

# 埋蔵文化財調査報告書46

高蔵遺跡（第34次・第39次）

2003

名古屋市教育委員会

## 正誤表

『埋蔵文化財調査報告書』46に誤りがありました。お詫びするとともに、下記のように訂正します。

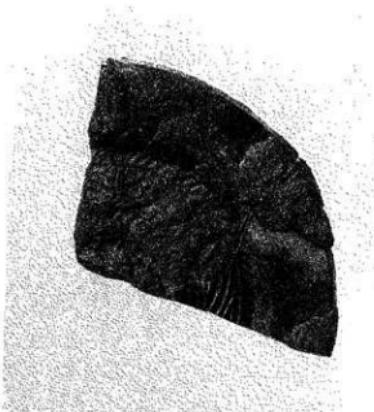
頁	行	誤	正
40 頁	10	まとめ(5-1)	まとめ(5章)
46 頁	第34図ヤブツ ン	66~68: SK42 69~70: SK43	66~67: SK42 68~70: SK43
54 頁	第44図中位	1678 座	168 座
55 頁	第46図 SX12 の座標		上のトンボ 横 X=-94, 415 縦 Y=-23, 590 下のトンボ 横 X=-96, 420 縦 Y=-23, 590
93 頁	第85図中	トーン部は電袖が	トーン部は電袖か
114 頁	6	ものと。	ものに分けられる。

## 埋蔵文化財調査報告書46

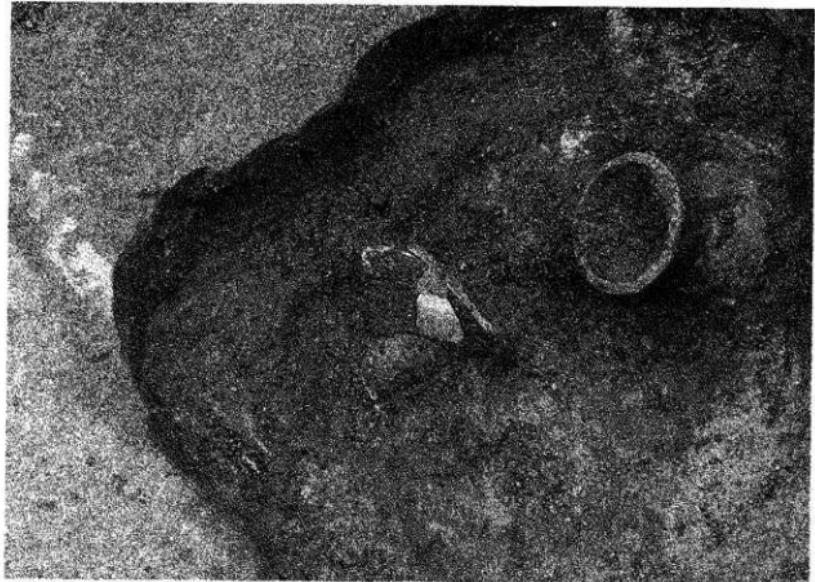
高蔵遺跡（第34次・第39次）

2003

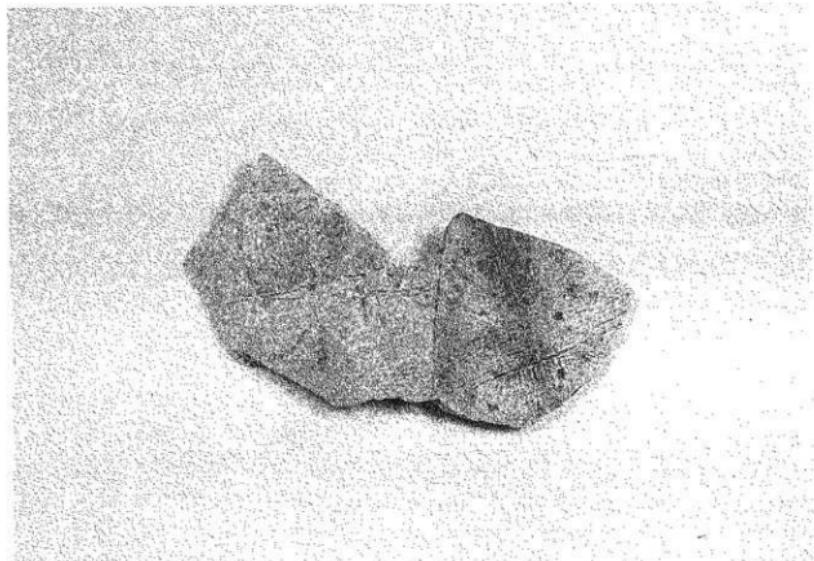
名古屋市教育委員会



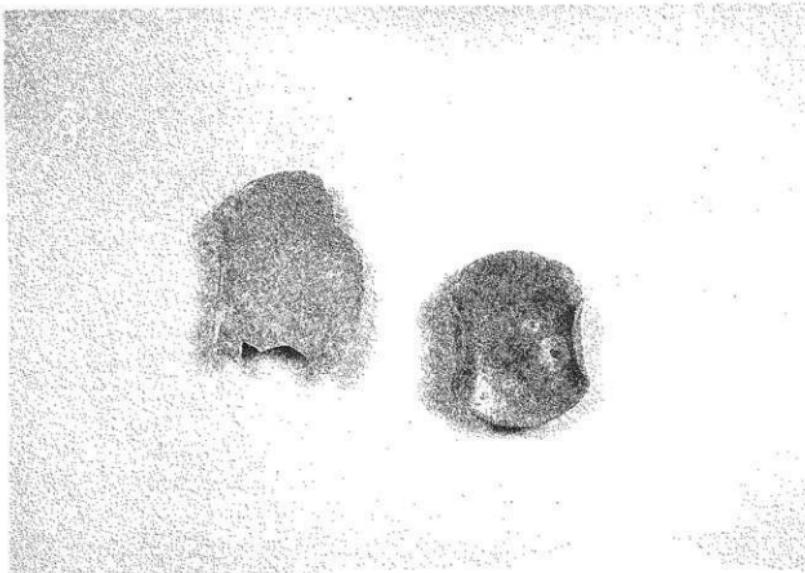
34-SK44 出土鏡



34-SK44 遺物出土状況



39-SX106 繪畫土器



39次調查出土耳皿

## 例　　言

1. 本書は熱田区夜寒町5-1の旗屋小学校で行った、高蔵遺跡第34次・39次発掘調査の報告書である。
2. 調査についての調整は名古屋市教育委員会文化財保護室が行い、現地調査は見晴台考古資料館が担当した。それぞれの調査の期間、担当者は以下の通りである。

### 第34次調査

期　間 2001年11月19日から2002年2月28日

担当者 野沢則幸、村木誠、藤井康隆

### 第39次調査

期　間 2002年7月15日から2002年11月30日

担当者 山田鉉一、村木誠、田原和美

3. 本書は、4章の34次調査古代と5章の鏡については藤井、4章39次調査出土の動物遺体については名古屋市文化財調査員野邊地章太が執筆し、それ以外については村木が執筆した。全体の編集は村木が行った。また、出土した鏡の鉛同位対比分析及び出土人骨の分析については、それぞれの分析をお願いした先から頂いた報告を付論に掲載した。また鏡の写真は名古屋市博物館杉浦秀昭氏に撮影していただいだ。

4. 調査に際して、様々な方々にご協力やご教示を頂いた。記して謝意を表す。

赤塚次郎　伊藤楨樹　岡村秀典　加納俊介　兎頭剛　中崎正彦　佐藤公保　篠原和大　杉浦秀昭　都柴暢也　松村冬樹　森泰通　森岡秀人　森下章司　名古屋市立旗屋小学校の皆様

5. 調査では、方位は国土座標第49系による座標北を、水準はT.P.（東京湾基本海面）を用いた。なお、34次調査と39次調査の間に、国土座標の日本測地系から世界測地系への移行があり、座標の値が変化したが、34次調査の成果に関しては本書では変換を行わず、調査で用いた値（旧座標）を用いている。この取扱の詳細は4章の調査の概要で示した。

6. 調査に関する記録、出土遺物は見晴台考古資料館で保管している。

## 目 次

1. 遺跡の位置と環境 (村木) .....	1
2. 調査の歴史 (村木) .....	3
3. 調査の経過 (村木) .....	9
4. 調査の成果	
4-1 調査の概要 (村木) .....	11
4-2 基本層序 (村木) .....	13
4-3 遺構と遺物	
第34次調査 .....	28
弥生時代 (村木)	
古代 (藤井)	
第39次調査 .....	67
弥生時代 (村木)	
古墳時代 (村木)	
古代 (村木)	
中世 (村木・野邊地)	
5.まとめ	
5-1 弥生時代 .....	106
遺構 (村木)	
遺物 (村木・藤井)	
5-2 古墳時代 (村木) .....	113
5-3 古代 (村木) .....	114
付論	
1. 愛知県高蔵遺跡から出土した銅鏡片の自然科学的研究 .....	119
2. 高蔵遺跡 (39次調査) 出土の人骨 .....	126
3. 弥生時代の高蔵遺跡 .....	127

## 1. 位置と環境

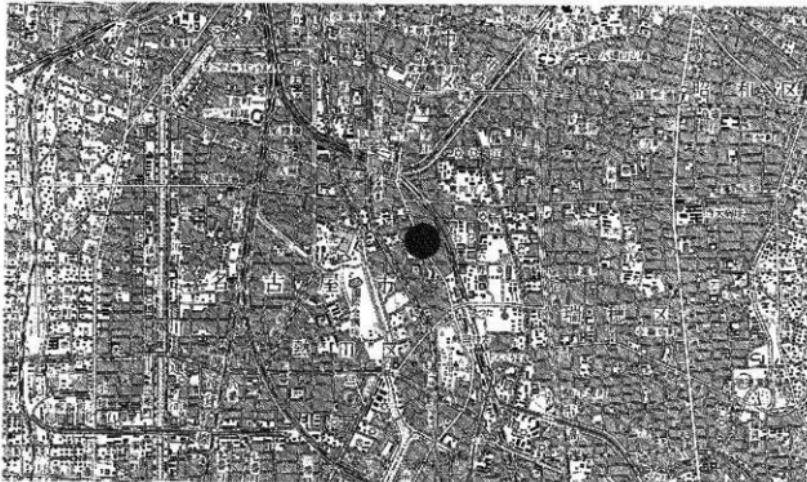
名古屋市の地形は、市域中央部の台地、その北及び西に広がる低地、市域東部の丘陵部に大別できる。この内、市域中央部の台地は、今から6万年ほど前に堆積したといわれる熱田層からなるが、この台地は名古屋城を北西隅とし、名古屋市の中心部を乗せ、南は、熱田と笠寺にむかってそれぞれ半島状に突出している。熱田にのびている西側の突出部は、熱田台地とも通称される。市街化した現在からは想像しにくいが、江戸時代の東海道が、熱田台地の先端から海路によって西へとながっていたことからも知られるように、海上に突き出した半島のような景観を呈していたと推測される。特に、弥生時代以前にはこの台地の南にまで海が迫っていたと復元されている。高蔵遺跡はこの熱田台地の東縁に所在する。

この熱田台地から北にかけての台地上では縄文時代以降の遺跡が数多く知られている。これらの遺跡については、点的な調査がなされているのみであるが、高蔵遺跡の動向とも関わるので幾らか見ておこう。

高蔵遺跡のすぐ南に位置する玉ノ井遺跡では縄文時代晩期の貝塚の存在が知られていたが、2002年に縄文時代晩期の墓が数多く検出された。また、この遺跡には弥生時代後期の遺構もあり、環濠かとも推測されている幅の広い溝も見つかっている [水野2000] [綿嶺2003]。縄文時代晩期の遺構、遺物に関しては、高蔵遺跡の弥生時代前期集落との関わりの点で興味深いが、現在のところ晩期でも最末のものではなく、時間的な断絶があるようだ、今のところ直接的な関わりを考えることはできない。また、玉ノ井遺跡では弥



第1図 名古屋市の地形と高蔵遺跡の位置（●印）



第2図 高蔵遺跡の位置（国土地理院発行 1:50,000地形図 名古屋南部）

生時代後期の遺構も多く検出されている。中でも高蔵道跡範囲の南から数百mしか離れていない地点で検出された弥生時代後期の大溝は、規模などから見て環濠の可能性も指摘され、高蔵道跡の後期集落の動向を考える時には大きな意味をもつ。しかし、両遺跡の間については全く不明であり、今後の調査に待つところが大きい。また、玉ノ井遺跡ではその後古代の集落が営まれているが、これも高蔵道跡の古代集落と時間的にも重なっており、一連の居住域であった可能性も考えなければならない。

弥生時代に関しては、玉ノ井遺跡の更に南に森後町遺跡が所在する。この遺跡も、弥生時代後期の遺物



- |             |             |              |             |             |
|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 7-22 尾張元興寺跡 | 7-23 東古波町遺跡 | 12-1 熟田村城    | 12-2 高蔵道跡   | 12-3 花ノ木古墳  |
| 12-4 高蔵1号墳  | 12-5 高蔵2号墳  | 12-6 高蔵3号墳   | 12-7 高蔵4号墳  | 12-8 高蔵5号墳  |
| 12-9 高蔵6号墳  | 12-10 玉ノ井遺跡 | 12-11 熟田神宮遺跡 | 12-12 新宮坂貝塚 | 12-19 断夫山古墳 |
| 12-20 白鳥古墳  | 12-21 熟田C遺跡 | 12-23 森後町遺跡  |             |             |

第3図 周辺の遺跡

が見られる。遺情は不明であるが、弥生時代後期後半の土器がまとまって採集されており、高藏遺跡とは時間的に重なっている。詳細は不明であり評価をすることは難しいが、高藏遺跡の動向を考える上では欠かせない遺跡である。

日を北に転ずると、高藏遺跡の北1km程の、現在の金山駅の北に所在する弥生時代前期のなかでも古い時期の土器を出土した古沢町遺跡の存在が注目される。この遺跡では若干の時間差をもつといわれる2条の溝が検出され、条痕紋系の土器が出土している。高藏遺跡の弥生時代前期を考える上では欠かせない。

古墳時代に関しては、高藏遺跡の南方数百mの地点に、古墳時代後期における東海地方最大の前方後円墳、断夫山古墳が立地する。このあたりでは、断夫山古墳の南に白鳥古墳が立地する他、古墳の可能性が指摘される「塚」や「築山」が知られており、大規模な古墳が築かれている。高藏遺跡においては、これらの古墳におそらく先行する時期の小規模な方墳が極めて多く検出されている。両者は古墳としては対極的な特徴を示し、時間的にも幾らか隔たりがあるが、何らかの関わりが想定することもできよう。断夫山古墳の東にあたる玉ノ井遺跡でも埴輪の出土が知られており、高藏遺跡と同様な墳丘を失った古墳が存在する可能性もある。

一方、高藏遺跡の北側には、高藏遺跡と同様な小型の方墳が見つかっている東古渡町遺跡がある。同様な古墳であるが、時期的には東古渡町遺跡がやや古い。時間の変化に伴う古墳分布の変化についてはまだ不明であるが、こちらも当然高藏遺跡と関連していると見るべきであろう【藤井2002】。さらに東古渡町遺跡の北には、初期須恵器などを出土する、古墳時代中期から後期にかけての大集落である、伊勢山中学校遺跡や正木町遺跡が存在し、古墳と集落の関わりを考える上でも重要である。

その後の時代については、周辺遺跡での調査事例に乏しい。先述したように、玉ノ井遺跡で古代の集落が知られる。また、伊勢山中学校、正木町遺跡などでも古代の集落が知られているが、まだ不明ことが多い。

先述した森後町遺跡の南には、草薙の剣を祭神とする熱田神宮が所在する。熱田神宮の社地も埋蔵文化財の包蔵地として知られており、山茶碗など中世から近世の遺物が数多く出土している。その他では、高藏遺跡の周辺に中世の城跡とされるものが幾つか知られている程度である。

古代以降についてはまだ不明なことが多いが、高藏遺跡の所在する熱田台地周辺は、縄文時代以来、人間活動の痕跡が豊富に残されている。

## 2. 調査の歴史

高藏遺跡について記されたものとしては、明治31年に、斎藤恒氏による石器採集の報告がもっとも古いものとされる。その後、鍛谷徳三郎氏の「尾張熱田高藏貝塚発掘」『東京人類学会雑誌』第二百六十六号(明治41年)において、遺構、遺物がまとまった形で報告された。斎藤氏の報告のところから「貝塚」の存在は知られていたらしいが、鍛谷氏はその地点に現在の大津通が造られ、開削された際に調査を行った。氏は、土器、石器、貝、獸骨などの自然遺物を採集している。

鍛谷氏の報告後、高藏遺跡は弥生時代の遺跡として広く知られ、数多くの研究者が高藏遺跡を調査した。個々の調査については一覧表(表1・2)にまとめたが、これらの調査については、調査の規模が小さかったことや十分な報告がなされた調査が少ないとといった事情もあって、高藏遺跡の内容は明らかになった

とはいひ難い状況であった。しかし、そうした状況でも高藏結御子神社東（後述する田中氏のC地点）などでは、弥生時代前期の「遠賀川式」土器が出土することが知られ、弥生前期文化の波及の東限と考えられるようになった。また、後期には、赤彩、文様をもつ土器が多く出土することが知られ、この内の一つが濱田耕作によって「バーレース式」と名付けられるなど、弥生時代の遺跡として有名になった。

これらの調査の中でも重要なのは、田中稔による調査、報告である。田中は、分布調査によって遺構、遺物が観察された地点をA地点からK地点とし、それぞれの地点について、確認できた遺構や遺物について記述している。この田中の分布調査は、高藏遺跡の広がりを考える上で重要なものであり、都市化が進んだ現在では貴重なデータとなっている。中でも、田中が報告した大規模な「V型ピット」は、集落を取り巻く環濠の可能性が高く、弥生時代集落の復元には欠かせない。

また田中はE地点と呼んだ地点の調査を行い、環濠らしい溝とそこから出土した土器について報告を行った。こちらも高藏遺跡の実態解明だけでなく、この地域の弥生時代中期の土器研究の点でも重要である。田中が報告した各地点については、1953年と56年には南山大学がD地点を、名古屋大学がE地点を調査している。南山大学の調査については、その後遺物を中心とした報告がなされ、高藏遺跡の環濠集落の動向を考える上で貴重な資料となっている。これらの調査の資料をもとに、弥生時代中期の土器様式に対して「外土居式」「高藏式」といった名称が与えられた。

1981年以降は、名古屋市教育委員会が主に調査を実施している。これらの調査は面積が小さい場合が多く、一回の調査の成果には限界があるが、各所で調査が行われ、少しずつではあるが高藏遺跡の実態が明らかになってきた。各調査の成果については表1・2及び第4図を参照して頂くこととし、ここでは時代ごとに現状で明らかになっていることを簡単にまとめておく。

縄文時代については、少数の縄文土器の破片が見つかっているのみである。確実な遺構は見つかっていない。土器の破片は、夜寒地区や五本松地区、或いは第5次調査など、遺跡内各所で後期、晩期のものが見られるが、いずれも数点ずつで、まとまって見られる地点はない〔伊藤・川合1993〕。

弥生時代については、前期から後期のそれぞれについてある程度の知見が得られ、名古屋台地周辺における弥生時代の中心的な集落という評価が定着しつつある。前期については、1次調査や夜寒地区的調査で遺跡範囲の東側の、台地の縁辺で多条の環濠が見つかり、名古屋台地上ではもっとも大規模な前期の遺跡と見られる。環濠の内側の居住域については全く不明である。環濠の周辺の、37次調査などで前期上器の破片が出土する程度である。前期の環濠が埋まつた後の中期の初めについては、前期の環濠内から僅かな土器の破片が見つかっている程度であり、これまでの調査から判断する限り、前期の集落からみると極端に小規模化しているものと思われる。まったく廃絶してしまったかどうかはわからないが、前期の集落がそのまま中期の集落へとつながっていったという状況ではないだろう。

その後、中期の中葉になると、F地点などで遺物が採集されるようになるが、遺構はほとんど見られない。F地点で行った33次調査では、大半が擾乱された状態ではあったが、土器の量はまとまっており、前期の集落とは別の地点に中期の集落が營まれるようになったことがうかがえる。

中期も後葉の凹線文系土器が波及した後については、遺構、遺物が増加している。E地点を始めとし、田中氏が報告した地点の幾つかでは環濠らしい溝があり、掘削された時期は不明であるが、出土する土器はこの時期のものが主体である。環濠内側では住居などは検出されていないが、方形周溝墓は環濠集落の

想定範囲の縁辺で何基か見つかっている。この環濠が埋まつた後、中期の最末になると、環濠からは離れた広い範囲で住居や方形周溝墓が見つかっている。

弥生時代後期は、これまで検出された遺構、遺物がもっとも多い時期である。D地点で見つかった大溝や出土中氏が報告する溝を環濠と判断すれば、中期の環濠集落を一回り大きくした形の環濠集落域が復元できる。但しこの範囲内での住居などの検出例はほとんどない。この環濠は、掘削された時期や機能していた時期を特定するのは難しいが、出土遺物は後期後半を中心としている。堅穴住居は、環濠との時間的な関わりが難しいが、環濠集落域の北側で検出されている。後期の環濠が機能はじめる前の住居と思われる。環濠内側にある、28・29次調査で検出された住居址は、環濠と同時期の遺物を出土する。その他には方形周溝墓が数多く検出されている。遺跡の南西部の広い範囲で検出されており、かなり広大な墓域であったことが推測される。また、この墓域とは離れた遺跡の北東部でも検出例があり、複数の墓域があったようである。

高蔵遺跡では、途中断絶はあるもののほぼ弥生時代を通じて人間活動の痕跡が認められる。大雜把な傾向としては遺跡の東側から南側にかけてが居住域として利用され、西側には墓域が形成されていたということができるよう。

弥生時代の終末から古墳時代前期にかけては、弥生時代から引き継ぎ方形周溝墓（古墳時代のものは方墳と呼ぶべきか）が築かれている。これらは形態や規模、出土遺物の点では弥生時代後期の方形周溝墓と変わることろがない。こうした墓も、古墳時代の初頭まではある程度の調査事例があるが、古墳時代前期については極端に少なくなり、前期の後半以降はほとんど見られない。古墳時代の前期については、居住に関する遺構など、墓以外の遺構は全く検出されておらず、遺物の出土もあまり知られてない。今のところは集落の規模が縮小したと想定しておきたい。

古墳時代も中頃以降になると堅穴住居が遺跡の南東部で点々と見つかっている。夜寒地区、春日莊地点では須恵器が出現する直前の堅穴住居が検出されており、この頃になって古墳時代の集落が成立したものと思われる。同じ頃の遺構として、古墳も数多く検出されている〔藤井2002〕。古墳は、墳丘を失い、周濠だけが検出されているのであるが、遺跡範囲の西半を中心に見つかっており、形のわかるもの多くが方墳である。これらの古墳の多くは5世紀後半から6世紀前半代のものである。江戸時代に記された『尾張志付図』には、現在の高蔵遺跡の範囲内にいくつか「塚」が描かれており、発掘調査で見つかった古墳がそれらの「塚」に比定される可能性も指摘されている〔竹内1990〕。

高蔵結御子神社境内から高蔵公園にかけては、墳丘の残る古墳もある。この内高蔵1号墳は名古屋大学によって調査され、横穴式石室をもつ7世紀代の古墳であることが明らかになっている。その他、高蔵公園内には墳丘の残る古墳が数基知られている。

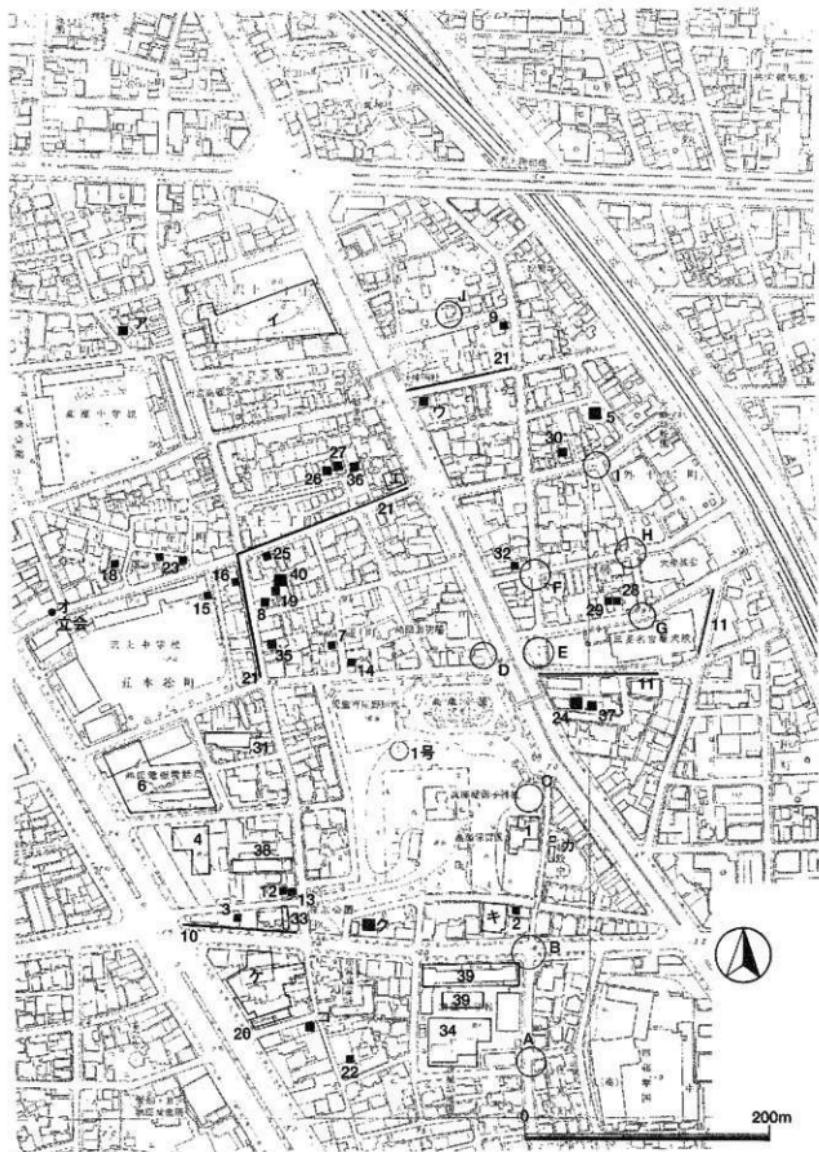
奈良時代から平安時代については、高蔵結御子神社を中心とした遺跡の南半を中心に堅穴住居が見つかっている。今回の調査区のすぐ北にあたる夜寒地区では、7、8世紀の堅穴住居や溝状の遺構が検出されているほか、その北にあたる1次調査では9世紀墳の堅穴住居がある。遺跡範囲の東部にあたる24次調査などでも堅穴住居が見つかっているほか、遺物の出土は遺跡内各所で見られる。高蔵遺跡では、弥生時代や古墳時代の包含層に掘りこまれた堅穴住居の検出が極めて困難であることを考慮すれば、本来は更に多くの住居があったものと推測される。時間の経過に伴う集落の変化はまだ不明であるが、7世紀から9世

調査年	調査主体	団の表示	本文中の呼称	調査地点	弥生時代の遺構・遺物	古墳時代の遺構・遺物	古代以降の遺構・遺物	文献
1908	鍵谷龍三郎			大津通				鍵谷1908
1913	井上菊四郎 (旗原小)							
1916	安藤清太郎							
1917	徳川義親			E地点				
1917	佐藤兔一							
1919	小金井良精・ 柴田常忠							
1919	清野謙次							
1927	直良信夫							
1928	小栗鐵次郎・ 伊藤文四郎							
1940	鈴木範一			D地点				
1941	酒井伸男			C地点 (高蔵 鈴子神社東)				
1942	高橋義一			C地点 (高蔵 鈴子神社東)	弥生土器			
1943	山内清男							
1946	村松弘							
1951	田中稔	E	E地点	外土居町12 (E地点)	中期溝			
1951	瀧田正一							瀧田1955
1953	中山英司	D	D地点	高蔵町62 (D地点)				熊田1979
1954	名古屋大学 (猪崎彰一)			高蔵1号墳				
1956	南山大学 (柳垣晋也)	D		D地点				本山1985
1981	高蔵追跡調査会 (今西秋男)	カ	春日丘地点	高蔵町1001-2	前期・後期上 器	中期堅穴住 居、土師器		杉浦編1962
1981	市教委1次	1		高蔵町9-7	前期環濠、後 期周溝墓			名古屋市教委1982
1982	市教委2次	2		夜寒町70	前期環濠	埴輪	須恵器	名古屋市教委1983
1985	夜寒町区調査 会(荒木和男)	キ	夜寒地区	夜寒町204	前期環濠、後 期周溝墓	中期堅穴住居	古代須恵器	重松他編1987
1985	荒木実(1次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1986
1986	荒木実(2次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1987
1987	荒木実(3次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1987
1987	夜寒町遺跡調 査会(荒木実 他)			夜寒町102				夜寒町遺跡調査公 1988
1987	市教委3次	3		五本松町1002			古代須恵器、 瓦、中世落 土坑	水野1988
1988	荒木実	ウ	沢上二丁目	沢上二丁目 501	中・後期堅穴 住居	須恵器、土師 器		荒木他1989
1989	市教委4次	4		五本松町901				竹内1990
1989	荒木実(4次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1990	荒木実(5次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1990	荒木実(6次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1990	荒木実(7次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1993	高蔵遺跡(花 鳥園地区)調査 会(中嶋惠志)	ア		花町6-15		須恵器、土師 器		中嶋・尾野1994
1993	市教委5次	5		沢上二丁目 704	後期周溝墓	中期溝、後期 周溝墓		野口1994
1994	市教委6次	6		五本松町7- 20-30	後期周溝墓	古墳	古代土坑・溝 野口・伊藤1995	
1994	市教委7次	7		高蔵町6-10		古墳		加藤編1995
1994	市教委8次	8		高蔵町1-17		古墳(周溝墓)		
1995	市教委9次	9		沢上二丁目 4-12	後期上坑			

表1 これまでの調査(1)

調査年	調査主体	図の表示	本文中での呼称	調査地点	弥生時代の遺構・遺物	古墳時代の遺構・遺物	古代以降の遺構・遺物	文献
1995	市教委10次	10		五本松町・夜寒町	中期溝		中世土坑	野口1996
1995	市教委11次	11		外十居町	中期上坑	須恵器		原部1996
1996	市教委12次	12		五本松町909-3		方墳	中世溝	田原編1997
1996	市教委13次	13		五本松町909-4		方墳、須恵器	中世井戸	田原編1997
1996	市教委14次	14		高蔵町5-18	中期周溝墓、 弥生土器			田原編1997
1996	市教委15次	15		五本松町9-4		方墳		田原編1997
1997	市教委16次	16		五本松町503-1	後期周溝墓			
1997	市教委17次	17		高蔵町1-18		方墳、須恵器、 土師器		野澤1998
1998	市教委18次	18		五本松町208-3			中世山茶碗	山田1998
1998	市教委19次	19		高蔵町110		方墳、埴輪		山田・野口1999a
1998	市教委20次	20		五本松町11-18	後期周溝墓	溝	古代土壙	服部1999
1998	市教委21次	21		沢上一丁目他		溝、埴輪		山田・野口1999b
1998	市教委22次	22		夜寒町6617		須恵器		伊藤編2000
1999	市教委23次	23		五本松町3-8			中世大溝、青 銭片	伊藤編2000
1999	市教委24次	24		外十居町806	中期土坑?		古代土坑	伊藤・村木2000
1999	市教委25次	25		高蔵町1-1		方墳、埴輪		伊藤・村木2000
1999	静岡人歴史研究 所	エ	人歴史研究所 所地点	沢上一丁目6-19	中期環濠、周 溝墓	古墳、須恵器		森2001
1999	高蔵遺跡調査 会(会長伊藤 秋男)	イ		沢上一丁目3				
2000	アイシン開発 株式会社他	コ		五本松町1202		溝	山茶碗	廣田他2001
2000	市教委26次	26		沢上一丁目6- 621-1	中期土器	古墳、埴輪		織田編2001
2000	市教委27次	27		沢上一丁目6- 28		古墳、埴輪	古代堅穴住居	織田編2001
2000	市教委28次	28		外土居町5-13	後期堅穴住居			織田編2001
2000	市教委29次	29		外土居町5-14	後期堅穴住居			織田編2001
2000	市教委30次	30		沢上一丁目713	中・後期方形 周溝墓	後期堅穴住居		織田編2001
2000	市教委立会講 会	オ		五本松町			中世上坑、青 銭	伊藤原編2002
2000	市教委31次	31		五本松町604	後期方形周溝 墓、パレス塚	古墳、須恵器		伊藤原編2002
2001	市教委32次	32		外土居町110	中期堅穴住居、 貝層			伊藤原編2002
2001	市教委33次	33		五本松町 1004-4				伊藤原編2002
2002	市教委34次	34		夜寒町5-1 (森屋小学校)	中後期堅穴住 居		古代堅穴住 居、土坑	木暮
2002	市教委35次	35		高蔵町617	後期方形周溝 墓、パレス塚		中世地下式瓶	藤井編2003
2002	市教委36次	36		沢上一丁目 620-23	中后方形周溝 墓	古墳		藤井編2003
2002	市教委37次	37		外十居町806	中期土坑	後期堅穴住居		藤井編2003
2002	市教委38次	38		五本松町907, 908		古墳、埴輪		藤井編2003
2002	市教委39次	39		夜寒町5-1 (佐道小学校)	後期周溝墓	古墳、埴輪	古代堅穴住居	木暮
2002	市教委40次	40		高蔵町108-2, 109	後期周溝墓			藤井編2003
2003	市教委41次			高蔵町404				藤井編2003

表2 これまでの調査(2)



第4図 これまでの調査

紀にかけての集落は大規模であったことは間違いない。

その後の鎌倉時代以降についても各種の遺構が見つかっている。4次調査では、鉄滓が出土したほか、鋳型らしい破片もあり、鍛冶に関わるかと推測される遺構が調査されている。また、12次・13次調査のように、古墳の周濠上位から山茶碗などが出土する例もあり、その時点でもまだ埋まりきっていない古墳の周濠に何らかの造作を加えた可能性が考えられている。遺跡南部では少量であるが瓦も出土している。しかし、鎌倉時代以降については、性格不明遺構も多いし、各調査区の点的な調査から全体像を復元するまでは至っていない。

### 3. 調査の経過

本書で報告する2回の調査はともに名古屋市立旗屋小学校の校舎建て替えに関連して実施した。第34次調査は改築に先立つ仮設校舎建設に伴うものであり、第39次調査は新校舎建設及び貯水施設建設に伴うものである。調査面積は、第34次調査が1,450m<sup>2</sup>、第39次調査が2,250m<sup>2</sup>であった。

第34次調査は、原因である仮設校舎建設による掘削が最大でも現地表から65cmを上回ることがなく、それ以下の埋蔵文化財に影響を与えることがないと判断されたため、発掘調査の対象も現地表から65cmまでに限定した。そのため、調査区の大半において包含層の掘削、遺構検出までを実施するに止まり、実際に遺構を掘削したのはごく一部に過ぎない。特に調査区の南半分は表土および搅乱土を除去したのみである。また、発掘調査で掘削することによって地耐力が失われ、仮設校舎の建設に影響を与える可能性があったため、調査終了後は砂によって埋め戻した上で、転圧を行うこととした。またその埋め戻し後には、コンベネトロメータによる試験を行った。

第34次調査は、2001年11月19日に現地調査を開始した。排土置場と写真測量の際のクレーンの通路のために、調査区を南北で二分し、北側を前半の調査区として掘削を開始した。仮設校舎の基礎の部分のみの掘削のため、調査区内に掘削しない部分が島状に残ったため機械による掘削には手間取った。表土および搅乱を機械で除去した後、包含層を人力により掘削した。西半は搅乱が多く、地表からほぼ65cm程度で露出した地山面で遺構が検出できたのみであった。調査区の東端では、校庭の盛土の下位がすぐ弥生時代の包含層であり、40cmほどで遺構埋土や地山に達した。そのためこの部分については、遺構を掘削することとした。この部分は遺構が密に残っていた上に、土が極めて固く締まっていたため掘削に手間取り、前半の写真測量までには終了できなかった。そのため、掘りきれなかった部分は後半の調査区とともに写真測量することとした。12月19日に前半の写真測量を行い、東端部分を除いて埋め戻した。後半は、前半に掘りきれなかった北半の東端部分を引き続き調査しつつ、南半を新たに掘削した。こちらも、地表から65cmの間は搅乱されていた部分が大半であった。部分的には、地山面に達したところがあり、そこで遺構検出を行った。この結果、いくらかの遺構が検出できたが、遺構の埋土については掘削しなかった。調査も終盤にかかった2月7日には、前半に掘りきれなかった調査区北東端の住居址が密集している部分で鏡の破片が出土し、高藏遺跡の重要さを改めて知ることとなった。遺構の掘削はやはり時間がかかったが、後半の写真測量を2月13日に実施することができた。その後、クレーンの通路のために残した部分を掘削する一方、断面図などの記録の作成を行った。2月16日には、地域の方々を対象とした現地説明会を開催し、250人の参加があった。これとは別に、調査期間中には旗屋小学校の小学生を対象とした見学会を開催し

た。後半の掘削範囲も砂による埋め戻し転圧を行ったのち地耐力の試験を行い、2月28日にすべての現地作業を終了した。仮設校舎建設に伴い、調査区外で掘削が必要となった部分については立会調査を実施した。調査終了後の3月19日には、現地説明会までに十分な広報ができていなかった、出土した鏡について、市政記者クラブへの資料提供を行った。この際には、コメントをいただいた先生がたをはじめ、多くの研究者の方に貴重なご教示をいただいた。また貴重な資料であることから、見晴台考古資料館で速報展示を実施した。

第39次調査は、第34次調査地点のすぐ北にある貯水槽の建設予定地、給食室の跡地、校舎が建て替えられる地点を調査した。排水場と写真測量の都合から、校舎部の東半分を前半、校舎部の西側半分と貯水槽部、給食室部を後半と二分して調査した。校舎が建て替えられる地点については、旧校建の地上部分を解体し、地下部分の基礎は残した状態で調査を行った。前半は、7月15日から調査を開始した。旧校舎建設の際の基礎掘削のため擾乱を受けていたが、基礎に埋まれた部分の中央は遺跡が残存していた。ただし、基礎によって細かく分断されているため、機械掘削に思われる時間がかかった。機械掘削がある程度進んだ7月25日ころからは、人力により包含層掘削、引き続き遺構検出を行った。堅穴住居や古墳の周濠などが検出されたが、旧校舎の基礎による分断のため、遺構のつながりがよくわからず、一連の遺構に別の番号を与えるといった例が多くなってしまった。また、7月から8月にかけては気温が極めて高く、休憩を多く取りながらの作業となった。そのため大きな溝などの掘削には手間取ったが、予定通り9月11日に前半部分について、測量用の写真撮影を実施することができた。この時点では、校舎部分の掘削範囲が校舎建設予定範囲と若干異なっていたことが判明したため、不足している部分について改めて掘削し、手測りによって平面図等を作成した。

後半の掘削は9月20日から開始した。後半の調査区のうち、貯水槽部は第34次調査地点と前半の校舎部分の間にあたり、小学校の校庭として使用されていたため、あまり擾乱を受けておらず、包含層が極めて良好に残っていた。この包含層中にも焼土が見られるなど、包含層を掘り込んで塗られた遺構があることが推測されたが、平面的に検出することは困難であると判断したため、焼土や遺物の位置を記録しつつ包含層として掘り下げた。包含層の下位の地山面には、遺構が数多く残っており、口頭的には極めて厳しい状況となつたが、何とか11月13日に測量用の写真撮影を行った。11月16日には、市民を対象に現地説明会を開催し、100名の参加が得られた。その後、断面図などの記録を作成した後、必要な遺構については断ち割り等を行った後、埋め戻しを行った。11月29日までに、次の工事への引継ぎも終了し、調査を終了した。調査後、調査区付近の抜根などの工事に際しては立会調査を実施した。

第34次・39次調査とも、遺物の整理作業は現地作業と併行して実施した。またそれぞれの調査終了後遺物整理作業とあわせて作成断面などの整理作業を見晴台考古資料館において実施した。遺物の整理にあたっては、できるだけ多くの遺物を図化し報告するように努めたが、特に第39次調査については遺物の出土量が極めて多かったため、すべてが報告できたわけではないことは遺憾である。また、整理作業に際しては、遺構の番号などは基本的に調査時のものを踏襲することとし、34次及び39次の遺構番号を通番にするなどの処置はしなかった。

## 4. 調査の成果

### 4-1 調査の概要

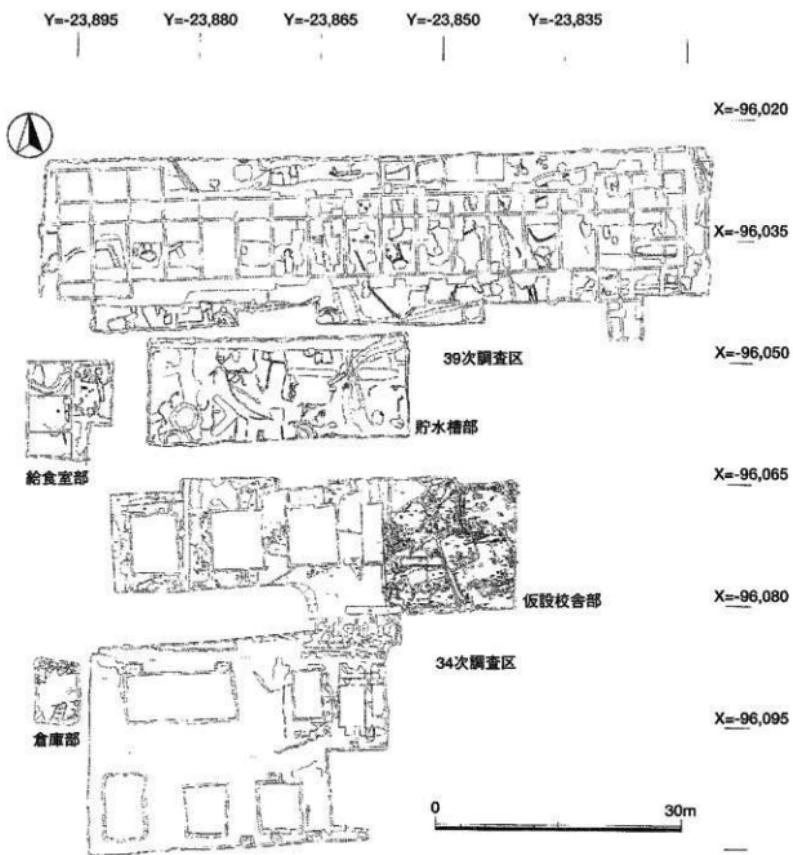
それぞれの調査では、調査区全体を覆うようにグリッドを設定した。調査毎に行ったため、34次調査と39次調査のグリッド名は関連がない。また、この両調査の間に国土座標の日本測地系から世界測地系への移行が行われた。それぞれの調査において、その時点で用いられていた座標系を採用したため、両調査のグリッドは対応しない。また、そのため両地点の座標の数値も相互には対照することはできない。それぞれのグリッドの設定状況については、各調査の報告の項で示す。なお、両地点を合成した平面図では、34次調査の座標の幾つかを、国土地理院による変換プログラムで変換したうえで合成している。なお、変換の基準とした点とその変換後の座標は次の通り。(旧X座標, 旧Y座標) → (新X座標, 新Y座標) で示すと、(-96415, -23575) → (-96065.9252, -23846.0144)、(-96450, -23575) → (-96100.9246, -23846.0142)、(-96415, -23620) → (-96065.9273, -23891.0142)、(-96450, -23620) → (-96100.9267, -23891.0142)である。巻末の抄録では、世界測地系によるデータを示している。

両調査において数多くの遺構が見つかったが、住居についてはSB、溝はSD、土坑はSK、不明遺構はSX、小穴にはPを冠し、それぞれ01から順に名称を与えた。この名称も調査毎に付いている。本書ではそれぞれの調査報告ではそのまま用いるので注意されたい。まとめなどで両調査の遺構について触れるときには、34-SB01、39-SK01といった具合に頭に調査次数を冠して区別する。

34次調査の対象は、仮設校舎建設予定地と倉庫建設予定地であった。倉庫予定地については、遺構名の前にWを冠してW-SK01としている。39次調査も旧校舎跡地、貯水槽建造予定地、給食室跡地と調査区が3ヶ所に分かれ、一部が同時進行したため、給食室跡地の遺構名称は100番台（例えばSB101という具合）、旧校舎部の西半分の遺構は200番台（同じくSK201）となっている。最終的には第34次調査ではSBを閲したものが21、SKが49、SDが33、SXが12、Pが約350基となった。第39次調査では、SBを閲したもののが22、SKが121、SDが59、SXとなり、ピットは1300基余りときわめて多くの遺構を検出した。これらのうちのいくつかは、掘削に伴って滅失したり、遺物の出土がなく時期が不明であったりし、すべてについては言及することができないので、主要な遺構について、位置、埋戸の特徴、出土遺物などを一覧表で示した。

なお、本書で用いる時期は、弥生時代については、汎用性を考えて[永井・村木2000]に準拠し、Ⅲ様式を中期中葉、Ⅳ様式を同後葉、V様式、VI様式を後期前半、VII様式を同後半と表現している。また、VII様式の直後の時期は、弥生時代とも古墳時代とも言われるが、本書では弥生時代終末期と表現している。

古墳時代、古代については[尾野2000]などの須恵器の編年研究を参考にして記述し、その推定される曆年代から考へて奈良、平安といった名称も併用している。また、ここの遺物については改めて分類などを行うことはせず、一般的に持ちいられている器種、形式名を用いた。また土器の調整などについても一般的な名称を採用した。また、鏡および石器など遺物の一部については、本章の遺構と遺物の項ではなく、5章のまとめの中で記述した。



第5図 34次・39次平面図（座標は新座標）

## 4-2 基本層序

基本となる層序は、調査区の壁面で確認した。調査範囲は広く、一様とは言えないが基本的には次のような層序である。表土の下位には、古代の包含層である暗褐色土が堆積している。部分的にはこの間に中世の包含層である褐色土がある。そして、この暗褐色土の下位には部分的に弥生時代から古墳時代の包含層である黒褐色土、黒色土が堆積している。また、この暗褐色土が見られない部分では、表土の直下に黒褐色土、黒色土が堆積していた。それぞれの層の厚さは地点毎に異なるため、以下若干詳しく述べる。

34次調査区については、調査区の南半分は部分的に中世の包含層と思われる褐色土に達した以外は、ほぼ表土を除去したのみである（第9・10図）。この下位の状況を知るために、数箇所のサブトレンチを掘削した。調査区の南端では、擾乱土の下位に黒褐色土が堆積しており、その下位が熱田層であった。現地表から熱田層上面までは、0.8mほどあった。34次調査区北側の西半分については、校庭の盛土、擾乱土など近現代層が約0.5mほどあり、その下位に暗褐色の包含層が堆積していた。これは古代の須恵器を含いでいたが、一部は遺構の埋土の可能性もある。その下位は地山である熱田層であった。西半では地山面まで掘り下げ、遺構検出を行った時点で掘削を終了した。34次調査区の北東端は他の地点とは状況が異なり、あまり擾乱を受けておらず、地表面から0.3mほどで暗褐色や黒褐色の遺物包含層に達した。特に一番東端の部分には、黒味が強くよく縮まった黒色土、黒みの強い黒褐色土が堆積していた。これらの土は約0.3～0.4mあり、その下位は地山上である熱田層であった。黒褐色土および黒色土は、うまく識別できなかった部分も多いが、弥生時代の包含層又は遺構の埋土である。この東端の部分では暗褐色を呈する古代の包含層は全く見られなかった。北東の一においても西寄りでは表土の下にあまり黒みの強くない黒褐色土や暗褐色土が堆積しており、これは古代の包含層、遺構埋土である。この下位には弥生時代の包含層である黒褐色土はほとんどないが、地山面に掘りこまれた弥生時代の遺構は残存していた。東端部からわずか数メートルであるが、古代以降に地山の面まで削平されているのであろう。

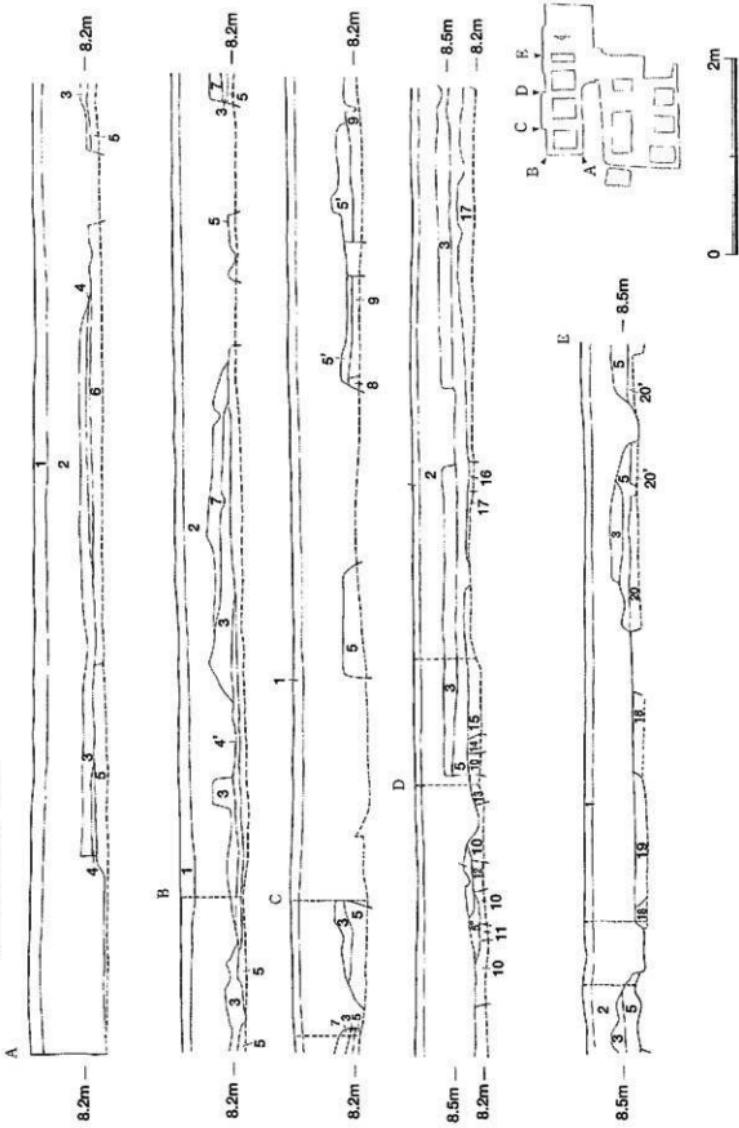
西端の倉庫予定地は、地山面まで掘り下げ、遺構を掘削した。表土の下位には、黒褐色土が堆積していた。熱田層は現地表から1.3m程の高さで検出され、調査区の東よりと比べるとやや下がっている。黒褐色の包含層が残っていることからすると、少なくともこの包含層の堆積以降には削平されてはいないので、東に向かってわずかに下がるのが本来の地形である可能性が高い（第12図）。

39次調査地点の防水槽部分は、34次調査地点の北東部のうちの西よりと同様で、0.3～0.4mの盛土、擾乱土の下位には暗褐色土が約0.3～0.4mの厚さで堆積しており、その下位には黒褐色土ではなく熱田層であった。この暗褐色土は包含層として掘削したが、焼土が見られたことから、遺構の埋土も含まれているものと思われ、煩雑になるため断面は模式図で示した（第13図）。暗褐色土は大きく2層に分けられ、上層は砂がらみ、下層は黒味が強くややシルトがらみであった。防水槽の西側にあたる給食室部でも同様で、地山の直上には暗褐色土があり、黒褐色土は見られなかった。このあたりでは地山はあまり下がっていないかった。

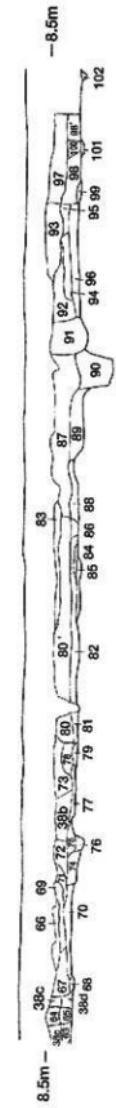
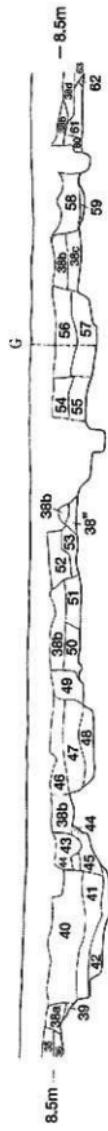
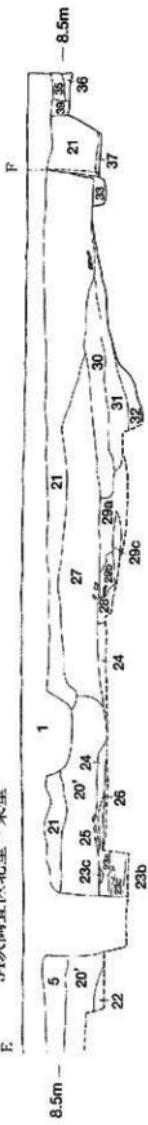
校舎部分については校舎の基礎で十分に層序が確認できなかったが、表土の下位に暗褐色土の包含層があったのは同様である。東の方ではその下位にわずかに黒褐色土があり、その下位が地山の熱田層であった。西の方では暗褐色の直下に熱田層が見られ、黒色土、黒褐色土は見られなかった。なお、39次調査区校舎部の西よりは基礎によりほぼ搅乱されており、本来の堆積状況を確認することはできなかった。

なお、本書で断りなく「地山」と述べた場合は熱田層のことを示す。

34次調查区西壁～北壁



F 34次調査区北壁～東壁



第7図 34次調査区北壁～東壁 (注記は16頁)

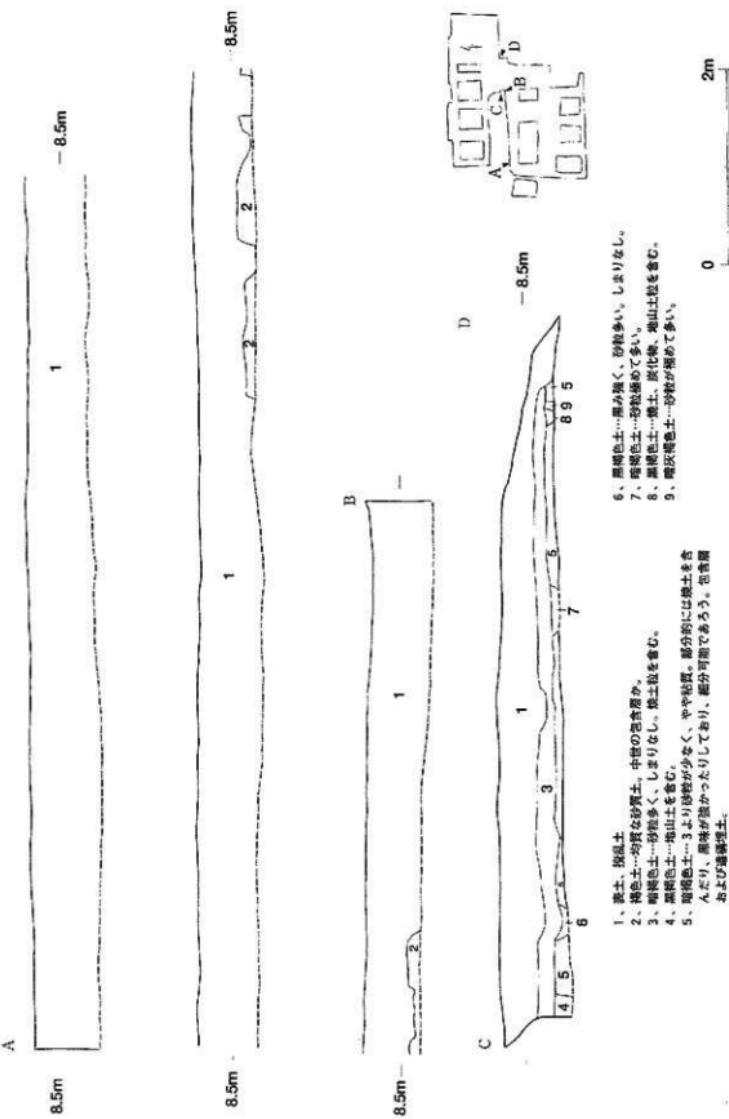
### 34次調査区西壁～北壁～東壁

- 1、武土（グランド盛土）
- 2、擾乱土
- 3、灰褐色土…砂質。1～2cmの小石を含む。
- 4、明褐色土…砂質。しまりなし。
- 4'、明褐色土…4ほど明るくなく、褐色に近い。1cm大の小石を含む。
- 5、暗褐色土…ややしまりあり。砂粒が多い。造構の埋土等も含むと思われるが分離しなかった。
- 5'、暗褐色土…砂粒多い。5とはほぼ同じ。
- 5''、暗褐色土…5より黒味が強い。
- 6、暗褐色土…5との部分不明瞭だが、5よりしまりがある。焼土粒をいくらくか含む。住居埋土か。
- 7、灰褐色土…砂質土。褐色土の混入多い。
- 8、暗褐色土…ややしまりがあり、砂粒の混じり少ない。
- 9、暗褐色土…8よりやや砂粒多い。この層の下位を中心地山土を少し含む。住居埋土か。
- 10、暗褐色土…2～3cmの地山土塊を含む。造構の埋土。
- 11、暗褐色土…ピット
- 12、黒褐色土…ピット
- 13、黒色土…ピット。地山土含む。
- 14、暗褐色土…ピット
- 15、暗褐色土…1～2cmの地山土粒を含む。埋構埋土か。
- 16、暗褐色土…ピット。地山土含む。
- 17、暗褐色土…5より黒味が強く、砂粒をあまり含まない。炭・焼土粒を含む部分がある。
- 18、種喰褐色土…炭化物、焼土粒を含む。砂粒はあまり含まない。
- 19、暗褐色土…擾乱。
- 20、暗褐色土…砂粒はあまり含まない。焼土粒をわずかに含む。複数の造構がある可能性あり。
- 20'、暗褐色土…20と同様であるが、焼土粒は含まない。

### 調査区北壁～東壁

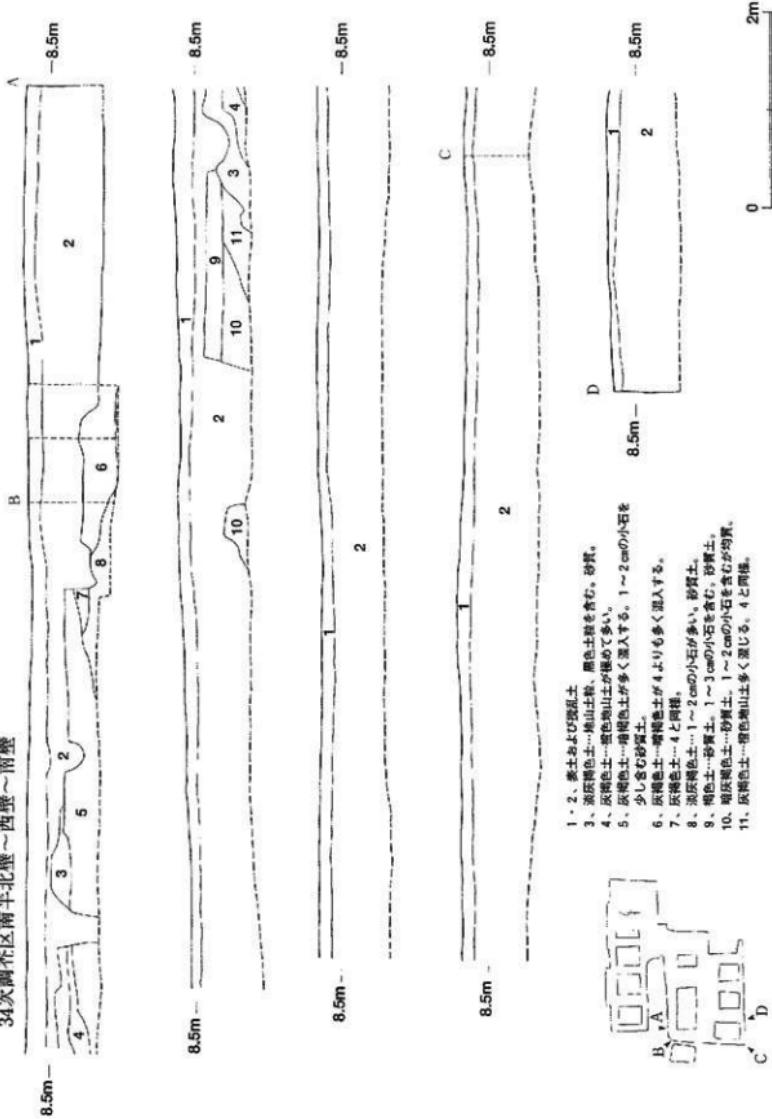
- 21、暗褐色土…造構の小石多い。
- 22、暗褐色土…地山土粒多い。
- 23a、黒褐色土…燒土、炭化物粒、地山土塊を含む。
- 23b、黒褐色土…地山土、焼土粒を含む。
- 24、黒褐色土…23aよりも黒み深い。炭化物を含む。
- 25、深褐色鐵土面…この面が被熱している。
- 26、赤褐色土面
- 27、暗褐色土…炭化物粒、燒土粒を含む。燒土粒は30よりも小さい。古代の遺物を多く含む。
- 28、暗褐色土…燒土粒多い。黒味が強い。
- 29a、黒褐色土…黒味が強い。28に類似するが燒土粒、炭化物粒多い。
- 29b、黒褐色土…29aと同様だが、燒土粒はない。
- 30、黒褐色土…やや黒味弱い。燒土粒含む。
- 31、黒褐色土
- 32、暗褐色土…地山土粒含む。
- 33、黒褐色土…地山土粒少量含む。
- 34、暗褐色土…黒味強い。炭化物をわずかに含む。
- 35、淡褐色土
- 36、暗褐色土…黒味強い。
- 37、注記漏れ。
- 38a、黒褐色土…砂粒がやや多い。しまりあり。
- 38b、暗褐色土…38と同様だが、同じかどうか不明。
- 38c、黒褐色土…38と同様だが、同じかどうか不明。
- 38d、黒褐色土…38と同様な土に地山土が含まれる。
- 38e、黒褐色土…38dより砂粒が少ない。
- 39、黒褐色土…38と同様な土に地山土塊を含む。
- 40、褐暗褐色土…砂粒多い。土質片多い。
- 41、褐暗褐色土…地山土塊を少許含む。
- 42、暗褐色土…地山土にわずかに黒色土を含む。  
(40～42はSK35堆土)
- 43、暗褐色土…砂粒多い。擾乱か。
- 44、黒褐色土…地山土極めて多く含む。
- 45、黒褐色土…地山土少疊含む。砂粒多い。
- 46、黒褐色土…砂粒多い。黒味が強い。
- 47、黒褐色土…1、2cmの地山土多く含む。炭化物、焼土粒あり。
- 48、黒褐色土…地山土極めて多く含む。焼土粒、炭化物粒もある。
- 49、黒褐色土…砂粒極めて多い。
- 50、黒褐色土…炭化物、地山土粒極めて多い。
- 51、黒褐色土…地山土はあまり含まない。この層の基下位に炭化物を極めて多く含む。
- 52、黒褐色土…砂粒極めて多く含む。
- 53、黒褐色土…焼土粒極めて多い。地山土も多い。
- 54、黒褐色土…砂粒少ない。炭化物をよくわずかに含む。
- 55、黒褐色土…1、2cmの地山土多く含む。
- 56、黒色土…黒味が強い。土器片多い。
- 57、黒褐色土…砂粒少ない。燒土粒、地山土粒をわずかに含む。
- 58、黒褐色土…地山土は含まない。炭化物の小片をわずかに含む。
- 59、暗黃褐色土…地山土がわずかに黒色を帯びている。
- 60、黒褐色土…砂粒はあまり多くなく、地山土は含まない。
- 61、黒褐色土…やや砂質で、きめ細かい感じ。炭土粒をごくわずかに含む。
- 62、注記漏れ
- 63、注記漏れ
- 64、暗褐色土…地山土塊含む。
- 65、經喰褐色土…地山土塊含む。やや粒質。
- 66、黒褐色土…砂粒極めて多い。授亂か。
- 67、暗褐色土…砂粒極めて多い。地山土塊含む。
- 68、黒褐色土…地山土極めて多い。
- 69、暗褐色土…地山土が層をなしていない。
- 70、黑色土…粘質土。砂粒をあまり含まない。
- 71、黑色土…砂粒はあまり含まない。
- 72、黑色土…71に近くやや砂質やや多い。
- 73、黒褐色土…やや粘質だが砂粒はやや多い。
- 74、黒褐色土…やや粘質。砂粒は少々。地山土をやや多く含む。
- 75、非褐色燒土…この場所で被熱している。
- 76、黒褐色土…地山土極めて多く含む。
- 77、黒褐色土…燒土粒、炭化物を極めて多く含む。
- 78、黒褐色土…73よりも砂粒が少なく、地山土塊をやや多く含む。
- 79、赤褐色燒土…この位置で被熱している。
- 80、黒褐色土…1cmの大の地山土粒をわずかに含む、砂粒は多い。
- 80'、黒褐色土…80と同様だが、同一かどうか不明。
- 81、黒褐色土…砂粒をやや多く含む。
- 82、黒褐色土…2～3cmの地山土塊を多く含む。
- 83、黑色土…砂粒を極めて多く含む。
- 84、非褐色燒土…炭化物もある。
- 85、暗褐色土…地山土にごくわずかに黒色土が含まれる。
- 86、黒褐色土…地山土を極めて多く含む。
- 87、黒褐色土…砂粒をやや多く含む。小さな燒土粒多く含む。
- 88、黒褐色土…炭化物、燒土粒を多く含む。
- 89、黒褐色土…やや粘質。地山土粒をやや多く含む。SK41堆土。
- 90、黒褐色土…砂粒をや多く含む。燒土粒わずかにあり。
- 91、黒褐色土…黒味強い。砂粒を多く含む。
- 92、黑褐色土…91より黒味が弱い。砂粒はやや多い。
- 93、黑褐色土…砂粒が極めて多い。
- 94、暗褐色土…92より更に黒味が弱い。砂粒はやや多く、燒土粒を含む。
- 95、黒褐色土…この層の上面に橙色燒土がある。
- 96、黒褐色土…粘質土。下位に炭化物、燒土を多く含む。
- 97、黑色土…黒味が強い。砂粒はやや多い。
- 98、黒褐色土…地山土塊を含む。砂粒は少ないと。
- 99、黒褐色土…地山土を多く含む。やや粘質。
- 100、唯褐色燒土…粘質土。下位に地山土多い。
- 101、暗黃褐色土…地山土に黒褐色土が混じる。
- 102、黒褐色土…SB17周溝埋土。
- 103、暗褐色土…地山土塊を含む。

34次調査区中央 東西方向断面



- 1、赤土・褐風土。
- 2、褐風土…均質な砂質土。
- 3、褐褐色土…砂質多く、しまりなし。
- 4、褐褐色土…地山土を含む。
- 5、褐褐色土…より砂質が少なく、やや粘土質。部分的には土を含んでおり、風分可能であろう。色青緑および褐色。
- 6、褐褐色土…風み強く、砂質多い。しまりなし。
- 7、褐褐色土…砂質多め。
- 8、褐褐色土…地土、灰化土、地山土を含む。
- 9、褐褐色土…砂質が極めて多い。

34次調査区南半北壁～西壁～南壁

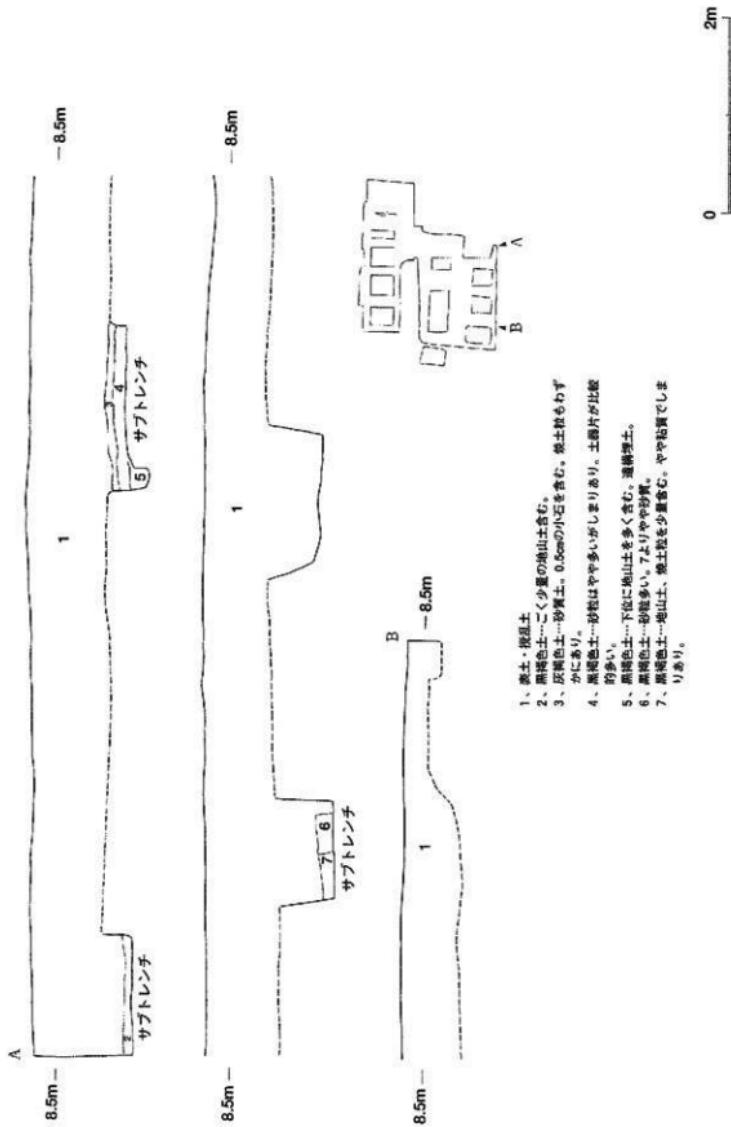


- 1・2、黄土など砂質土。
- 3、淡灰褐色土・褐色山土粉、褐色土粉を含む。砂質。
- 4、灰褐色土・褐色山土が混入が多い。
- 5、灰褐色土・褐色土が多く混入する。1～2cmの小石を少しある。
- 6、灰褐色土・褐色土が4より多く混入する。
- 7、灰褐色土・と同様。
- 8、淡灰褐色土・1～2cmの小石が多い。砂質土。
- 9、褐色土・褐色土・1～3cmの小石を含む。砂質土。
- 10、暗灰褐色土・褐色土・1～2cmの小石を含むが少す。
- 11、灰褐色土・褐色山土多く混じる。4と同様。

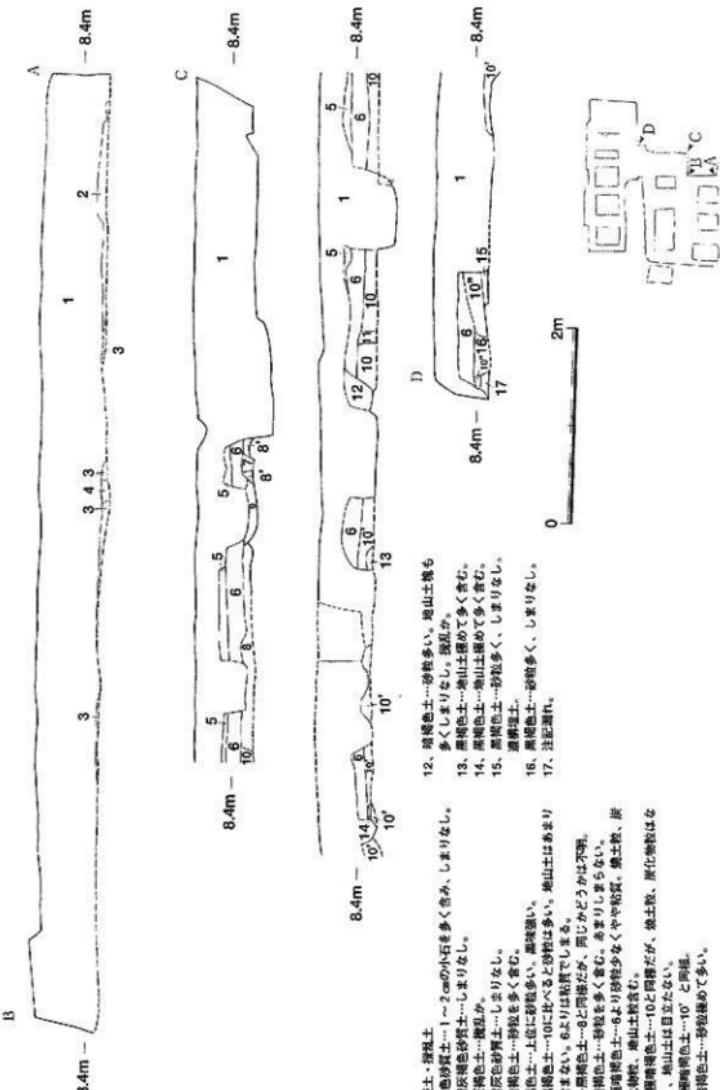
34次調査区南半北壁～西壁～南壁

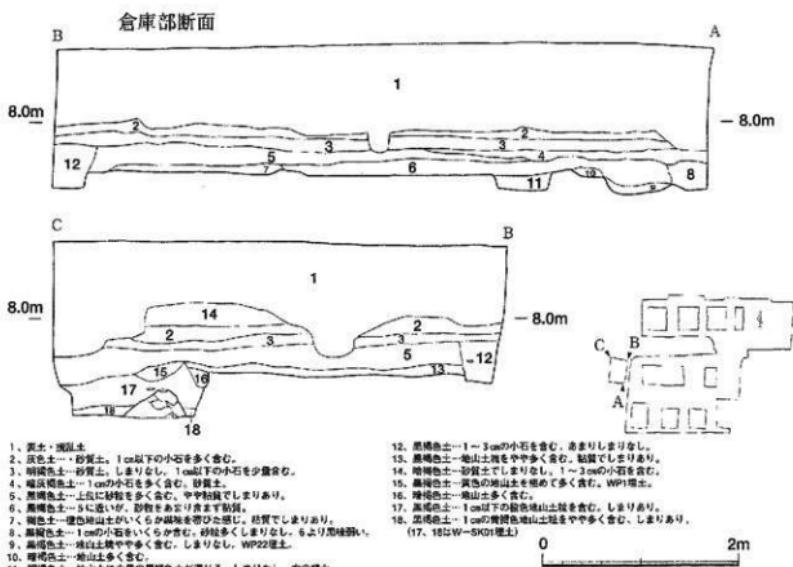
第9図

34次調査区南壁

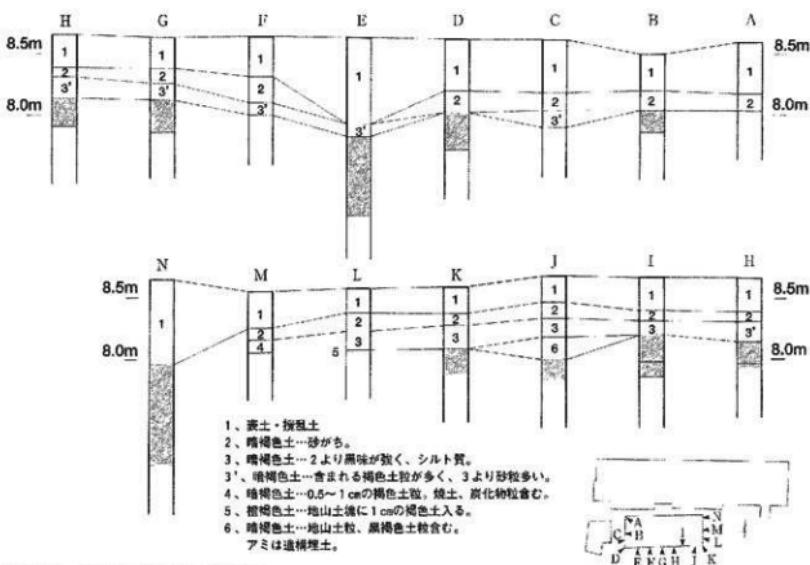


34次調査区南半東壁

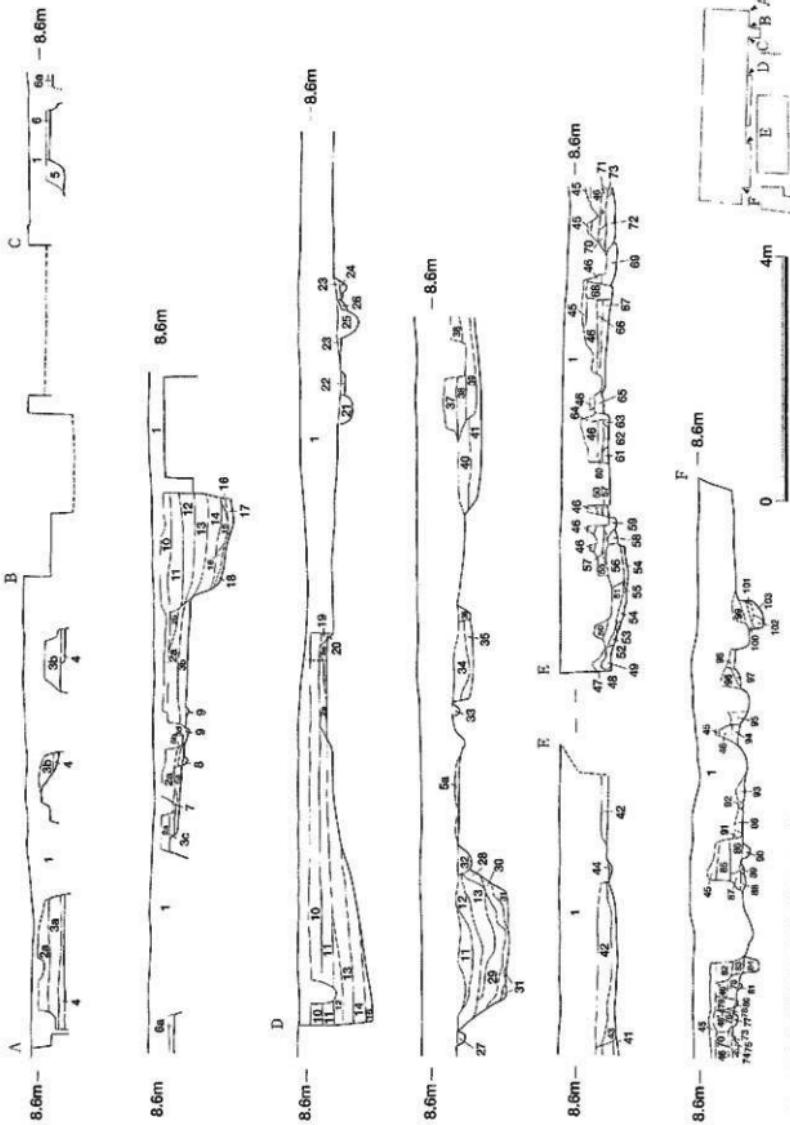




第12図 34次倉庫部断面



第13図 39次貯水槽部断面模式図

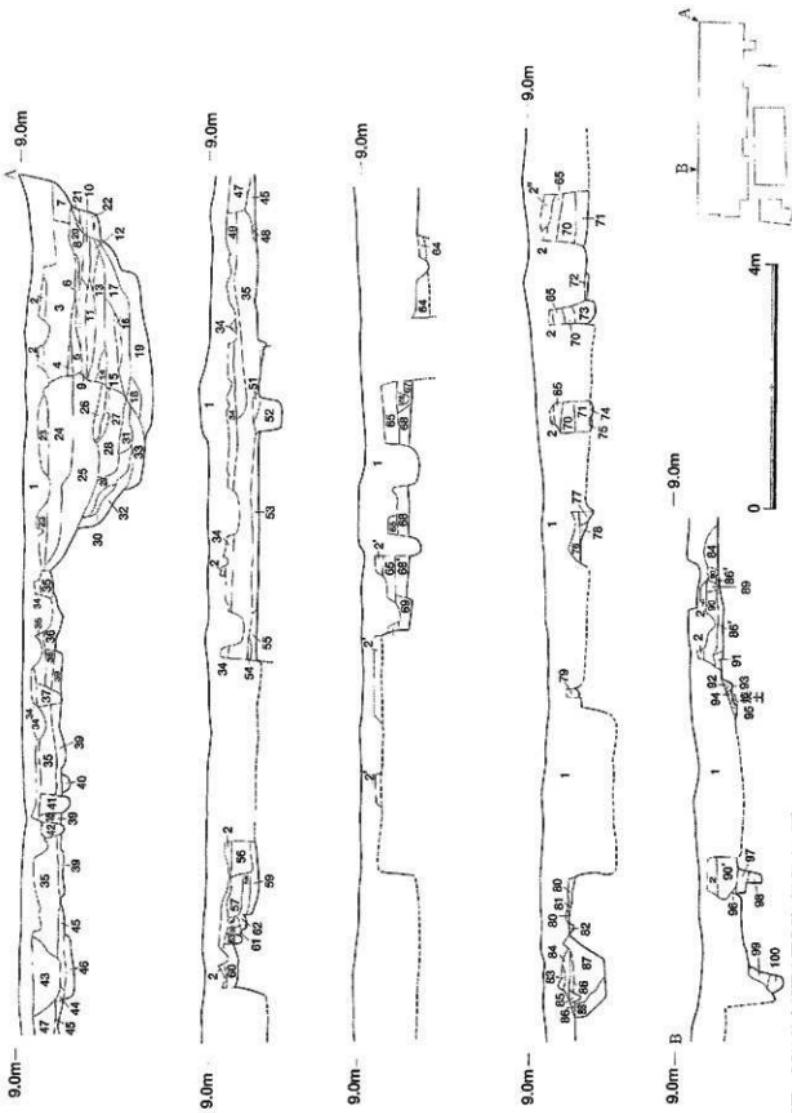


第1图 39次校合剖面图(注剖面23段)

## 校舎部調査区南壁

1. 地土、裸露土。
- 2a. 黒褐色土…砂質土。0.5cm以下の褐色土と黒色土が混じる。
- 2b. 黒褐色土…砂質土。10.0cm以上の黒褐色土が多く、黒味が強い。
- 3a. 黒褐色土…2より黒味が強い。0.5~1cmの地山土主体で0.5cmの褐色土混ざる。
- 3b. 黒褐色土…3aより褐色土粒が多い。
- 3c. 黑褐色土…1cmの地山土を3より多く含む。
- 3d. 黑褐色土…3aと同様だが、0.5cmの地山土が目立つほか、0.2~0.5cmの地山土粒を含む。
4. 黑褐色土…シルト質。0.5cm以下の地山土粒目立つ。
5. 黑褐色土…0.5~1cmの黒褐色土と褐色土が混じる。0.5cmの地山土粒目立つ。
- 6a. 噴霧褐色土…0.5cmの地山土粒が主体で、両の大の褐色土・黒褐色土が少混合される。
- 6b. 噴霧褐色土…6aより黒褐色土の量が多く、地山土とほぼ同量。
7. 地山土。
8. 黑褐色土…0.5cmの地山土粒が多い。6b, 3d, 8はSB05埋土。
9. 崩壊褐色土…0.2cmの崩壊褐色土が混じる。
10. 黑褐色土…砂質土。黒褐色土と混じるが褐色土が多い。
11. 黑褐色土…砂粒が多い。黒褐色土が混じるが、10.0cm以上は黒褐色土が多い。
12. 黑褐色土…0.5cmの黒褐色土が主体で0.5cm以下の褐色土が混じる。0.5cmの地山土粒をわずかに含む。
13. 黑褐色土…黒褐色土が主体で、0.2~0.5cmの褐色土が混じる。0.5cmの地山土粒を少し含む。
14. 噴灰褐色土…シルト質。0.5cm以下の噴灰褐色土が主で、0.2~0.3cmの黒褐色土が目立つ。
15. 噴灰褐色土…シルト質。0.2~0.5cmの黒褐色土が14. 16.より多い。
16. 黑褐色土…シルト質。0.5cm以下の噴灰褐色土と黒褐色土がほぼ同量混ざる。0.2cmの地山土粒を含む。
17. 噴霧褐色土…0.5cmの地山土粒が多く含まれる。
18. 噴霧褐色土…0.5~1cmの地山土粒が黒褐色土が同量程度。
- (11~16はSD06埋土)
19. 黑褐色土…0.5cm以下の黒褐色土に両の大の褐色土が混じる。0.2~0.3cmの地山土粒が少混合。
20. 黑褐色土…0.5cmの地山土と同の大の地山土粒がほぼ同量混じる。
21. 黑褐色土…シルト質。0.5cm以下の地山土粒が多く含む。P327埋土。
22. 黑褐色土…0.2cmの地山土粒をばらに含む。P286埋土。
23. 黑褐色土…0.5cm以下の地山土粒がまばらに含まれる。
24. 黑褐色土…0.5cm以下の地山土粒が多い。
- (23, 24はSB09の埋土)
25. 黑褐色土…地山土粒をほとんど含まない。P325埋土。
26. 黑褐色土…0.5~1cmの地山土粒がばらに含まれる。
27. 黑褐色土…0.2~0.5cmの地山土粒が含まれる。
28. 噴霧褐色土…1~2cmの地山土粒が多く含まれる。
29. 噴灰褐色土…シルト質。0.5~1cmの噴灰褐色土と黒褐色土がほぼ同量混ざる。0.2~0.5cmの地山土粒を少混合。14. 15. 16.に対応。
30. 噴灰褐色土…シルト質。0.5cm以下の噴灰褐色土と黒褐色土がほぼ同量混ざる。0.5~1cmの地山土粒が多い。
31. 噴霧褐色土…1~2cmの地山土粒が主で、1cmの黒褐色土が混じる。
32. 噴霧褐色土…1cmの褐色土と同の大の褐色土が混じる。0.5~1cmの地山土粒目立つ。
33. 黑褐色土…0.2~0.5cmの地山土粒まばら。
34. 黑褐色土…0.5~1cmの黒褐色土が主体で、両の大の褐色土が含まれる。
35. 噴霧褐色土…シルト質。黒褐色土粒が少混合する。0.5cmの地山土粒が目立つ。
- (34, 35はSK02埋土)
36. 黑褐色土…0.5cmの褐色土粒、地山土粒が少混合される。
37. 噴霧褐色土…0.5cmの褐色土と黒褐色土が混じる。量は褐色土粒が多い。
38. 黑褐色土…0.5~1cmの黒褐色土が主体で、0.5cmの褐色土粒がまばらに入り。
39. 黑褐色土…1~1.5cmの黒褐色土が主で0.5cmの大の褐色土・地山土粒が所々入る。
40. 黑褐色土…1cm以下の黒褐色土が主で0.5cmの褐色土粒が含まれる。
41. 黑褐色土…0.5cmの褐色土粒が少混合される。40より黒味が強い。0.5~1cmの地山土粒目立つ。
42. 噴霧褐色土…0.5cmの褐色土と黒褐色土が同量程度。0.5cm以下の地山土粒所々含まれる。
43. 黑褐色土…シルト質。0.5cmの大の褐色土粒が少混合される。0.5cmの地山土粒多い。
44. 噴霧褐色土。
45. 噴霧褐色土…あまり異味のない砂質土。焼土粒、炭化物粒少量含む。10と同じか。
46. 噴霧褐色土…砂粒を多く含む。しまりなし。地山土粒をわずかに含む。
47. 噴霧褐色土…46と同様であるが、地山土をやや多く含む。焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。
48. 噴霧褐色土…砂粒やや多く含む。0.5cmの地山土粒含む。
49. 黑褐色土…47より砂粒少なく、粘質な感じ。黒味強い。地山土粒はわずかに含む。

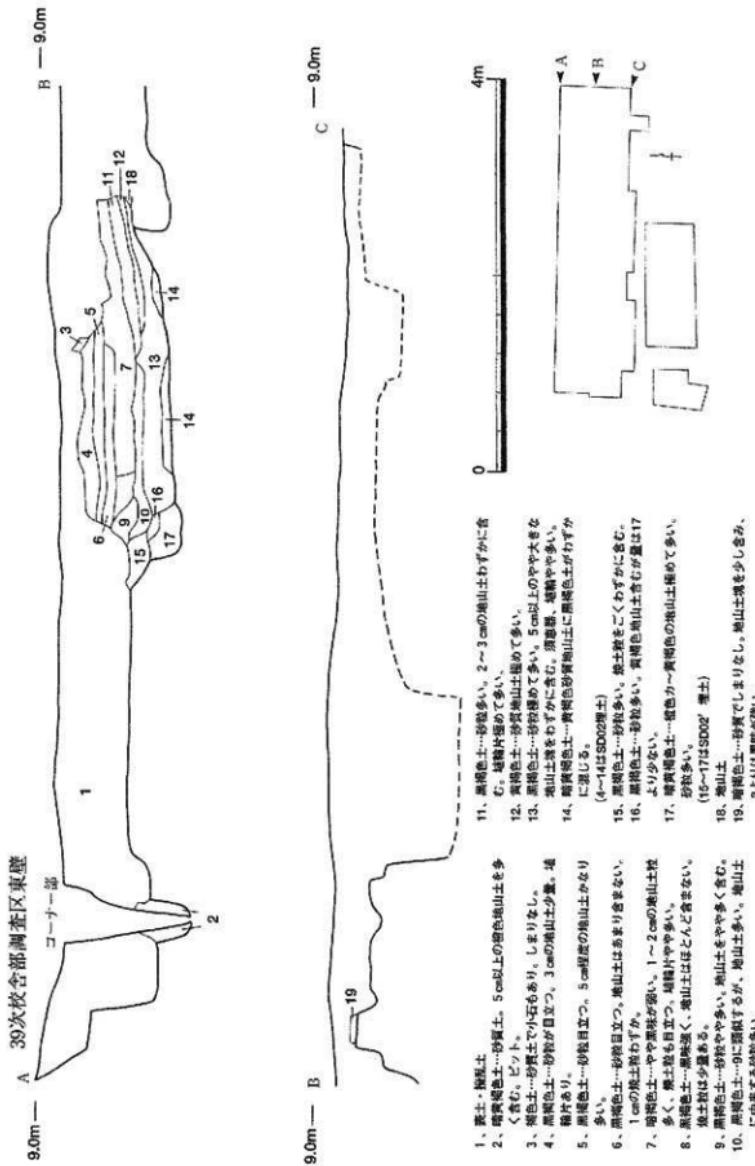
49. 噴霧褐色土…47より墨味強いが、48よりは墨味弱い。47より砂粒は少ない。地山土粒あり。
50. 噴霧褐色土…褐色が強い。砂粒多い。0.5~1cmの地山土粒と炭化物粒を含む。
51. 噴霧褐色土…砂粒多いが、50よりは砂粒少ないと。地山土はごく少混合する。地山土粒あり。
52. 噴霧褐色土…51より黒み強く、黄褐色の地山土やや多く含む。
53. 黄褐色土…黄褐色の地山土と黒褐色土の迷った感じ。砂粒はあまり目立たない。
54. 黑褐色土…2cmの地山土粒かなり多く含む。砂粒はあまり多くない。炭化物粒を含む。
55. 黑褐色土…地山土をほとんど含まず、黒み強い。
56. 黑褐色土…51と同様な感じであるが、やや砂粒少なく、黒み強い。地山土粒、炭化物粒を含む。
- (51から56はSX202埋土)
57. 噴霧褐色土…2~3cmの黒褐色の地山土を極めて多く含む。黒褐色土は黒味が強い。P310に伴う地山土。
58. 黑褐色土…3~4cmの地山土粒をやや多く含む。砂粒はやや多い。
59. 黑褐色土…砂粒はやや多いが、やや粗粒。焼土粒をわざかに含む。
60. 噴霧褐色土…40よりも少ないが砂粒を多く含む。3cmの大の地山土ごくわずかに含む。地山土粒もあり。
61. 噴霧褐色土…1cmの大の地山土粒やや多く含む。1cm以下の地山土粒も多い。
62. 黄褐色土…大粒の黄褐色地山土にわずかに黒褐色土が混じる。
63. 噴霧褐色土…砂粒を含む。地山土はごくわずかで、焼土粒はない。
64. 噴霧褐色土…砂粒を極めて多く含む。焼土粒はごくわずか。
65. 黑褐色土…2~3cmの地山土粒かなり多く含む。砂粒はあまりなく、地山土粒ごくわずかに含む。
66. 噴霧褐色土…1~2cmの地山土をやや多く含む。砂粒は46ほど多くない。
67. 噴霧褐色土…3~5cmの地山土を極めて多く含む。0.5~1cmの埋土もあれば、やや粘質。
68. 噴霧褐色土…砂粒を極めて多い。1~2cmの地山土を含むか、焼土粒をわずかに含む。
69. 噴霧褐色土…1cmの大の地山土粒かなり多く含む。砂粒はやや多い。
70. 噴霧褐色土…11よりも少ないが、砂粒をやや多く含む。焼土粒をわざかに含む。
71. 噴霧褐色土…1~2cmの地山土粒を極めて多く含む。砂粒はやや多い。
72. 噴霧褐色土…1~3cmの地山土粒を極めて多く含む。砂粒はあまり多くなく、やや粘質な感じ。
73. 噴霧褐色土…砂粒はあまり多くなく、地山土もほとんどない。
74. 噴霧褐色土…地山土を極めて多く含む。
75. 噴霧褐色土…砂粒を極めて多く含む。小ピット埋土。
76. 噴霧褐色土…砂粒を極めて多く含む。あまり墨味なく褐色が強い。
77. 噴霧褐色土…1~2cmの地山土粒を極めて多く含む。砂粒はあまり多くない。
78. 噴霧褐色土…70.4%の砂粒を多く含む。地山土はあまり内。
79. 噴霧褐色土…砂粒を多く含む。地山土は含む。
80. 噴霧褐色土…地山土主体、やや粘質。
81. 噴霧褐色土…78に近いやや粘質。
82. 噴霧褐色土…46より砂粒を多く含む。焼土粒をわずかに含む。
83. 噴霧褐色土…78と部類群く褐色が強い。1cm以下の小さな地山土粒やや少い。82よりやや粘質。
84. 噴霧褐色土…1~3cmの地山土粒をかなり多く含む。砂粒はあまりなくやや粘質な感じ。
85. 噴霧褐色土…46~48と同様な砂粒の多い土だが、焼土粒をやや多く含む。色調もやや褐色が強くなる。
86. 噴霧褐色土…87に近いがやや粘質。
87. 噴霧褐色土…砂粒を含む。
88. 噴霧褐色土…46より多くなくやや粘質。ごくわずかに地山土を含むか、かく0.5cmの崩れの地山土含む。
89. 噴霧褐色土…1~3cmの地山土粒をかなり多く含む。やや粘質で、焼土、炭化物含む。
90. 噴霧褐色土…地山土主体、やや粘質。
91. 噴霧褐色土…地山土多い。やや墨味弱い。
92. 噴霧褐色土…砂粒をかなり多く含む。地山土は少し含む。
93. 噴霧褐色土…1~2cmの地山土粒を含む。炭色~褐色を含んでいる。SX203の埋土。
94. 噴霧褐色土…1~3cmの地山土を極めて多く含む。やや粘質。
95. 噴霧褐色土…砂粒をやや多く含む。地山土はほとんど含まず。墨味強い。
96. 黑褐色土…砂粒の多さなど土の感じは85に似ているが、墨味が更に強い。
97. 黑褐色土…0ほど墨味強くなく、1~3cmの地山土。砂粒は目立つ。
98. 黑褐色土…やや粘質の黒褐色土に3cmの大の地山土を極めて多く含む。
99. 黑褐色土…墨味強い。砂粒は目立つ。地山土はほとんど含まず、微小な塊土粒入り。
100. 黑褐色土…9と同様の黒褐色土に1cm程度の地山土粒やや多く含む。
101. 黑褐色土…100に比べると地山土はやや少い。墨味が弱く、やや砂質。
102. 黑褐色土…0.2cmの小さな地山土粒を含むが目立たない。砂粒は多い。
103. 黑褐色土…3~5cmの大粒の地山土粒が多い。砂粒はやや多い。
- (99から103はSK216埋土)



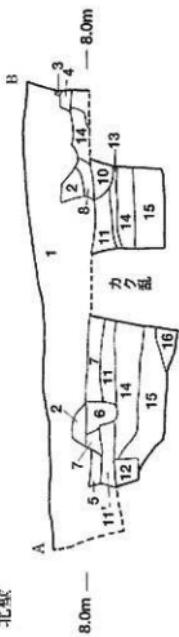
第15図 39次校正部調査区北壁 (注記は25頁)

### 39次校舎部調査区北壁

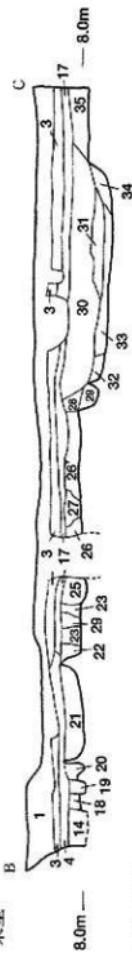
1. 黒褐色土・微混土。
2. 黑褐色土…しまりのない砂質土。
3. 黑褐色土…2と同様だが、燒土粒を含む。
4. 黑褐色土…砂粒多く、しまりない。燒土粒をごくわずかに含む。
5. 黑褐色土…より細かな燒土粒を含む。地山土を少し含む。
6. 黑褐色土…やや粘質、炭化物、燒土粒を極めて多く含む。  
(1~6はSK01堆土)  
7. 黑褐色土…砂質でしまりなし。3より黒味強い。
8. 黑褐色土…砂質土。地山土をわずかに含む。墨色はあまり強くない。
9. 黑褐色土…0~2cmに砂質が多い。地山土はあまり含まない。
10. 黑褐色土…砂粒を多く含む。5cmの地山土をや多く含む。
11. 黑褐色土…黄褐色と砂質土を揉めて多い。
12. 黑褐色土…黒褐色地山土を少し含む。燒土粒をやや多く含む。
13. 黑灰土…やや細い砂から粘質、燒土粒、炭化物を極めて多く含む。植物も多い。
14. 黑褐色土…砂質。5cmの大粒地山土をやや多く含む。燒土粒も少しあり。
15. 黑褐色土…砂質。上位に燒土粒を含むが、それほど多くはない。
16. 黄褐色土…黒褐色土中に黒褐色砂質地山土を多く含む。
17. 黑褐色土…砂粒を極めて多く含む。1~2cmの地山土粒を少し含む。
18. 黑褐色土…砂質土。2~5cmの大粒の小石を含む。
19. 喀斯特地山土…沙質土。小石が多いほか、砂質地山土を揉めて多く含む。  
(7~19はSD02堆土)
20. 黑褐色土…砂粒多い。地山土にはほとんど含まれない。
21. 黑褐色土…砂粒多い。2~3cmの地山土を含む。
22. 黑褐色土…3~5cmの地山土を揉めて多く含む。砂粒多く。  
(20~22はSD02堆土)
23. 棕褐色土…砂質土。しまりなし。2に近い。
24. 黑褐色土…砂粒を多く含む。燒土粒を少し含むほか、土器の小片も多い。
25. 黑褐色土…24よりも砂粒少なく、比較的粘質な感じ。燒土粒をわずかに含む。
26. 棕褐色土…黑褐色土中に棕褐色地山土を揉めて多く含む。13や14より地山土の量は多い。
27. 黑灰土…やや細め相手く粘質。この層の下位に燒土粒揉めて多い。
28. 黑褐色土…砂質土をやや多く含む。1~2cmの大粒地山土粒を少し含む。
29. 黑褐色土…砂粒少ない。3cmの大粒地山土がかなり多く含む。
30. 黑褐色土…29と同様砂粒が少い。地山土はほとんど含まない。
31. 黑褐色土…地山土はあまり含まない。
32. 黑褐色土…砂質土。黄褐色の砂質地山土を揉めて多く含む。
33. 喀斯特地山土…砂質土。地山の横幅同様砂質土を多く含む。  
(24~33はSD01堆土、23は骨壺層)  
34. 棕褐色土…砂質土。しまりなし。
35. 黑褐色土…砂粒を多く含む。分離可能であろう。
36. 黑褐色土…1~2cmの地山土粒をやや多く含む。少ししまった感じ。
37. 黑褐色土…砂粒多く。少し固なし。
38. 黑褐色土…異味強い。地山土は全くなく、燒土粒をわずかに含む。
39. 黑褐色土…30よりも墨色濃い。下位を中心地山土少し含む。燒土もあり。
40. にない埋褐色土…黒褐色地山土に墨褐色土が混じる。
41. 黑褐色土…砂粒多く、しまりなし。下位を中心地山土含まれる。
42. 黑褐色土…砂粒多く。しまりなし。
43. 喀斯特地山土…砂質。しまりなく、全体が均質な感じ。
44. 喀斯特地山土…やや細め相手く粘質、燒土粒をわずかに含む。
45. 黑褐色土…3~5cmの大粒地山土を揉めて多く含む。35に比べるとやや砂粒少ない。
46. にない埋褐色土…黒褐色土中に墨褐色地山土揉めて多く含まれる。
47. 喀斯特地山土…3~5cmの大粒地山土を揉めて多く含む。砂粒多く、しまりなし。
48. にない埋褐色土…地山土が少し汚れた感じ。
49. 喀斯特地山土…砂質。しまりなし。34より黒味強い。
50. にない埋褐色土…墨褐色地山土中に墨褐色地山土が混じる。
51. 黑褐色土…35よりも墨色強い。砂粒は35より少ないと。
52. 黑褐色土…2~3cmの地山土をやや多く含む。やや粘質。
53. 黑褐色土…2cmの大粒地山土をやや多く含む。やや粘質。
54. 明褐色土…粘質地山土が混じる。
55. 黑褐色土…63とあまり違わないが、地山土の量がやや多い。
56. 黑褐色土…砂質土。しまりなし。焼土粒をわずかに含む。
57. 喀斯特地山土…砂質。しまりなし。2cmの地山土粒、燒土粒わずかに含む。
58. 喀斯特地山土…5よりは墨色強く、ややシルトがら。燒土粒、地山土を少々含む。
59. 黑褐色土…58より更に墨色強い。地山土をやや多く含む。
60. 黑褐色土…墨色で墨味強い。砂粒は多くなくしまる。燒土粒はごくわずかに含む。土塵片あり。
61. 地山土
62. 喀斯特地山土…墨色地山土中に3cm以下の燒土粒をかなり多く含む。砂粒はあまり多くなく、やや粘質。
63. 喀斯特地山土…砂質土。しまりなし。0.3cmの燒土粒をわずかに含む。
64. 黑褐色土…墨味強い。地山土をやや多く含む。
65. 喀斯特地山土…砂質でしまりなし。燒土粒を含む。
66. 喀斯特地山土…地山土を揉めて多く含む。
67. 黑褐色土…燒土粒、炭化物をやや多く含む。下位に地山土多い。
68. 黑褐色土…無味強い。砂粒はあまりなく、ややしまる。
69. 黑褐色土…68と同様だが、やや墨味弱い。
70. 黑褐色土…炭化物をやや多く含む。
71. 黑褐色土…70に比べると砂粒少なく、やや粘質。5cmの大粒地山土塊をやや多く含む。
72. 注記漏れ
73. 黑褐色土…71に比べると砂粒はやや多い。2~5cmの地山土をやや多く含む。
74. 黑褐色土…71と同様な土だが、やや墨味強い。地山土少しあり。
75. 黑褐色土…74と同様だが、地山土は見えない。
76. 黑褐色土…5cmの大粒地山土塊を多く含む。砂粒も多い。
77. 黑褐色土…1~3cmの地山土塊含む。墨味強く、ややしまる。
78. 黑褐色土…77と同様だが、地山土はそれほど多く含まない。
79. 黑褐色土…1~2cmの地山土粒をわりに含む。砂粒はやや多い。
80. 喀斯特地山土…地山土を揉めて多く、砂粒も多い。
81. 喀斯特地山土…砂質で50と同様砂粒が多いが、地山土は含まない。
82. 喀斯特地山土…燒土粒を少し含み、砂粒はあまり多くない。
83. 喀斯特地山土…砂粒を揉めて多く含む。燒土粒もわずかに含まれる。
84. 喀斯特地山土…83よりも砂粒少ない。燒土粒、炭化物粒があり、2cmの地山土粒がわざわざにあります。
85. 喀斯特地山土…地山土を揉めて多く含み、砂粒も多い。燒土粒、炭化物粒を含む。
86. 喀斯特地山土…同様の土の上、2~3cmの地山土揉めて多く含まれる。燒土粒もあり、85よりも砂粒少ない。
87. 喀斯特地山土…86と同様で、地山土を揉めて多い。
88. 黑褐色土…地山の横幅同様砂質地山土を揉めて多く含む。上位に砂粒が多い。
89. 喀斯特地山土…上位に砂粒多い。
90. 喀斯特地山土…83に近いが、砂粒多い。燒土粒はごくわずかにありがあるが目立たない。
91. 喀斯特地山土…燒土粒やや目立つ。燒土粒をわずかに含む。88'に比べると燒土粒は少ない。
92. 喀斯特地山土…砂粒やや多い。燒土粒もわずかに含む。
93. 喀斯特地山土…1cm粒の地山土や多い。炭化物粒あり。
94. 喀斯特地山土…地山土はあまり目立たない。燒土粒はあり。
95. 喀斯特地山土…0.5~2cmの大粒の燒土粒かなり多い。地山土も多い。
96. 喀斯特地山土…90'と同様だが、1~2cmの地山土層立つ。
97. 喀斯特地山土…3~5cmの大粒地山土多い。砂粒層立つ。炭化物粒もあり。
98. 喀斯特地山土…砂粒はあまり目立たない。燒土粒、地山土わずかにあり。
99. 黑褐色土…1cm以下の大粒地山土ばかりに含む。砂粒はあまり多くなく、やや粘質。
100. 黑褐色土…99に3~5cmの大粒地山土かなり多く含む。燒土粒もわずかに含まれ、やや粘質。



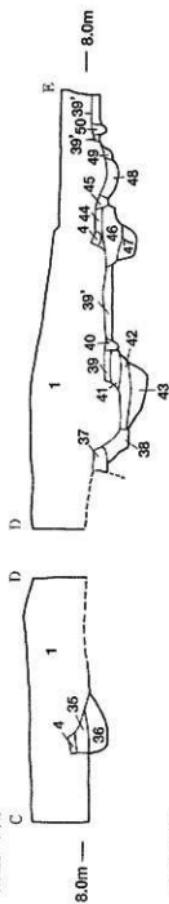
北壁



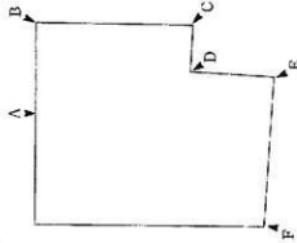
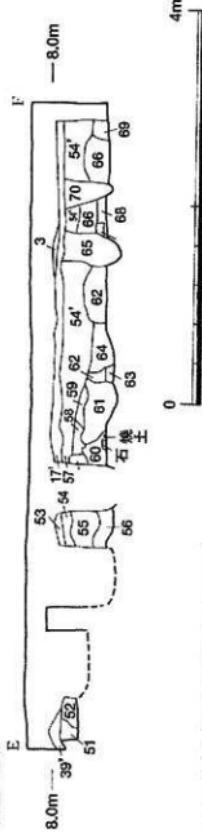
東壁



南壁(東)



南壁(西)



第17図 39号船室部構造面 (注記は28頁)

### 39次給食室部調査区壁面

1. 黒土・鐵土
  2. 塗褐色土・砂質土。1cm以下の層を含むほか、鐵土層、炭化物層や多い。
  3. 灰色土・砂質土。しまりなし。1cmの層を含む。
  4. 塗褐色土・明るい灰色土。1cm以下の層を含み、鐵土層を僅かに含む。
  5. 塗褐色土・鉄土層が多い。鐵土層は1cm以下の層を含む。
  6. 塗褐色土・1cm以下の層を含む。鐵土層は多く、鐵土層は層かに含む。
  7. 塗褐色土・土層を含むに鉄土層が多い。1cm以下の層を含む。1cmの層は山土層を含む。
  8. 塗褐色土・より西よりは鉄土層が多い。鐵土層を含む。
  9. 塗褐色土・より西よりは鉄土層が多い。鐵土層を含む。
  10. 塗褐色土・1cm以下の層を含む。鐵土層を含む。
  11. 塗褐色土・2~3cmの層を含む多く含む。砂質多く、砂粒多い。炭酸化セメント多い。
  12. 塗褐色土・1cm以下の層を含む。鐵土層を含む。
  - (11, 11' はSB0104壁上とか)
  13. 塗褐色土・一分多い。1cmの層を含む。
  14. 塗褐色土・1cm以下の層を含む多く含む。粘膜で表面的に侵蝕した土のよう。
  15. 塗褐色土・1cm以下の層を含む多く含む。鐵土層を含む。
  16. 塗褐色土・14cm以上に鉄土層が多い。1cmの層は土層で多く、やや砂質。
  17. 塗褐色土・3~5cmの大層の山土層で多く含む。15cm以上は鉄土層が多い。
  - (14~16はSB100壁上とか)
  18. 塗褐色土・明るい灰色の膠膜土。しまりなし。1cmの層を多く含み、山並木などの小片もある。
  19. 塗褐色土・土層には鉄土層が多い。中やや粘膜。
  20. 塗褐色土・18cm以上に鉄土層を多く含む。6.5cm厚の層を含む。
  21. 塗褐色土・砂質土。2~5cmの山土層を多く含む。鐵土層もあり。
  22. 塗褐色土・砂質土多い。ビット土質。
  23. 塗褐色土・砂質土を含む多く含む。2~3cmの層は山土層を多く含む。
  24. 塗褐色土・砂質土から灰褐色土の鉄土層を含めて多く含む。鐵土層もある。SB104の壁面土である。
  25. 塗褐色土・砂質土から灰褐色土の鉄土層を含めて多く含む。鐵土層もある。砂粒多い。
  26. 塗褐色土・土層には鉄土層多く含まれるが鉄土層は1cm以下の層は砂質土層を含む。
  27. 塗褐色土・26cm以上に鉄土層を多く含む。層下には山土層と粘膜土層の層や多い。
  28. 塗褐色土・1cmの層を含む多く含む。鐵土層はごくわずかに含まれる。
  29. 塗褐色土・1~3cmの層には多く含む。砂質土層を含む。
  30. 鉄土層土・1~2cmの層には多く含む。1.5cmの層は土層や多い。
  31. 鉄土層土・30cm以上に鉄土層を多く含む。大層な山土層を含む。山土層と鉄土層を含む。
  32. 鉄土層土・30~40cmの層には多く含む。
  33. 塗褐色土・30~32cmの層で、1cmの層は山土層を多く含む。
  34. 塗褐色土・粘膜の褐色地山土に灰褐色土層が追加する。無はない。
- [30~34はSB110壁上とか]

35. 塗褐色土・鉄土層多い。鐵土・鐵土層後、地山土すれども少量。
36. 塗褐色土・1~3cmの層は山土層や多い。砂質土層もやや多く、鐵土層はわずかにあり。
37. 塗褐色土・砂質土層多い。鐵土層は地山土すれども少く、鐵土層もあり。
38. 塗褐色土・3~5cmの層は山土層で多く含む。
39. 塗褐色土・鉄土層が多い。鐵土層は山土層すれどもそれぞれ少含む。
40. 塗褐色土・鉄土層多い。鐵土層の層をやや多く含む。
41. 鉄土層土・砂質土層多く含む。1.5cmの層は山土層で多く含む。
42. 褐褐色土・あまり黒味は強くない。やや粘膜質で炭化物層を少しきむ。
43. 褐褐色土・1~3cmの層は山土層を含む多く含む。黒味は弱く、粘質。
- (4~43はSB110壁上とか)
44. 塗褐色土・砂質土・2cmの層は山土層はわずかに含む。
45. 塗褐色土・砂質土を多く含み、鐵土を含む。鐵土層も含む。
46. 鉄土層土・1~5cmの層は山土層を含めて多く含む。鐵土層は山土層にあり。
47. 塗褐色土・より西よりは鉄土層多い。5cm以上の層は山土層を含む。
48. 塗褐色土・山土層は鉄土層で、鐵土層を含む多く含む。やや砂質。
49. 塗褐色土・45cmより西よりは山土層多く含む。やや明るい色。
50. 塗褐色土・砂質土・引出しの凹面で、鐵土層を含めて多く含む。
51. 黑褐色土・褐色土の層よりやや粘膜質が強い。粘膜。
52. 黑褐色土・褐色土の層よりやや粘膜質が強い。粘膜。
53. 塗褐色土・6~17cmに近づくあたりで砂質土を含む。明るい色。鐵土・炭化物層を含む。
54. 塗褐色土・やや砂質土・鐵土層、山土層を少々含む。
55. 塗褐色土・30cmの層は山土層をやや多く含む。鐵土・鐵土層、層下の層で砂質土層を多く含む。
56. 塗褐色土・55cmより西に多くの鐵土層、炭化物層を含む。1~3cmの層は山土層のみが多い。55cmより粘質。
57. 塗褐色土・鐵土層の層を多く含み、黒味強。やや砂質。
58. 塗褐色土・やや砂質土・54cmのよう土層に1cm以下地山土層を含む多く含む。
59. 塗褐色土・55cmより西に多くの鐵土層を含む。鐵土層やや多い。
60. 塗褐色土・56cm以上に鉄土層を多く含む。砂質土層が多い。
61. 塗褐色土・褐色土の層やや多く含む。黒味が強い。3~5cmの層は山土層で多く、下位は鐵土・炭化物層で多く含む。
62. 塗褐色土・56cm以上に鉄土層 (5cm) を含む。黒味は弱い。やや粘質。
63. 塗褐色土・1~2cmの層は山土層がごくわずかに含む。砂質土層が多い。
- (62, 63はSB103壁上とか)
64. 塗褐色土・1~2cmの層は山土層がごくわずかに含む。下位は鐵土・鐵土層。
65. 塗褐色土・砂質土層で多い。1~3cmの層は山土層やや多い。
66. 塗褐色土・山土層を含む多く含む。下位に鐵土・鐵土層。
67. 黑褐色土・山土層が多い。6cmに近づく。
68. 塗褐色土・山土層はわずか。某層が強い。
69. 塗褐色土・山土層は山土層に含む。鐵土層は弱い。
70. 塗褐色土・砂質土層多い。6cmに近づく。

### 4-3 遺構と遺物

#### 第34次調査

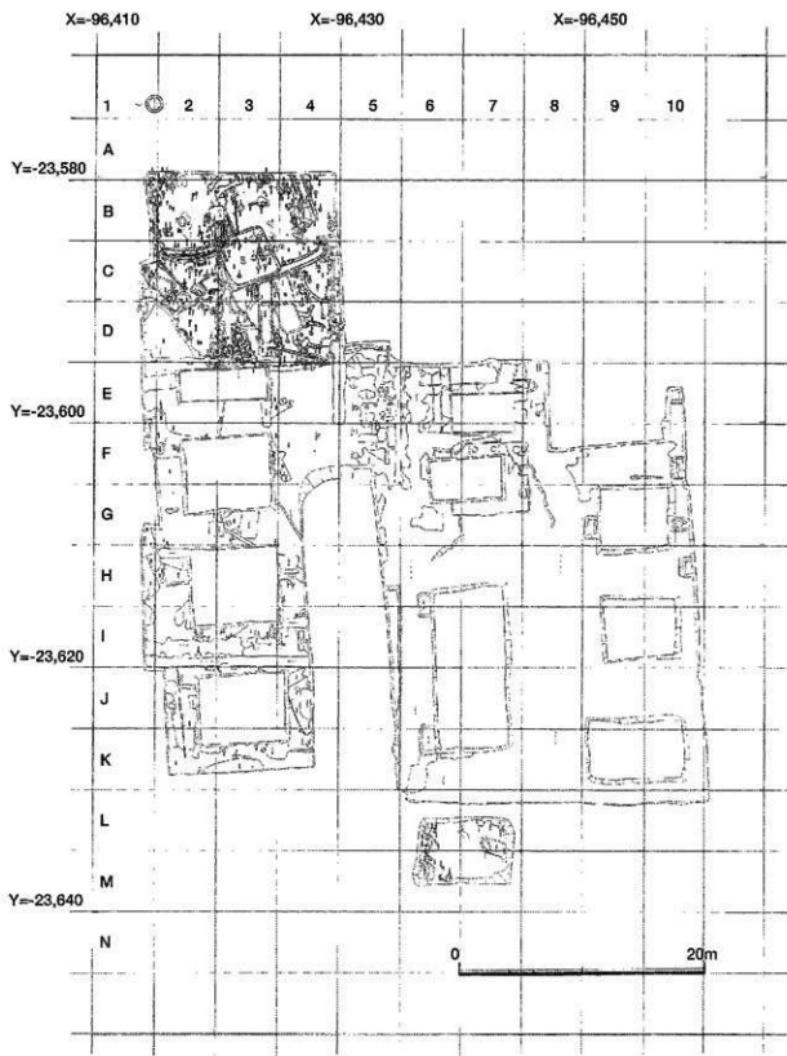
最初にグリッドについて示す。国土座標の数値は旧座標である。グリッドは調査区の北東端のX=-96,410, Y=-23,575を北東端の原点とし、西に向かって5m毎にA、B、C…、南に向かって5m毎に1、2、3…と逆に対して名称を与える、その組み合わせでA 1、B 2というように呼んだ。

先述したように、調査区の大半は遺構検出しただけに止まっている。こうした遺構は、重複しているところでは平面プランも確実とは言えず、出土遺物も確実にその遺構に属すると言えるものは少ない。であるから、確認できたプランと埋土の特徴などを示すことしかできない。それらについては、実際に掘削した遺構について時代毎に報告した後にまとめて記述する。

実際に掘削したのは、調査区北東端の一角に限られ、そこで見つかった遺構には、弥生時代中期から後期に属するものと、古代のものがある。遺構の時期ごとに分けて遺構と遺物について記述する。なお、検出した遺構については、抹消されたり、不明になったものも含めて一覧表(表6)にして示しておく。

#### 弥生時代

調査区北東端の一角の中でも東よりの部分では、表土の直下に黒色土が一面に広がっていた。当初これを包含層として掘削したが、掘削を進めると、竪穴住居が切り合ひをもって築かれた結果と判明した。遺構埋土である黒色土が一面に広がった状態のため、プランの確認は困難であった。SB02やSB17等は部分的にでも地山面で検出できたため、プランをある程度把握することができたが、その他は土器や焼土・炭化物の広がりを指標として竪穴住居のプランを推定した。その他、プランは全く不明で焼土とそれに伴う



第18図 34次調査平面図（座標は旧座標）

土器が検出されたものもある。こうした状況のため、ここで報告する遺構にはプランが曖昧なものが含まれているほか、見落としもあるものと思われる。確認できた遺構は時期的に見ると、中期中葉から終末期のものまでがあるが、以下では時間順ではなく、住居、土坑、その他という順序で記述する。

### SB02 (第19回)

東端部のC3グリッドで検出した。地山土を多く含む特徴的な埋土のため、今回検出した中では比較的容易にプランを検出することができた。

一辺が4.5mを測る方形の堅穴住居である。住居の西辺では、検出した地山面から床面までは0.3~0.4mほど残っている。西辺はE-20° -Wという方向を示している。SB17の埋土に掘り込まれている。

埋土は大きく2層に分けることができたが、両層とも地山土を多く含む黒褐色土である。上層に比べると下位層には大きな地山十塊が含まれていた。また、埋土は固く縮まっており、多量の地山土の存在とあわせると意図的に埋められた可能性もあろう（第22回）。住居範囲のはば中央地山面上で焼土を検出した。浅いピット状の掘り込みが伴っていた。この住居の焼跡と思われる。また床面上では数個のビットを検出した。いくつかはこの住居に伴うものと思われるが、確定することはできなかった。

この住居からはあまり遺物の出土が見られなかつたが、壺口縁、党中央部、高坏脚部などが出土している（第32回）。あまり残存度の高いものはない。1の壺は口縁の内向に流水文風の文様が施されている。2、3は台付窓の台部である。4は高坏の脚部である。縁やかに外反し、端部は丸くなり面は持たない。出土した土器は1が文様の点でやや古い特徴を示すが、4の高坏の脚部はVI様式でも後山の特徴を示している。SB17を切ることから見ても、VI様式後半と思われる。

### SB03 (第20回)

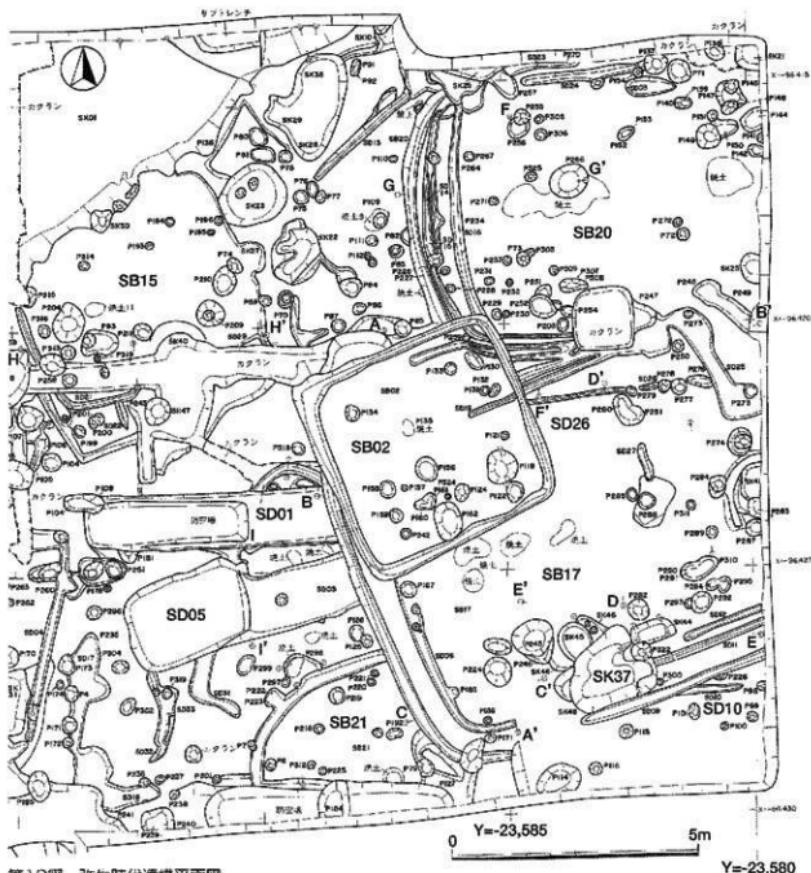
東端部のB4、C4グリッドで検出した。南半は擾乱によって失われている。平面的には明確にプランを検出することができなかつたが、この住居の床面と考えた面での炭化物の広がりと、上面での土器の分布範囲、更には埋土の観察から、第20回のようなプランと考えた。このプランではほぼ南北方向を示している。埋土と考えた土は、褐色味を帯びた黒褐色土で砂粒を多く含んでいた。住居範囲と考えた部分の中央付近に焼上が見られ、位置からすると如跡の可能性があろう。また、この住居の埋土上面からは弥生時代終末期の土器がまとまって出土している。出土状況を図（第21回）に示したが、ほぼ完形に復元できた大型の壺6の破片が広く散らばっているほか、壺の口縁部、台部の破片が多く見られた。高坏等のその他の器種はほとんどなく、僅かに19のミニチュア土器があるのみである。また、この上器群中には白色粘土の塊が2個所見られた。

5はバレススタイル壺の口縁部である。小破片であるが壺面には擬円線が施され棒状浮文も持つ。内面には樹による羽状剥突が施される。6は単純口縁の壺である。端部は四角く作っているが、明瞭な面はない。外面はイタナテ状の痕跡が残っている。7から10は単純に外反する口縁の壺である。7については、それ以外のものとは同時期とは考え難い。12、13は受口状口縁の甕である。12は法量が小さなもので、口縁部は短く上に立ちあがっている。14は、13に比べると大きく、口縁部も長い。端部は上方に立ち上がり、薄くなつて終わる。14は口縁部以外はほぼ全存する。法量の小さな甕である。15から18は甕の台。16や18は微妙に内湾している。

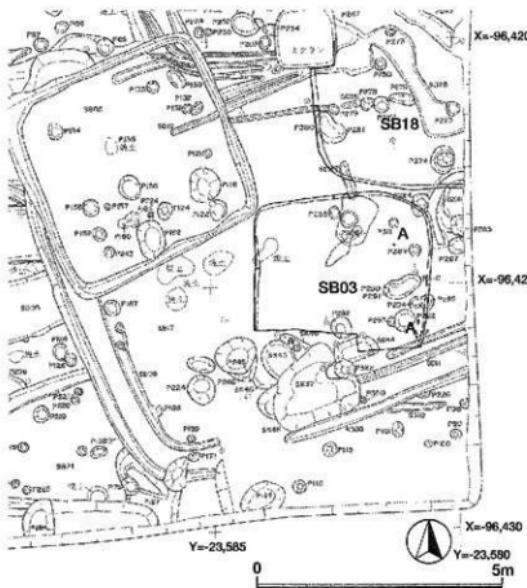
遺物の時期としては、甕の特徴、バレススタイル壺からみて弥生時代の終末頃と言えよう。この遺物は埋土上面出土のため、住居の時期を示しているとは言えない。しかし、6の壺のように埋土の下位にも達しているものもあるほか、上面上器群と時間的に異なる遺物も7がある程度で多くない。であるから、SB03の時期も弥生時代終末期頃と見ておきたい。

### SB06 (第52図)

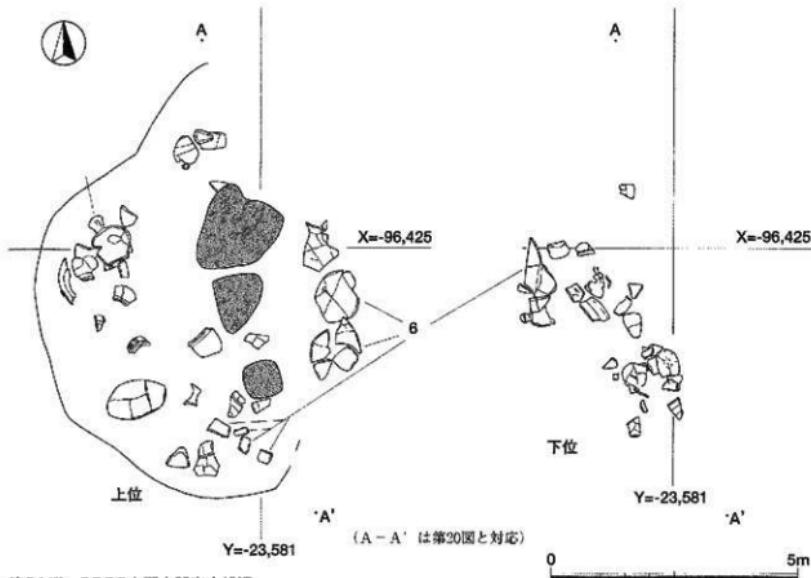
J4グリッドで検出した堅穴住居である。地山面の直上まで搅乱を受けていたため、地山面で周溝を検出した。検出できたのは北半だけであり、南は調査区外へと続いている。北側の辺は、N-67°-Eという方向を示しており、西辺はおよそN-25°-Wという方向になろう。この周溝の内部、ちょうど調査区壁面際のところで焼土と深鉢底部を転用した台を検出した。焼土は住居の床面と思われる地山上にあり、掘り込み等は伴っていないかった。20は台として図化した。上面はよく熱を受けている。埋土がほとんどなかったため、その他の出土遺物はないが、台に転用されている深鉢の形態から見て、IV様式前半以前の住居であると思われる。



第19図 弥生時代遺構平面図

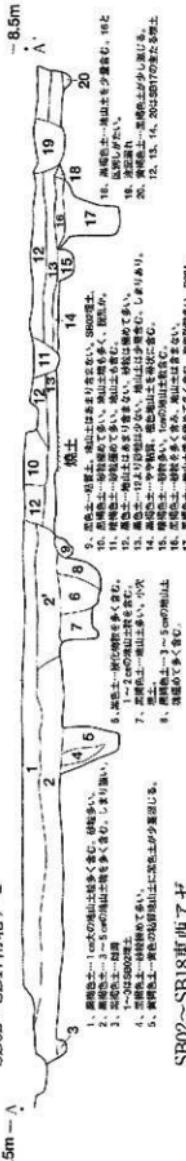


第20図 SB03・18平面図

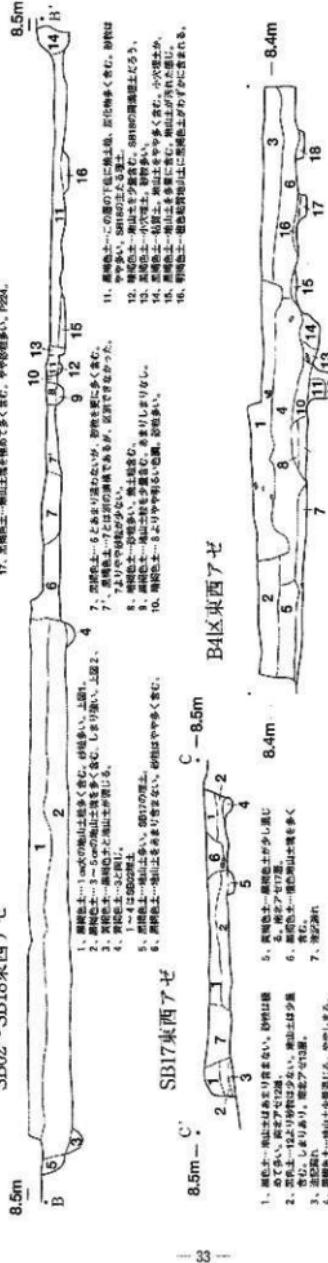


第21図 SB03上面土器出土状況

## SB02～SB17南北アゼ



## SB17東西アゼ



## B3・4X南北アゼ



第22図 弥生時代遺跡断面図 (1)

2m

### SB15（第20図）

D2・3グリッドで検出した。北辺部分はSX01によって切られているが、他の三辺は蟻の立ち上がりが残っており、プランを検出することができた。残っている部分から判断すると、一辺が約5mの方形を呈する。東辺はN-20°-Wという方向を示している。埋土は、地山上を含んだ黒褐色土で、約10cmほど残っていた（第23図）。地山上に少量の黒褐色土を含む土で床面を形成しているように観察された。住居の南辺付近中央にあるSK40は、いわゆる周堤をもつ土坑であり、この住居に伴うものであろう。この住居に伴う柱穴は不明であるが、ピットの規模等から見ると、P204、P209などがその可能性があるが、特定するにはいたっていない。壁際には周溝が巡っていた。また住居の中央やや西よりの地点で焼土を検出した。特に掘り込みなどはないが、焼跡の可能性が高い。

この住居からは、21～29に示した弥生時代後期前半の壺口縁部、壺、蓋、高坏などが出土している。高坏と壺はそれぞれまとまって出土し、出土状況から見て住居に伴うもの可能性が高い。壺の口縁部21には、内面に5段の斜め刺突が施されている。赤彩は見られない。壺22は小さな破片だが、口縁部が水平に近く横に開く形状であり、端部は四角くなり刺突はなされていない。外面にはハケメが残っている。23の壺は小破片で、口縁部には明瞭な面を持っている。高坏は3個体分である。24の口縁端部は幅の広い外傾する面となっており、坏底部外面のみ赤彩される。内外面はミガキが施されている。25の坏部は、口縁端部付近で少し折れる感じで、内傾する面となっている。外面には赤彩がある。脚部は脚部を欠いているが、上位に4段の直線文とその間に3段の斜位刺突がなされている。26は脚部のみである。3段の直線文が施され、脚部は赤彩されている。端部はやや幅の広い面をなしている。27は蓋である。頂部の摘みの中央に穿孔されている。以上の遺物は、23を除けばこの住居に関連したものと思われ、時期としては弥生後期前半（VI-3様式）頃であろう。28は、キザミのある凸帯が施された破片で、天端は不明だが、図に示した向きの凸帯の上位には横方向、下位には縦方向の条線が施されている。時期は不明である。29は弥生時代前期の条痕紋系土器の破片である。その他、土鍤や須恵器などの破片もあるが（古代の頃で述べる）、これらは切り合いの確認がうまくできなかったSX01に関連した遺物の可能性が高い。

### SB17（第20図）

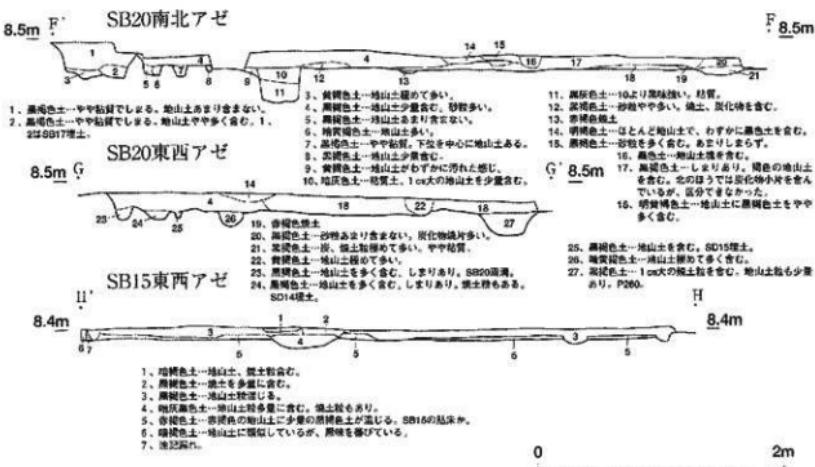
BC3・4グリッドで検出した大型の竪穴住居である。北西部分はSB02に切られている。西側は地山面で検出することができたが、東半については搅乱を受けていたほか、SB03に切られ、SB18と重なるなどしてこの住居の埋土を把握することはできなかった。SB17の床面と考えたレベルより上位でSB03やSB18の床面の焼土、炭化物を検出していることから、これらの住居に先行するものと思われる。西側の壁直下の床面には幅10cmほどの周溝が巡り、0.5mほど内側にもう一条の周溝が巡っている。住居の南辺では、調査区東壁付近では部分的ではあるが平行する溝がもう1条ある。北側ではSB02に切られて不明瞭ではあるが、同じ方向を示す溝が2条平行している。これらはSB17の周溝だと思われるが、同時期に多条巡っていたのか不明である。また、北側ではSB17とは方向の異なる溝SD26を検出した。これも住居の周溝の可能性が高いが、住居についてはまったく不明である。また、SB17とSD26を周溝とする住居の切り合いについても、壠土上面の黒色土では確認することができなかつたので不明である。SB17の西辺はN-22°-Wという方向を示している。

一辺7.5mほどを測り、今回検出された住居の中ではひときわ大型である。西端では地山面からの深さ

が0.2mほどある。埋土は、大きく2層に分けられるが、いずれも黒色土であった。中央付近の床面上には地山土を帶状に含む黒褐色土が薄く堆積しており、床を形成した土の可能性がある。B4グリッドの東西アゼではSB17の埋土と確実に同定できたものはないが、地山土を多く含む7は、上述の床を形成した層と同一の可能性もある（第22図）。

この住居の東辺に近い位置で、周堤を持つ十坑SK41を検出した。西半分を検出したのみで東は調査区外である。直径は1.5mほどある。周堤はカマボコ形の断面形をしており、高さは地表面から5cm程度、内側は周堤上面から7、8cm程度と浅いものである。SB17の東辺に近い位置にあり、この住居の施設の可能性が高いが、SB17の埋土が特定できなかったため確実とはいえない。埋土から弥生土器の蓋71が出土している。その他、住居範囲の南半には多くのピットや土坑がある。SK42・SK43は後述するようにこの住居の貼床部分の可能性が考えられる他、SK44など住居との関連が重要な遺構があるが、ちょうどこの付近は地表面まで擾乱を受けていた上、埋土が残っている部分には複数の遺構が重なっていたため、これらがSB17に伴うものであるのかどうかは確定できなかった。そのため、これらは別に報告する。

出土した遺物は小片が多いが、壺、壺、高杯などがある（第33図）。30の壺は端面に凹線が施される。口縁内面には3段の斜位刺突が施されている。31は径も復元できない小片だが、口縁部外面に擬凹線を施した受口状口縁の壺である。34から36は壺の口縁部である。34、36は胴部から口縁部にかけてあまり明瞭には折れず、緩く屈曲して口縁にいたる。35はややはっきりと折れている。いずれも端部には右上がりの刺突が施されている。38は赤彩のある高杯脚部である。ヘラによる直線文が施されている。39の高杯脚部は、これ以外の遺物とは時期を異にしている。40は赤彩が施された台状の土器である。沈線が施され、上面は平坦になっている。壺についてはそれほど古い特徴を見ることはできないが、赤彩のある高杯脚部の存在、赤彩を施した台などからみて、VI様式初め頃に比定できる。なお、41は網文土器深鉢の口縁部である。端部の下に、竹管状の工具による押し引きが2条施される。本刈谷式に比定できよう。



第23図 弥生時代遺構断面図（2）

### SB18（第20図）

B3グリッドで検出した竪穴住居である。この住居もSB03と同様、黒色土中に塗かれており、プランは明確には確認できなかったが、SB02の東側で炭化材、焼土が広がっていた範囲を住居の床面であると考えSB18とした。およそのプランが想定できたに留まり（第20図）、周溝、柱穴など住居に伴う遺構は確認できなかった。想定したプランではほぼ南北方向を示している。住居の埋土上を考えたのは砂粒が多く含む黒褐色土であり、この層の下位に焼土、炭化物が広がっていた。この竪穴住居の埋土中にはSB17の床面らしい面ではなく、SB17よりは後に塗かれた住居であると思われる。この炭化物層の上面で、外面に赤彩を施したバレススタイル壺が、潰れた状態で出土している。口縁部は薄く作られ、口縁端部も丸くなり面は持たない。形状から見て弥生時代終末期であろう。外面の赤彩は部分的に残るのみであるが、頬例から見て全面に施されていた可能性が高い。43、44も壺である。44は口縁の端面に凹線を施している。42とは時期が異なる可能性が高い。42はほぼ全体が復元できる程度に残っているから、床面の遺物であるとすると住居の時期は弥生時代終末期（VI様式末からその後続する時期）であろう。

### SB20（第19図）

調査区の北東端BC2グリッドで検出した。西辺はほぼ南北方向を示す。竪穴住居の西側半分は比較的明瞭にプランを検出することができたが、東半分は複数の遺構が重なった結果、地山の面が住居床面の高さまで見られなかったため、プランは不明である。南北方向は、約5.5mほどあり、コーナーはやや丸みを帯びている。西辺および南辺では、壁際の周溝に平行して3条の細い溝が巡っていた。これらの周溝は、SB20の埋土の下で検出され、この住居に伴うもの可能性が高い。多条の周溝が同時期に巡っていたのか、住居の拡張が行われたのかはわからない。埋土は、地山土を含む黒褐色土で、住居の立ち上がりは、西壁際で15cmほど残っていた（第23図）。西側の壁面から3mほどの地点の地山面上に焼土が認められた。不整形に広がっているのみであるが畑跡の可能性が高い。また柱穴の可能性のあるビットはいくつか見つかっているが、特定することはできなかった。

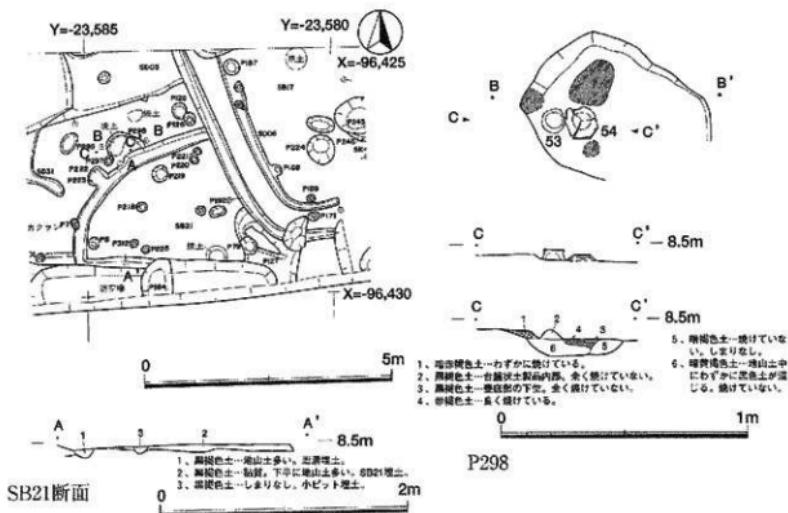
この住居の埋土上面に、明褐色の地山土による面が形成されていた。これが住居の貼床であると考えてSB19としたが、プランなどははっきりせず、最終的には住居とするだけの根拠を見出せなかった。この住居の西側には所属不明の焼土もあり住居が存在した可能性は高い。また、当初上位の住居（SB19）と考えた範囲ではやや大型の上器片が見られた。しかし、これらの土器は貼床と考えた部分よりも下位に及んでおり、SB19の土器とは考えにくくなかった。遺物では、当初46から50までをSB19とし、51、52をSB20としていた。46の壺は、口縁部内面に扇形文が施され、胴部は横による直線文と波状文が施される。口縁の端面には、原体は不明であるが、斜めの刺突が施されている。48、49は単純に外反する口縁をもつ壺である。ともに口縁部は四角く作り、端部には明瞭な面を持つ。刺突は施されていない。50は受口状口縁の壺である。この住居の範囲内には焼土があり、弥生時代終末期の土器が出土しているが、この土器も上面の遺構に関わるものと思われ、他の土器とは時期が異なる。51は器台の脚部ではないかと思われる。外面は赤彩されており、細長い長方形の透孔の痕跡が2方向に見られる。52はミニチュア土器である。また、SB19と考えた部分から石器が1点出土している。石器についてはまとめで記した。確実に別の時期である50を除けば、土器に明瞭な時期差はみられず、壺や壺の特徴、赤彩をもつ器台らしいものの破片など、弥生時代後期の初頭、VI様式ないしはVI-1様式に比定できよう。

SB21 (第24図)

C4グリッドで周溝のみを検出した堅穴住居である。検出できたのは、やや丸みをもった住居の北西コーナー部分だけである。埋土はほとんど残っていなかったこともあり、SB17との関係は不明である。周溝は幅15cm程度、深さは数cmである。埋土は5, 6cm残っているのみだが、粘質で地山土を多く含む黒褐色土であった。また、全体のプランが丸みを帯びているため、方向は決めていくが、やや西に傾いた方向を示すものと思われる。北辺および西辺からそれぞれ2mほどの所に焼土が見られ、炉の可能性が高い。時期を特定できるような遺物は出土していないが、炉の存在から見て弥生時代に属する可能性が高い。ただしこれほど丸みを帯びた住居の他はない。

P298 (第24図)

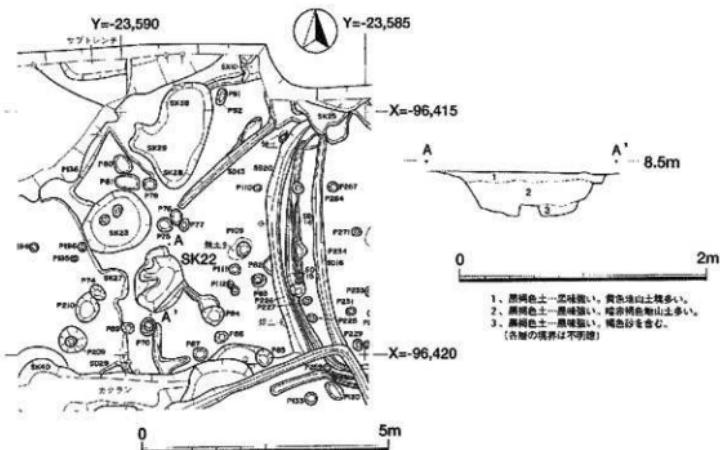
C4グリッド、SB21の北側で検出した焼土である。浅く掘り進められ、内部には焼土が見られた。この小穴内には、壺を持ち上げる台となるものが南北に2個体設置されていた。南側の54は壺の底部を転用したものである。台としての上面(壺の底面)は熱を受けて赤変していた。もう一方の53はいわゆる台盤状土製品である。外面頂部は平坦な面をなし、下半は外側に向く器形をしている。内面は横方向にハケメが施されている。この台盤状土製品には顯著な被熱の痕跡は見られない。焼土は北側の台盤状土製品の外側と壺底部の下位に見られた。本来、住居の炉であると思われるが、これが属する住居は全く不明である。またこのピットとSB21の切り合いも不明である。時期としては、台盤状土製品の存在から見て弥生時代中期であろう。



第24図 SB21・P298

## SK22

C2グリッドで検出した直径1.2m程の円形の土坑である。深さは0.4m程であるが、底は二つに分かれており、複数の土坑が重なっている可能性もある。断面の検討では埋土は明瞭に区分することができなかつたが、いずれも黒味が強い黒褐色土である。埋土中からは弥生時代後期の短頸壺、甕の台部、鉢など(55～58)が出土している。57の鉢は突出する底を持ち、頸部はあまりしまらない。58は短頸壺である。口縁部は短く外に開く。遺物は時期を特定する材料に乏しいが、VI様式期の造構と見られる。



第25図 SK22

## SK37 (第19図)

B4グリッドで検出した直径が1mを越える不整円形の土坑である。幾つかの土坑が重なっているようで、上位を掘削時にはうまく識別することができなかったが、SK46を切っているように見えた。埋土は上位は黒褐色土をしているが、その下位には地山土を極めて多く含む暗黄褐色土が堆積している。当初、土坑の形状と埋土の違いから、上位の黒褐色土のみをSK37とし、その下位はSK37に切られる別の造構(SK48)と考えたが、最終的には両者は同一造構であると判断した。SK37と判断した範囲の内、南部はかなり深く、検出した地山土から0.6mほどのところまで掘削した。この南部から弥生土器がやや多く出土した(59～65)。破片が多いが、61のように比較的遺存度の高いものもある。59は受口状口縁になる太頸壺の口縁部と思われる。口縁部外側には擬凹線が施され、その下に斜めの刺突がある。60は壺の台であろう。61は無頸壺である。体部の中位が強く張る器形である。口縁部外側には刺突が施されている。圓化部の人半が残っている。62は甕の口縁部。口縁端部には幅の広い面をなすが、刺突は施されていない。63は長く直線的な口縁部をもつ長頸壺である。64は高壺か器台の脚部である。端部付近に多数の透孔が穿たれる。端には面を持っている。65は小さな高壺の脚部である。59のように中期以来のものが含まれる一方、64のような新しい器種を含んでいる事から、VI様式の初頭の資料を見ておきたい。この土坑はSB17の範囲内にあ

るが、関係は不明である。遺物の時期は、かなり近いものと思われる。

#### SK42

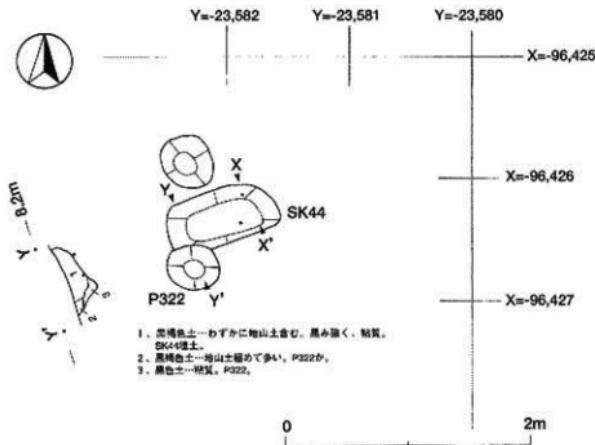
B3・4グリッドで検出した浅い落ち込みである。周囲の掘削によりプランは失われてしまった。地山土を多く含む暗褐色土を埋土としている。掘削時にはよくわからなかったが、埋土の特徴から見るとSK43と同様、SB17の貼床の可能性もある。SK42からは壺の口縁部66と高坏の脚部67が出土しているが、埋土中であるのか上面であるのか不明である。67は、斜めの刺突と竹管状工具の刺突が施され、縫部は赤彩されている。

#### SK43

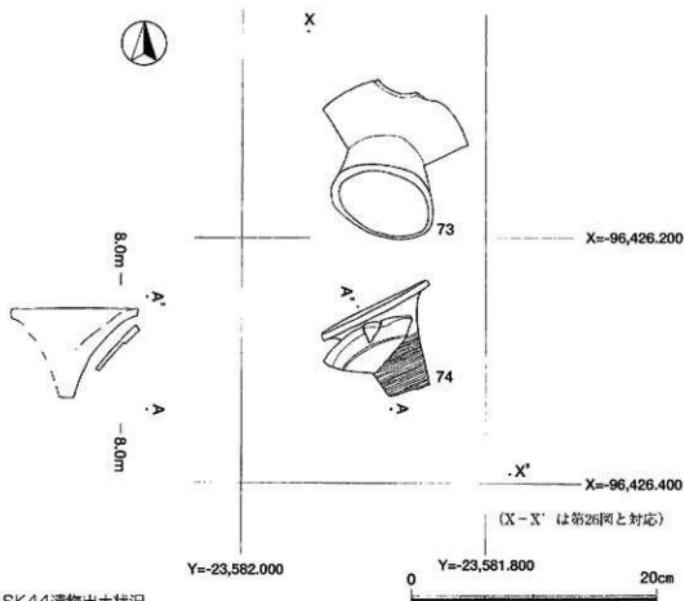
B3グリッドで検出した、ごく浅い十坑である。掘削したがプランは不明確である。埋土は地山土を多く含む黒褐色土であった。埋土の上面では完形に復元できる小型の壺68のほか高坏の脚部70などが出土した。68は粗雑なつくりで、口縁の端部もあまり整っていない。69の壺口縁部はVI様式期の典型的なものである。70の高坏脚部は上位がやや柱状になり、裾部もあまり広がらない。裾部のかなり低い位置に透孔が穿たれている。端部はやや膨らんだ面をなしている。この土坑の性格は不明といわざるを得ないが、SB17の範囲内にあり、埋土の特徴やごく浅い形状から見て住居の貼床の可能性があるのでは思われる。そうであるならば、この遺物はSB17に属するものということになるが、遺物も同時期ともみなしえるものである。

#### SK44（第26・27図）

B4グリッドで検出した、長軸0.9m、短軸0.45mを測る橢円形の土坑である。池山の面で検出し、位置としては、SB17の範囲内にあたるが、この付近は地山直上まで擾乱を受けており、SB17の埋土とこの土坑の関係はわからない。深さは検出面から0.2mほどで、断面は緩いU字形を呈する。埋土は黒褐色土でわずかに地山土を含んでいた。



第26図 SK44



第27図 SK44遺物出土状況

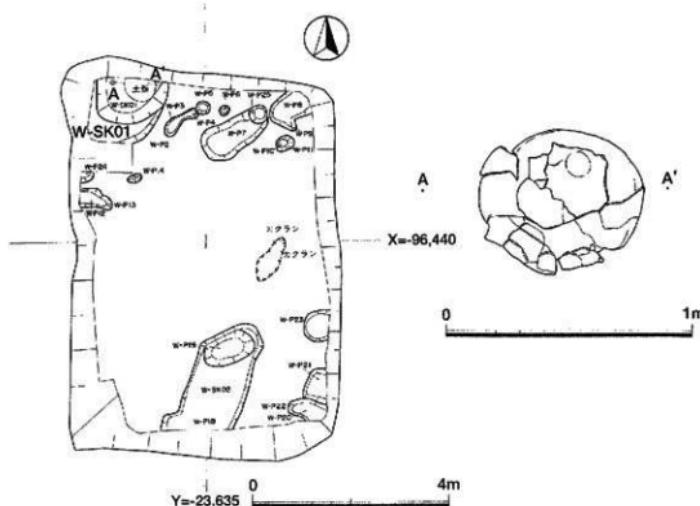
この土坑からは、鹿龍文鏡、弥生上器の壺の台、壺の台、高坏脚部などが出土した。弥生上器は、下端が土坑の底に接するようなレベルから出土し、鏡は高坏の脚部の直上で、僅かに土をはさんでいるが、部分的には高坏に接して出土した。その他に壺の台部の破片もある。確認できた遺物はほとんどこれだけで、壺や高坏の欠損部の破片などはない。壺の台部73は、端部にヨコナデが施されているが、明瞭な外傾面はなしていない。高坏の脚部は上位にヘラによる直線文が施され、施文後に全面に赤彩が施されている。裾付近は外反し、端部には面を持っている。外面に赤彩が施された壺72の脚部もある。弥生土器は特徴からみて、弥生時代後期初頭（VI-1・2様式）頃に位置付けることができる。土器と鏡の出土状況から見て、これらがこの土坑内に埋まったのが同時期である可能性が高い。土器には大きく時期の異なる破片などは見られないが、固化した遺物は全体からの遺存度も高くないため、土器の時期と土坑が埋まった時期が異なる可能性も考慮する必要がある。なお、鏡についてはまとめ（5-1）で記述する。

#### SK46（第19図）

B4グリッドで検出した。深さは最大0.2mほどである。埋土はSK37に切られているように見えた。埋土は暗黄褐色上で、地山上を帶状に含んでいた。出土遺物は小片が多い。75は壺の口縁部。外面には擬凹線を持ち、その下位には斜め刺突が施される。76は受口状口縁になる壺の口縁部。77は外面が赤彩された口縁部の破片である。いずれも小片であり時期を決めるのが難しいが、VI様式の初めと見ておく。

### W-SK01 (第28図)

西端の倉庫予定地のM6グリッドで検出した直径が2mほどの土坑である。埋土は黒褐色土である。上坑の中央には、壺の胴部上半が据えられたような状態であり、壺の底部で上が覆われていた。壺の口縁部はなかった。出土状況から見て土器棺であると思われる。39次調査ではこの20mほど北で方形周溝墓らしい溝が検出されており、墓域の中に築かれているのかもしれない。土器棺となった壺は、胴部上位に斜めの刺突と波状文をもつ。胴部下位はヘラケズリされている。弥生時代後期のものである。



第28図 W-SK01

### SD01 (第19図)

C3グリッドで検出したほぼ直角に折れる溝である。幅は約25cm、深さは10cm程度である。砂粒の多い黒褐色土を埋土とする。コーナー部分のみであるが、規模、形状から見て竪穴住居の周溝の可能性が高い。南側には焼土もあり、検出できなかった住居の存在を物語る。台付壺の台78が出土している。

### SD05 (第19・29図)

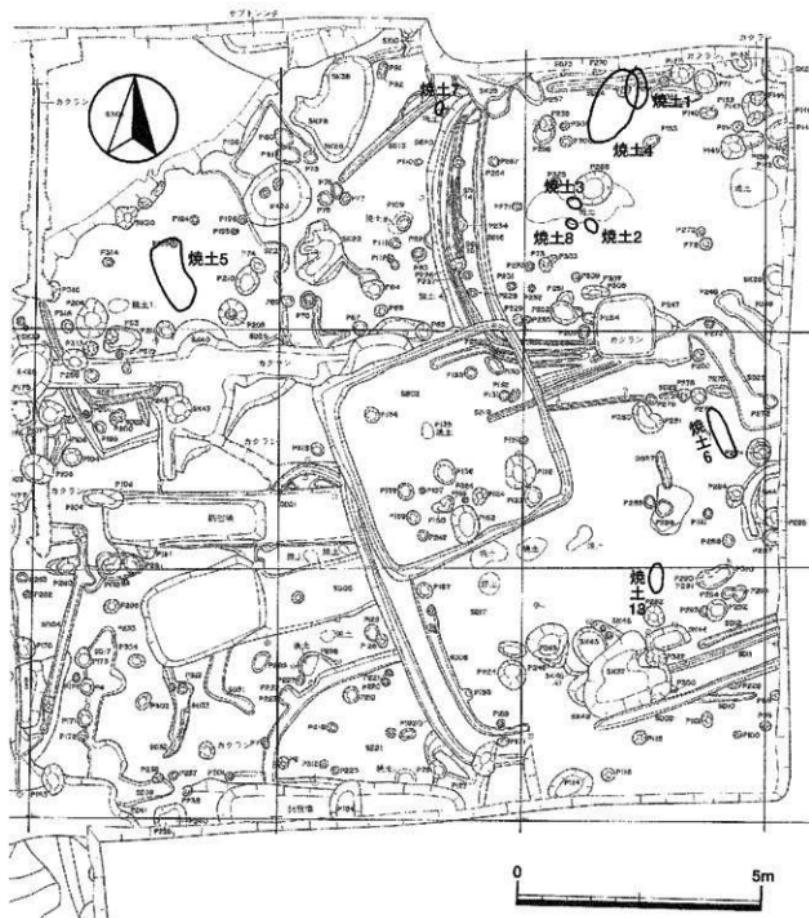
C-D4グリッドで検出した短径1m、長径2m程度の楕円形の遺構である。中央付近で幅が変わり、本来複数の遺構が重なっていたものと思われる。地山土を多く含む黒褐色土を埋土としている。埋土の上面から、外面にタタキを残す壺79が出土している。壺の外面には波状文が施されている。IV様式の後半のものとみて良い。



第29図 SD05断面

### 焼土（第30図）

調査区北東端の住居密集部では、包含層中、道構壇上上、地山面などで多くの焼土が見られた。これらの中には本来、住居の炉の跡も含まれているものと思われるが、周辺の造構との関連が明らかな焼土は少ない。これらの焼土は未検出の居住関連造構の存在を示唆するものであり、造構の重複の多さを示しているのであろう。ここでは焼土の位置と関連する出土遺物について報告する。第30図には、黒色土上面などで検出されたため平面図に表現されていない焼土の位置を示した。なお、焼土2、3、8はSB20の床面上に見られる焼土と同一のものであろう。

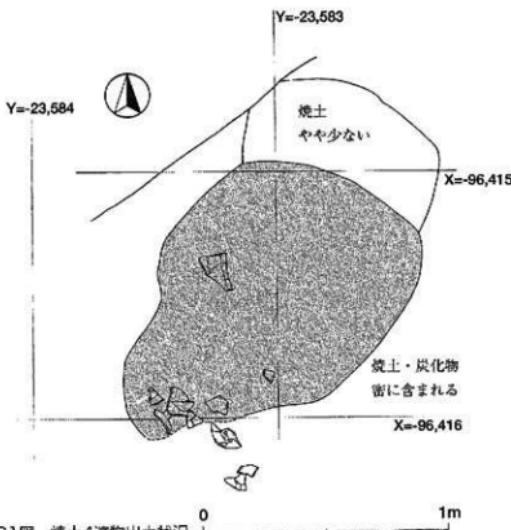


第30図 焼土位置図

#### 焼土 4 (第31図)

B2グリッドの黒色土上で検出した。直径1mほどの範囲に焼土、炭化物が密集していた。その北側には、やや焼土粒が少ないとある範囲があった。この焼土中および隣接する範囲から、弥生時代終末期から古墳時代の高坏が3個体出土している。いずれも脚部のみであるが、82は脚の中位で屈曲し、下半は内湾する。83・84は全体にゆるやかに外反する形態である。その他に受口口縁の壺81も存在している。

この焼土の性格は不明ではあるが、壺を伴うなど住居の炉跡の可能性が高い。検出されたのが黒色土上面であり、遺構の検出が困難であったことから判断 第31図 焼土4遺物出土状況



#### 焼土 6

B3グリッドで検出した。黒色土上面が、幅0.4mで、1mにわたって赤く焼けている。焼土付近から高坏の壺部85が出土している。壺部はほぼ全体が残っている。内外面は緩方向のヘラミガキがなされ、口縁の端部には内傾する面を持っている。時期はⅡ-2~3様式頃と思われる。炉の可能性があるが、関連した堅穴住居については不明である。

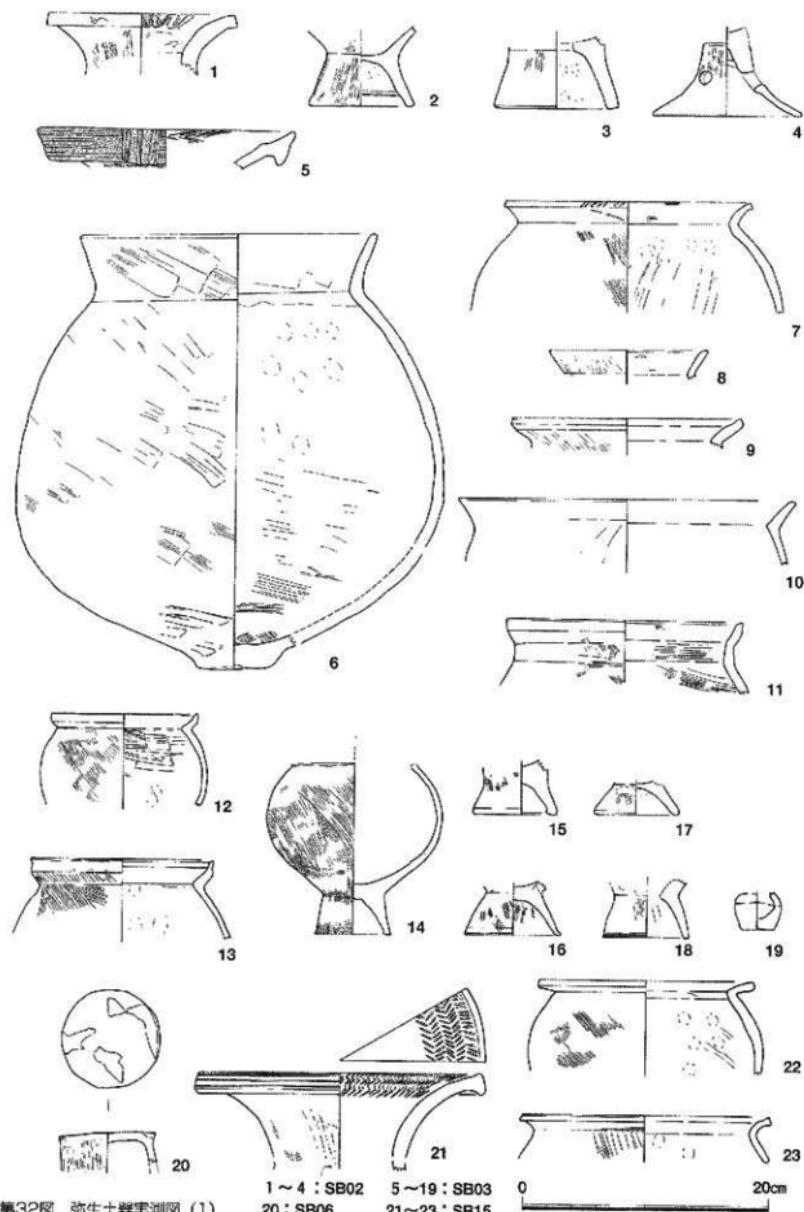
#### その他の弥生時代の遺物

以上に報告した遺構のほかに、弥生土器が出土している遺構がいくらかある。これらの遺物は遺構とのかかわりが明らかではないので、ここでは遺物についてのみ記述する。

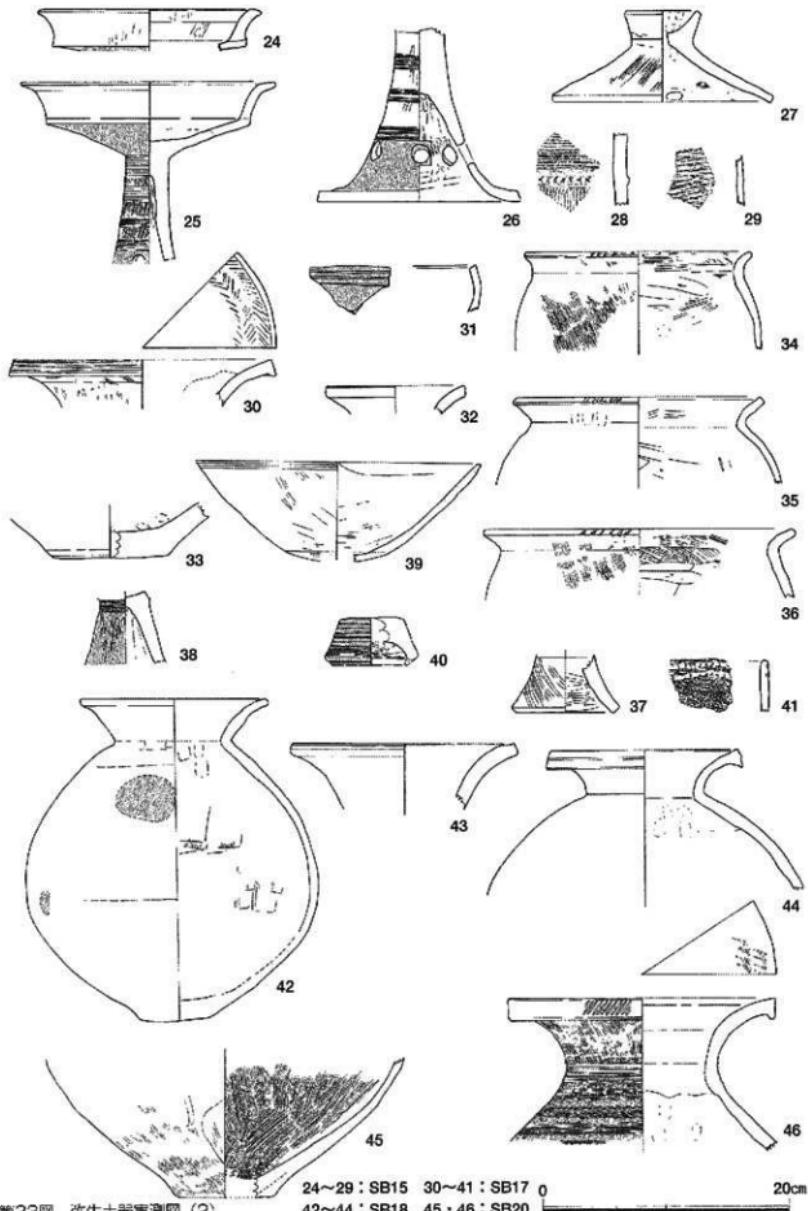
86はSB13から出土したとされている弥生土器壺の口縁部である。口縁端部には明瞭な外傾する面をなし、刺突が施されている。SB13はB1・2グリッドで検出した遺構であったが、プランが不明確であったため抹消した。87はSB17またはSD26から出土したプランデーグラス形の高坏である。ほぼ全体が残っている。外面全体が赤色されている。SD26とSB17は切り合いでよくわからず、この遺物もどちらに属するか不明である。なお、住居の周溝状の溝であるSD26は6mほど南に離れたSD10と平行しているが、同一住居の周溝になるのかどうか不明である。

88はSK23から出土した条痕文系土器の口縁部破片である。SK23はC2グリッドで検出されているが、この他には須恵器、土師器片が出土しており、遺構の時期は古代以降である。

89はSD12から出土した台付壺の台部分である。やや外反気味に開いており、端部は丸く終わっている。この遺構は、SB17の範囲内にあり、同一の方向を示しているが、つながりが不明のため周溝とは確定できない。



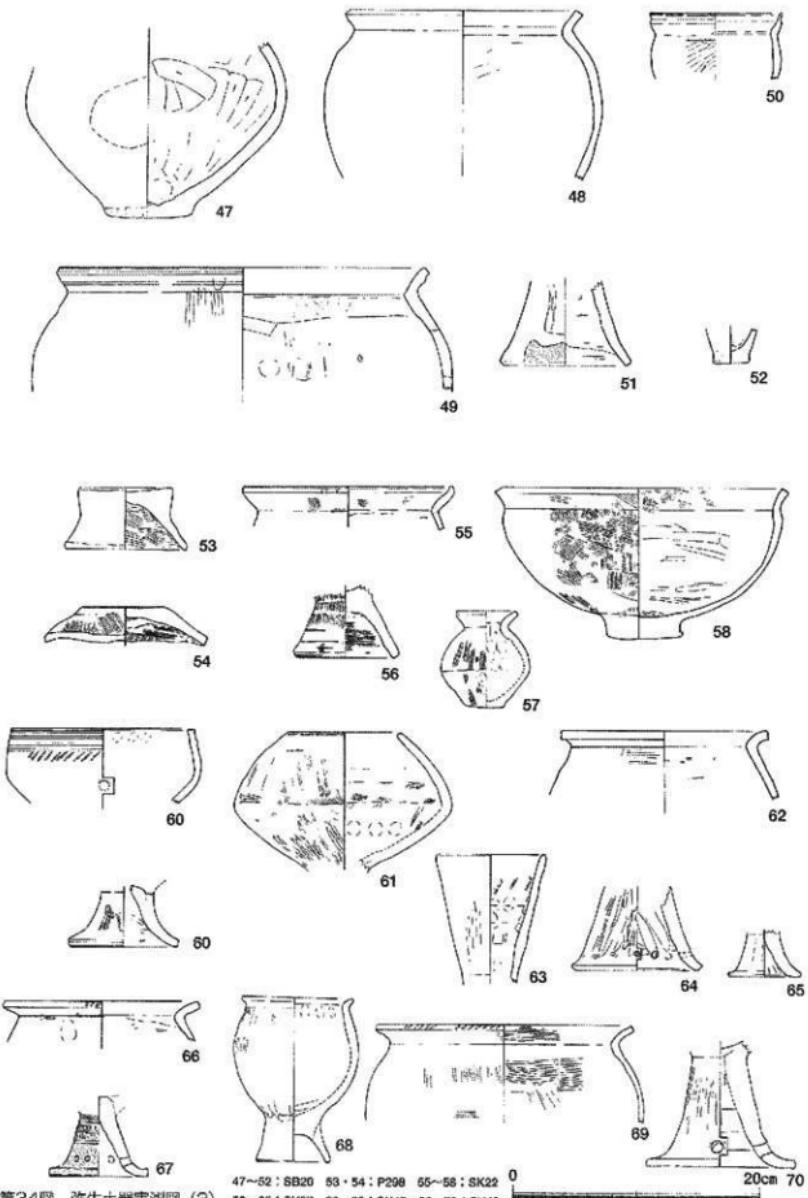
第32图 弥生土器実測図(1)



第33図 弥生土器実測図(2)

24~29: SB15 30~41: SB17  
42~44: SB18 45~46: SB20

20cm

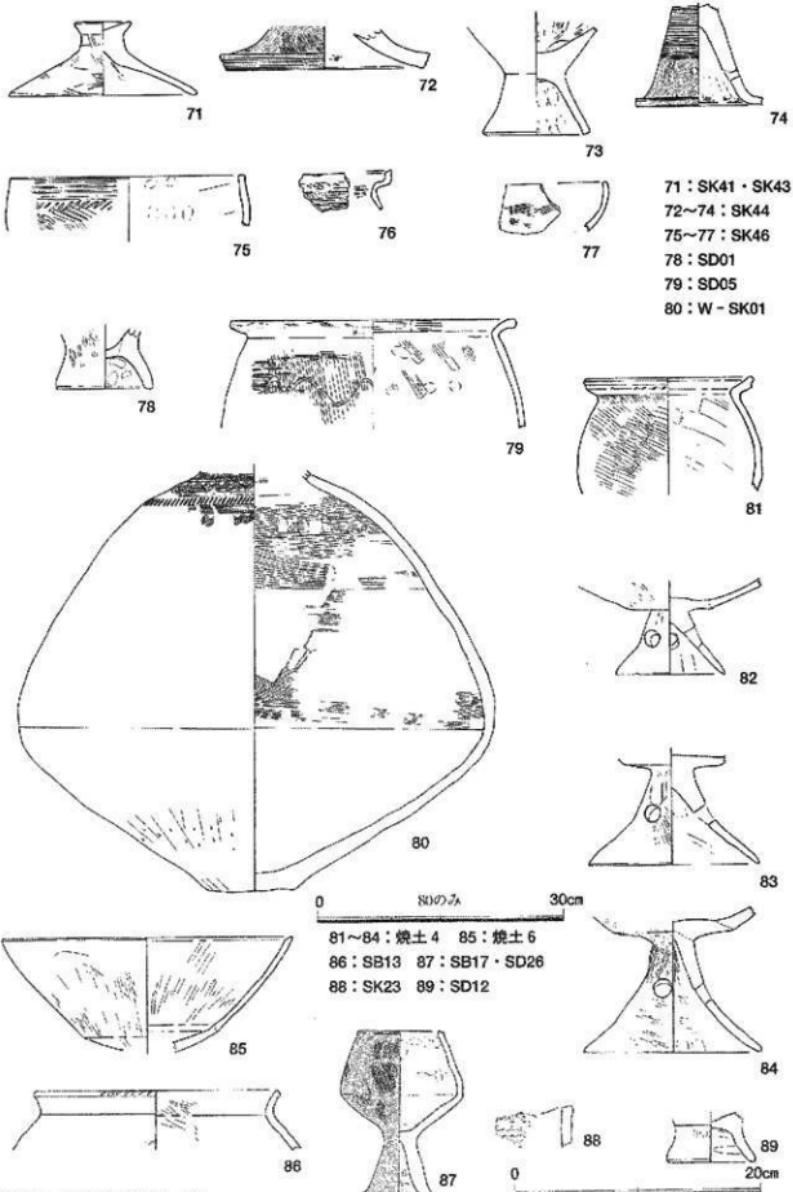


第34図 弥生土器実測図(3)

47~52 : SB20 53~54 : P298 55~58 : SK22  
59~65 : SK37 66~68 : SK42 69~70 : SK43

0

20cm



第35図 弁生土器実測図 (4)

## 古代

古代については、Eグリッド列以西の地区で住居址や土坑、ピットなど、遺構が多数みとめられたが、掘削深の制約により、平面形を検出したにとどまり、検出面以下の掘削はできなかった。そのため、それらの遺構の帰属時期は把握できていない。ほかに、C1・2グリッド、D1・2グリッドでも古代の遺構を検出したが、ここでの遺構は土坑やピットを中心で、性格を明らかにできたものはない。古代の遺物は、その他包含層や弥生時代の遺構埋土からもすくなくからず出土している。以下、おもな遺構と遺物について述べる。

### 住居址

**SB05** E・F4グリッドで検出した。一辺5m以上の住居址で、北辺に竈とおもわれる張り出し部をもち、焼土が濃密にみとめられた。検出面以下の掘削はおこなえなかつたが、その埋上から出土した須恵器短頸壺（第39図132）を回収した（写真図版9）。G2グリッドのSK11出土の須恵器口縁片と接合した。比較的大型の短頸壺で、口縁附近を工具で回転ナド調整しており、その工具アタリ痕によって、口縁部が段状になつたり、口縁直下に粗雑な沈線状の痕跡のがこるなどしている。体部下半には、平行タタキが明瞭に観察できる。タタキ目の隙間に、タタキ目と直交する細かいハケ目状の筋が無数にみとめられ、タタキ板の木目と考えられる。

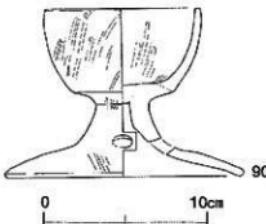
**SB08** E2グリッドで検出した住居址である。島状未掘地区の北西角の際で、検出面直下から焼土とともに土師器甕が出土した（写真図版9）。検出面以下の遺構掘削はおこなえなかつたが、古代の住居址とおもわれる。

### 土坑

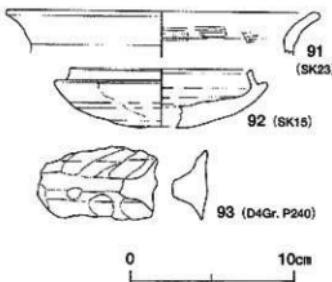
**SK11** G2グリッドで検出した土坑である。直線的な掘り方プランを呈し、住居址の可能性があるが、未掘のため不明である。ここから出土した須恵器口縁片は、F4グリッドのSB05出土の須恵器短頸壺（132）と接合した。

**SK15** E4グリッドで検出した土坑である。未掘である。須恵器の蓋坏（第37図92）、口縁片（第38図99）が出土している。壺頸または甕頸の口縁であろう。

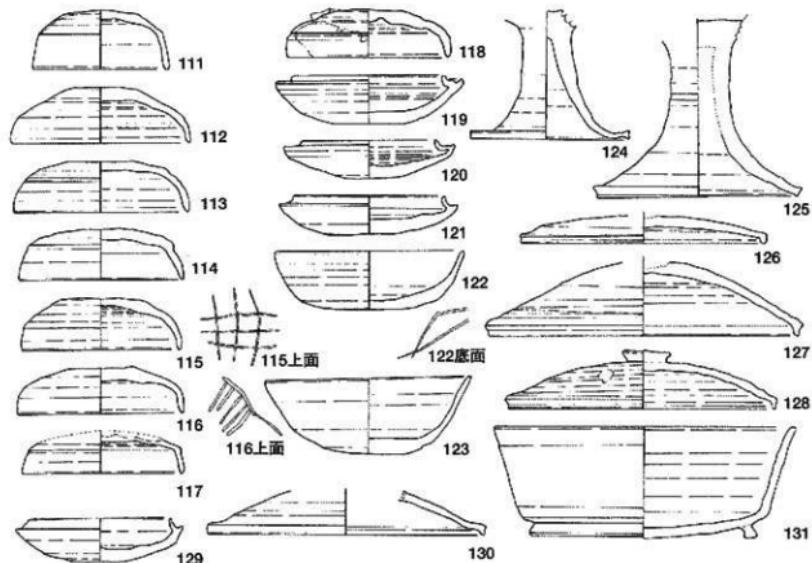
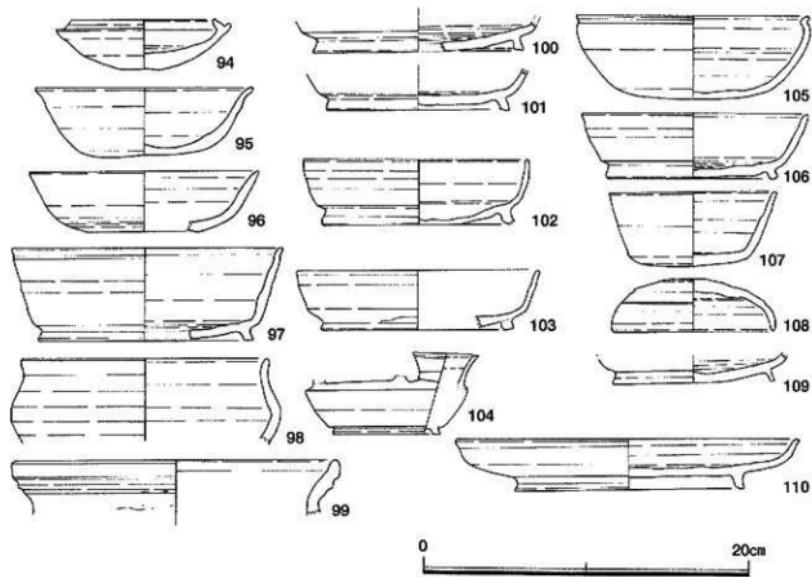
**SK17**（写真図版4） F2グリッドで確認した土坑である。未掘である。小型の平瓶（第38図104）が出土した（写真図版4）。把手が欠損している以外は、ほぼ完存している。口は低く、頭部が短く直立ぎみにたちあがり、口縁部附近が外反



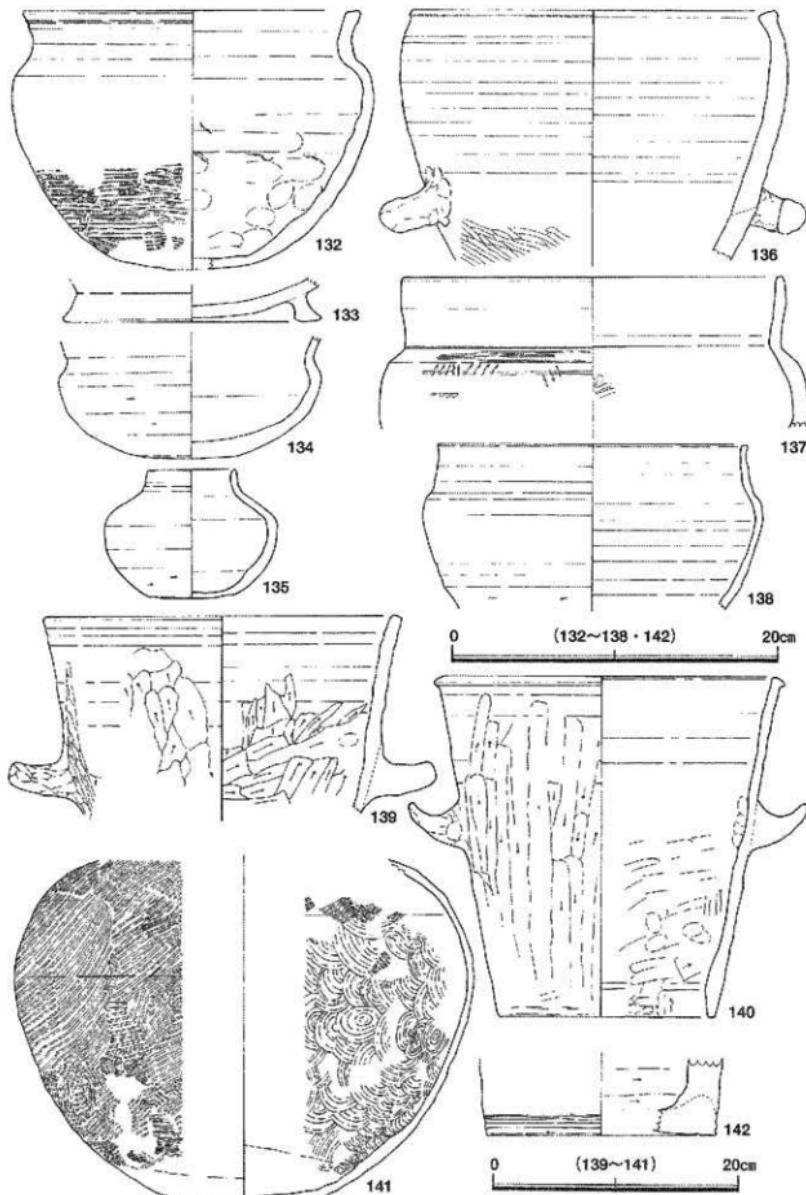
第36図 SK20出土土器



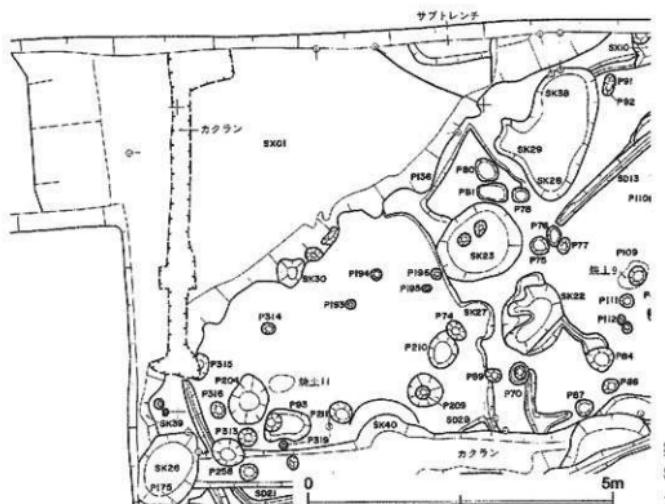
第37図 古代の遺物（1）



第38図 古代の遺物 (2)



第39図 古代の遺物 (3)



第40図  
SX01およびC2・3  
グリッド周辺の透析

する。欠損した把手の断面形は整った長方形である。体部は、肩が角張った稜線をなし、肩より上はやや丸みをもつが、ほぼ平坦である。肩以下は、微妙な丸みをもちつつも直線的に、斜めにすぼまっていく。

**SK20**（写真図版4） 古式土師器高坏（第36図90）、ほぼ完形の須恵器無台碗形坏（第38図105）、須恵器有台瓶頸片（第39図133）が出土した。無台碗形坏（105）は、底部はやや丸みのある平底で、体部は上端附近に最大径をもつ。口縁部はつよくくびれてから短く外反し、内面側が肥厚している。H101-I 17号窯式期と考える。有台瓶頸片（133）は、底部および台部が残存している。底部底面には平行タタキがほどこされている。

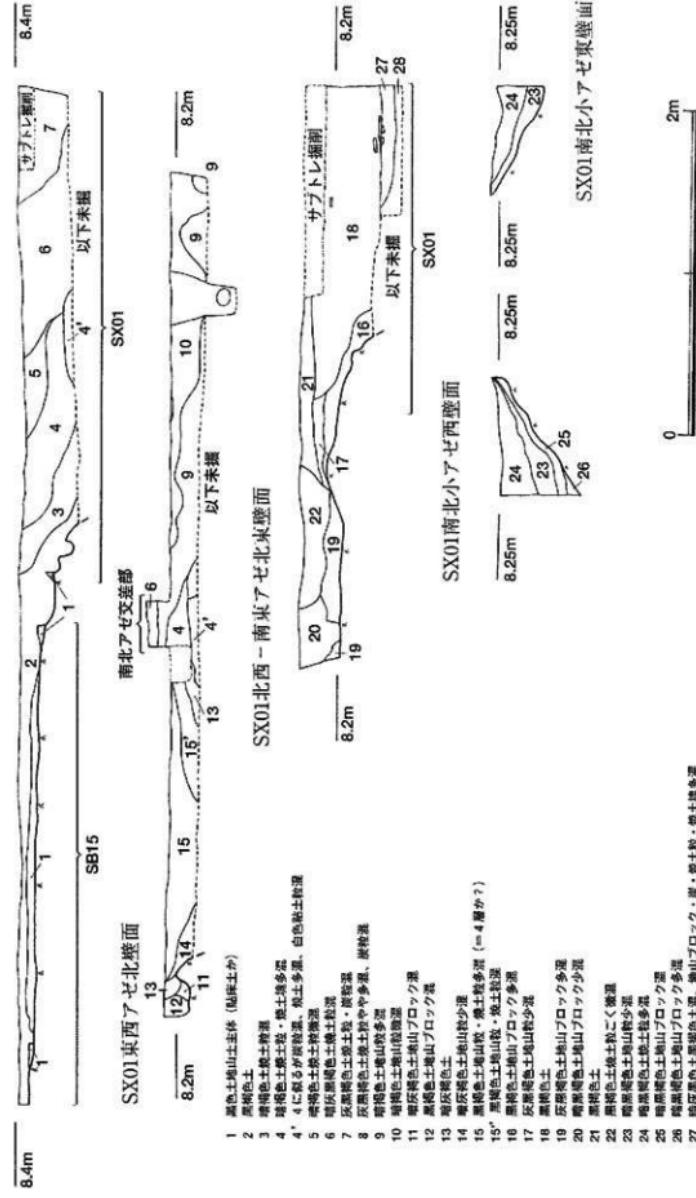
**SK23** (写真図版4) CD2グリッドで検出した。深さ約0.2m、稍円形の上坑である。土器部窓の口縁片（第37図91）、ほぼ完形の損壊器（第38図110）が出土した。焼成は縮まっているが、色調は黄褐色を呈しやや軟質的印象をもつ。口縁端部附近で短く外反する。I25～K117号窓式割に位置づけられよう。

**SK24** C1グリッドで検出した不整指円形の土坑である。壇上中から須恵器有台杯(第38図109)の底盤片が出土した。掘削中に、複数の小土坑が切りあつたものであることが判明したため、結局、SK28、SK29、SK38に分割した。

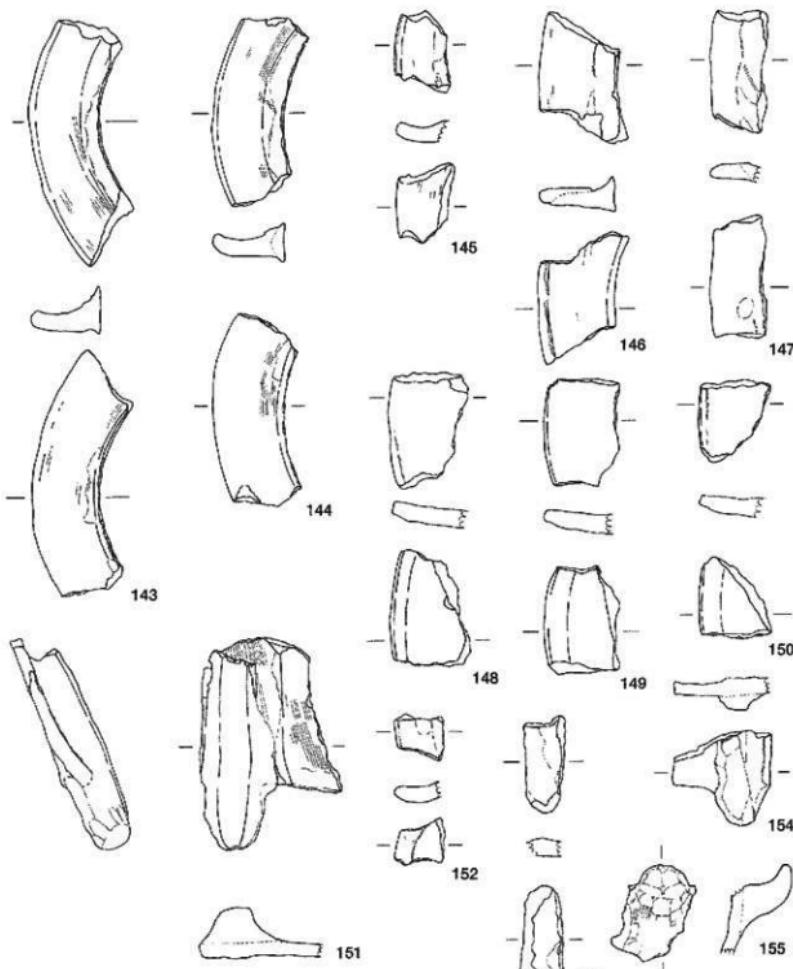
**SK28** CIグリッドのSK24を掘削して検出した上坑である。ほぼ完形の須恵器有台坏(第38図106)が出土した。I25号墓式期と考えられる。

**SK39** E2グリッドの局状未掘地区的部で検出した。後述のSX01の一部をなすようである。須恵器無台坏（第38図107）と坏蓋（第38図108）が出土した。須恵器無台坏（107）は、底部はやや丸みのある平底で、明瞭に屈曲して体部・口縁部へと直線的に斜めに立ちあがる。I17～S78号窯式期に位置づけられよう。坏蓋（108）は、肩部の突起がなくなり、天井部と口縁部の境を沈線によって区画している。天井は丸く、頂部に狭い平坦面をもつ。口縁部は微妙に内湾ぎみにおわり、丸くおさめている。I101号窯式期であろう。

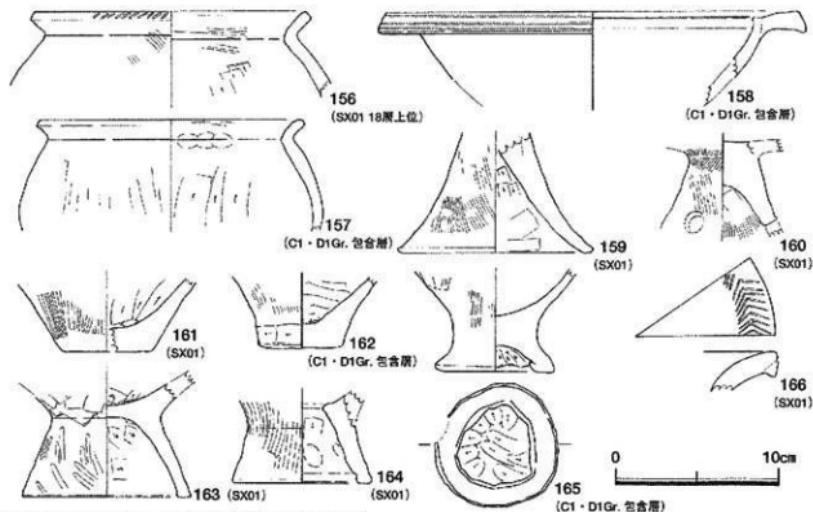
### SX01～SB15南北通しアゼ東壁面



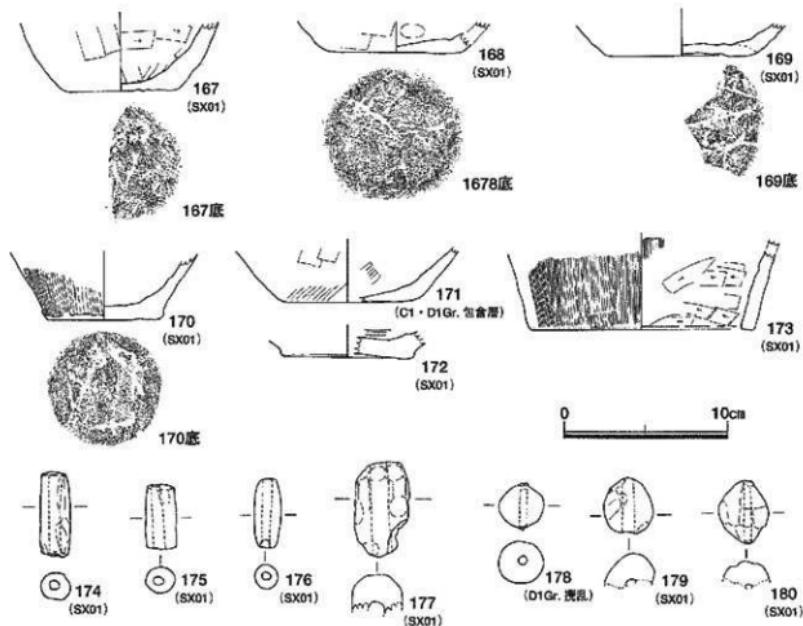
第41図 SX01土層断面図



第42図 移動式窯 (SX01出土)



第43図 弥生土器・土師器 (SX01および含層)

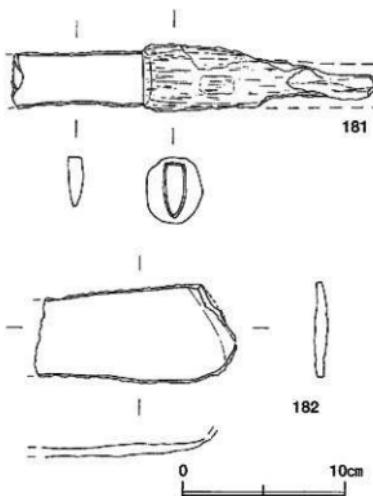


第44図 土器器・土師 (SX01および含層)

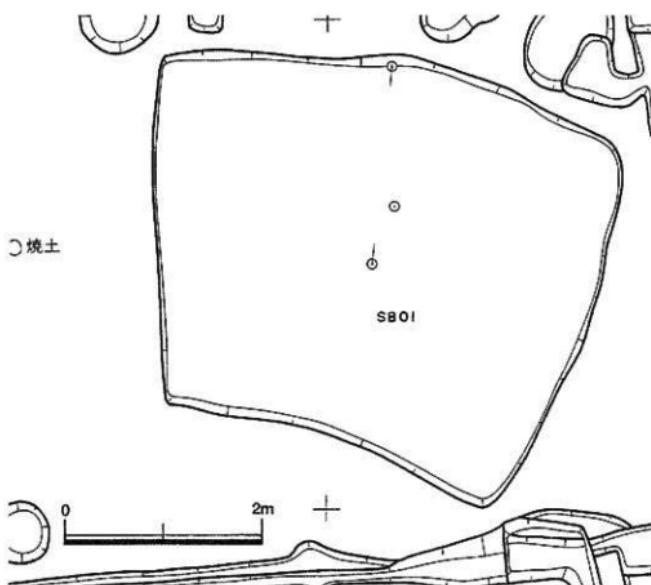
性格不明遺構

SX01（第40図・第41図・写真図版4・5）

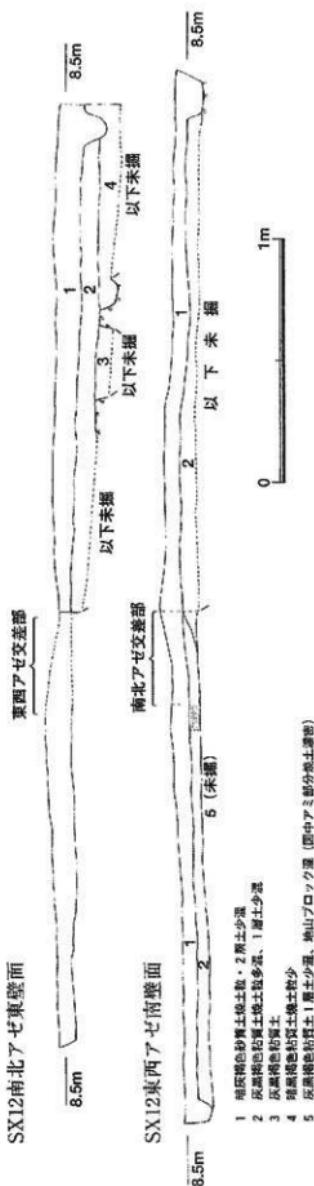
CD1・2グリッドで検出した大型遺構である。検出範囲よりもさらに北方と西方に広がることは確実であったが、北は調査区外、西は掘削中断地区となるため、余形を明らかにできなかった。確実なプラン検出は地山面で明瞭となつたが、包含層上面での遺構検出段階で、模様としてはいたが、周囲の包含層とやや土質の異なる範囲をみとめていた。包含層上面の段階、地山面の段階と、2度にわたって一部にサブトレンドチをもうけて掘削し、面的に地山面-0.6mまで掘り下げた。最終的にサブトレンドチを再度もうけて地山面-0.9mまで掘削したが、底面に到達しなかつた。平面規模、



第45図 SX01出土鉄器



第46図 SX12平面図



第47図 SX12土層断面図

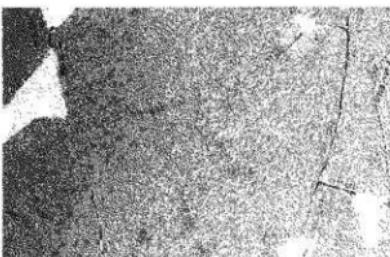


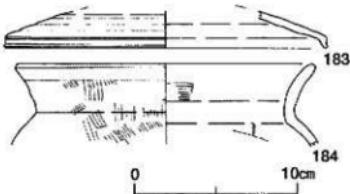
写真1 SX12須恵器壺の内面

深さとともにかなり大規模な、溝状ないし土坑状をなす造構とおもわれる。埋土中からは、土師器、須恵器、移動式竈、瓶、鉄製刀子など、古代の遺物を大量に出土した。細片ではなく、完形品ないしは全形をうかがえる大型破片が主体を占めていることも特色である。また、埋土には、焼土を密にふくむ上層や、炭を多量にまとめてふくむ土層がところどころにみとめられ、一部の炭層からは瓶片や須恵器蓋环を出土している。

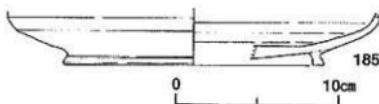
遺物 (第38図111~118) は壺蓋、(119~121・129) は壺身で、いずれもいまだ蓋にカエリのつかないタイプのものである。2点ある無台壺 (122・123) はいずれもNN288~I 25号窓式期とおもわれる。(111) は口径のわりに器高が高く、とくに口縁部の立ちあがりが高い。天井部と口縁部の境の稜線は角ばって明瞭である。(112~116) は、天井頂部がケズリによりあきらかな平坦面をなす。口縁端部は丸くおさめている。(111) はH15~I 101号窓式期、(112) はI 101~H16号窓式期、(113) はH16号窓式期であろう。(114・117・118) は、天井部が高く張らず、天井部と口縁部の境も、ややだれではいるが突窓状の段をなす棱をもち、その区別が比較的明瞭である。口縁部はやや外方へ開きざみに直立し、口縁端部は細く尖り、内面には沈線状のナデ調整がみとめられる。(115・116) は天井部と口縁部の境で、稜を失いかけているが、この場所での器形の屈曲は顕著であり、なお天井部と口縁部の区別をあきらかにしている。以上の特徴から、(114・117・118) はH50号窓式期に、(115・116) はI 101~II 50号窓式期に位置づけられよう。そのほか、

移動式竈片（第42図）、土師器・土錘（第43図・第44図）、鉄製刀子、鐵鎌（第45図181・182）など古代の遺物が豊富に出土した。

**SX12**（第46図・第47図・写真図版5） C2グリッドの包含層上面で検出した。不明確ながら方形の平面形を検出し、須恵器壺（第39図141）が出土したため、当初は古代の住居址と考えた。ところが、掘削するにつれ器形残存率の高い弥生土器が出土し、遺構と古代の遺物との関係が不明瞭で疑われたため、性格不明遺構とした。須恵器壺（141）は、内面に青海波状のタキ当て具痕が明瞭にみとめられる（写真1）。（第38図102）は、ほぼ完形の須恵器有台壺で、NN288～125号窯式期であろう。



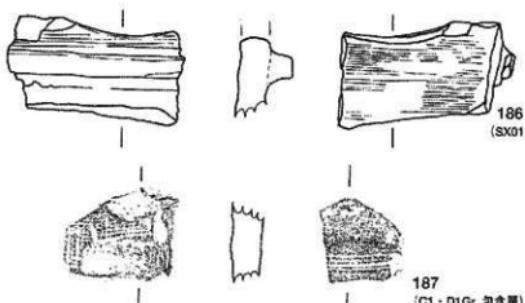
第48図 古代の遺物（4）



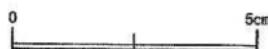
第49図 古代の遺物（5）

## 小結

今回の調査では、掘削制限により、残念ながら掘削できた古代の遺構はきわめてすくなかった。そのため、今次調査地点の古代の様相を充分に明らかにすることはできなかった。とはいえ、今回出土した古代の遺物は豊富であり、須恵器を中心にして7世紀中葉から8世紀前葉の様相をしめしている。未掘とはいえ古代のものとおもわれる住居址を検出したことと考えあわせて、この時期、高蔵遺跡の南部に古代の集落が相当規模で展開したとおもわれる。また、從来名古屋台地では、古代の土師器の様相や壺導入の実態については、資料がきわめて少なく、まったくといってよいほど不明であったが、今回えられた土師器壺頸片、移動式竈片や壺などは、その点で示唆的な資料であり、名古屋台地の古代を明らかにするうえで貴重な成果となった。高蔵遺跡において今後の調査成果の蓄積が期待される重点のひとつである。

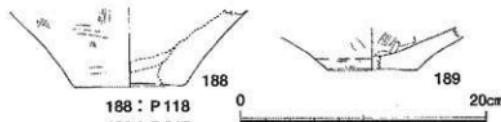


第50図 円筒焼軸片



ピット

調査区全体で約400のビットを検出した。住居の床面などで検出したものの一部や時期の特定できたものについては各住居についての記述な



どで触れたが、それ以外のものにつ 第51図 ピット出土遺物

いては、その性格上時期の特定も困難である。個別に記述することは煩雑を極めるため、検出地点、埋上の特徴、出土遺物について一覧表にして示す(表3~5)。ビット出土遺物でここで図を提示するのは2点である(第51図)。いずれも壺の底部である。

表3 ピット一覧 (1)

アリ	種名	地名	遺物	地名	水準	備考
D1	P106	地山	丹波花土	842	825	
C2	P109	地山	黒褐色土+栗色土	841	822	
C2	P110	地山	栗色土	840	834	
C2	P111	地山	栗色土+鈍土少し	840	823	
C2	P112	地山	栗色土+鈍土少し	842	828	
B4	P113	地山	栗色土+鈍土少し	842	821	
B4	P114	地山	丹波花土	840	795	
B1	P115	地山	栗色土+地山土少し	814	861	
B4	P116	地山	栗色土+地山土少し	809	781	
B4	P117	地山	栗色土			
C3	P118	SBD2米岡 (地山)	鶴見土	819	771	
C3	P119	SBD2栗東 (地山)	鶴見土+鈍土多し			減
C3	P120	SBD2栗東 (地山)	鶴見土			減
B3	P121	SBD2美濃 (地山)	鶴見土+高見土	818	838	
B3	P122	SBD2美濃 (地山)	鶴見土+地山土少し	818	812	多い
C3	P123	SBD2米岡 (地山)	鶴見土+地山土少し			減
C3	P124	SBD2栗東 (地山)	鶴見土+地山土多し	818	802	
B1	P125	地山	栗色土+鈍土少し	813	818	
C4	P126	地山	鶴見土+地山土多し	844	800	
C4	P127	地山	鶴見土+鈍土少し	825	816	
C4	P128	地山	鶴見土+鈍土少し	847	842	
I2	P129	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+鈍土少し	814	802	
C3	P130	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+地山土少し	818	812	
C3	P131	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+地山土少し	817	813	
C3	P132	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+地山土少し	817	813	
C3	P133	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+地山土少し	810	793	
C3	P134	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+地山土少し	817	787	
C3	P135	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土+地山土少し	814	790	
B1	P136	地山	鶴見土+地山土少し	829	782	
B1	P137	地山	鶴見土+地山土少し	830	798	
B2	P138	地山	鶴見土+鈍土少し	827		
M2	P139	地山	鶴見土+鈍土少し	827		
M2	P140	地山	鶴見土+鈍土少し	826		
A2	P141	地山	鶴見土+鈍土少し	825	816	
A2	P142	地山	鶴見土+鈍土少し	825	819	
A2	P143	地山	鶴見土+鈍土少し	825	816	不明
A2	P144	地山	鶴見土+鈍土少し	827	817	若
S2	P145	地山	鶴見土	825	796	
S2	P146	地山	鶴見土	825	796	
R2	P147	地山	鶴見土+鈍土少し	827	814	
B2	P148	地山	鶴見土+鈍土少し	827	798	
B2	P149	地山	鶴見土+鈍土少し	835	798	
B2	P150	地山	鶴見土+鈍土少し	828	817	
M2	P151	地山	鶴見土+鈍土少し	815	794	
B2	P152	地山	鶴見土	815	815	
B2	P153	地山	鶴見土	815	815	
B2	P154	地山	鶴見土	816	786	
B1	P155	地山	鶴見土+鈍土少し	816		
C3	P156	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	816	769	
C3	P157	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	816	769	
C3	P158	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	816	769	
C3	P159	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	816	784	
C3	P160	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	817	787	
C3	P161	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	816	782	
C3	P162	SBD3岐阜 (地山)	鶴見土少し	818	782	
D4	P163	P163地山	鶴見土+鈍土少し	818	780	
D4	P164	地山	鶴見土+鈍土少し	825	814	年々替
D4	P165	地山	鶴見土+鈍土少し	846	844	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P166	地山	鶴見土+鈍土少し	846	814	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P167	地山	鶴見土+鈍土少し	846	814	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P168	地山	鶴見土+鈍土少し	846	814	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P169	地山	鶴見土+鈍土少し	846	814	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P170	地山	鶴見土+鈍土少し	825	814	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P171	地山	鶴見土+鈍土少し	846	814	C4 (SBD3岐阜 (地山))
D4	P172	地山	鶴見土+鈍土少し	829	819	(P163は複数)
D4	P173	地山	鶴見土+鈍土少し	845	817	
D4	P174	地山	鶴見土+鈍土少し	819	826	
D4	P175	地山	鶴見土+鈍土少し	845	808	

表4 ピット一覧(2)

分類	地名	風土	樹種	樹木率	樹木率	樹木率
C2	P231	SB26西向 地色土 (JAL)		8.22	8.16	
B1	P232	SB26北向 地色土 (風土)	松子+松木	8.22	8.01	
B2	P233	SB26北向 地色土 (JAL)		8.22	8.14	
C2	P234	SB26北向 基礎色土+風土 (風土)				
P235	東北					
D1	P236	東北	泥炭色土	8.48	8.20	
D4	P237	東北	泥炭色土	8.48	8.23	
D4	P238	東北	泥炭色土	8.48	8.17	
D5	P239	東北	泥炭色土	8.25	8.16	
D6	P240	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.26	7.84	
D6	P241	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.26	7.84	
C3	P242	SB26北向 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.35	7.97	
D2	P243	SB26北向 風土	泥炭色土+風土 +風土	8.19	7.98	
B2	P244	SB26北向 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.19	7.98	樹木不明
B1	P245	SB26北向 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.13	7.23	
B4	P246	SB26北向 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.17	7.23	
F2	P247	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.13	8.05	SB17南向 に切られた
E2	P248	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.22	8.13	
E2	P249	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.22	7.92	
F3	P250	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.22	7.92	
F2	P251	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.22	8.01	
E2	P252	東北(SD26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.23	7.80	
F2	P253	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.23	7.80	
B2	P254	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.18		
E2	P255	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.24	7.91	
D3	P256	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.16		
B3-2	P257	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.24	8.16	
D3	P258	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.19	8.12	
C3	P259	東北(SD26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.19	8.12	
F4	P260	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.41	8.23	
D4	P261	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.51	8.31	
E4	P262	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.38	8.29	
E4	P263	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.28	7.85	
C2	P264	SB26北向 (風土)	泥炭色土+風土+風土 (風土)			
C2	P265	SB26北向 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.20		
B2	P266	SB26北向 (風土)	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.20	8.04	
C2	P267	SB26北向 (風土)	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.27	8.12	
B4	P268	SB26北向 (風土)	泥炭色土+風土+風土 +風土		8.04	
B4	P269	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.24	8.15	
B4	P270	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.24	8.15	
C2	P271	東北(SB26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.23	8.07	
B2	P272	東北(SD26) 風土	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.21	7.99	
B2	P273	SB26北向 (風土)	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.22	8.15	筆者のはSB 西小片
B2	P274	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.23	7.78	
B2	P275	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.21	8.09	
B3	P276	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.19	8.10	
B3	P277	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.18	8.09	
B3	P278	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.19	8.01	
B3	P279	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.21	7.29	
B3	P280	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.21	7.29	
F3	P281	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.19	7.29	SB17
B3	P282	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.09	SB17	
B3	P283	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.21	7.21	
B3	P284	東北	泥炭色土+風土+風土 +風土	8.21	7.21	

表5 ピット一覧(3)

### 未掘削の遺構

検出しただけに止まった遺構については、廃土上面の遺物しかないため、時期は不明といわざるを得ない。一部に遺存度の高い遺物や、窓などの特徴から時期が推測できるものもあり、それらは各時期の報告で述べたが、それ以外の埋土を掘削していない遺構についてはここで記述する。北半は遺構の密度が比較的低く、プランの一部が明らかになったものがありそれらについては形状から判断して住居と思われるものには名称を与えた。なお、一覧もあわせて参照していただきたい。一方、南部について大半が搅乱中で掘削を中止しており、遺構プランの検出もしていない部分が多い。ただし、南東部分では部分的に地山面に達したので検出作業を行った。しかし、そのEF5グリッドやE6・7グリッドでは数多くの遺構が切り合っているようで、わずかな手がかりから遺構の平面形を決めるることは困難なため、遺構の種類も判別できない。そうした事情により、名称を与える事もしなかったので、ここでは地区毎に状況を記す。

#### SB04（第52図）

K3グリッドで検出した堅穴住居と思われる遺構である。検出できたのは、遺構の東側の一部であるが5m程の直線的な辺とほぼ直角に折れる2つのコーナーであり、その特徴から住居と判断した。東辺は、N-8° -Wという方向を示す。埋土は検出した面では暗褐色土であり、焼土も見られた。埋土の上面からは須恵器が出土している。

#### SB07（第52図）

H1グリッドで検出した、ほぼ直角に折れ曲がるコーナーをもつ遺構を堅穴住居と判断した。西側の辺は1m程度しか検出できていないが、N-33° -Wという方向である。北側は調査区外へと続いている。検出した面で観察できた埋土は暗褐色土で、焼土も見られた。

#### SB09（第52図）

JK2グリッドで検出した直線的な北辺と、その西端で直角に折れる遺構を堅穴住居と認めた。北辺の方向は、N-80° -Eという方向であり、わずかに西に傾いているがほぼ南北方向を示している。埋土は検出した面では、地山土を含む暗褐色土であった。

#### SB10（第52図）

K2グリッドのSB09のすぐ西で検出した。確実に検出できたのは直線的な辺の一部のみで、住居か否かは不明である。SB09と切り合いをもち、上面での検討では切られているように見えたが、掘削していないので確実とは言えない。埋土は暗褐色土。東辺は、N-8° -Wである。

#### SB11（第52図）

F1グリッドで検出した、直線的な南辺とその東端で直角に近く折れるコーナーをもつ遺構を堅穴住居とした。南辺は、2.5mほど検出したが、ほぼ東西方向を示しており、東辺はほぼ南北方向を示すことになる。埋土は検出面では暗褐色土を呈していた。

#### SK04（第52図）

K3グリッドで、SB04の東側の小さな土坑である。暗褐色土を埋土としている。

#### SK05（第52図）

J4グリッドのSB06の東側で検出した。幅1m弱の細長い遺構である。両端とも調査範囲外に続いているため、本来の形状は不明である。埋土は地山土を多く含む暗褐色土である。

#### SK06（第52図）

I4グリッドの調査区南壁際で検出した。検出したのは遺構の北側の辺にあたる部分のみであり形状は不明である。北側の辺は、やや膨らみを持っているが、直線的に見えるので、或いは堅穴住居かもしれない。埋土は黒褐色土である。

#### SK07（第52図）

I3グリッドで検出した。幅1.5mほどでやや長い遺構である。南は調査区外、北は搅乱に切られており形状は不明である。暗褐色土を埋土としている。

#### SK08・SK09・SK10（第52図）

いずれもH2グリッドで検出した。地山面で検出できたプランを手がかりに埋土の上面でプランを検討したが、切り合いについては確実とは言えない。SK08は西側は包含層との区別もついていない。

#### SK11・SK18（第52図）

GH1・2グリッドで検出した。暗褐色土と地山上を埋土とするSK18を切ってSK11が塗かれているように見えた。あくまでも検出面での所見であるが、SK11の北側の辺は直線的である。SK11については古代の部分で触れてある。

#### SK12・SK13・SK14（第52図）

いずれもG3グリッドで検出した。地山部分でわずかにプランの一部を検出したにとどまり形状は不明である。SK14は幅1mほどの溝状である。

#### SK16（第52図）

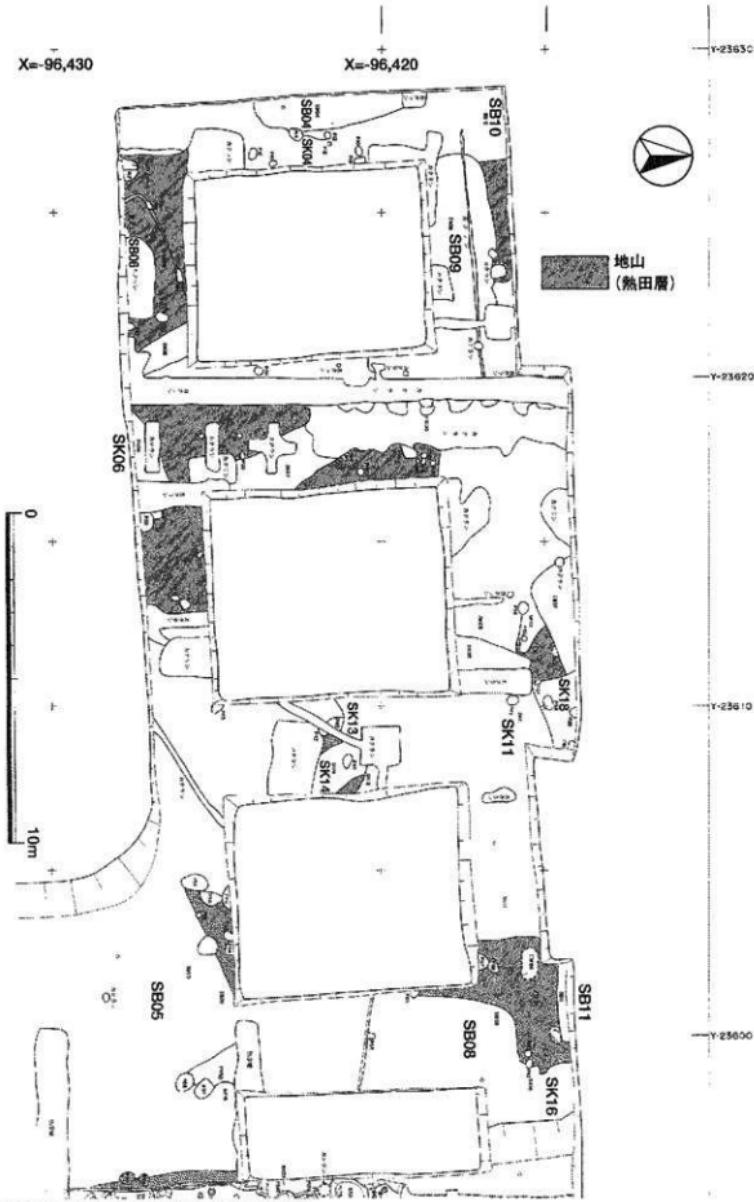
E1グリッドで検出した。地山で検出したプランからは明らかに二つ以上の遺構が重なっているが、埋土上面の検討ではプランは判然としなかった。埋土はおおむね褐色土であった。

#### E5・F5グリッド（第53図）

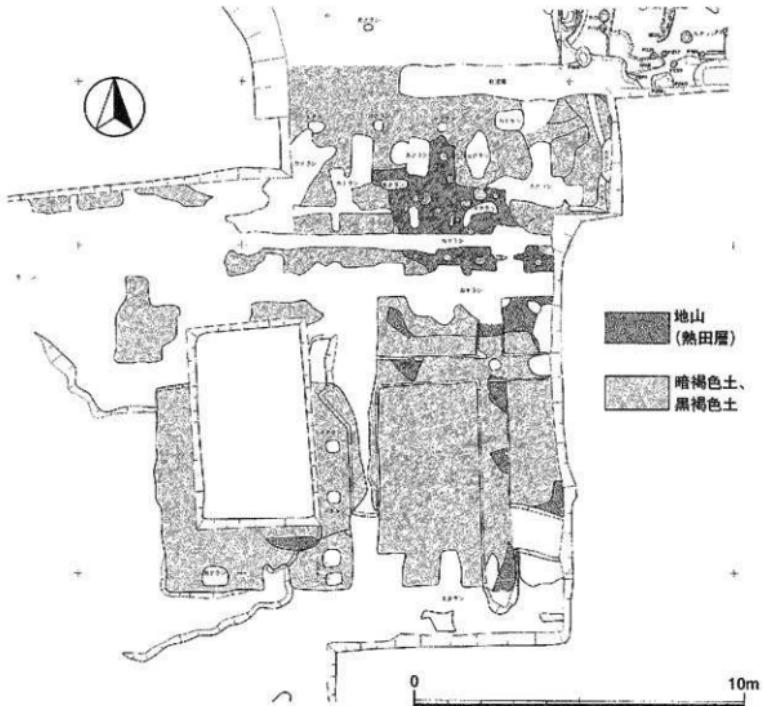
E5、F5グリッドでは地山面で数多くの遺構が見つかっている。しかし切り合いが激しく、形状が明らかになったものはない。地山で検出できたプランは第53図に示した通りである。部分的には直線的な辺や直角に近くおれるコーナーなども見られる。図では、黒褐色土と暗褐色土の違いを示さなかったが、北の方では暗褐色土の面で掘削を終えている。南では黒褐色土が露出した状態で掘削を終了した。

#### E6・E7グリッド（第53図）

ごく部分的に地山面を確認し、遺構のプランの一部を検出したが、ほぼ全体について暗褐色または黒褐色土の上面で掘削を終了した。方形の遺構のコーナー部分らしいものも見られ、住居などが存在するものと思われる。時期については個別には不明である。検出土には、須恵器も出土している。



第52図 前半西部検出状況（未掘削の邊堀）



第53図 E・F5・6区検出状況(未掘削の構造)

#### その他の遺構

遺構を掘削した部分においても、上記の他にも多くの遺構が検出されている。中には竪穴住居の周溝かと思われる溝などもある。こうした遺構の存在は、確認できなかった遺構が数多く存在することを示している。しかし、これらの遺構は全体が判明しておらず、出土遺物も乏しく時期を決定することができない。ここでは時期ごとの報告で触れられなかった遺構の埋土や出土遺物の一覧(表6)を掲載し報告とする。

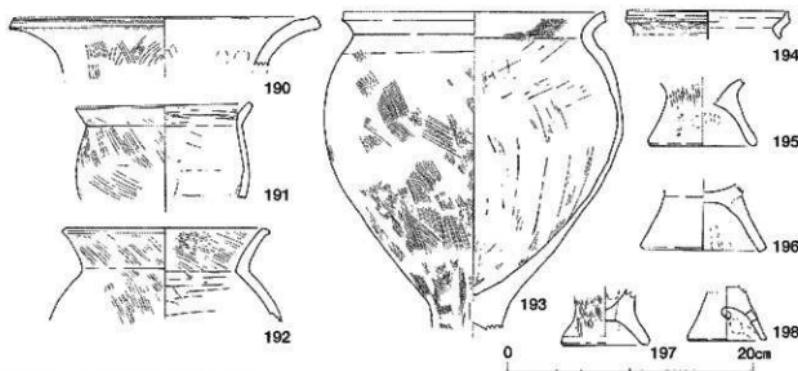
#### 包含層からの遺物

包含層の相割中に数多くの遺物を採集した。特に北東端の方形部分では弥生土器を中心にかなりの遺物が出上している。先述したとおり、竪穴住居の埋土を包含層として掘削したため、その遺物も多く含まれている。しかし、グリッド単位で遺物を採集したため、出土位置を特定できるものは少ない。ここではまとめて包含層出土遺物として扱うこととする。

第54図に示した弥生土器は、197がG6・7グリッド出土であるほかはいずれも調査区北東端の弥生時代竪穴住居集中区から出土している。190は壺の口縁部である。B1グリッド出土であり、SB20出土のものと時

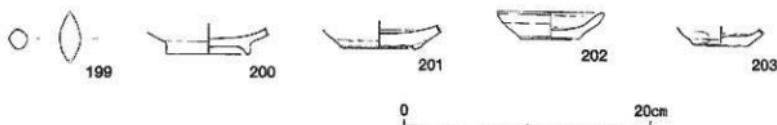
地質	グリッド	地上植物	樹木	方向	電柱
SD01	C3	被林・裸地			
SD02	B1	灌木			
SD03	B1	灌木			
SD04	D4	灌木山櫻小片	灌木		
SD05	C-D4	灌木山櫻小片	灌木		
SD06	C4	灌木山櫻小片	灌木		
SD07	B3-B4	灌木			
SD08	B3-B4	灌木			
SD09	B4	灌木山櫻小片	灌木		
SD10	D4	灌木			
SD11		灌木山櫻小片	灌木		
SD12	B4	灌木山櫻小片	灌木		
SD13	C2	灌木山櫻小片	灌木		
SD14	B2	灌木山櫻小片	灌木		
SD15	B2	灌木山櫻小片	灌木		
SD16	B2	灌木山櫻小片	灌木		
SD17	D4	灌木山櫻小片	灌木		
SD18	D4	灌木			
SD19	B3	灌木			
SD20	C2	灌木			
SD21	B3	灌木			
SD22	D3	灌木			
SD23	B1	灌木			
SD24	B1	灌木			
SD25	B2-B3	灌木			
SD26	D3	灌木山櫻小片	灌木		
SD27	B3	灌木山櫻小片	灌木		
SD28	B3	灌木山櫻小片	灌木		
SD29	B3	灌木山櫻小片	灌木		
SD30		灌木			
SD31	D4	灌木			
SD32	D4	灌木山櫻小片	灌木		
SD33	D4	灌木山櫻小片	灌木		
SK01	C2	灌木			
SK02	B4	灌木			
SK03	B2	灌木			
SK04	B3	灌木			
SK05	B3	灌木			
SK06	B3	灌木			
SK07	B3	灌木			
SK08	B3	灌木			
SK09	B3	灌木			
SK10	B3	灌木			
SK11	B3	灌木			
SK12	B3	灌木			
SK13	B3	灌木			
SK14	B3	灌木			
SK15	B3	灌木			
SK16	B3	灌木			
SK17	B3	灌木			
SK18	B3	灌木			
SK19	B3	灌木			
SK20	B3	灌木			
SK21	B3	灌木			
SK22	B3	灌木			
SK23	B3	灌木			
SK24	B3	灌木			
SK25	B3	灌木			
SK26	B3	灌木			
SK27	B3	灌木			
SK28	B3	灌木			
SK29	B2	灌木			
SK30	B2	灌木			
SK31	B3	灌木			
SK32	B3	灌木			
SK33	B3	灌木			
SK34	B3	灌木			
SK35	B3	灌木			
SK36	B3	灌木			
SK37	B3	灌木			
SK38	B3	灌木			
SK39	B3	灌木			
SK40	B3	灌木			
SK41	B3	灌木			
SK42	D3-D4	灌木			
SK43	B3	灌木			
SK44	B3	灌木			
SK45	B3-B4	灌木			
SK46	B4	灌木			
SK47	D3	灌木			
SK48	B4	灌木			
SK49	B4	灌木			
SK50	B4	灌木			
SK51	C-D2	灌木			
SK52	B3	灌木			
SK53	B3	灌木			
SK54	B3	灌木			
SK55	B3	灌木			
SK56	F1	灌木			
SK57	B3	灌木			
SK58	B3	灌木			
SK59	B3	灌木			
SK60	F-2	灌木			
SK61	E2	灌木			
SK62	E-F1	灌木			
SK63	B1-E	灌木			
SK64	B1	灌木			
SK65	C2	灌木			
SK66	C2	灌木			
SK67	B1	灌木			
SK68	B1	灌木			
SK69	B1	灌木			
SK70	B1	灌木			
SK71	B1	灌木			
SK72	B1	灌木			
SK73	B1	灌木			
SK74	B1	灌木			
SK75	B1	灌木			
SK76	B1	灌木			
SK77	B1	灌木			
SK78	B1	灌木			
SK79	B1	灌木			
SK80	B1	灌木			
SK81	B1	灌木			
SK82	B1	灌木			
SK83	B1	灌木			
SK84	B1	灌木			
SK85	B1	灌木			
SK86	B1	灌木			
SK87	B1	灌木			
SK88	B1	灌木			
SK89	B1	灌木			
SK90	B1	灌木			
SK91	B1	灌木			
SK92	B1	灌木			
SK93	B1	灌木			
SK94	B1	灌木			
SK95	B1	灌木			
SK96	B1	灌木			
SK97	B1	灌木			
SK98	B1	灌木			
SK99	B1	灌木			
SK100	B1	灌木			
SK101	B1	灌木			
SK102	B1	灌木			
SK103	B1	灌木			
SK104	B1	灌木			
SK105	B1	灌木			
SK106	B1	灌木			
SK107	B1	灌木			
SK108	B1	灌木			
SK109	B1	灌木			
SK110	B1	灌木			
SK111	B1	灌木			
SK112	B1	灌木			
SK113	B1	灌木			
SK114	B1	灌木			
SK115	B1	灌木			
SK116	B1	灌木			
SK117	B1	灌木			
SK118	B1	灌木			
SK119	B1	灌木			
SK120	B1	灌木			
SK121	B1	灌木			
SK122	B1	灌木			
SK123	B1	灌木			
SK124	B1	灌木			
SK125	B1	灌木			
SK126	B1	灌木			
SK127	B1	灌木			
SK128	B1	灌木			
SK129	B1	灌木			
SK130	B1	灌木			
SK131	B1	灌木			
SK132	B1	灌木			
SK133	B1	灌木			
SK134	B1	灌木			
SK135	B1	灌木			
SK136	B1	灌木			
SK137	B1	灌木			
SK138	B1	灌木			
SK139	B1	灌木			
SK140	B1	灌木			
SK141	B1	灌木			
SK142	B1	灌木			
SK143	B1	灌木			
SK144	B1	灌木			
SK145	B1	灌木			
SK146	B1	灌木			
SK147	B1	灌木			
SK148	B1	灌木			
SK149	B1	灌木			
SK150	B1	灌木			
SK151	B1	灌木			
SK152	B1	灌木			
SK153	B1	灌木			
SK154	B1	灌木			
SK155	B1	灌木			
SK156	B1	灌木			
SK157	B1	灌木			
SK158	B1	灌木			
SK159	B1	灌木			
SK160	B1	灌木			
SK161	B1	灌木			
SK162	B1	灌木			
SK163	B1	灌木			
SK164	B1	灌木			
SK165	B1	灌木			
SK166	B1	灌木			
SK167	B1	灌木			
SK168	B1	灌木			
SK169	B1	灌木			
SK170	B1	灌木			
SK171	B1	灌木			
SK172	B1	灌木			
SK173	B1	灌木			
SK174	B1	灌木			
SK175	B1	灌木			
SK176	B1	灌木			
SK177	B1	灌木			
SK178	B1	灌木			
SK179	B1	灌木			
SK180	B1	灌木			
SK181	B1	灌木			
SK182	B1	灌木			
SK183	B1	灌木			
SK184	B1	灌木			
SK185	B1	灌木			
SK186	B1	灌木			
SK187	B1	灌木			
SK188	B1	灌木			
SK189	B1	灌木			
SK190	B1	灌木			
SK191	B1	灌木			
SK192	B1	灌木			
SK193	B1	灌木			
SK194	B1	灌木			
SK195	B1	灌木			
SK196	B1	灌木			
SK197	B1	灌木			
SK198	B1	灌木			
SK199	B1	灌木			
SK200	B1	灌木			
SK201	B1	灌木			
SK202	B1	灌木			
SK203	B1	灌木			
SK204	B1	灌木			
SK205	B1	灌木			
SK206	B1	灌木			
SK207	B1	灌木			
SK208	B1	灌木			
SK209	B1	灌木			
SK210	B1	灌木			
SK211	B1	灌木			
SK212	B1	灌木			
SK213	B1	灌木			
SK214	B1	灌木			
SK215	B1	灌木			
SK216	B1	灌木			
SK217	B1	灌木			
SK218	B1	灌木			
SK219	B1	灌木			
SK220	B1	灌木			
SK221	B1	灌木			
SK222	B1	灌木			
SK223	B1	灌木			
SK224	B1	灌木			
SK225	B1	灌木			
SK226	B1	灌木			
SK227	B1	灌木			
SK228	B1	灌木			
SK229	B1	灌木			
SK230	B1	灌木			
SK231	B1	灌木			
SK232	B1	灌木			
SK233	B1	灌木			
SK234	B1	灌木			
SK235	B1	灌木			
SK236	B1	灌木			
SK237	B1	灌木			
SK238	B1	灌木			
SK239	B1	灌木			
SK240	B1	灌木			
SK241	B1	灌木			
SK242	B1	灌木			
SK243	B1	灌木			
SK244	B1	灌木			
SK245	B1	灌木			
SK246	B1	灌木			
SK247	B1	灌木			
SK248	B1	灌木			
SK249	B1	灌木			
SK250	B1	灌木			
SK251	B1	灌木			
SK252	B1	灌木			
SK253	B1	灌木			
SK254	B1	灌木			
SK255	B1	灌木			
SK256	B1	灌木			
SK257	B1	灌木			
SK258	B1	灌木			
SK259	B1	灌木			
SK260	B1	灌木			
SK261	B1	灌木			
SK262	B1	灌木			
SK263	B1	灌木			
SK264	B1	灌木			
SK265	B1	灌木			
SK266	B1	灌木			
SK267	B1	灌木			
SK268	B1	灌木			
SK269	B1	灌木			
SK270	B1	灌木			
SK271	B1	灌木			
SK272	B1	灌木			
SK273	B1	灌木			
SK274	B1	灌木			
SK275	B1	灌木			
SK276	B1	灌木			
SK277	B1	灌木			
SK278	B1	灌木			
SK279	B1	灌木			
SK280	B1	灌木			
SK281	B1	灌木			
SK282	B1	灌木			
SK283	B1	灌木			
SK284	B1	灌木			
SK285</td					

期的に近いものと思われる。191、192は外反口縁を持つ壺である。191は頸部があまりしまらない器形である。縁部はやや四角く作ってはいるが、明瞭な面はない。包含層掘削中に取り上げてしまったが、焼土などに近い位置から、口縁部を下にした状態で出土した。遺存度も比較的高いから、本来焼土上に伴うものかもしれない。192は長い口縁部を持つ。端部は外側にわずかに突出している。口縁部内面にも横方向のハケメが残る。台付壺193は台部を除いてほぼ全体が潰れたような状態で出土した。当初SX12（掘削中はSB01、57頁参照）に伴うものと考えたが、明らかに時期が異なるため、本來別の遺物のものであると考えた。しかし、その遺物についてはまったく不明のため、包含層出土として示す。胴部は上位が張って、下位が強くしめる形状である。口縁部は斜めに開き、あまり横には開かない。口縁部には幅の広い面をなす。胴部の外側はハケメ調整、内面は頸部直下までヘラケズギが施されている。こうした形状、調整から見て、VI様式初頭のものである。この土器が出土したすぐ東にはこの頃の堅穴住居SB20があるが、出土地点はそれとは重ならない。194はB2グリッドから出土した受口状口縁の壺である。壺様式末からそれ以降のものと思われる。195～197は台付壺の台部である。198は法量の小さな高杯の脚部である。A3グリッドの調査区塗から出土している。直線的に聞く形状である。これも壺様式末以降のものと思われる。



第54図 包含層等の出土遺物（1）

199は、調査区南よりの表土除去中に出土した青銅製品である。両端は欠落しているが、紡錘形を呈し、断面は丸い。表土除去中の出土のため、時期は不明である。200は灰陶器碗の底部である。調査区北よりの中央付近から出土している。201から203は山茶碗である。201は低い高台がついている。山茶碗は調査範囲の中央より南で多く出土している。遺物の量としては多くはないが、中世にも何らかの利用がなされたことが知られる。



第55図 包含層等の出土遺物（2）

## 第39次調査

39次発掘調査は、すでに述べたように校舎部分と貯水槽部分および給食室部分を対象とした。最初にグリッドの設定状況を示す（第56図）。調査区北東角のX=-96,020、Y=-23,823を原点とし、5mごとにグリッドを設定した。原点から西に向かってA、B、C…、南に向かって1、2、3…というように、辺に対して名称を与えた。そして各グリッドはA1、B2というようにその組み合わせで呼んだ。このグリッドは34次調査とは間違がない。

校舎部では、包含層を掘削した後、地山面で遺構検出を行ったが、古墳の周濠のような深い遺構を除いてはあまり遺存状態は良くなかった。何棟か検出された竪穴住居もあまり埋土は残っておらず、周溝だけが見つかったものや焼上だけが検出された場合も少なくない。そのため、時期の決められない遺構も多い。

貯水槽部では暗褐色土が極めて良好に残っていた。しかし、竪穴住居などの遺構の多くは暗褐色土に掘りこまれており、地山面には深く掘り込まれていなかった。そのため、地山面での検出が困難で、プランもはつきり確定できなかったものも多い。

以下では、プランが比較的明瞭で遺物の出土もあり、時期の特定ができる遺構を中心に記述する。すでに述べたとおり、同一遺構に複数の名称が与えられていたものを統合するなどしたため、遺構の名称が平面図上には現れない遺構もある。これらを含めて、今回検出した遺構について一覧表（表9・10）を作成した。

以下では、弥生時代、古墳時代、古代、中世の順に記述する。

### 弥生時代

#### SB01（写真図版11）

校舎部のC5グリッドの南側に突出した調査区は、大半が擾乱を受けていたが、ごくわずかに残った部分には弥生時代の遺構埋土の可能性が高い、黒味の強い黒褐色土が堆積していた。その黒褐色土の下位の平坦な地山土上には焼土が見られた。こうした状況から、この黒褐色土は住居の埋土の可能性が高いと判断し、SB01とした。範囲は不明、住居に関連した遺構も焼土以外は不明である。この黒褐色土からは、弥生時代中期の壺の口縁部、脇部および壺の小破片などが出土した。後期のものらしい破片も少量あるが、遺物の量が相対的に多い、中期後葉（IV様式）の住居と推測する。

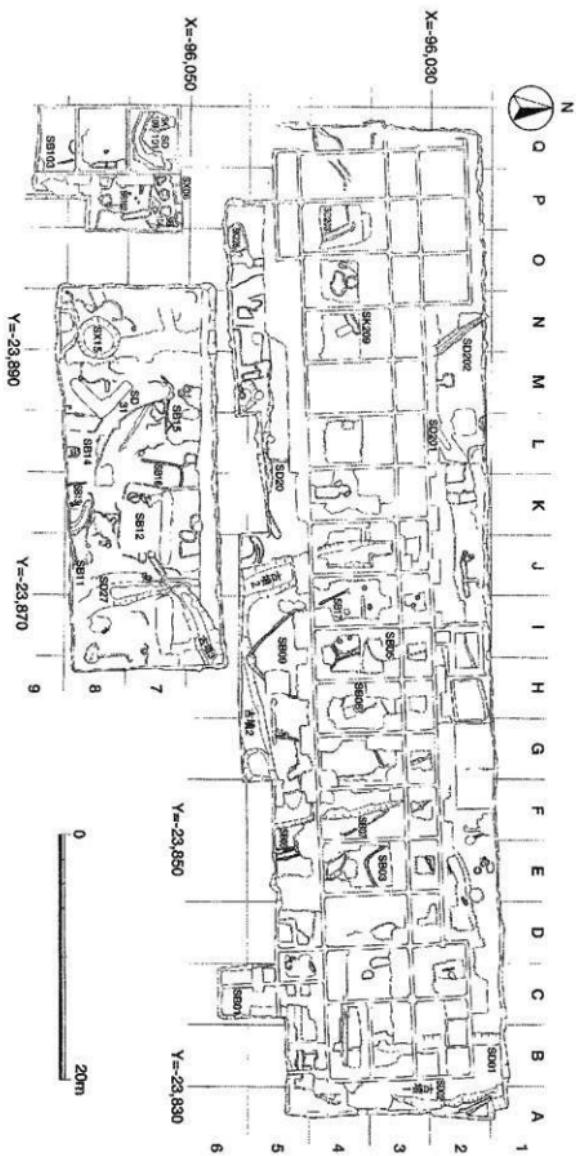
#### SB06

校舎部東よりE5グリッドで検出した周溝状の溝とその2mほど西にある焼土は共に1棟の竪穴住居を構成するものと考えて住居とした。周溝はN-14° -Wという方向を示す。この内側にも同様な方向を示す溝があるが関連は不明である。焼土は古墳2の周濠に切られており、40cm程の円形に残っている。

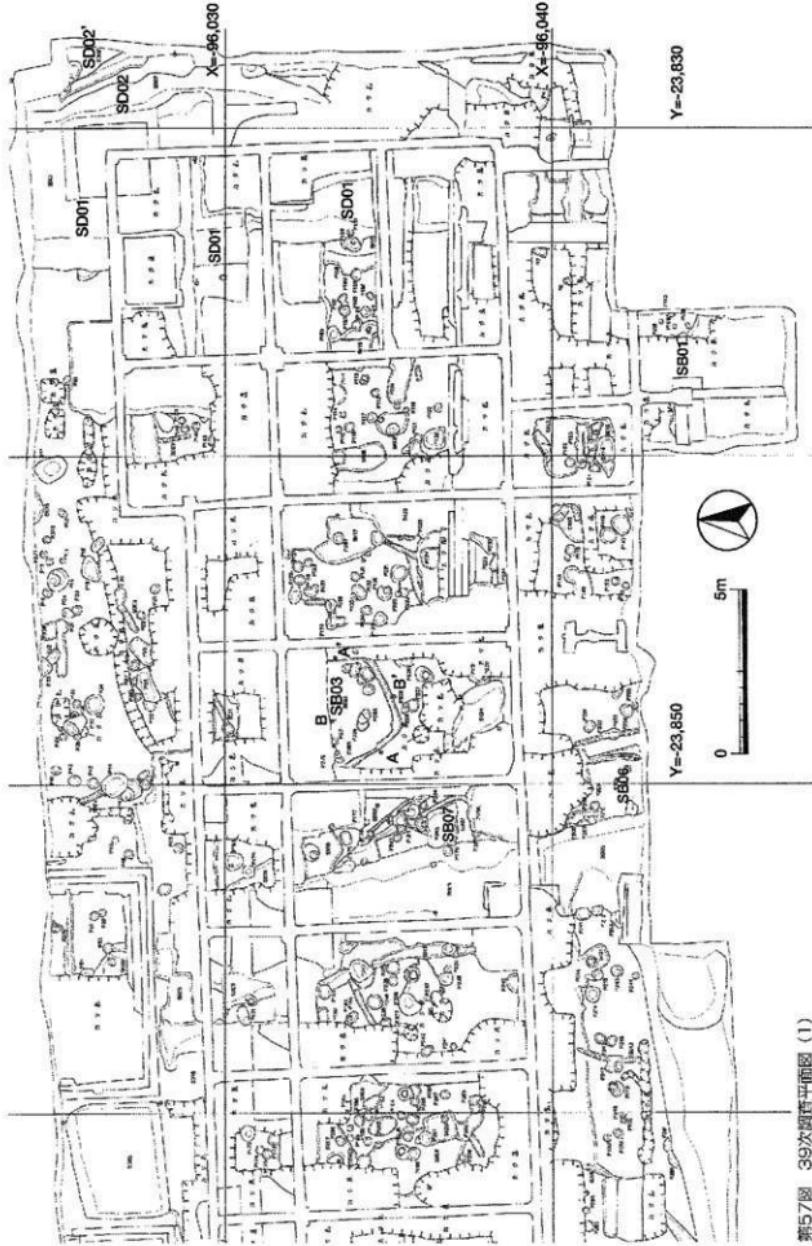
遺物はいざれも小片であり、図化できたものはないが、弥生時代後期前半（VI様式）のものが見られる。住居の時期もそのころのものと見ておく。

#### SB09

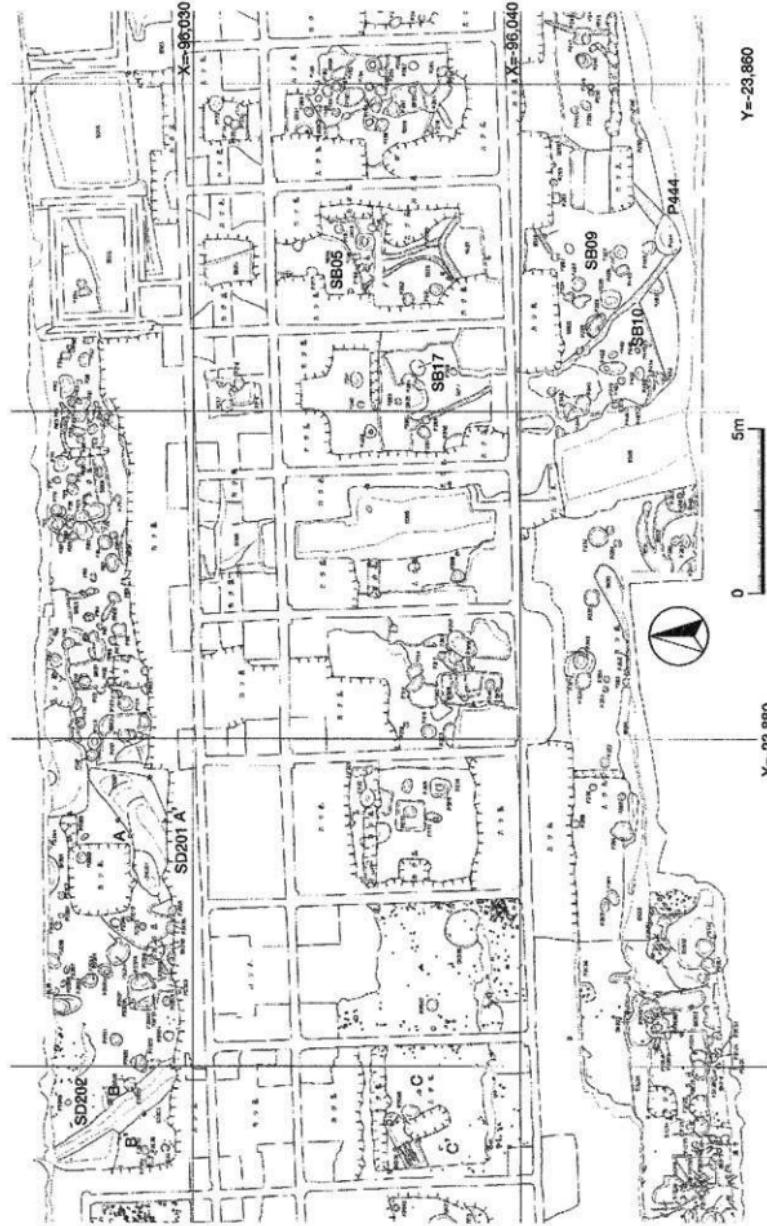
校舎部中央の南端、H14・5グリッドで検出した竪穴住居である。擾乱を受けているため不明瞭ではあるが、方形に巡る周溝のコーナーが4箇所検出できた。壠上はわずかに残っていた程度である。このコーナーをつなぐと、5.5mほどのやや疊んだ方形に復元できる。西側の辺は、N-44° -Wという方向を示してい



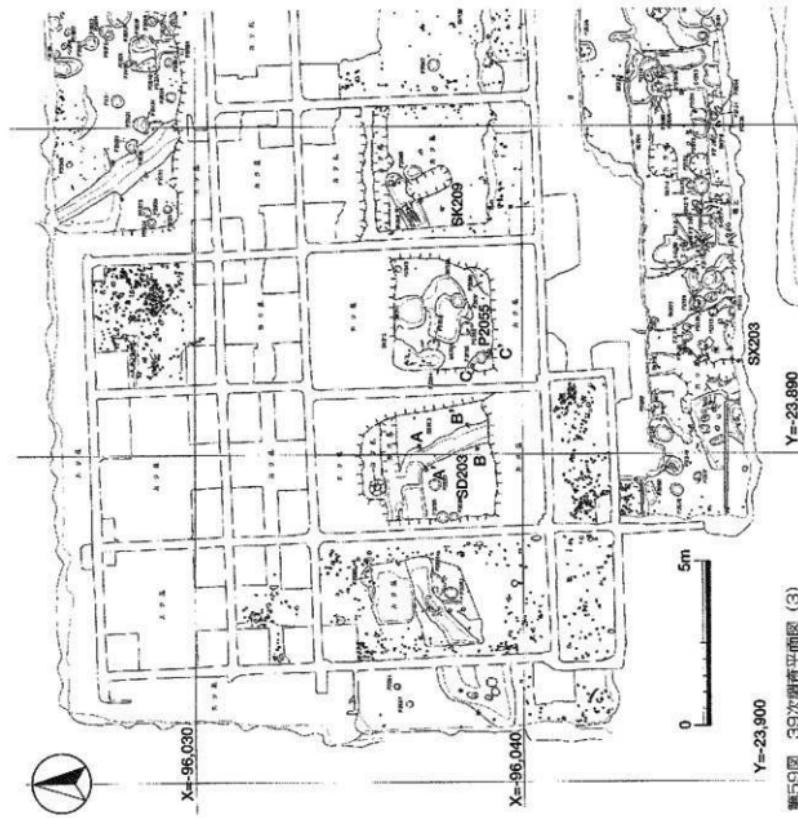
第56図 39次調査全体平面図



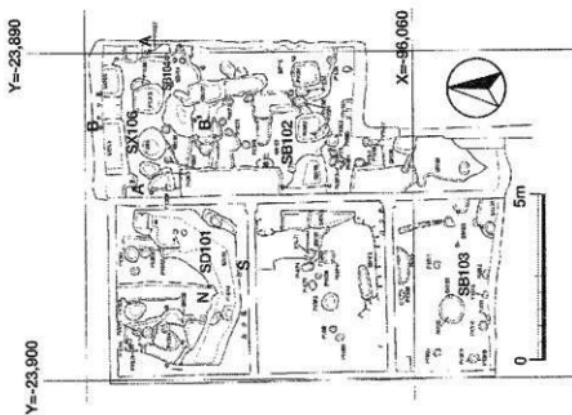
第57圖 39次鋼筋平面圖（1）



第58圖 39次調查平面圖(2)

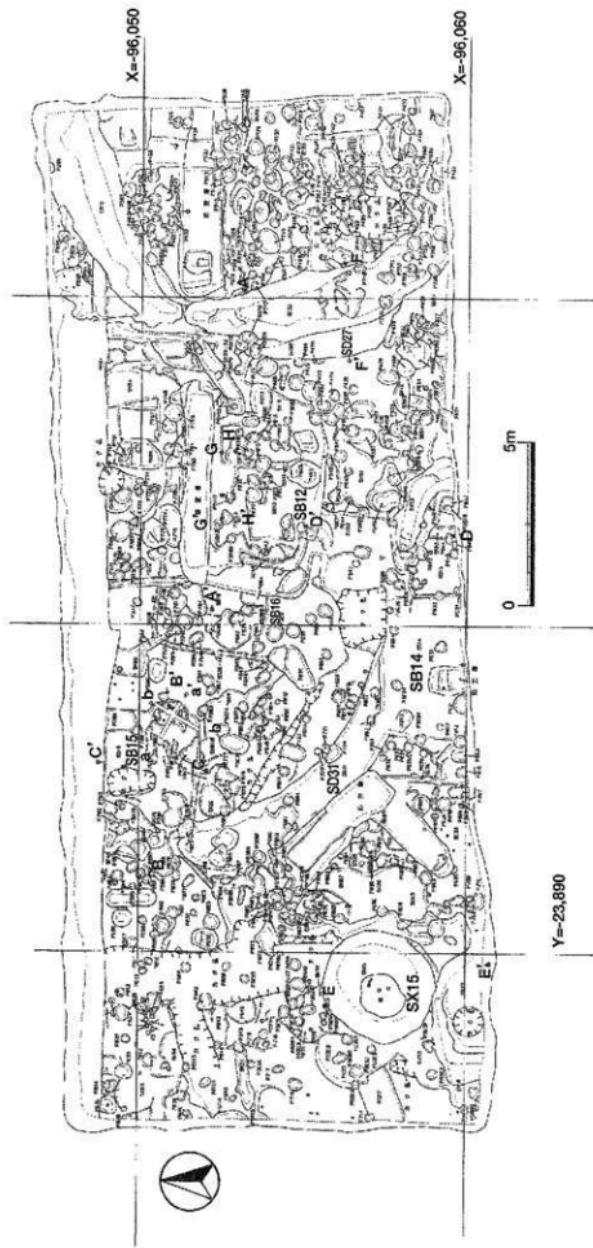


第59圖 39次南面平面圖(3)



第60圖 39次南面平面圖(4)

第61图 39次制造平面图 (5) 防水帽部



る。住居のほぼ中央で焼土が検出されており、この住居の炉跡の可能性があろう。古墳2の溝に切られているが、切り合いの判断が不確実であったため、住居埋土出土遺物の中に須恵器や埴輪が混入している。しかし、床面からは、206の小さな器台のほか、弥生時代終末期墳の高壺やパレススタイル壺が出土しているから、その頃の住居とみてよいだろう。また、南のコーナー部分には直径0.7mほどのやや大きなピット(P444)があり、小型器台が2個体出土している(第65図)。いずれも残りがよく全形を知ることができる。204は直線的に開く受部をもち、受部の端部は上方に突出し外側に面をなす。脚部は外反する。脚部と受部の間に貫通孔がある。205は、湾曲する受部で端部は丸い。受部と脚部は貫通しない。SB09の床面から出土した遺物の時期と大きさは異ならないと思われ、この住居に伴うピットとしてよいだろう。

#### SD31(第56図)

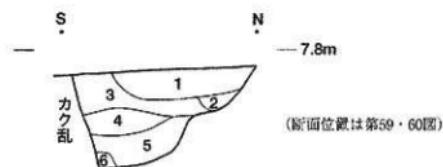
貯水槽部の中央LM7・8グリッドで緩く弧を描いて南北に伸びている溝である。断面は緩いU字形を示し、検出された地山面からの深さは0.2m程度である。堰上は黒味の強い暗褐色土である。この造構は、埋土の特徴などから、K-L5グリッドのSD20につながるものかとも思われるが、SD31の北より部分が不明なこともあり確認はない。

出土遺物は小片ばかりではあるが、弥生土器が主体である。特に下層から出土したものは、中期の弥生土器のみで、埋まり始めた時期としては弥生時代中期の可能性が高い。少量の須恵器片も含まれているが、SB14などと重なっていることによるのだろう。

#### SD101(第60図)

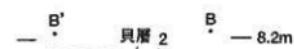
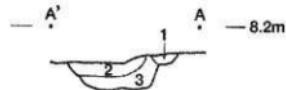
給食室Q7グリッドで検出した、ほぼ直角における溝である。西側および北側はそれぞれ調査区外に続いている。西側は古代の造構が上に築かれている。埋土は黒褐色土である。最下層には暗褐色の粘質土が堆積していた。断面は逆台形である。

SD101



1. 黒褐色土…上位に砂粒多い。黒味はそれほど強くない。
2. 黑褐色土…砂粒はあまりない。地山土を少し含む。
3. 黑褐色土…黒味が極めて強く、やや粘質。砂粒は目立つが1よりは少ない。
4. 黑褐色土…3より黒味は弱いが3と同様に粘質。砂粒はあまり多くない。
5. 黑褐色土…粘質。黒褐色土塊が含まれる。
6. 黄褐色土…5に地山土が多く含まれる。

SD203



1. 黒褐色土…黒味弱く、砂粒が多く含む。
2. 黒褐色土…黒味強く、砂粒はやや多く含む。地山土少含む。
3. 黒褐色土…3cm大の地山土塊で多く含む。砂粒はやや多い。
- 3'. 黒褐色土…3と同様地山土塊で多い。砂粒はやや少なく、黒味は弱い。

第62図 方形周溝墓断面

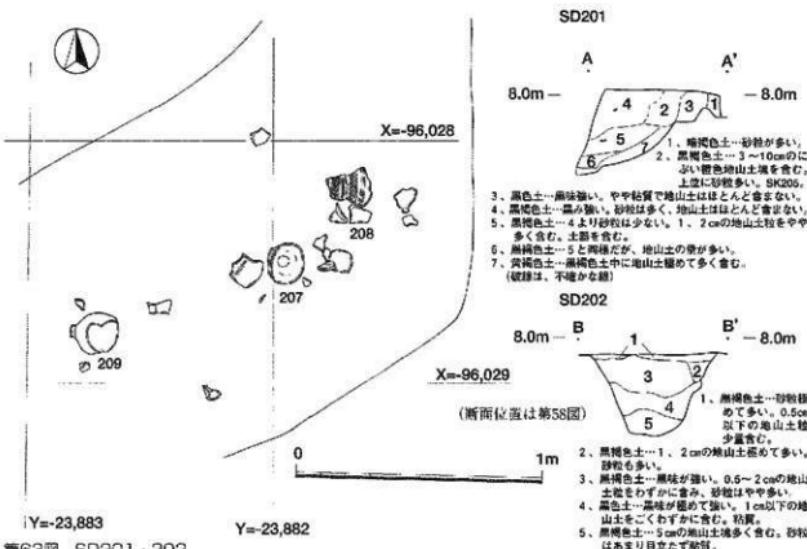
遺物は弥生時代後期前半のものの小破片が多く、本来この溝に属するものとはいえない。そのため、溝の機能した時期を特定することはできないが、後期前半のもの可能性が高い。時期と形状から見て弥生時代の方形周溝墓の一部であろう。なお、この遺構出土として取り上げた須恵器があるが、西側にあるSK109とした遺構の遺物であろうと判断している。

#### SD201・SD202 (第58図)

校舎部北端中央付近で検出した。SD201は、北東端が浅くなり、地山面では途切れている。この浅くなった部分で土器がまとめて出土している(第63図)。SD202はSD201と直交する方向をもつ。形状とSD201の遺物出土状況から見て方形周溝墓を構成する2辺の可能性が高い。西辺にあたるSD202は、N-37°Wという方向を示す。埋土は共に黒味の強い黒褐色土、黒色土であり、最下層には地山上塊を多く含んでいる。SD201については南側を擾乱に切られており、断面形は明らかではないが、SD202については逆台形をしている。

SD201からは比較的残りのよい壺、甕が出土した。ただし完形のものではなく、出土状況も個体ごとにまちまちである。207の壺は球形の胴部から屈折して口縁部にいたる。口縁部外面には凹線が施されている。胴部は無文である。208の甕は口縁部から肩部上位の破片である。口縁部はヨコナデによって四角くなる。面を持つ端部にはヘラによる斜位刺突が施される。内面は頸部直下までヘラケズリがなされる。209は粗雑なつくりの台を持つ器形で胴部下半が残存している。あまり類例を知らず、器種もよくわからないが、器向の感じは甕に近く、熱を受けた痕跡も顕著ではない。

SD202からは無頭甕210が出土している。これは正位で出土した。位置としては西辺の中央にあたる付近である。無文、無赤彩である。これらの遺物は後期初頭のものである。



第63図 SD201・202

SD203 (第59図)

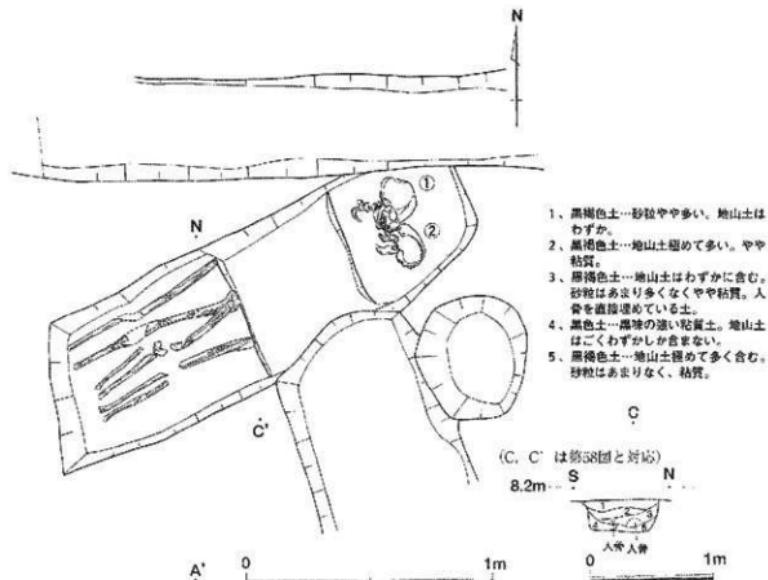
校舎部調査区の西端で検出した、方形に巡ると思われる溝である。地山面で検出したが、幅は0.7m、深さは0.3mほどで規模は小さい。東辺の方向は、N-22°-Wである。東辺及び北辺は明瞭であるが、西端では古墳時代の遺構と重なっており形状がはっきりしない。埋土は東辺では埋土中に小規模な貝層が見られた。形状からみて方形周溝墓の可能性が高い。埋土は黒褐色上で下位には地山土塊を多く含んでいた。

出土遺物は弥生時代中期から後期の小片ばかりであり、確實にこの遺構と関連すると思われるものはない。後期までには埋没していたと見られる。

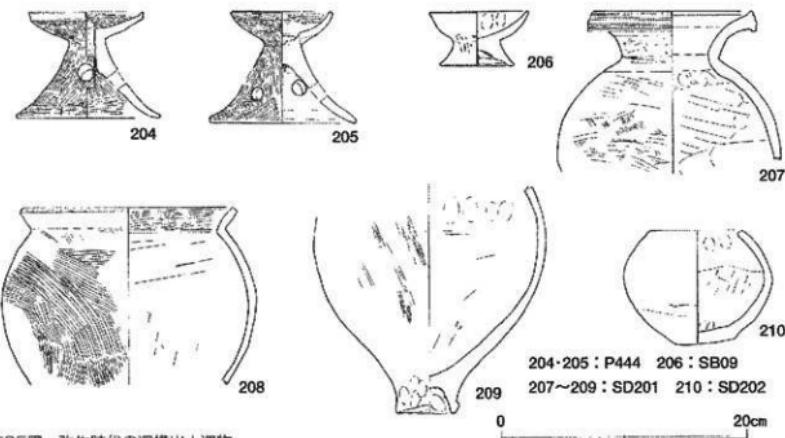
SK209 (第58・64図)

N4グリッドで検出した短辺0.5m、長辺は残存している部分1.5mほどの方形の土坑である。方向としては、N-60°-Eである。この土坑では、2体分の人骨が、向き合うような状態で検出された。頭位は北東方向を示す。2体を葬ったとしては幅の狭い土坑である。すぐ横に擾乱があり、そこから掘り進めたために、胸部は失われてしまった。木棺などの痕跡は認められなかった。埋葬の状況や掘り直しが見られないことからみて同時に埋葬されたのであろう。埋土は全体に黒味の強い黒褐色土である。人骨は黒色土・黒褐色土上で検出された。人骨を埋めていたのも黒褐色土であった。人骨については、分析をお願いした新美先生から頂いた原稿を付論2に掲載した。

時期を推定する根拠は直接はないが、埋土中からは弥生時代後期までの土器が出土している。黒味の強い埋土であるから、古墳時代以前の遺構であると思われ、須恵器が含まれていないことから弥生時代のも



第64図 SK209



第65図 弥生時代の遺構出土遺物

のと推測する。

なお、この遺構の周囲にはSD201・SD202やSD203などの方形周溝墓が築かれているが、この埋葬施設を取り囲む溝はなく、方形周溝墓の埋葬施設ではない。

### 古墳時代

#### 古墳1 (SD02・02')

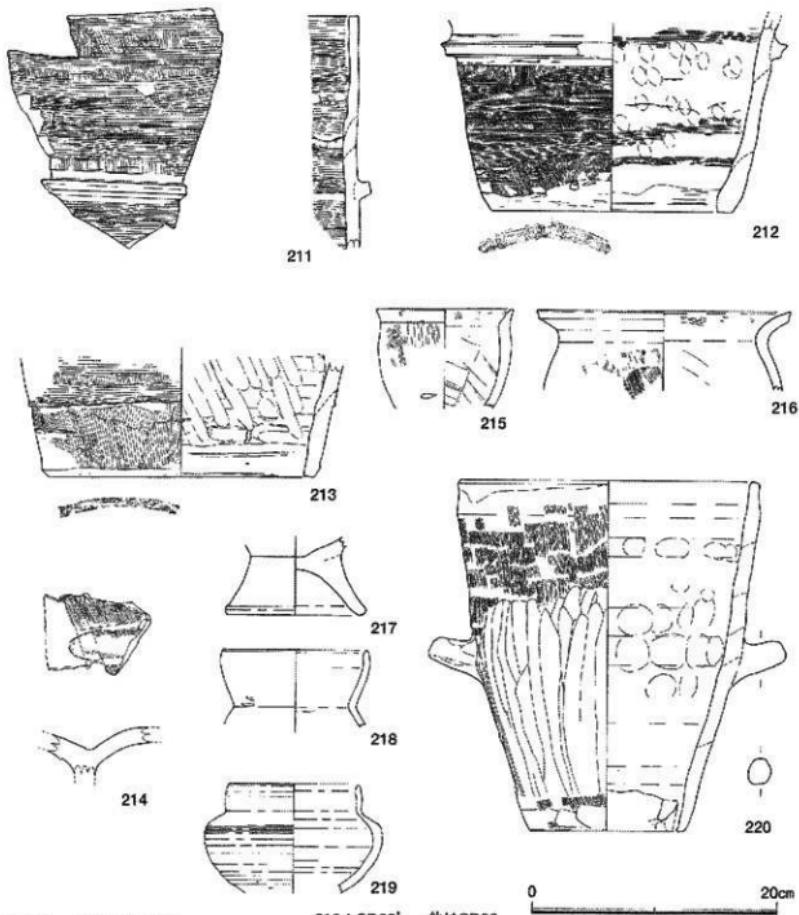
校舎部東端で検出した、南北方向にのびる溝である。南は擾乱によって切られていることもあって確實とは言えないが、検出した南端付近で浅くなり、地山面では一度途切れているように見える。この溝は西側の調査区内には続いているかないので、続くとすれば東側である。溝の北半はSD01と重なっており、掘削中は黒土をうまく区別することはできなかったが、断面の検討ではSD01に切られている。後述するように、この溝中には埴輪が極めて多く含まれており、その存否を目安として掘削した。西側はSD01に切られ、東側は後述するSD02'とした溝と重なっているため、平面図ではこの溝のプランが不明瞭であるが、図示された溝下場の線がこの溝の方向を示しており、北から15°程度西に傾いた方向である。埋土は黒褐色土であり、中位に埴土を根めて多く含む層が見られた。

SD02の埋土中からは極めて多くの、小片化した埴輪が見つかっている。原位置をとどめたものや全体が復元できるようなものはなかった。ほとんどが円筒埴輪である。口縁部、底部の残るものを見化した(211・212)。いずれも回転を利用したヨコハケメが施され、212の底面にはわずかな段差がみられる。いずれも「尾張型埴輪」[赤塚1991]と称されるものである。1点のみであるが形象埴輪とみられる破片214が出土している。扁平な円筒の断面形となると思われる体縫に、鱗状の突起が付いている。この鱗状部分は、圓化した上下縫がともに破面ではなく本来の面であり、5~6cm程度のものである。その他、須恵器、土師器など多く出土している。隣接するSD01と区分できなかったために遺物も混じっているが、掘削時にこの溝からの出土と判断したものを見出せる。破片化した土器片が多いが、須恵器の中には比較的遺

存度の高いものもあった。220の須恵器瓶は残存度が高く、本来この溝に伴うものであろう。

規模や出土遺物から古墳の周濠であると思われ、墳丘が調査区外にある古墳の西邊にあたるのではないかと思われる。

なお、この溝に切られて浅い溝SD02'がある。SD02と重なり、ほぼ同じ方向を示しているが、溝の下部は明らかにSD02とは異なっており、断面の観察でもSD02に切られている。僅かに数m検出できただけである。掘削中には、遺物は区別できなかったため、この溝から出土した埴輪片213もあわせて示しておく。この遺物は、SD02'の底から出土しており、確実にこの遺槽に属する。



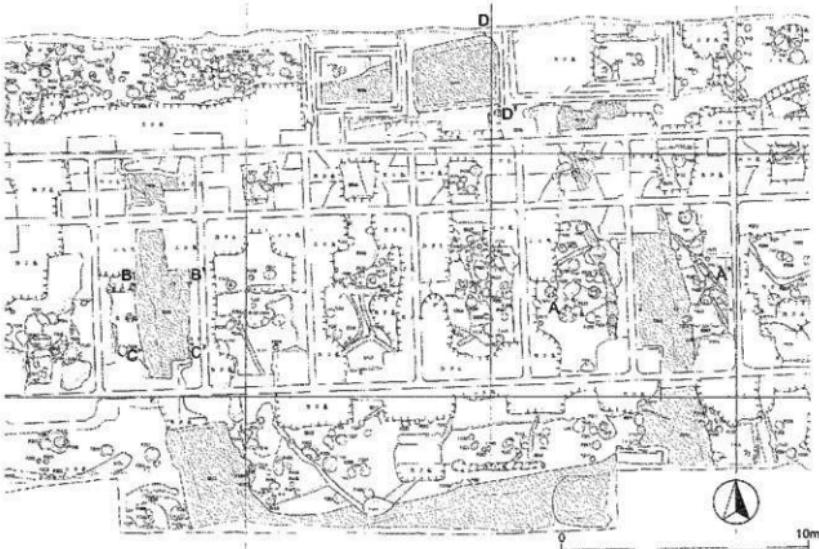
第66図 古墳1出土遺物

## 古墳2 (SD05、SD08、SD12、SX08)

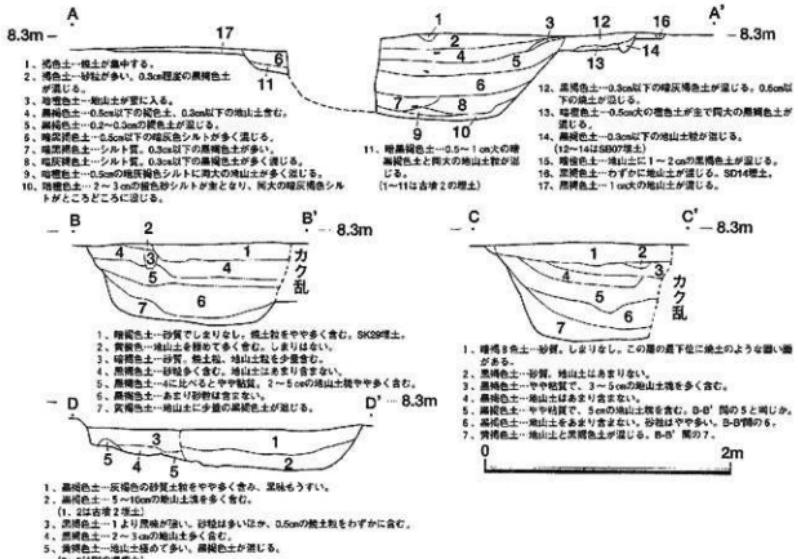
校舎部の中央で検出した一辺18m程度の方墳である。上面が削平されていることもあって、溝の幅は地点によって異なるが最大では2.5mほどある。地山面からの深さもまちまちだが、最大では0.8mほどある。北辺では0.3mほどの深さであるが、底の水準値が他の地点より高い。深さの差は、本来の深さの差であるのか、掘り込まれた面の高さが違っていたのかわからない。東西の辺は、北から12°ほど西に傾いた方向を示している。なお、基礎によって区画されていたために、地点ごとに異なった名称が与えられていたが、本来同一の古墳の周濠である。

埋土は、岡をとった地点間の対応が確定には行えなかったが、黒褐色土を埋土としている（第68図）。西辺では埋土中位から下位にかけて地山上を多く含む層が見られた。上位には砂粒が目立ち、下位はやや粘質であった。埋土中からは、破片化した埴輪が大量に出土している。埋土の上位から中位にかけて多く含まれていた。原位置をとどめているものではなく、全体を復元できるようなものもなかった。北辺のH2グリッドでは溝の幅が広くなっているだけでなく、この溝の北よりではほとんど埴輪が出土しておらず、別の遺構が重なっている可能性が高いと思われる。断面の検討ではそれらしい痕跡を認めたが、平面では明らかにできなかった。

出土遺物としては、先述の大量の埴輪片のはかに、やや時代が下る古墳時代末から古代の須恵器も多く出土している。これにはきわめて残りがよいものが含まれているので、古墳周濠が埋まる過程で混入したもののはかに、古墳の周濠上に別の遺構が築かれていた可能性もある。また、まだ完全には周濠が埋まりきっていないかった古墳に対して、何らかの行為が行われた可能性も考えられよう。埴輪はほとんどが円



第67図 古墳2平面図



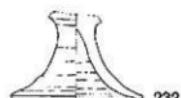
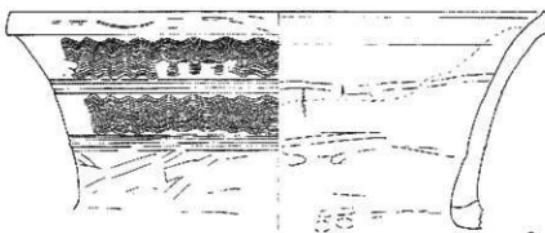
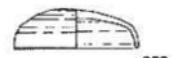
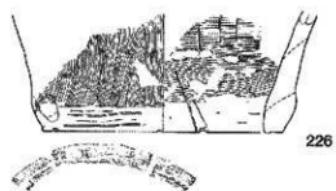
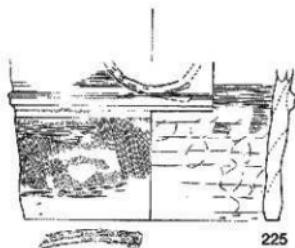
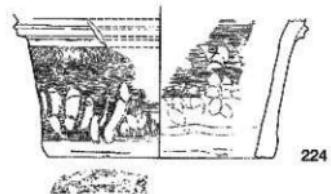
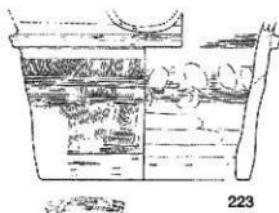
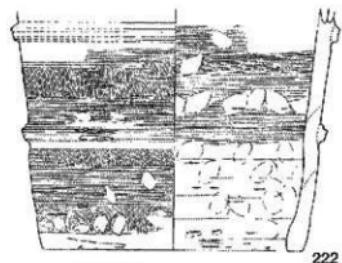
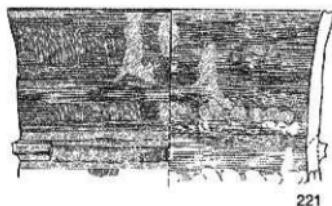
第68図 古墳2断面

筒輪、朝顔形埴輪である。口縁部、底部の残っているものを図化した。すべてが「尾張型埴輪」と称されるものである。外面は回転によるヨコハケメが施され、底面にはわずかな段があり、底部側面には工具のズレの痕跡がある。221の突帯の剥離部分には一条の沈線が見られ、突帯の位置を設定した時の痕跡と思われる。外面全体と内面の上位が赤彩されている。227は家形埴輪の一部と思われる。横方向の突帯があり、綾杉文が描かれている。外向には赤彩が施されている。228から231は口径が小型化したもので、浅い器形となっており、1-17号窓の遺物に類似している。234は須恵器の大形の壺。口縁部はあまり横に開かず、外面には櫛による波状文が巡らされている。235、236は移動式の壺の破片である。235は上端の竪孔から底部分までの破片である。粘土を加えて底を形成している。外面はナデによって調節されている。内外面に粘土の接合痕が残っている。236は、竪孔部分から体部の破片である。縦方向に突帯がつく。また円形の把手がつけられている。ともに雲母の小片を多く含む、特徴的な胎土である。

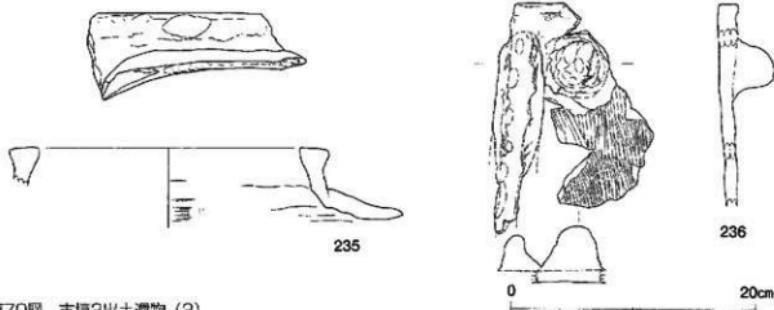
その他、図示することはできなかったが、周濠の底部付近から、 $15\text{cm} \times 8\text{cm}$ 、厚さが4cm程度の鉄の塊と、長さ10cm、幅3cm程度の器種不明の鉄製品が出土している。(写真岡版17)

### 古墳3 (SX10, SD32)

野水精舎東塙、IIJ-6~8グリッドで検出したし字形の溝である。北辺は幅1.5mで調査区東壁では約0.7mの深さである。北辺は古墳2の南辺と重なるような位置である。北西のコーナー付近では地山面から0.3m程度と浅くなっている。西辺(SD32)はやや浅く、幅が広くなっている。古代の溝SD27と重なっているせいもあるが、北辺と一連の溝と見てよいか若干の疑問が残る。南は調査区外へと続いている。34次調査で



第69図 古墳2出土遺物 (1)



第70図 古墳2出土遺物（2）

はこの溝の延長線上にSX01とした古代の落込みがあるが、形状から見てつながらないものと思われる。調査区東端で記録した北辺の断面図（第71図）では、上位は暗褐色土、中位以下は黒褐色土の埋土である。最下層には地山土が多く含まれていた。西辺の断面図（第72図）では、SD27によって切られているが、地山土を多く含む暗褐色土をこの古墳の周濠（SD32）の埋土と判断した。

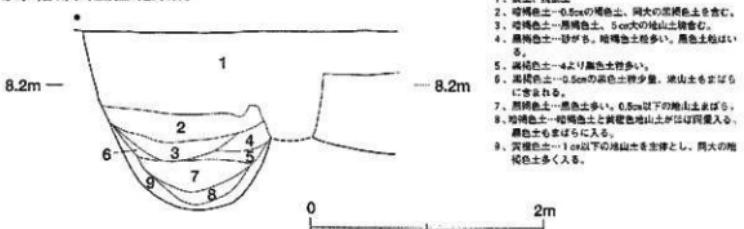
固化できた遺物はないが、北辺では埋土中から埴輪片が出土している。何れも小破片であり、原位置をとどめていなかった。固化することはできなかったが、何れも円筒埴輪で、古墳1、2出土の埴輪と共通の特徴をもつ、「尾張型埴輪」である。赤彩を施したものも見られる。西辺では、埴輪片はほとんど出土しなかった。

この遺構については、北辺で埴輪が出土し、L字形に溝が続いているように見えるため古墳として報告したが、古墳2との位置関係、溝の形状や埴輪の出土状況から見ると、方墳の周濠ではない可能性も考慮しなければならない。

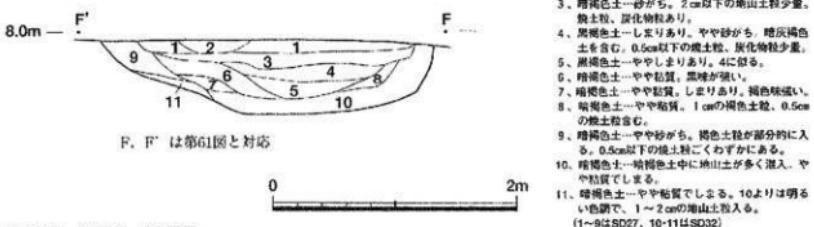
#### SK226

Q7グリッドで検出した上坑である。北辺が直線的なため、調査時は住居（SB201）としたが、掘削の結果堅穴住居ではないことが明らかたため改称した。両端は調査区外へ続いているため不明であるが、検出

#### 貯水槽部調査区北東隅



第71図 古墳3断面

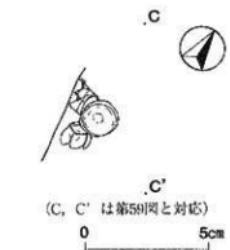


第72図 SD27・32断面

したのは南北1.5mほどで、東西方向は2m程を測る。埋上は黒褐色を呈し、地山面から0.4mほどの深さである。断面は台形状を呈し、底は平坦である。壇七中からはあまりまとまった遺物の出土はなかったが、遺存度の高い須恵器の壺身237が1点出土している。底部外側に×字状のヘラ記号が付けられている。口径は大きく、H61号窯の遺物に類似している。そのほかにはもう少し後のものかと思われる須恵器の破片もあるが、残りのよいこの遺物の示す時期をこの遺構の時期と考えておく。

#### P 2055 (第73図)

O4グリッドで検出した。西側および南側を搅乱に切られているため、検出できたのは半径0.4mほどの深い小穴の一部である。この小穴からは須恵器の高壺蓋238、壺身239、直口の壺240などが出土した。高壺蓋の上に壺蓋が下向きにのっていた。周辺には性格の明らかな造構ではなく、この小穴の性格も不明である。238はつまみが完全に欠損しているが、高壺の壺である。239の壺身はやや歪んでいるが、比較的大きな口径で、深い体部であり、且44号窯の資料に類似する。直口の壺は、体部がほとんど膨らみを持たず、口縁部から明晰な頸部を持たず底部に至る。

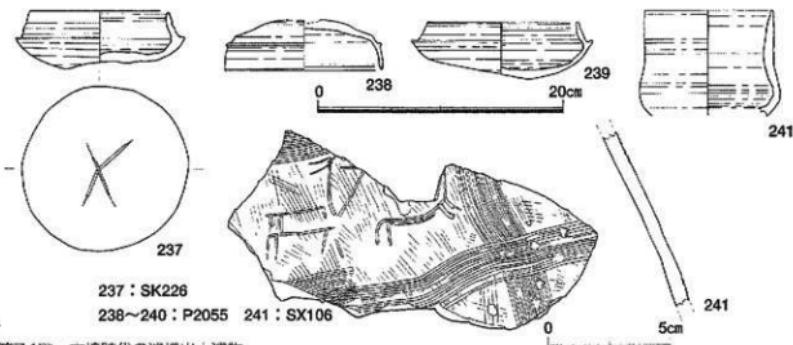


第73図 P2055

#### SX106 (第60図)

給食室部の北端P7グリッドで検出した遺構である。南側の辺は直線的であるが、東西は搅乱に切られ、北は調査区外のため、形状は不明である。この遺構の上面には地山上を多く含む黒褐色土が帯状に見られたが、これはSX106の上面に築かれたSX109に作る整地土であると思われる。この層の下をSX106の埋土と考えたが、いずれも黒味の強い黒褐色土であった。最下位には地山上塊を多く含む土が堆積していた。SX106と考えた部分の深さは約0.6mほどある。

この遺構からは、須恵器が出土しており、黒味の強い埋土とあわせて考えると古墳時代の遺構と思われる。古墳時代の遺物で岡化できたものはなかったが、線刻による絵画の描かれた弥生土器片241が出土している。土器は、横方向の櫛描直線文と縦方向の櫛描文が見られ、弥生時代中期の壺の胴部であると思われる。破片のため全体は不明であるが、櫛描文で区画された内部に、シカと思われるものが描かれ、その右にも動物が描かれている。シカは胴部が2頭分描かれているように見える。頭部はV字に描かれている。



第74図 古墳時代の遺構出土遺物

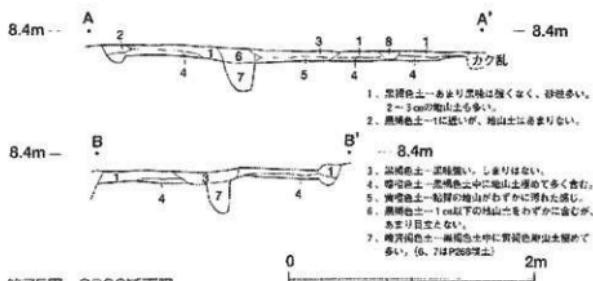
#### 古代

古代の遺構としては、調査区の北東部で検出した大規模な溝、地山面で検出した多数の堅穴住居、更には暗褐色の包含層を掘削中に検出した焼土がある。先述した通り、この包含層中に築かれた遺構は本來数多くあると思われるが、焼土の他には検出することはできなかった。その他、調査区の北東端で検出した大規模な溝状遺構もあり、古代に属する遺構は極めて多い。しかし、遺構名をあたえて掘削したものの中には、プランが不明確であったり、周辺遺構の掘削によって滅失してしまったものも多い。そのため、欠番や遺構として報告できないものも少なからずある。そうしたものも含めると極めて煩雑となるため、遺構については一覧表で示し、プランや埋土が確實に把握できたものを中心記述する。以下、堅穴住居から順に述べる。

#### SB03

校舎部東よりのE3グリッドの地山面で検出した。基礎によって分断されているが、グリッドの南よりで検出したコーナーと基礎の北にあるSD11とした溝が1棟の堅穴住居をなすものと思われる。西辺はN-35°-Wを示す。南北方向は4.8mを測る。検出した面からは約8cmほど残っていた。埋土は砂粒を多く含む黒褐色であるが、あまり黒味は強くない。床面にいくつかピットがあるが、P268は埋土を切って掘られているほか、その他のピットもこの住居に伴うものかどうかわからない。

埋土中からは、古代の須恵器や弥生土器の小片が出土している。確實に遺構に属する遺物とはいい難いが、古代の堅穴住居と推定する。須恵器の蓋242を図化した。



第75図 SB03断面図

### SB05 (第58図)

校舎部の中央J3グリッドで検出した。L字状に検出されたプランから竪穴住居であると考えた。東側の辺の一部が検出できたに過ぎないが、その方向はN-17°-Wである。大半が壊されていることもあり、この住居に伴う施設は不明である。埋土中からは古代の須恵器片が出土している。確実とは言えないが古代の住居と推測する。

### SB11 (第56・77図)

J8グリッドで検出した竪穴住居である。周囲を掘削したためプランはほとんど残っていない。SB13の東側で、SB13と重なっているが、切り合いについてでははっきり確認することができなかった。埋土は暗褐色土上で、焼土粒がまばらに含まれていた。なお、SB11、SB13、SB14などの断面は、貯水槽部の調査区南壁でも記録されているため、第77図に示しておく。埋土中からは須恵器の坏身243が出土している。やや深い器形で、体部は内湾し端部には内傾する面をなす。尾野氏の編年〔尾野2000〕のV期に編年される窓跡出土資料に類似している。

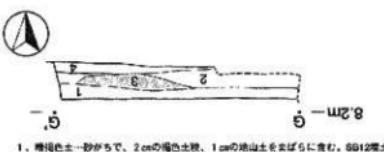
### SB12 (第61図)

貯水槽部の中央JK7グリッドで検出した竪穴住居である。南側半分は比較的明瞭に検出できたが、北半は暗褐色土を掘りこんで築かれており、複数の造営が重なりプランを明瞭に検出することはできなかった。南辺は6mほどあり、やや規模の大きな住居である。西辺の検出できた部分はN-10°-Eという方向を示している。埋土は暗褐色土で、検出できた暗褐色土上面からの深さは0.2mほどである。

なお、SB12の埋土の暗褐色土中に焼土の広がりが認められた。ちょうど中央アゼの部分である。焼土は1m程度の範囲に広がっていた。また周囲には焼土粒を含む土が広がっており、その中には須恵器の瓦片などが含まれていた。なお、SB12などの断面図は、貯水槽部の中央に設定した東西方向のアゼの断面図にも記録されているため、第77図に示した。埋土中からは須恵器の坏身244が出土している。口径13.4cm、坏深3.0cm程度である。尾野氏の編年のIV期新段階からV期古段階に属する資料に類似する。

### SB13 (第56・77図)

貯水槽部南辺中央のK8・9グリッドで検出した。方形になるものと思われるが、南は調査区外へと続いている。西側はSB14と重なっており、SB14との切り合いは、平面でも断面でも把握することができなかった。東側はSB11と重なっているが、こちらも切り合いは不明である。そのため規模は不明である。埋土は、調査区の南壁や南北方向に設定したアゼで確認すると、暗褐色土であり、0.3cmほどの地山土粒をまばらに含むほか焼土、



1. 暗褐色土…砂がちで、2cmの褐色土層、1cmの地山土をまばらに含む。SB12埋土。  
2. 暗褐色土…シルトがち。しまりあって、粘質。1cm以下の地山土をすこし含む。



3. 暗褐色土…砂がち。2cm以下の地山土多く、炭化物多い。  
4. 暗褐色土…シルトがち。0.5cmの地山土性多い。0.2-0.3cmの暗褐色土が生となる。  
5. 暗褐色土…地山土性。瓦礫は多く含む。



G-G' H-H' は第61図と対応



第76図 SB12内埋土

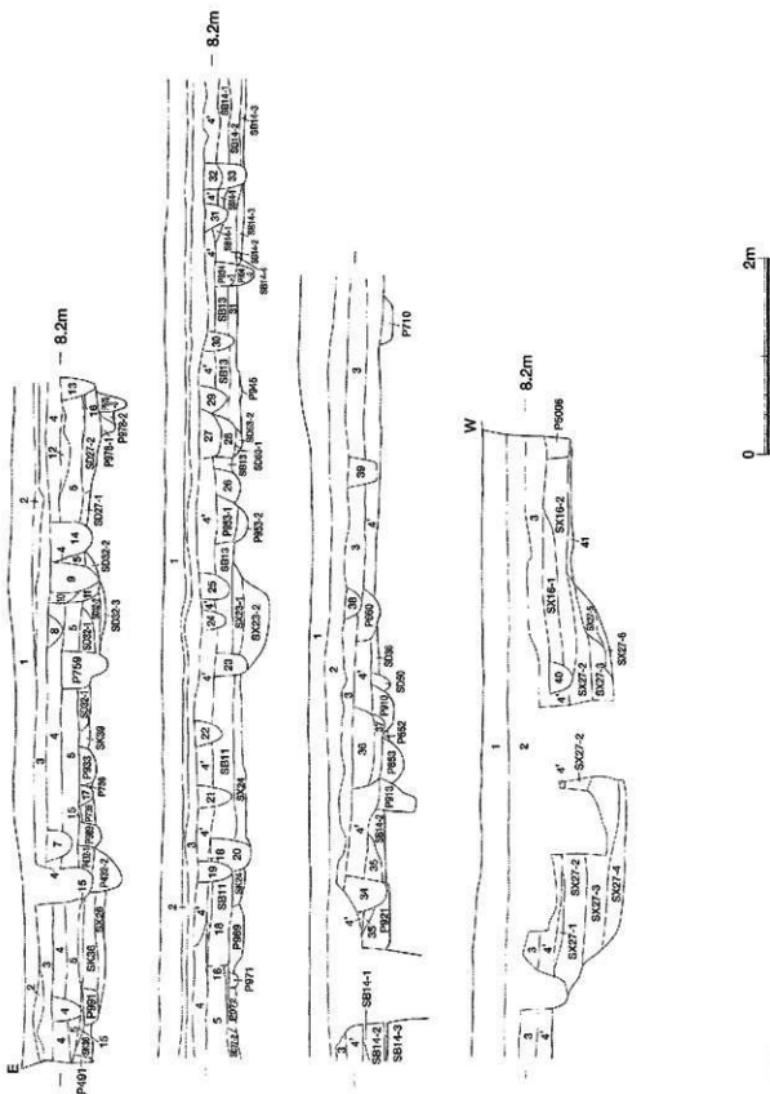
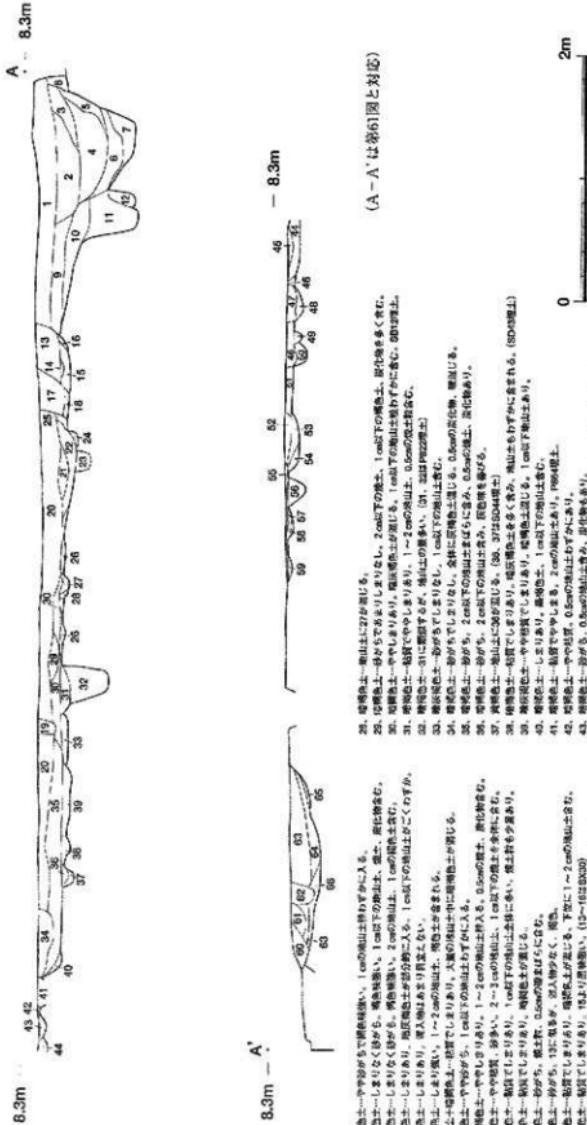


图777 荆水地层剖面图

## 貯水槽部調査区南壁

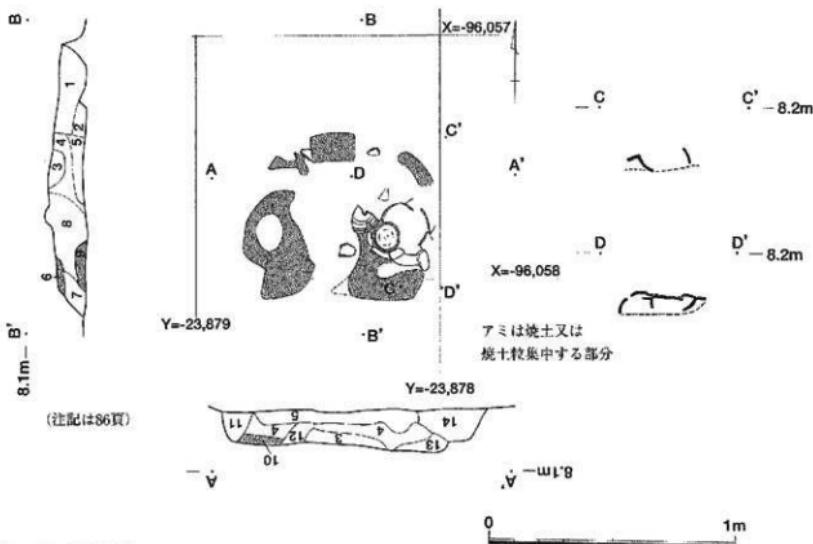
1. 砂土・屋土
  2. 底面土・砂質土・旧土、粗粒土。
  3. 黒褐色土・0.5cm以下の褐色土多く含み、砂かち。0.3cm以下の焼土まばら。
  4. 喀褐色土・3cmと同様だが、黒味強くシルトがら。
  5. 喀褐色土・4cmと類似するが褐色土の量が多くやや砂がち。
  6. 黒褐色土・0.5cm以下の地山土粒を含む。0.3cm以下の黒褐色土部分的に入る。
  7. 黒褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土多く、地山土、焼土粒、炭化物粒少々入る。
  8. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土混じる。黒味が強い。
  9. 黑褐色土・0.5cm以下の褐色土混じる。
  10. 喀褐色土・0.5cm以下の褐色土入る。0.5cmの地山土まばら。
  11. 黑褐色土・0.3cmの褐色土、黒褐色土含む。0.5cm以下の地山土含む。黒味強い。
  12. 褐褐色土・上層がよく焼けている。
  13. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土含む。0.3cm以下の黒褐色土、燒土含む。
  14. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土、黒褐色土含む。0.3cm以下の地山土粒含む。
  15. 黑褐色土・0.5~2cmの地山土が多く含まれる。
  16. 黑褐色土・地山土と暗褐色土の混じり合間。
  17. 黑褐色土・ピット。0.3cm以下の地山土、焼土粒まばらに入れる。
  18. 焼土・上層のほうがよく焼けている。
  19. 黑褐色土・0.5cm以下の褐色土入り。0.3cmの褐色土まばら。
  20. 黑褐色土・0.5cm以下の褐色土少々。0.3cmの黒褐色土、焼土粒まばら。
  21. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土多く、0.3cmの黒褐色土まばら。
  22. 黑褐色土・0.5cm以下の褐色土。
  23. 黑褐色土・0.3cmの褐色土、黒褐色土入る。0.2cmの地山土まばら。
  24. 黑褐色土・ピット。0.5cmの褐色土含む。
  25. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土入る。0.2cmの焼土、炭化物粒少々入る。
  26. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の地山土、黒褐色土入る。
  27. 黑褐色土・0.5cmの褐色土多い。0.3cmの黒褐色土、地山土部分的に入る。
  28. 黑褐色土・0.5cmの褐色土部分的に入る。0.5cm以下の地山土、黒褐色土全体に入れる。
  29. 黑褐色土・ピット。0.5cm以下の褐色土多く入る。
  30. 黑褐色土・ピット。0.3cm以下の褐色土、黒褐色土入る。
  31. 黑褐色土・0.5cm以下の褐色土少々。
  32. 黑褐色土・0.5cm以下の褐色土入る。
  33. 黑褐色土・0.5cmの褐色土、黒褐色土全体に入れる。1~2cmの地山土部分的に入る。
  34. 黑褐色土・2cm以下の地山土多く入り。0.5cmの黒褐色土、褐色土全体に入れる。
  35. 黑褐色土・1cm以下の地山土多く入る。
  36. 黑褐色土・0.5cmの黒褐色土、褐色土混じる。1cm以下の焼土まばら。
  37. 黑褐色土・0.5cm以下の地山土、焼土多く入る。
  38. 黑褐色土・0.3cmの黒褐色土、褐色土混じる。0.3cmのレキ混じる。
  39. 黑褐色土・0.3cmの褐色土多く入る。
  40. 黑褐色土・ピット。黒褐色土と暗褐色土を含む。0.3cmの地山土まばら。
  41. 黑褐色土・1.5cm以下の地山土粒を主体とし、2cmの暗褐色土部分的に入る。
- P401- 喀褐色土。0.5cmの地山土、暗褐色土まばらに入る。
- SK36- 黑褐色土。0.5cm以下の地山土、黒褐色土部分的に入る。
- SK26- 褐色土。地山土多く含み、黑色土も含まれる。
- P432-1- 喀褐色土。0.5cmの褐色土、暗褐色土入る。
- P432-2- 喀褐色土と暗褐色土が同様じる。
- P989- 喀褐色土。0.5cm以下の褐色土、地山土入る。
- P738- 喀褐色土。0.3cmの褐色土混じる。1~3cmの地山土塊も含む。
- P933- 黑褐色土。0.5cmの褐色土入る。地山土入る。
- SKC9- 黑褐色土。0.5cmの褐色土入る。0.3cmの地山土部分的に入る。
- SD52-1- 喀褐色土。暗褐色土を含む。0.5~3cmの地山土部分的に入る。
- SD52-2- 黑褐色土。0.5cm以下の暗褐色土含み、最大の地山土塊少々。
- SD52-3- 黑褐色土と暗褐色地山土混じる。1cm以下の黒褐色土部分的に入る。
- P759- 喀褐色土。0.5cmの褐色土、黑色土も含む。1cm以下の地山土粒まばら。
- SD27-1- 喀褐色土。0.5cm以下の黒褐色土含む。0.5cmの地山土多い。
- SD27-2- 喀褐色土。0.5cm以下の黒褐色土、地山土入る。0.5cm以下地山土粒まばら。
- P978-1- 喀褐色土。0.5cmの黒褐色土、地山土まばらに入る。
- P978-2- 1~1cmの地山土粒を主とし、両大的喀褐色土が入る。
- P978-3- 喀褐色土。0.5cm以下の黒褐色土、地山土多い。
- P972- 喀褐色土。0.3cmの黑色土、地山土まばらに入る。両大的地山、皮化物粒少々。
- P971- 喀褐色土。0.3cm以下の地山土少々入る。
- P969- 喀褐色土。0.3cmの褐色土、地山土粒まばらに入る。
- SB11- 喀褐色土。0.3cmの褐色土、黑色土入る。0.5cm以下の地山土全体にまばらに入る。
- SB13- 喀褐色土。0.5cm以下の褐色土、黒褐色土全体に入る。1cm以下地山土まばら。0.5cmの燒土、炭化物粒まばら。
- SK94- 喀褐色土。0.5cm以下地山土全般に入り、0.3cmの黒褐色土まばら。
- SK23-1- 喀褐色土。0.3cmの黒褐色土、地山土部分的に入る。
- SK23-2- 原褐色土。0.5cmの喀褐色土入る。0.5cmの地山土全体に入る。
- P951-1- 喀褐色土。0.3cmの褐色土、地山土入る。
- P953-2- 喀褐色土と暗褐色土が混じる。
- SD33-1- 喀褐色土。灰色土を含びる。0.5cmの地山土まばらに入る。
- SD33-2- 暗褐色土。灰色土を含びる。0.5cm以下の地山土多く入る。
- SB14-1- 喀褐色土。0.3cmの褐色土、地山土入る。
- SB14-2- 喀褐色土。0.5cmの褐色土、地山土全体に入る。0.3cm大黒褐色土、燒土粒少々入る。
- SB14-3- 喀褐色土。0.5cm以下の地山土多く、両大的黒褐色土も全体に入る。
- SB14-4- 喀褐色土。0.5cmの地山土多く入る。SB14崩壊。
- P921- 喀褐色土。2cm以下の地山土多く、0.5cmの褐色土入る。
- P913- 黑褐色土と暗褐色土が混じる。0.5cm以下の地山土全体に入る。
- P650- 黑褐色土。0.5cmの褐色土入る。0.5cm以下地山土まばら。
- P652- 喀褐色土。0.5cmの黒褐色土入る。
- P910- 喀褐色土。0.5cmの地山土。くろ褐色土部分的に入る。
- SD50- 喀褐色土。0.3cmの地山土多く入る。
- SD35- 喀褐色土。1cm以下の地山土全体に多く入る。
- P710- 喀褐色土。0.5cm以下の地山土まばらに入る。
- SK37-1- 喀褐色土。暗褐色土と地山土が混じる。
- SK37-2- 黑褐色土。0.3cmの暗褐色土多く、1cmの地山土まばら。
- SK37-3- 黑褐色土。0.5cm以下の暗褐色土少々入る。0.5cm以下の地山土少量。
- SK27-4- 黑褐色土。0.5cm以下の褐色土少々入る。
- SK27-5- 黑褐色土。0.3cmの暗褐色土部分的に入る。0.5cm以下の地山土多い。
- SK27-6- 喀褐色土。1cm以下の地山土を主とし、両大的暗褐色土少々入る。
- SX16-1- 喀褐色土。0.5cm以下の褐色土部分的に入る。0.3cm以下地山土まばらに入る。
- SX16-2- 喀褐色土。0.5cm以下の地山土、褐色土入る。黒味強い。
- P5000- 喀褐色土。0.5cmの黒褐色土部分的に入る。
- SB13窓**
1. 喀褐色土・地山土相混めて多い。燒土、炭化物はほとんどない。
  2. 喀褐色土・1より少些の地山土を含む。燒土はごくわずか。
  3. 喀褐色土・やや砂質。小さな燒土粒わざわざに含む。
  4. 喀褐色土・喀褐色土をやや多く含む。1cmの燒土、炭化物多やや多く含む。
  5. 喀褐色土・砂質地山土を含む。燒土粒は少し。
  6. 明顯な燒土・比較的多く焼けた燒土粒が散在。
  7. 暗褐色土・やや砂質。2cmの焼土粒あり。
  8. 暗褐色土・粘質土、暗褐色土含む。1cm以下の燒土粒やや多い。
  9. 喀褐色土・やや砂質。1cm以下の燒土粒多い。
  10. 喀褐色土・燒土だが焼け難い。
  11. 喀褐色土・暗褐色、地山土粒を含む。上面には砂利多く、地山土はない。
  12. 喀褐色土・上面に良く焼けた燒土がのっているが、層中にはほとんどない。
  13. 喀褐色土・砂質や多く、燒土粒はごくわずか。
  14. 喀褐色土・やや炭化物を含む。砂質で、燒土粒はごくわずか。



卷之三

炭化物も含んでいた。

この住居の内部に、この住居に伴うと思われる竈状の遺構があった。焼土粒をまばらに含む土の中に上師器壺と須恵器壺等が埋まっていると言った感じで、あまり焼け縮まったような部分はない。土師器の壺は、口縁部を上にして、やや傾いて設置されていた。その上に、須恵器の壺身247がのっていた。焼土が集中し、壺が据えつけられた状況は、SB15の竈と同じであり、竈であるとは思われるが、本來の形状は良くわからない。この竈状の遺構を断ち割ったところ、地山面に焼土が広がっており、その上に須恵器の



第79図 SB13竈



第80図 SB13竈下位

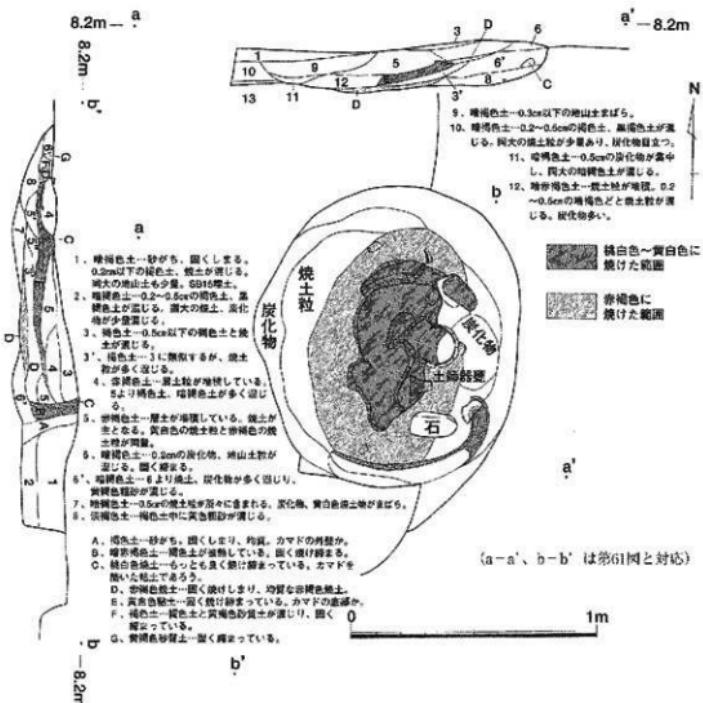
碗246の破片が見られた。これらも竪状遺構に関連したものであろう。竪状の遺構から出土した土器類245と須恵器3点(246~248)を図化した。245は、あまり膨らみのない胴部からほぼ水平に折れる口縁部を持つ。246は須恵器の碗である。丸みを帯びる体部で、端部には内傾する面を持つ。248は体部の途中で屈曲を持つ碗である。NN289号窓などの資料に類似している。

#### SB14

貯水槽部のL8グリッドで検出した堅穴住居である。住居の南半は調査区外へと續き、東はSB13と重なっており、住居のプランは不明である。西辺はほぼ南北方向(N4°・E)を示している。埋土は暗褐色土であり、中位には焼土粒が含まれていた。下位には地山土が多く含まれていた。柱穴や竪などこの住居に関連した遺構は不明である。埋土中から出土した須恵器壺身2点を図化した。249は平底になるもので、体部は直線的に外方に開き、端部でわずかに外反する。250は高台を持つもので、浅い器形である。尾野氏の福井のV期新段階の資料に類似している。

#### SB15 (第61図)

貯水槽部の中央北端LM6・7グリッドで検出した堅穴住居である。東辺、南辺は比較的明瞭に検出できだが、北辺は搅乱によって失われ、西辺も他の遺構と重なって不明瞭である。東辺はほぼ北方向(N4°・E)

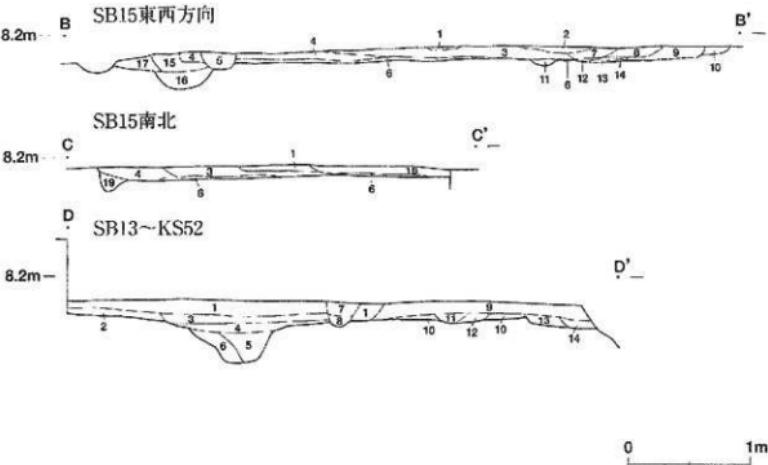


第81図 SB15図

を示している。規模は確実とは言えないが、東西方向はおおよそ4.5m程度である。残りの良い部分では10cm壁の立ち上がりが認められ、埴土は地山土を少量含んだ暗褐色土である。地山土を多く含む暗褐色土を、地山上に貼り付けて床面を形成していた。

この住居の東辺の南側のコーナーに近い地点に窓が築かれていた。この住居の窓は、極めてよく焼けており、窓の形状を明瞭にとどめていた。窓の内側にある中央部が純白色、黃白色に焼け締まっており、その下位と外側は赤褐色に焼けていた。この良く焼けた部分が窓の内部及び床にあたるものと思われる。内部には、土師器の窓が設置され、その南には石が設置されていた。

また、窓の外側、住居内側方向には、赤褐色の焼粒を多く含む土が堆積し、更にその外側には炭化物が広がっていた。埋土中および窓から出土した遺物を図化した(251~254)。252、253は窓からの出土である。251は土師器の窓である。やや膨らみを持つ胴部から緩やかに屈曲して口縁部にいたる。胴部には粗いハケメが施されている。252は灰釉陶器の碗である。口縁部は端部付近でわずかに外折する。内面に



第82図 貯水槽部窓穴住居断面

### SB15

1. 暗褐色土…砂がら。0.5cm以下の明褐色土入る。
2. 明褐色土…褐色土をはじり、炭化物をばらに含む。
3. 暗褐色土…褐色土を混じる。0.3cm以下の地山土がばらに入れる。
4. 暗褐色土…0.2~0.5cmの黒褐色土粒が混じる。0.5cmの地山土が含まれる。
5. 黑褐色土…0.5cmの黒褐色土粒、地山土を含む。SK16埋土。
6. 暗褐色土…地山上に暗褐色土が混じる。底層の粘土であろう。
7. 暗褐色土…0.5cm以下の褐色土が混じる。0.5cm以下の地山土、0.5cm以下の炭化物、地土粒少々。
8. 非褐色土…透土粒の堆积。0.2~0.5cmの炭化物、地土粒が多い。
9. 黄白色土…裏よりでは炭化物多い。
10. 暗褐色土
11. 黑褐色土…0.5~1cmの地山土多い。P003。
12. 黑褐色土…0.5cm以下の地山土が堆积。
13. 暗褐色土…0.5cm以下の地土粒が堆积。
14. 非褐色土
15. 黑褐色土…0.5~1cmの褐色土が混じる。炭化物をまぶら。SK75。
16. 黑褐色土…0.5cm以下の地山土粒が所々に含まれる。P077。
17. 黑褐色土…0.5cm以下の褐色土がまぶらに含まれる。SD49。
18. 暗褐色土…砂がら。0.5cmの褐色土がわずかに含まれる。
19. 硅藻土…砂がら。暗褐色土、地山土入る。

### SB13~SK52

1. 暗褐色土…砂がらでやや粘質強い。地山土を含む。SB13埋土。
2. 離褐色土…やや粘質でしまりあり。1~2cmの地山土大量に含む。
3. 暗褐色土…やや粘質でしまりあり。1cmの地山土と、地土疊合み、炭化物もあり。SD51埋土。
4. 暗褐色土…やや粘質でしまりあり。2~3cmの地山土もわずかに含む。
5. 黑褐色土…粘質でよくしまる。暗褐色土が追じり、1~2cmの地山土粒下位に多い。
6. 暗褐色土…暗褐色土が混じる。粘質でしまる。全体に地山土を含む。(6. BはSK23埋土)
7. 暗褐色土…砂がら。0.5cm以下の地土粒がごくわずかにあり。
8. 暗褐色土…暗灰褐色土が混じる。砂がら。1cm以下の地山土ごくわずかにあり。2. 3はP047埋土。
9. 暗褐色土…砂がら。1cm以下の褐色土全体に含む。淡い褐色土粒もあり。SK52埋土。
10. 離褐色土…砂がらでやや粘質。砂粒が多い。地山土も多く含む。
11. 暗褐色土…暗灰褐色土…砂がら。
12. 暗褐色土…暗灰褐色土…砂がら。11中に1~2cmの地山土が多く含まれる。
13. 暗褐色土…砂がら。暗褐色土でしまる。10に似るが、褐色強度高い。1~3cmの地山土入り。
14. 暗褐色土…暗褐色土…砂がら。P5077埋土。

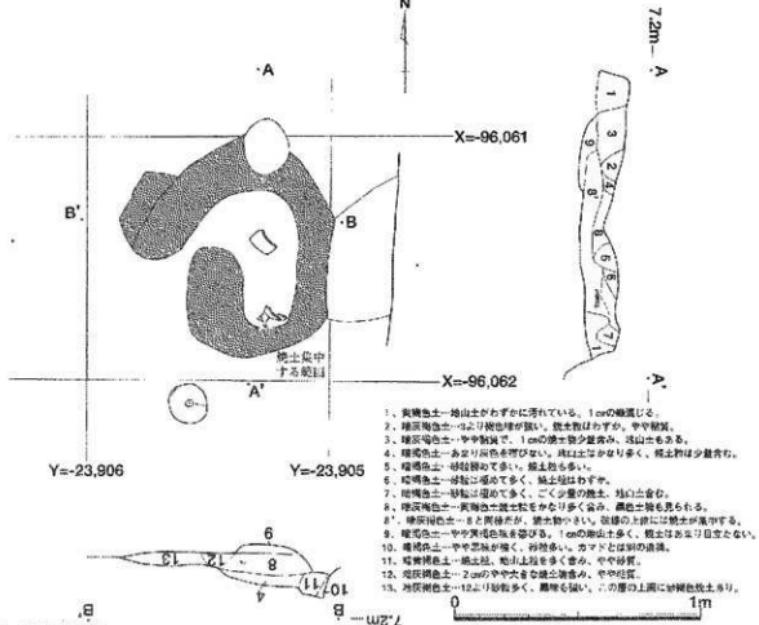
自然粘が厚く付着している。須恵器は尾野氏の編年でいうVI期古段階のものに類似しており、黒笠14号窯式 [斎藤1989] に比定できると思われる灰釉陶器と矛盾しない。

#### SB16 (SK59)

調査時には土坑 (SK59) として扱っていたものを改称した。KL7グリッドで、北辺から西辺の一部を検出した堅穴住居である。西辺の方向はN8°-Eである。地山面からの深さは数cm程度である。埋土は暗褐色土である。SB12と重なっており、直接の切りあい関係を確認することはできなかったが、SB12の埋土を切っている様子は観察できなかったから、SB12のほうが切っているものと思われる。壁際には0.2m程の幅の周溝が巡っている。埋土中からは土師器、須恵器の他に中世の陶器も出土しているが、混入したものと思われ、住居の時期としては古代として良いだろう。

#### SB103 (第60図)

給食室部の南西端Q9グリッドで検出した。延物の基礎に区画された範囲のため壁などが明らかでなく、プランは東辺を除いてよくわからなかった。その東辺にそって焼土が集まつた部分が見られた。この範囲は、馬蹄形に近い平面形を示しており、窓の形状を示している可能性が高いが、内部は焼けていない。うまく掘削することができなかつたが、南北の断面 (A-A') で見ると、焼土粒を含む土の両側に黄褐色の堆山上の高まり (第83図1) が観察でき、地山を掘り残して窓の袖としたものと思われる。内部には須恵



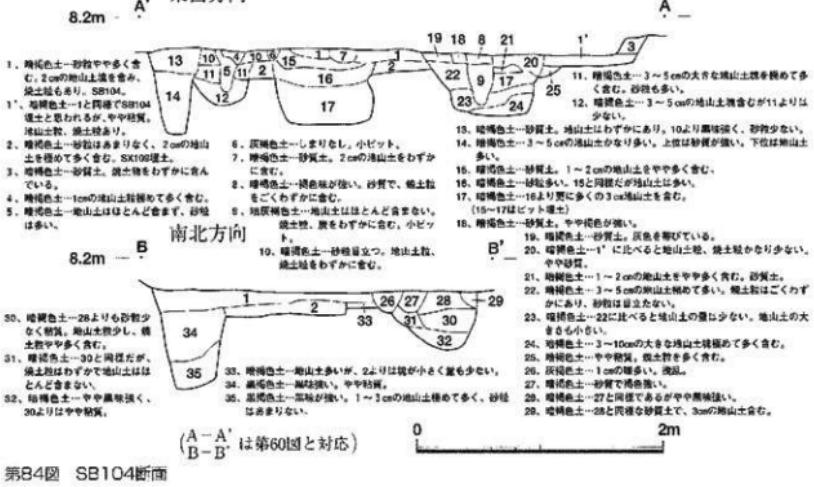
第63図 SB103図

器の高坏脚部が横転していたほか、土師器壺の破片も見られた。住居範囲内にはいくらかピットがあるが、何れも小規模なもので、この住居の柱穴と確定できたものはなかった。は不明である。固化できたのは須恵器の壺身257のみである。時期の比定は難しいが、尾野氏のV期の新段階頃と見られる。

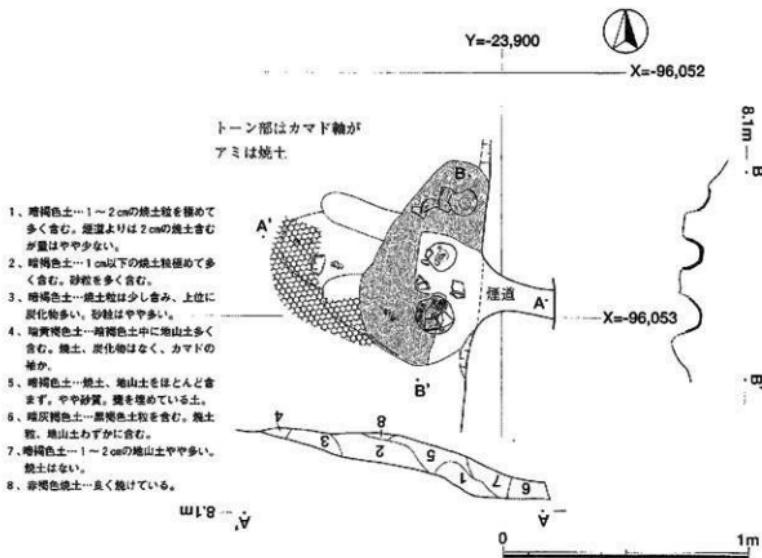
### SB104

給食室北端部のP7グリッドで検出した。北辺と西辺を検出したが、東辺は調査区外へ続き、南辺は擾乱を受けているため、規模は不明である。東辺はほぼグリッドの南北に一致する方向を示している。埋土は砂粒を多く含む暗褐色土で、10cm～15cm程度残っていた。東辺の南隅コーナーよりのところに壺が作り付けられたいた。あまり良く焼けてはいないが、一部壺の袖の痕跡と思われる黄褐色土の高まりが残っていた。また東に向かって煙道の痕跡らしい溝が伸びていた。窓内には、土師器の壺2個体、須恵器壺1個体がいずれも底部を上にして据えられていた。このうち須恵器にはあまり被熱の痕跡がないが、壺は2個体とも煙道側に赤変やススの付着といった被熱の痕跡が認められる。被熱していることから見て、土師器の壺については支脚のように用いられたものと思われる。住居の床面では比較的大きなピットなどがあるが、住居に関連したものと確定できたものはなかった。

出土遺物としては壺の内部から出土した須恵器、土師器と住居埋土中から出土した土錠を固化した(258～261)。258は窓内に伏せられていた土師器の壺である。口縁部を下に伏せられており、口縁部はごくわずかにしか残っていない。法量の小さなものの、外向は粗いハケメによって整えられている。内面は底部付近をイタナデし、肩部はナデで整えている。口縁部内面には粗い横方向のハケメが施されている。内面には粘土の擦ぎ日の痕跡が残っている。小さな平底である。259も窓内に伏せられていた土師器壺であるが、こちらは258よりは大きな壺の底部のみを用いていた。外面はきわめて粗いハケメが施されている。底部外面付近は、反時計回りの方向に斜めのハケメが施される。内面は底部付近は横にイタナデ、

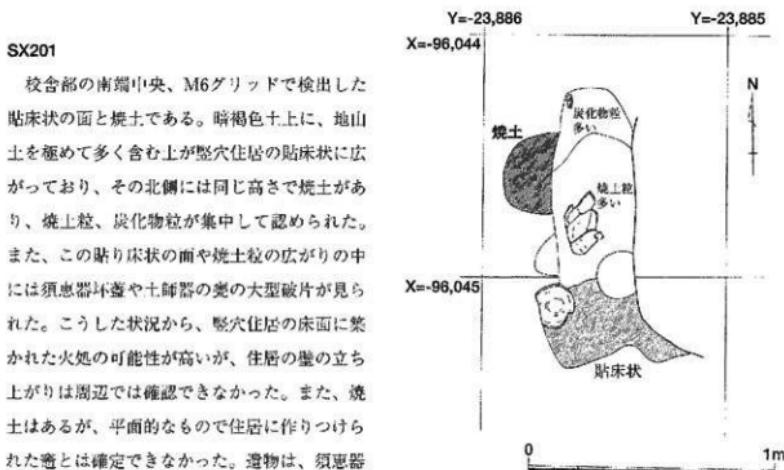


第84図 SB104断面



第85図 SB104窓

底部はナゲで整えている。260は窓内に伏せられていた須恵器の碗である。浅い器形である。尾野氏の編  
年のVI期古段階頃と見られる。



第86図 SX201

ある。やや器高が高く、口縁付近で屈曲している。VI期古投擲のものに類似している。

### SX203 (第87図)

SX203は、O5・6グリッドで検出した、深さ数cmの落ち込みである。この落ち込みの西端の部分で、焼土粒、炭化物の広がりが認められた。この焼土粒の広がり中には甕が伏せられ、臺から0.5mほど北に扁平な石が立てられていた。甕は割の下半部が、底部を上にした状態で据えられていた。底部は見られなかった。石はわずかに上方北に傾いていた。この石や甕を焼土粒を多く含む暗褐色土が埋めていたが、甕の南側、石の両側が特に多く含んでいた。

この土を掘り下ろしたところ、地山の高さで焼土面が確認できた。この面は、石の中央から東よりを取り巻くように見られた。この焼土は、暗灰褐色土を埋上とする皿状の窪みの上面にのっているような状況で、厚さはもっとも深い地点で7cmである。石は、地山面上の部分全体が被熱により赤変していたが、特に北面が顯著に赤変していた。甕は北面と南面にススが付着しているが、顯著な赤変は見られなかった。

この遺構は、SX203の内部に築かれているが、SX203の埋土の一部を掘りこんでいるように見えるため、SX203に伴うものとは決められない。その他、この遺構を火廻とするような竪穴住居の痕跡も見出せておらず、他の遺構とのかかわりは不明である。土錘263と伏せられていた甕264を固化した。臺はかなり長胴になるものの下胴部である。外面はきわめて粗い縱方向のハケメで調整されている。内面は底部付近がイタナデ、上位がナデで整えられていた。底部の破片は見られなかった。この他に、第93図の298もSX203から出土している。



第87図 SX203

### SD01（第57図）

調査区北東端のB1グリッドから南にのびる大規模な溝である。北は調査区外に続くが、南はB4グリッド付近で途切れている。北東端では古墳1の周濠であるSD02と重なっており、切り合いの判断が難しかったが、SD02にみられた地山土を多く含む層が見られないことなどを手がかりとして、SD02を切っているものと判断した。方向はほぼ南北方向を示している。断面は、調査区北壁（第15図）で確認した。埋土は黒褐色土であり、含まれる砂粒の量や地山土の量によって分層した。溝の上位にはわずかな量ではあるが焼土粒が含まれていた。中位には、焼土粒をきわめて多く含む、粘質の黒灰色土が帶状に見られた。この層に類似する上はSD02にも見られた。下層には地山である燕田層由来の砂を多く含んでいた。この溝は、巾は3m以上あり、北端では地山面から1.5m程で、南に行くほど徐々に浅くなっている。B3グリッドまでは1m近い深さであるが、その南では急激に浅くなり、南端は校舎の基礎で擾乱されていたこともあって、包含層と区別ができなかった。

埋土中からは、小片ではあるが古代の須恵器、土師器が大量に出土している。その他弥生時代、古墳時代の遺物も多く、北側の調査区外にはその時代の造構が存在すると思われる。265の壺と266の高环脚部を図化した。265はS字状口縁台付壺である。古墳時代のものである。266は弥生時代のものである。

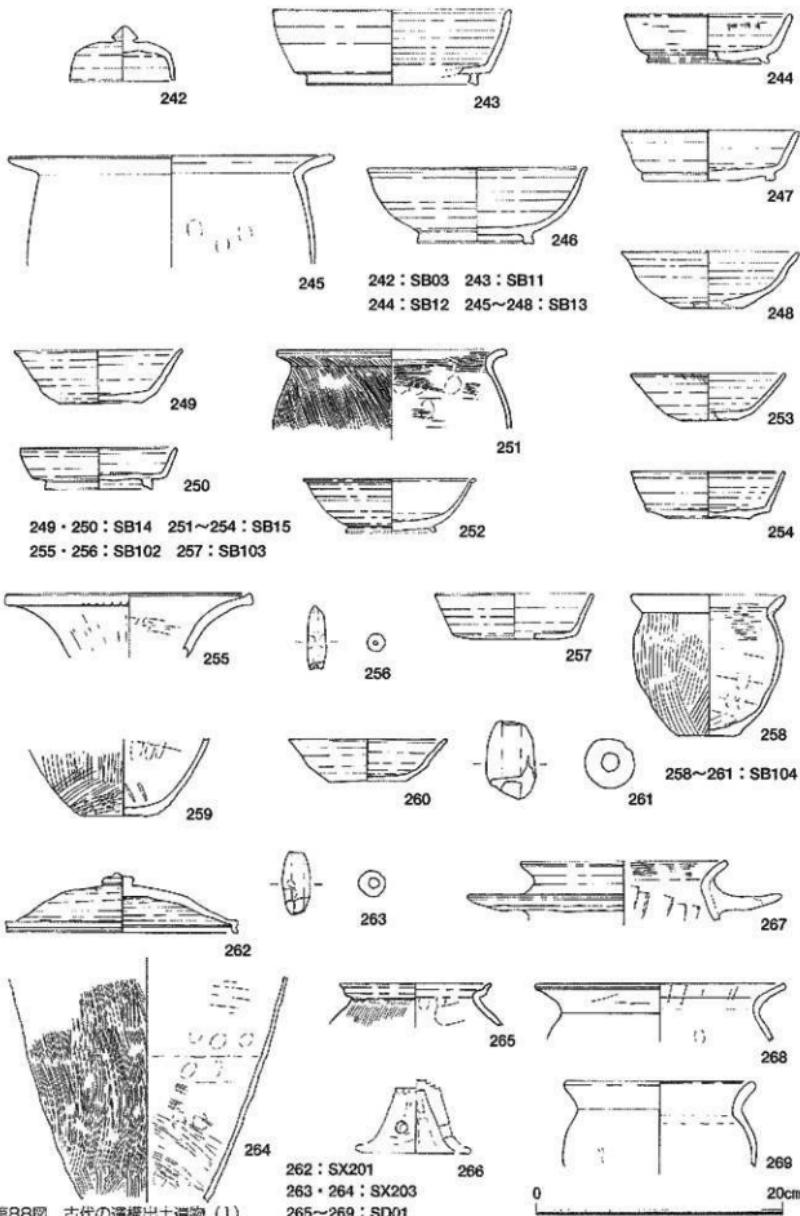
古代のものは、残りのよいものを中心に図化した。267は土師器の羽釜。口縁部付近の破片であるが、比較的幅広の鈍が付けられている。268、269は土師器の壺。270～273は須恵器である。270、271の蓋杯はともに口径が小さなものである。272は短頭壺。273のハソウは口縁部を欠いているが、肩部には櫛による刺突が施され、孔の下位が突出している。これらの須恵器はI-17号窯の遺物に類似している。その他、図化できなかったが、十鉢も出土している。

### SD27（第61図）

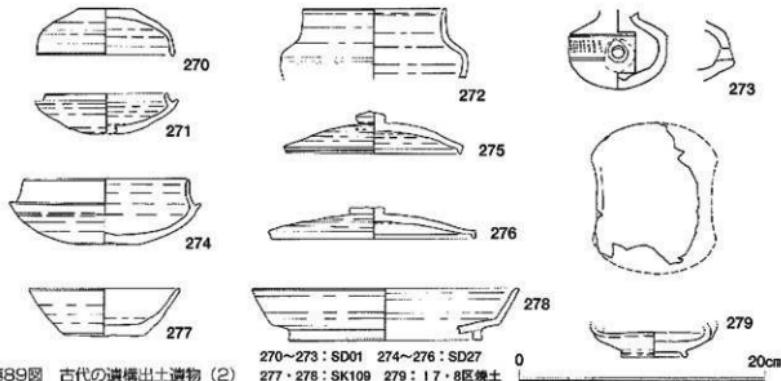
町水精部中央18グリッドで検出した溝状の造構である。古墳3の一部となると思われるSD32と重なっており、SD32の埋土上に掘り込まれた溝である。プランは今ひとつはっきりしないが、ほぼSD32と平行して南北方向に伸びているものと思われる。埋土は暗褐色土が主体であり、部分的に黒褐色土もみられる。また上位には焼土粒、炭化物粒が含まれていた。埋土中からは遺存度の高い須恵器275・276が出土している。いずれもつまみの付く壺蓋であるが、275は口径14.1cmで、体部はやや膨らみを持っている。276は、口径16.5cmで体部はあまり膨らまない。扁平なつまみが付けられている。V期中段階～新段階の資料に類似している。

### SK109

給食室部の北西端Q7グリッドで検出した土坑である。東辺が直線的であったため当初竪穴住居と判断したが、幅が1m程度しかなく、住居とは考えにくいため改称した。SK109は、黒味の強い黒褐色土を埋土とし、深さは20cm程度であったが、中央にこの造構を切るビット（P1034）があり、遺物はうまく区別できなかった。SK109の底では、地山面が焼けているのが観察された。先述の通り、遺物が混入しているが、この造構出土遺物と記録されているもののうち、須恵器2点（277・278）を図化した。いずれも尾野氏のVI期古段階のものに類似する。



第88図 古代の遺構出土遺物(1)



第89図 古代の遺構出土遺物（2）

270～273：SD01 274～276：SD27  
277・278：SK109 279：I7・8区焼土

#### I7・8グリッド焼土

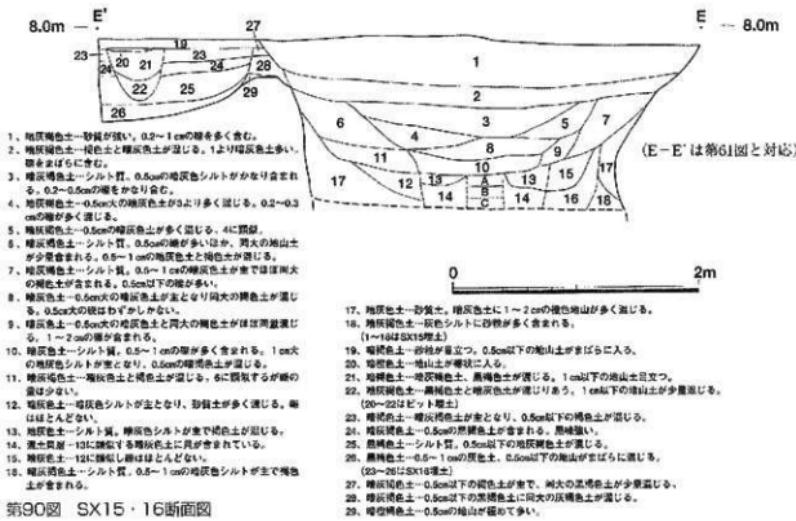
貯水槽部南端の、I7・8区で、暗褐色の包含層中に数箇所の焼土が認められた。いずれもその場所で焼けた様子であったが、焼け締まってはいなかった。共に水準は8.2m前後で、堅穴住居の検出できた面より上位であり、暗褐色土に茶かれた遺構が存在するものと思われるが不明である。I8区の焼土の北側で焼土とほぼ同じレベルから、縁軸陶器の耳皿等が出土した。耳皿279は低い高台をもつ。折り返された部分は欠損している。全面に紋様が施されている。黒瓦14号窯式～黒瓦90号窯式期のものと思われる（[伊藤2001]および藤澤良祐氏のご教示）。

## 鎌倉時代

SX15 (第61図)

町水橋地点の西端N8グリッドで検出した井戸状の遺構である。検出した包含層の上面では直径3.6mほどを測る円形をしている。上位はすり鉢状の断面形であるが、地山面から0.8m以下はほぼ垂直に掘り下げられている。埋土上層は、暗灰褐色の、しまりのない疊混じりの土であった。下位にはシルト質の土も見られた。埋土は、この遺構以外にはほとんど見られない特徴的なもので、遺構内では比較的均質であるから、意図的に埋め戻しを行った可能性もある。検出した面から1mほどのところに貝殻が形成されていた。井戸枠等は検出されなかったが、この貝層の平面形が円形をしており、この範囲が井戸枠内にあたる可能性もある。貝殻は第90図のように上下に連続する3つのサンプルを採取し、水洗選別を行った。なお、湧水などもあったため、途中で掘削を中止した。

遺物は貝層の付近から極めて多く出土した(280~286)。特に、土師皿、山茶碗は多数出土している。土師皿は図を示した個体は少ないが、口径が8cm程度のものと12cm程度のものがそれぞれ幾箇出土した(写真図版19)。いずれも手捏ねによるものである。山茶碗にはいわゆる南部系のものと北部系のものがある。南部系の碗のうち282は低い高台があり、体部にもやや丸みがある。283は、底部から高台が消失し、体部は直線的に開いており、斎藤氏の編年[斎藤1988]でいう第4期・第3型式頃に比定できる。一方北部系の碗は、形状から見て明和1号窯式[山内1992]に比定できる。これらの山茶碗の特徴から見て、13世紀末から14世紀初め頃という年代を推定することができよう。284は知多窯産と思われる広口の壺。まっすぐ立ち上がる長い頸部を持ち、口縁部付近で短く外反する。口縁部は端部内側が凹んでいる。285は古瀬戸の壺である。古瀬戸前期板式[藤沢1995]のものである。286は法量の小さな土鏡。その他、図化していないが、亀文をもつ軒円瓦の破片も出土している。



第90図 SX15・16断面図

## SX15の動物遺体

高蔵遺跡第39次調査では、13世紀～14世紀頃の井戸とみられる遺構から貝層が出土しており、30×30×10(cm)の貝層を3件サンプリングしそのうちの1つ(第90図C)を水洗選別して動物遺体を抽出した。水洗前の重量は10.5kg、これを1mmのふるいにかけ選別した。

貝類は第1表に示したとおりハマグリ、シオフキ、ヤマトシジミ、アサリ、カガミガイの5種がみつかっておりそれぞれ最小個体数にしてハマグリ527個体、シオフキ58個体、シジミ類4個体、アサリ1個体、カガミガイ1個体がみられ、ハマグリが9割近くを占めるというものであった(表7)。ハマグリは殻長が70mmを超えるものから最小17mmのものまで存在し、殻長30～35mmの個体がわずかに多かった。貝は削れたものが多く殻長または殻高が正確に計測できる個体は少なく、ハマグリと同定された全個体1028個体のうち殻長を計測することができたのはわずか73個体であった。シオフキは殻長35～40mmの個体が最も多かった。カガミガイ、ヤマトシジミはほぼ完形で検出され、カガミガイは1点のみの検出で殻長は62.5mm、ヤマトシジミは最大のもので殻長18.4mm、アサリは腹縁部を欠いた状態のものが1点のみであった。また巻き貝の殻はまったくみられなかつた。

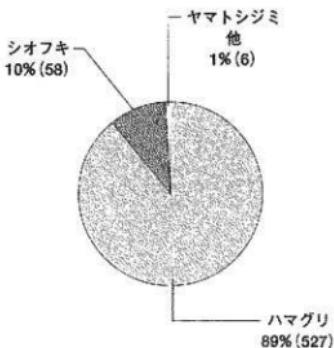
魚類について種の同定が可能な骨片等は検出されず、椎骨破片が1点と鱗が4点みられたのみであった。鳥類は検出されなかつた。また哺乳類に関しては、ネコの右尺骨が1点のみであった(表8)。

種	出土数
ハマグリ	左殻 502
	右殻 527
シオフキ	左殻 58
	右殻 37
ヤマトシジミ	左殻 4
	右殻 4
カガミガイ	左殻 1
アサリ	右殻 1
計	1134

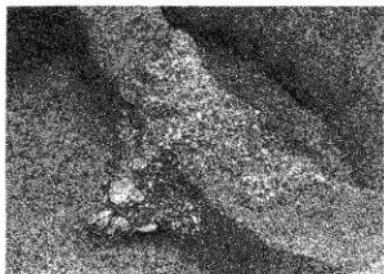
表7 貝類出土表

種	部位	出土数
同定不可魚類	椎骨破片	1
ネコ	尺骨右	4

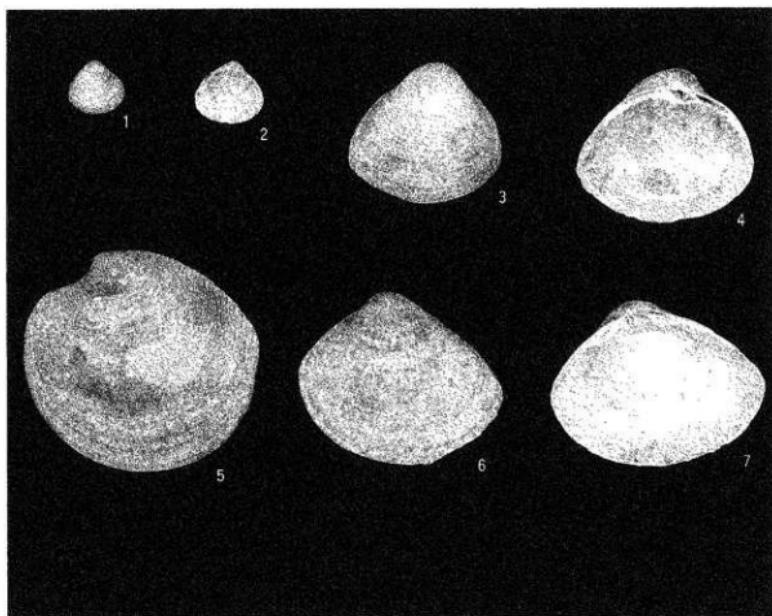
表8 魚類・哺乳類出土表



第91図 貝類組成グラフ

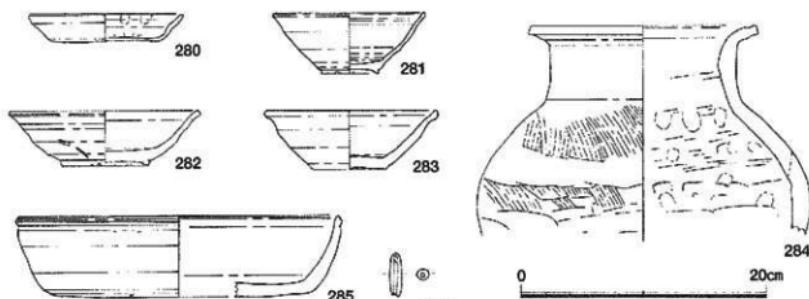


SX15貝層



貝類

1, 2 : ヤマトシジミ    3, 4 : シオフキ    5 : カガミガイ    6, 7 : ハマグリ



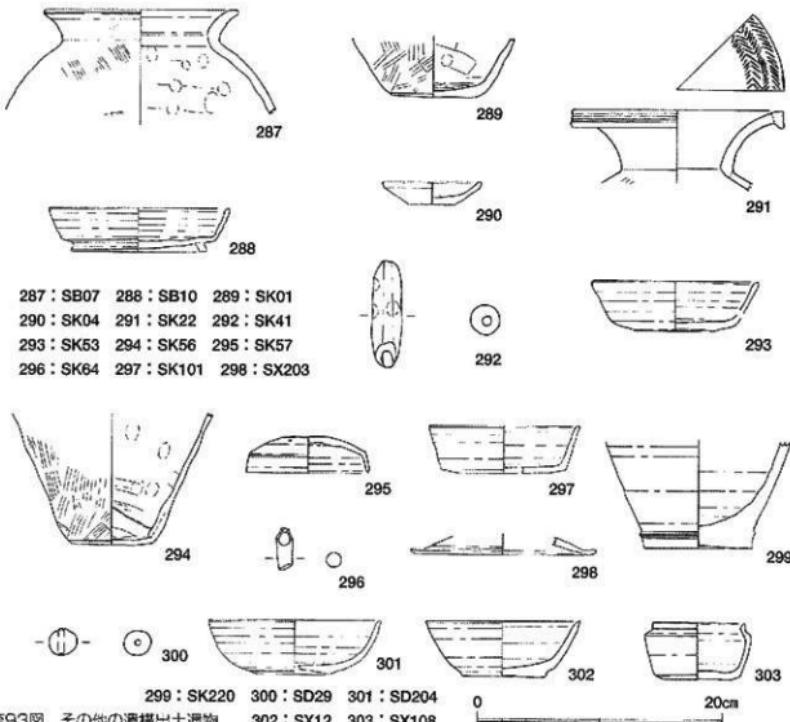
第92図 SX15出土遺物

### その他の遺構

時期ごとに遺構、遺物について記述したが、それ以外に時期が特定できない遺構が少なからずある。遺物の出土が少なかったり、遺構の切り合いが激しく、確実に遺構に属する遺物が特定できなかったということが理由である。また、出土遺物はあっても遺構のプランなどが不明なものも少なくない。ここではこうした遺構についてまとめて報告する。なお、すべてについて記述することはできないため、検出位置、埋土の特徴などについて一覧表（表9・10）にして示す。また、これらの遺構から出土した遺物の図も示した（第93図）。なお、298に示した須恵器は、古代の遺構として報告したSX203出土であるが、手違いにより、ここで図を示している。

### SB07（第56図）

板倉部やや東よりF4グリッド周辺で検出した堅穴住居である。中央を古墳2によって切られているが、東辺および北辺の一部を検出した。東辺はN-29°-Wという方向である。この住居の埋土である黒褐色土は、東壁付近では15cmほど残っていた。G4グリッドに見られる東西方向の周溝上の溝もこの住居の一部であろうと思われる。埋土中からは、古墳時代から古代のものと思われる土師器の堺287が出土しているが、



第93図 その他の遺構出土遺物

小片のためこの住居の時期を示しているとはいえない。

#### SB10（第58図）

I5グリッドのSB09の西側で検出した遺構は、南辺が直線的であったため当初住居と判断し、SB10とした。しかし、その他の辺やこの住居に伴う施設などはまったく不明であり、竪穴住居とする根拠には乏しい。埋土は暗褐色土である。切り合いで弥生時代終末期の竪穴住居SB09に切られていたと判断したが、この遺構からは須恵器の环288が出土している。

#### SB17（第58図）

校舎部中央I4グリッドで検出した竪穴住居である。壁の立ち上がりは全く残っておらず、方形に巡る細い溝を周溝と考え、住居と認めた。溝は幅10cm、深さは10cm程度である。北辺及び南辺は搅乱で失われているが、西辺は、N-27° -Wという方向である。また東西方向は4.6mほどある。この住居の内部のやや西よりの地点の地山上で焼土を検出しており、この住居の炉跡の可能性が高い。

住居範囲の中央に炉跡らしい焼土があることから古墳時代以前の住居であると思われるが、周溝からは遺物が出土しておらず時期を特定する材料はない。

#### SB102（第60図）

給食室部のP7・8グリッドで検出した竪穴住居である。南辺と東辺の一部を検出した。南東部は残りがよく、壁は0.3m程残っていた。西半は搅乱によって切られている。北辺は搅乱と他の遺構によってよくわからなくなかった。住居の中央付近にこの住居ものものと思われる小規模な焼土が見られる。出土遺物としては、弥生土器255と土錘256を図化した。255は壺の口縁部で、口縁端面下端にはキザミが施されている。256の土錘は法量の小さなもので、今回の調査では古代の遺構からの出土が目立つ。その他に上師器の壺の破片なども出土している。炉跡があることと図化した弥生土器を重視すれば弥生時代の住居の可能性が高いといえるだろうが、他の遺構との切り合が激しく、古代の遺物なども混入しているため、その他の時代の遺構として報告する。

#### 遺構出土遺物

第93図には、時期が決めがたい遺構やプランが不明な遺構から出土した遺物を示した。294は上師器の壺である。底部付近の破片であるが、底部最下位の内側に粘土を加えた様子が観察できる。295はSK57出土の須恵器壺蓋。法量が小さなものである。296はSK64から出土した製塙土器の脚部である。端部は欠損しているが、直径1cm程度の凹柱状をしている。297はSK101出土の須恵器壺身。298はSX203出土の須恵器であるが、あまり類例を知らない器形である。天地は不明である。299はSK220出土の擂鉢の底部である。底部外面は回転糸切りの痕跡が見られる。300はSD29出土の球形の土錘である。301、302は須恵器の壺。301はSD204出土、302はSX12出土である。302は底部が下方に突出している。303はSX108出土の短頸の壺である。

表9 39次調查彙編一覽(1)

表10 39次調查還構一覽（2）

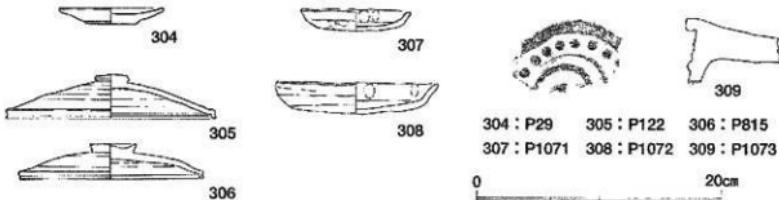
### その他の出土遺物

以上までに報告した以外にも多くの出土遺物がある。ここではピットから出土したものも含めて、その他の遺物について報告する。

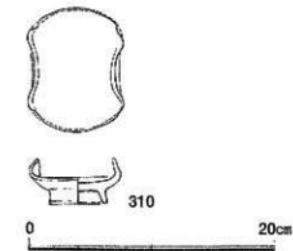
調査区北東部で検出したピットP29から、七輪皿が1点出土している。ロクロ成形によるもので突出する平底を持つ。SX15など調査区の南西部で出土する土師皿よりは古いものである〔佐藤1986〕。

給食室部の調査区では、ほぼ完形に近い土師皿を出土する、直径0.3mほどの小ピットが見られた(P1071、P1072)。何れも埋土の上位から出土している。また、同じ給食室部では、瓦の破片が数点出土している。軒円瓦309は巴文を持つものである。これらの給食室部のピット出土遺物は、SX15と共通であり、同時に存在した可能性が高い。また、本調査地点の西側の五本松町の地点でも同様な瓦の出土が見られるから、鎌倉時代には、本調査区から西に何らかの遺物があったものと思われる。

その他、重機による表土除去を行っていた際に縁船陶器の耳皿310が1点出土している。表土除去中の排水内にあったものため出土位置は特定できないが、貯水槽部からの出土の可能性が高い。ほぼ全体が残っており、17・8グリッドの焼土出土のものよりも径が小さく、高台は高い。色調も濃い緑色をしている。



第94図 ピット出土遺物



第95図 表探査物

## 5.まとめ

34次・39次調査では、弥生時代、古墳時代、古代（奈良時代～平安時代）についてそれぞれ大きな成果を得ることができた。時代ごとに若干のまとめを行っておきたい。

### 弥生時代

#### 弥生時代集落について

本調査では、弥生時代中期から後期の居住域を調査することができた。これまで縫穴住居が数棟見つかっていた程度で、居住の痕跡が乏しいとも言われていた高蔵遺跡においては、初めて弥生時代の居住域をまとまって調査したことになるといってよいだろう。ここでは、今回の調査での得られた成果を時期ごとに整理する。

34次調査では弥生時代中期の縫穴住居を検出した。遺構、遺物ともあまり残りが良くないが、台盤状土製品や壺、深鉢の底部を転用した台を作り焼土を2基検出したことからわかるように、中期後葉の頃（IV様式）の集落であると思われる。ただし何れもその他の出土遺物が乏しく、正確な時期を決めることもできない。34-SB06については台に転用された深鉢の形状からⅢ様式～Ⅳ様式の前半が想定できるにとどまる。また、34-P298は、台盤状土製品の形状から見てⅣ様式の住居に伴う炉であるが、そのすぐ北で検出した34-SD05とした遺構の上面からもⅣ期の土器が出土しており、これが関連があるとすればⅣ様式後半ということになろう。その他に中期の可能性が高い遺構としては39-SD31がある。後の遺構が重なっているために、遺構のプランや所属する遺物の特定も難しいが、Ⅳ様式後半の溝状遺構と見られる。つながりがよくわからないため、津の性格は決めがたいが方形周溝幕の可能性もある。

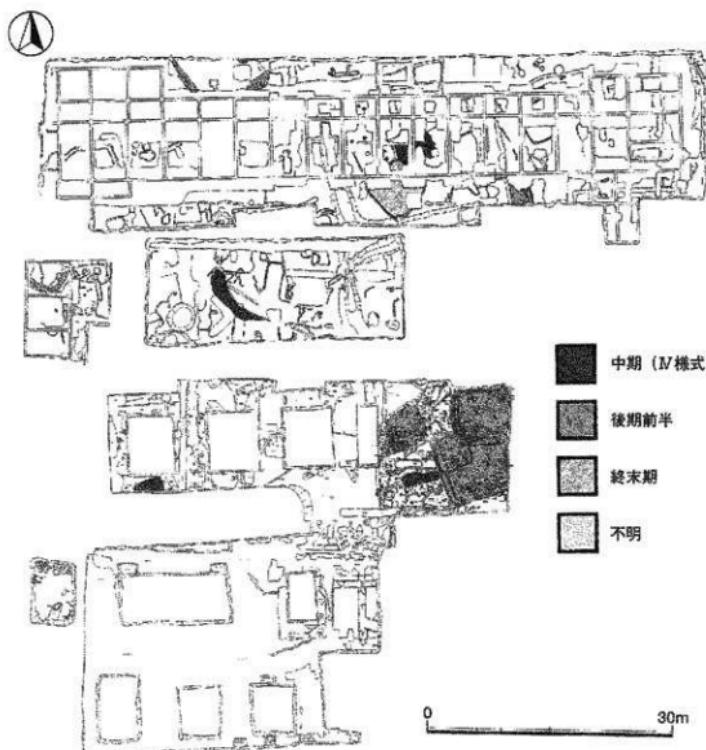
中期については確定なことは多くないため、同時期の遺構を取り出すこともできず、集落像を復元するのは困難である。しかし高蔵遺跡の中期集落は、環濠集落も含め遺跡範囲の中央から北よりにあったと考えていたため、居住域が常まれていたことを確認できただけでも大きな成果と言えるだろう。

また、弥生時代後期の縫穴住居群も検出した。後期も周溝幕ばかりが検出され、居住の痕跡が極めて少なかっただけに貴重な資料である。中には34-SB17のように一辺7mを越えるような大型のものもある。この住居の南東部にあたる部分には幾つかの土坑があり、その中の34-SK44から弥生時代後期初頭の上器とともに中国製の鹿龍文鏡の破片が出土したことも特筆される。残念ながら、この住居と土坑の前後関係などが把握できず、住居の範囲内から出土していくと、「住居から出土した」とは確定できない。34-SB17と34-SK44の出土遺物から判断すると、共に後期初頭にあたりそれほど遅い時期ではないが、この土坑のすぐ隣にある同じ頃の上坑34-SK46はやや規模が大きく、縫穴住居内の施設とは積極的には言い難い。この点も34-SK44を縫穴住居に関連した土坑と決めかねる理由である。

ここで検出された住居の時期を若干整理しておくと、34-SB17および34-SB20はVI様式でも前半に近い時期である。しかし、この2基は部分的に重なっており、同時に存在しない。切り合は不明であるが、上器の特徴だけから判断すると、赤彩が施されたものがほとんど見られない34-SB20の方が古いと思われる。34-SB15は、高坏の特徴などからこれにやや遅れた時期を想定する事ができる。34-SB17の埋土を切って塗かれた34-SB02もVI様式割であろうが、更に後出であると思われる。出土遺物の時期と位置関係からすると、同時期に併存したものはなく、4回にわたって通続的に築かれた縫穴住居群と見ることができる。

個別の竪穴住居を見ると、34-SB17や34-SB20は實際に複数条の周溝が巡っている。特に34-SB20では5条ほどの周溝が見られた。この周溝は同時期に巡っていたものなのか、住居が拡張された結果であるのか判断がつかない。住居の方向は、東西の辺の傾きで見ると34-SB20がほぼ南北方向を示すほかは、北から $20^{\circ}$ 前後西に傾いた方向を示している。

一方39次調査では後期前半の居住域の北端にあたるのではないかと思われる住居（39-SB06）を検出したほか、居住域の北西にあたる地点で方形周溝墓群を検出した。方形周溝墓と思われる溝は3基あるが、時期が確実に決められるのは39-SD201・202からなるもののみである。これはおそらく後期初頭に築かれたもので、34次調査で検出した竪穴住居と近い時期にあたると思われる。出土遺物が豊富とは言えず、かつ住居出土品の中には比較的多くみられた赤彩や文様を持つものがなく、墓の土器の方が草やかであるという先入観とは異なるが、居住域の維続期間に重なることは間違いない。その他の2基については小片しか出土遺物がなく、時期の比定が困難だが、39-SD101では後期前半の破片が目立ちこの頃のものと思われる。3基の方形周溝墓はやや距離をおいて並んでおり、接しているような状況ではない。辺の方向を見



第96図 弥生時代の遺構

てもややばらつきがあって、相互の関連を考えるのは難しい。

方形周溝墓は、今回の調査地点の北から西にかけてのかなり広い範囲に分布している。そのため今回検出した住居群と方形周溝墓群が直接対応するか否かはわからないが、後期の初め頃には居住域と墓域の境が今回の調査区内にあったことは間違いない。両者の間には、区画となるような遺構も含めてこの時期の遺構はほとんど見られないから、空隙地が两者を隔てていたものと思われる。そしてその墓域の側では、周溝墓の他に土器棺らしい大型の壺が出土したほか、2体の人骨を埋葬した方形の土坑も検出されている。土坑墓については時期を決めかねるが、報告で述べたとおり後期のものの可能性が高く、墓域の中に周溝を伴わない埋葬があったものと思われる。同時期に多様な埋葬方法があったことがうかがわれる。

今回の調査区内では後期後半の遺構はほとんど見られなかった。後期前半の住居が密集していたことを考えると、居住域として継続したとは考えにくく、一度途切れている可能性が高い。この時期は遺跡範囲中央で環濠集落が営まれる時期であることとも関連するかもしれない。ただし、古墳時代以降の遺構埋上や包含層から若干の遺物は出土している。

次にこの地点が居住域として用いられるのは弥生時代終末期（あるいは古墳時代初めというべきかもしれない）である。この時期の遺構は、後期前半の竪穴住居に重なって営まれたせいか、焼土や土器群といった遺構が中心であり、竪穴住居として認めたのは3基に過ぎない。そのため、居住域として利用されたことは間違いないが、その実態は不明として残ることになった。特に34次調査のSB03およびSB18については、一応プランを示しているが、土器や焼土の広がりを手がかりにしたもので明確にプランが検出できたわけではない。また34次調査で検出した焼土4、焼土6といった遺構は近接して出土する土器から見てこの時期のものであると思われるが、これを炉とするような住居については全く不明である。こうした状況のため、遺構の動向を具体的に示すのは難しいが、34-SB03と同SB18の位置関係や出土する遺物からみてすべての遺構が同時期というわけではなく、幾らかの時間軸をもっていると見られる。高蔵遺跡においてはこの時期の遺構としては方形周溝墓が五本松町などで検出されているが、居住に関連した遺構はほとんど不明であった。名古屋台地上のほかの遺跡と比べたときに、この時期の遺構が比較的多く見られる（後期の環濠が埋没後、集落が長く継続している）点が高蔵遺跡の特徴の一つであるだけに、その具体像が僅かでも明らかになった点が重要であると言えるだろう。

以上が弥生時代の遺構の動向であるが、後期前半と終末期の遺構が同じ地点でみられ、後期後半が欠けている状況は、五本松町の方形周溝墓群や1次調査で検出された方形周溝墓D3での土器の出土などと共に、高蔵遺跡全体の動向に関連している可能性が高い。

#### 出土遺物について

##### 土器・土製品

今回の調査では、竪穴住居などから多くの弥生土器片が出土している。各遺構からの出土土器についてはすでに報告したので、各資料相互の関係などについてまとめておきたい。

弥生時代後期初頭から前半の時期の資料としては、34次調査のSB20、SB17、SB15、SK44、39次調査のSD201・202の出土土器がまとまっている。最初にこれらの資料に含まれる壺について検討する。これらのなかには、胴部外面にタキ痕を残すものはない。34-SB20の中に外面をナデ調整したと見られるものが含まれているほかは、何れも外面はハケメ調整である。内面は何れも頸部直下までヘラケズリが施され、

口縁部には横方向のハケメが施されているものといないものがある。形状を見ると、頸部から口縁部へ水平に近く開く34-SB15の壺のほかはどちらかといえば口縁部は上方に立ち上がっている。口縁端部の形状では、ヨコナデによってシャープな凹面を持つものと、四角くは作っているがやや膨らんだ面をなすものがある。前者の34-SB20出土資料では刺突がなく、39-SD201のものはヘラによる刺突が施されている。一方、後者の中では刺突が施されない34-SB15のものと櫛による刺突が施された34-SB17の資料がある。これらの資料は、ちょうどIV様式のタキ痕が見られる凹線文系の壺からVI様式のハケメ調整で、口縁端部に横刺突を持つ壺が普遍的に見られるようになるまでの過渡期の資料に相当すると思われる。今回の資料は、今特徴を述べたように、かなり多様であり、どの属性を重視するかで順序も変わってくるものと思われる。私はこの時期の壺の変化の方向を示したことがあるが〔村木2001b〕、口縁部、台端部へのヨコナデの有無、口縁部にシャープな凹面を形成するか否かが変化の方向を示す材料であると考えている。また、外面調整の痕跡がタキのものとハケメのもの間に、ナデによって器面を整えるものがあることも述べた。これに従えば、口縁部に凹面を持ち、ナデ調整の34-SB20の壺、口縁部に凹面を持つが脚部ハケメ調整の39-SD201の壺、それ以外の口縁部の面がシャープではないもの、という順序を想定することになる。台部については、今回は口縁部と対応させられるものが無いが、同様にヨコナデの有無、端面の形状を指標とすることができ、34-SK44の壺はヨコナデはあるものの、較った外傾面を持っていないことで編年的位置を決める事ができる。ただし、これはあくまでも壺の変遷を模式的に理解するためのもので、遺構では異なる特徴のものが共存することは当然あるし、その他の属性の変化の方向と矛盾することもある。例えば、口縁部が水平に近く開く34-SB15の壺は端部の特徴で見ると後出であるが、形態的にはIV様式の壺により近い形態に見える。壺は出土量が多いが、それゆえに多様でもあり、これだけで順序を決めるのは難しい。その他の器種を見ておこう。ここでは、赤彩が施される器種に着目する。34-SB20では器台の破片と思われるものが出土している。34-SB17では、台と見られるものの他に、高坏の脚部が出土している。高坏は外反口縁のものではなく、いわゆるプランデー・グラス形のもの可能性が高く、沈線の間に赤彩されており、定型化した塗り分けは達成されていない。34-SB15では、外反口縁の高坏が出土し、脚部は赤彩の塗り分けが行われている。この遺構では、複数の高坏が出土しており、高坏が食器として用いられたことを示している。39-SD201・202からは、無頸壺はあるものの、赤彩が施された上器は出土していない。39-SD201・202を除くと、今述べた順序で推移したと見ることができるだろう。ちなみに34-SK44の高坏脚部は外反口縁のものではないと思われ、かつ全面赤彩であるから、34-SB17のものと近い時期が想定されることになる。この順序は、先に壺で検討した順序と大きく矛盾しない。とすると、上器群の順序としては、34-SB20→(39-SD201・202)→34-SB17→34-SB15という順であることがうかがえる。これは、V様式~VI-3様式までの土器の変化を示している。

終末期から古墳時代初期の土器を出土した遺構は、34-SB03、同SB18、同焼土4、6と39-SB09がある。これらはあまり共通した器種が見られるわけではないため時間的な前後関係を決めるのが難しい。すぐ北で行われた1次調査のD3上面ではこの時期の土器がまとまって出土しているから、それとの対照によってこの土器群の評価をしておく。もっとも土器のまとまっている34-SB03の土器は、パレススタイル壺、受口状口縁壺が1-D3上面の土器と共に通している。パレススタイル壺はほぼ同時期のものである。受口状口

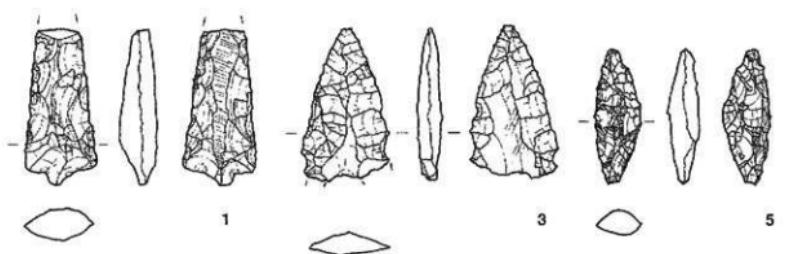
縦堀は形態は異なっているが、壺の中で高い割合を示すという組成は共通である。粗雑な印象を与える大型の壺も形状は少し異なるが、ともに含まれておれば同時期の土器群とみなしてよいと考える。但し、I-D3上面ではみられたS字堀はここではまったく出土していない。焼土6付近で出土した高坏もD3よりも後出ではないだろう。これに対して、39-SB09から出土した小型器台はI-D3上面の小型器台に比べると、脚部は明瞭に外反し、受部の形状もより新しい特徴を示している。また、焼土4から出土した土器群も、高坏の脚部が外反していたり、直線的であったりとI-D3上面の土器よりは新しい特徴を示している。出土状況や量といった資料の制約によって不確定な点も残ってはいるが、I-D3上面土器群との対比によって、前記資料群を時間的に細分できるのではないかと思われる。細分した内の古いものがⅢ-3様式からその後、新しいものがそれに後続する時期という事になろう。

39-SX106から出土した壺の破片にはシカと思われる動物が線刻されていた。高蔵遺跡では絵画土器は初めての出土である。脚部を直線的に描く表現はあまり類例を知らないが、頭部をV字形に描くのは、近畿地方の出土例に共通する。愛知県内では、朝日遺跡に数点の絵画土器が存在している「宮腰編1994」程度である。こうした土器に絵を描く行為、表現方法などは、近畿地方の集団との交流を通じて身に付けたものと思われ、高蔵遺跡の集団が広い交流範囲を築いていた傍証のひとつとなろう。

その他、焼上に伴って、台として用いられた土器・土製品3点が出土している。34-SB06から出土した20は条痕調整の深鉢を転用したもの、34-P298出土の54は壺の底部を転用したものである。一方、34-P298のもう一方は台盤状土製品で、森氏の分類「森1998」に従えばC類である。何れも共伴遺物がないため時期は決めがたいが、調査範囲内では中期の上器としては凹線文系土器が目立っているから、IV様式ではないかと考えている。20は、土器の色調が明褐色のため、赤変は確認しがたいが、器向の荒れた様子から底部（台としては上面）と脚部外面（側面）がよく熱を受けていると思われる。脚部外面はわずかに黒くなっている。54は底部（台の上面）が明瞭に赤変し、脚部下端（台としては側面の上端）に円形に煤が付着している。台盤状土製品53は、54と並んでいたが、53ほど被熱の痕跡が顕著ではない。脚部の内外面が赤変しており、被熱の痕跡と見られるが、上面およびその周辺には顕著な痕跡が確認できない。台盤状土製品と転用品があり、転用品のほうが使用痕が顕著である点は興味深い。残念ながら何れも共伴した土器ではなく、台の上で用いられたであろう壺の形態との関わりは不明である。

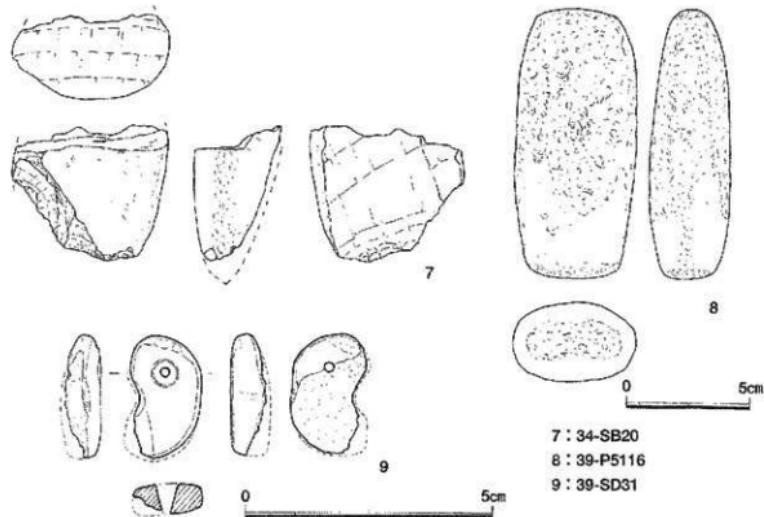
#### 石器・石製品（第97回）

34次・39次それぞれにおいて数点の石器が出土している。ここではそれについてまとめて報告する。1～5は石鐵。1は34次調査溝E1グリッドの包含層掘削中に検出した。先端部を欠損している。サヌカイト製である。2は、39-SK23から出土している。3は34-SB21から出土している。この住居は出土土器が多く時期は不明である。4は、39-SD28から出土している。先端部がわずかに欠損しているが、ほぼ全体が残っており全長2.3cm程度である。下呂石製である。遺構はプランのはっきりしない溝状の遺構で、上層質土器の小片が出土している。5は39-SK31出土である。チャート製で、長さは2.7cmほどである。遺構は時期、性格とも不明である。6は黒曜石の剥片である。7、8は磨製石斧であるが、8は敷石に転用されているものと思われる。7は弥生時代後期初頭の住居34-SB20出土である。刃部付近の破片である。8は39-P5116出土。9はヒスイ製の勾玉である。片面は破損している。遺構は弥生中期と思われる溝である。



1:34次E4包含層 2:39-SK23 3:34-SB21  
4:39-SD28 5:34-SB12

0 5cm



7:34-SB20  
8:39-P5116  
9:39-SD31

## 鏡

### 魅龍文鏡（四乳四虺文鏡）

魅龍文鏡の破鏡である。復元直径は約10.8cm、厚さは縁で約0.5cm、内区で約0.3cm、重さ（保存処理後）は64.5gである。全形の約1/4程度の破鏡である。全体に前漢鏡のもつ重厚な質感と重みをかなりよく残し、稜線なども比較的明瞭である。磨耗があまり顕著でなく、使用の期間や頻度が長期・高頻度にのほるものでないことをうかがわせる。破面は研磨して整えている。穿孔はない。表裏ともに赤色顔料が付着しており、とくに鏡背面に顕著にみとめられる。縁は素文の平縁で、文様帯は外から、獅齒文・逆S字魅龍文・獅齒文という構成で、鉢座・鉢にいたる。鉢座は輻射文a（岡村1984）である。円座乳の両側に線彫りの逆S字魅龍文を配し、魅龍文の内外に鳥文がある。鳥文は、隅丸三角形にちかい簡略な表現である。獅齒文は鏡中心にたいして放射状でなく、斜行する。獅齒文の斜行する向きが反時計回り方向である魅龍文鏡が圧倒的に多いなかで、高蔵遺跡鏡は時計回り方向に斜行する点でやや特異である。

高蔵遺跡鏡は、弥生後期前葉・永井・村木編年（加納・石黒編2002）でいう尾張VI-2様式の高坏（註1）と共に作成した。一般に魅龍文鏡の制作時期は、上限は前漢武帝の太始三（前94）年に比定される北京大葆台1号墓鏡までさかのほるという（程・韓2002）が、前漢末（前1世紀後葉）～王莽期（1世紀初頭）と考えられている（前掲岡村文献）。高蔵遺跡鏡は、その使用痕跡の希薄さを考慮すれば、制作後、日本列島へもたらされてから高蔵遺跡に埋没するまで、おおきな間をおかなかったと考えてよかろう。

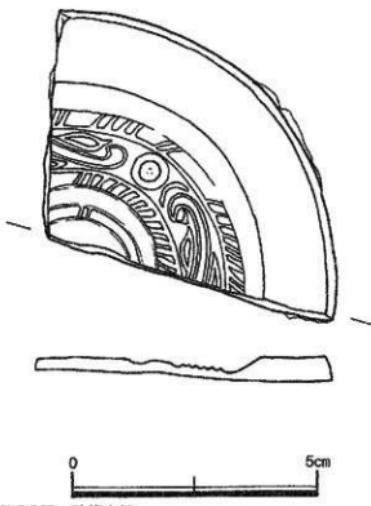
おなじ愛知県の清洲町朝日遺跡、また和歌山県滝ヶ峯遺跡、石川県吉崎次場遺跡の魅龍文鏡破鏡などとともに、近畿以東で中国鏡出土例が稀少な時期の例であり、日本列島東方への中国鏡流入の時期や経路を示唆する資料である。

註1 本報告では、赤坂次郎編年（赤坂2001）山中I式1

段階相当と考えている。赤坂は、この高坏を八王子古宮II式～山中I式初期とし、本報告よりもやや古めに位置づけている（赤坂2002）。

### 参考文献

- 赤坂次郎 2000 「朝日遺跡出土のキ龍文鏡」「まいぶん愛知」No.62、愛知県埋蔵文化財センター  
赤坂次郎 2001 「瀬戸平野における弥生時代後期の土器編年」「八王子遺跡」考察編、愛知県埋蔵文化財センター  
赤坂次郎 2002 「東洋の青銅器覚書」「考古学フォーラム」15、考古学フォーラム  
岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」「史林」第67巻第5号、史学研究会  
加納俊介・石黒立人編 2002 「弥生土器の様式と編年」東海編、木耳社  
程林泉・韓國河 2002 「長安漢鏡」、陝西人民出版社



第98図 魅龍文鏡

## 古墳時代

古墳時代の遺構としては、39次調査で検出した3基の古墳が挙げられる。39次調査区の中央で検出した古墳2は、ほぼ全体をうかがうことができる。周濠の最深部を基準とすると、一辺約18mの方墳である。その他の2基は部分的に検出したのみで全形はわからない。後述するように、この2基については不確実な点も残っているが、3基とも北からわずかに西に傾いた方向を示している。

古墳2は校舎の基礎などに搅乱されてはいるがほぼ全体を調査した。周濠は北辺がきわめて浅く（底の水準が高く）なっていた。あくまで地山面を基準にした上でのことであり、掘り込まれた面からの深さではないので、築造時に北辺が浅かったとは限らない。

古墳3は、L字形の周濠らしい溝を検出したが、途中で極めて浅くなるほか、西辺では古代の溝と重なっているらしく、プランもはつきりしない。遺物の点でも北辺では埴輪の出土があるものの、西辺ではまったくなく、一連の溝であるかどうか確実とはいえない。更に、ちょうど校舎部と貯水槽部の間で古墳2と3は周濠の一帯が重なるような位置関係となる。こうした点から、古墳3については古墳として報告したもの、不確実な点が多いことは認めねばならない。

古墳1は、辺の一部を検出したのみで、大半が調査区外となっている。39-SD02とした大規模な溝は、検出した南端部分はかなり浅くなってしまっており、地山面では一度途切れている。そのため、この溝がどちらに続いているのかはわからないが、調査区の側にはないから、調査区外の東側に続いているものと判断している。江戸時代に描かれた尾張忠付図「熱田」には、現在の高蔵遺跡の範囲内にいくつかの古墳が描かれており、そのうちのいくつかは墳丘の残る古墳であることが指摘されている〔竹内1990〕。今回の調査区の東側にも「上人塚」と記された古塚が描かれている。位置的にはこの古墳1にかなり近いものと思われ、今回検出した古墳が「上人塚」にあたる可能性もある。

ところで、この39-SD02に切られる溝39-SD02'からも埴輪片が出土している。この溝はわずかに検出しただけで、どのように続いていくのか不明であるが、2基の古墳の周濠が重なっているのであろうか。切り合いで持つSD01との関連も確実とは言えず、古墳1についても不明な点を残すこととなった。

以上の3基の古墳からは多数の埴輪片が出土している。いずれの古墳から出土した埴輪も原位置を保っているものではなく、細片化していた。しかし、古墳1および2については、出土量から見て、溝が埋まる過程で周辺から混入したというものではなく、本来その古墳に属するものであった可能性が高い。出土した埴輪はほぼ円筒埴輪と朝顔形埴輪に限られ、形象埴輪と思われるものは古墳1・2のそれぞれ一片に過ぎない。円筒埴輪、朝顔形埴輪は、いずれの古墳から出土するものも回転によるヨコハケメ、底部のわずかな段と底部側面の工具のズレの痕跡などの特徴を持つ、「尾張型埴輪」である。今回出土したものには、内外面に赤彩を施したもののが目立っている。古墳の周濠からは古代の遺物が多く出土しており、古代には埋まりつつあったことが知られる。

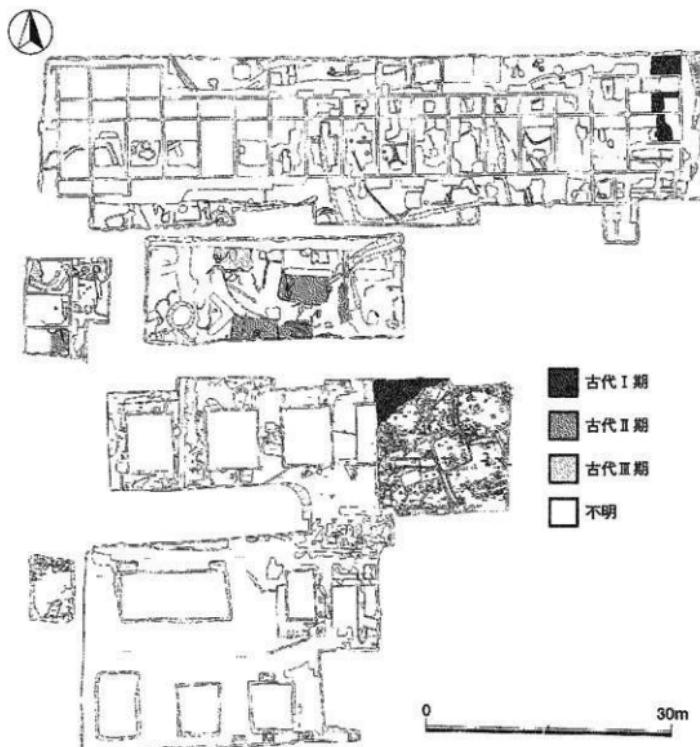
その他の古墳時代の遺構は39次調査区の西よりで須恵器を出土する土坑、ピットがあるに過ぎない。これらの遺構の性格は不明であるが、古墳の存在する調査区中央から東部とは異なった利用がなされていたことがうかがえる。

## 古代

古代については、数多くの竪穴住居を検出したほか、大規模な落ち込み、溝状の遺構を検出した。竪穴住居については、掘削しなかったが古代の可能性が高いものを含めて検出した。古代の遺構、遺物を時期別にみると、34-SX01や39-SD01等の遺構や、古墳の周濠から出土した遺物が属する7世紀のもの、39次調査で数多く検出された竪穴住居など8世紀のもの、更に39次調査で検出した竪穴住居の一部や、包含層として扱った暗褐色土中に存在した焼土など、灰釉陶器や綠釉陶器が出土する9世紀のものと。ここでは今3区分した時期をそれぞれ古代Ⅰ期～Ⅲ期としておく。

### 古代Ⅰ期

この時期のものは、遺構としては34-SX01、39-SD01があるほか、39次調査で検出した古墳の周濠中からもかなりまとまった量の須恵器が出土している。34-SX01は、39次調査のSX10、SD32などと共に古墳3の周濠になる可能性もあるが、これをつなぐ方形とはいひ難い形状となるため、ここでは別の遺構として扱っておこう。この時期には、古墳の周濠から出土する遺物が示すように、周濠は埋まりつつあるが完全に



第99図 古代の遺構

は埋まりきっておらず、まだ古墳が意識されていたものと思われる。すると34-SX01、39-SD01等の大規模な遺構は、それと接するような位置に掘削されたということになる。古墳の周濠から出土する遺物も、これらの遺構出土遺物と同じ時期であり、移動式竈片を比較的多く含むなど内容も類似している。周濠から出土する遺物は、その性格を推測する材料はないものの、遺存度の高い須恵器などもあり、古代Ⅰ期の遺構とともに、古墳を意識して行った何らかの行為の痕跡であると考える余地も残されていよう。

こうした遺構から出土した中に、移動式竈や羽釜などこれまで名古屋台地の遺跡ではあまり類例に恵まれなかった遺物がある。これらは何れも雲母を多く含む特徴的な胎土である。

#### 古代Ⅱ期

8世紀台の堅穴住居は多く見つかっている。この時期に分類した中でも切り合いを持ち、次のⅢ期のものへも連続的につながっているようだから、Ⅱ期とⅢ期の区分は便宜的なものに過ぎない。

この時期のもので埋土を掘削したのは39次の貯水槽部、給食室部のものにはば限られるが、34次調査で検出した遺構の中にはこの時期に入るものもあると思われる。これらの遺構は、暗褐色土中に掘り込まれているため、プランが確定できなかつたものも少なくない。確実なものだけをみると、ほぼ南北方向を示すもののかにわざかに東に傾いた方向を示す住居がある。住居に付属する施設としては、39-SB13や39-SB103などで作り付けの竈らしい遺構がみられた。39-SB103は住居の東壁沿い竈が作りつけられている。この竈は、地山土を掘り残して袖としており、不明瞭ではあるものの竈の形状を想定することができる。これに対し、39-SB13では住居の北辺に近い位置で、焼土内に土師器壺が埋められたような状況であった。住居の床面である埴山面まで焼けており、この住居の火処であると思われるが、明瞭な竈の形状をとどめていなかった。

その他この時期の遺構としては、古墳3と重なっている39-SD27がある。この遺構は渋としているが、プランはあまりはっきりしない。上記した堅穴住居には同時期のものもあるが、遺構の性格については不明である。

#### 古代Ⅲ期

この時期の遺構としては、39-SB15、39-SB104といった堅穴住居と39-SX201とした堅穴住居の貼床上の遺構、17・8グリッドの暗褐色土上で検出した焼土がある。確実な堅穴住居は2基のみであるが、39-SX201とした遺構も住居の一部の可能性が高く、Ⅱ期と同じ程度の遺構が見られる。Ⅱ期の住居が集中している地点とは若干地点が異なっている。

この時期の堅穴住居には何れも東壁に竈が造り付けられていた。何れも辺の中央よりは南に偏り、むしろコーナーに近いような位置であることも共通している。しかし、検出された竈の状況はかなり異なっている。SB15では、竈の袖や底部がきわめてよく焼け締まっており、竈の形状を明瞭にとどめていた。この竈の中央には土師器の壺が埋められていた。この壺は周囲の竈を築いた粘土とともによく焼けており、竈内に埋め込まっているような状況である。一方、SB104のほうでは、袖と思われる高まりは残っていたが、あまり焼け締まってはいなかった。また、竈の内部では土師器の壺2点、須恵器壺が何れも底部を上にして出土した。これらの壺は火を受けた痕跡はあるものの、置かれたような状況であった。Ⅱ期にも、土師器壺が焼土中に埋まったような火処と袖を残した一般的な竈が見られたが、その二者は3期にも見られるわけである。前者（39-SB13、39-SB15）および後者（39-SB103、39-SB104）はそれぞれ近い位置にあ

るから、それぞれが連續性を示しているとみることができるかもしれない。後述するように、更に異なる形態の火焔もあり、そうしたものも含めてその多様さの背景を考える必要があろう。

この時期に属する遺物としては、綠釉陶器の耳皿が2点出土している。279は猿投窓のものと見られるが、310は生産地が不明である。[伊藤2000]によれば、現在でも熱田神宮の祭祀などにおいて耳皿が用いられているという。本調査区のすぐ北に所在する高藏結御子神社は、熱田神宮の摂社であり、『続日本後紀』承和二年（852年）の記事にその名が見えている。今回出土した耳皿がどのように用いられたかについては更なる検討が必要であるが、現在の例から推定することが許されるならば、今回の調査区で検出した古代の集落がこの神社と関わりのある集落であるという可能性も見えてくるだろう。

#### その他の古代の遺構

ここでは上記の三時期に分類することができなかった遺構についてまとめておく。時期を特定することはできなかつたが、須恵器を出土することから古代に属すると思われる竪穴住居が数棟ある。34次調査で掘削しなかつたものと39次調査のSB03、SB05などである。これらの竪穴住居の分布から、古代の集落が今回の調査区の中央から北よりの広い範囲に広がっていたことが知られる。

その他、39-SX203にみられた土師器の壺を伏せた遺構があるが、こうした遺構は高藏遺跡においても1次調査で検出されている。1次調査では2基のこうした遺構が検出されているが、何れも竪穴住居の内部ではない。今回も39-SX203とした遺構の内部にはあるものの、この遺構を掘り込んで築いたものの可能性が高い。この遺構は焼土を伴い、壺や石も火を受けているが、住居の内部ではなく、外部に築かれることもあったものと思われる。

以上まで古代の遺構・遺物についてまとめを行った。本地点では、古墳の存在を前提としたらしい7世紀の遺構に統いて、8世紀以降は竪穴住居からなる集落が営まれる。この集落は本調査区北の夜寒地区や1次調査地点の集落と一連のものであると思われ、現在の高藏結御子神社付近に大規模な古代集落が営まれていたことが明らかとなった。古墳から古代の集落へという土地利用の変遷を跡付ける手がかりが得られたこととあわせて大きな成果を得たといえるだろう。

## 参考文献

<高蔵遺跡の調査報告書>

- 難屋徳三郎 1908 「尾張熱田高倉貝塚實查」『東京人類学会誌』第23卷266号
- 鏡田徳三郎 1908 「尾張熱田高倉貝塚實查」『考古界』第7篇第2号
- 清野謙次 1925 「尾張國名古屋市熱田貝塚」「日本原人の研究」同書院
- 渡田正一 1955 「愛知県名古屋市高蔵貝塚」「年報26年度」
- 清野謙次 1969 「名古屋市熱田高蔵神社北方貝塚」「日本貝塚の研究」
- 熊田敦子 1979 「高蔵貝塚I—1953年D地点第1次発掘調査」『南山大学人類学博物館名古屋市教育委員会 1982 「高蔵遺跡発掘調査概要報告書」
- 杉浦仁美編 1982 「高蔵貝塚—春日井地区発掘調査報告書」『高蔵遺跡調査会
- 名古屋市教育委員会 1983 「高蔵遺跡発掘調査概要報告書」「埋蔵文化財発掘調査概要報告書」
- 水口富夫 1985 「高蔵貝塚II—1956年D地点第2次発掘調査I」『南山大学人類学博物館
- 荒木実也 1986 「高蔵遺跡五本松町発掘調査概要報告書」五大卒業株式会社
- 荒木実也 1987 「高蔵遺跡五本松町第2、3次発掘調査概要報告書」国際興建開発コンサルタント株式会社
- 重松和男他編 1987 「熱田区夜栄町・高蔵遺跡発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 夜栄町遺跡調査会 1988 「高蔵（夜栄町102番地）遺跡調査報告」
- 水野裕之 1988 「高蔵遺跡第3次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 荒木実也 1989 「高蔵遺跡 池上二丁目501発掘調査報告書」川島商事株式会社
- 竹内良智 1990 「高蔵遺跡—第4次調査の概要」名古屋市教育委員会
- 荒木実也 1991 「高蔵遺跡五本松町11番4、5、6、7次発掘調査報告書」株式会社コニオ
- 野口泰子 1994 「高蔵遺跡 第5次調査の概要」名古屋市教育委員会
- 中嶋理恵・尾野哲裕 1994 「高蔵遺跡（花町地区）発掘調査報告書」「高蔵遺跡（花町地区）調査会
- 野口泰子・伊藤厚史 1995 「高蔵遺跡 第6次調査の概要」名古屋市教育委員会
- 加藤真琴編 1995 「高蔵遺跡（第7次）発掘調査報告」「石神遺跡 玉ノ井遺跡 高蔵遺跡（第7次）発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 平出紀男・伊藤厚史 1996 「高蔵遺跡（第8次・第9次）」「埋蔵文化財調査報告書25」名古屋市文化財調査報告32 名古屋市教育委員会
- 野口泰子 1996 「高蔵遺跡 第10次調査の概要」名古屋市教育委員会
- 服部哲也 1996 「高蔵遺跡—第11次発掘調査の概要」名古屋市教育委員会
- 川原和美編 1997 「埋蔵文化財調査報告書26」名古屋市文化財調査報告34 名古屋市教育委員会
- 野澤則幸 1998 「高蔵遺跡第17次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 山田敏一 1998 「高蔵遺跡第18次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 山田敏一・野口泰子 1998a 「高蔵遺跡第19次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 服部哲也 1999 「高蔵遺跡第20次発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
- 山田敏一・野口泰子 1999b 「高蔵遺跡第21次発掘調査報告書」「東邦ガス工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」東古派町道跡第6次発掘調査報告書「高蔵遺跡第21次発掘調査報告書」東邦ガス株式会社
- 杉山仁 2000 「高蔵遺跡（五本松町1202番地）発掘調査報告書」アイシン開発株式会社 アイシン精機株式会社
- 伊藤厚史編 2000 「埋蔵文化財調査報告書33」名古屋市文化財調査報告45
- 伊藤厚史・村木誠 「高蔵遺跡（第24次・第25次）」「埋蔵文化財調査報告書34」名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教育委員会
- 森威史 2001 「高蔵遺跡」株式会社静岡人類研究所

- 瀬織茂編 2001 「高藏道跡第26次～30次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書37』 名古屋市文化財調査報告50 名古屋市教育委員会
- 伊藤厚史編 『埋蔵文化財調査報告書42 高藏道跡（第31次・32次・33次・立会 鳴海城跡（立会）』 名古屋市文化財調査報告55 名古屋市教育委員会
- 村木誠編 2003 『埋蔵文化財調査報告書45 高藏道跡（第1次）』 名古屋市文化財調査報告59 名古屋市教育委員会
- 森井康隆編 2003 『埋蔵文化財調査報告書47 高藏道跡（第35～38次・第40次・第41次）』 名古屋市文化財調査報告61 名古屋市教育委員会

#### その他の引用・参考文献

- 赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤正人 2001 「愛知県の耳皿」「三河考古」第14号 三河考古刊行会
- 伊藤正人・川合剛 1993 「特別展「名古屋の绳文時代」資料集」 名古屋市見晴台考古資料館
- 尾野善裕 2000 「猿投窓（系）須恵器縦年の再構築」「須恵器生産の出現から消滅」第1分冊 東海土器研究会
- 尾野善裕他 2000 「猿投窓」「須恵器生産の出現から消滅」第2分冊 東海土器研究会
- 加藤安信 1998 「伊勢湾地区の叩き甕」「横崎彰一先生古希記念論文集」 横崎彰一先生古希記念論文集刊行会編 真庵社
- 木村育作 1995 「あゆ湯の考古学」名古屋市博物館
- 瀬織茂 2003 「埋蔵文化財調査報告書44 玉ノ井遺跡（第3・4次）」 名古屋市文化財調査報告58 名古屋市教育委員会
- 瀬藤孝正 1989 「灰釉陶器の研究Ⅱ—猿投窓第V期碗・皿類の式型編年」『名古屋大学文学部研究論集』104 史学35 名古屋大学文学部
- 佐藤公保 1986 「中臣土器研究ノート（1）」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 水井宏幸・村木誠 2002 「尾張地域」「弥生土器の様式と編年」東洋編 木耳社
- 永原義二編 1995 「奈良燈と中世社会」 小学館
- 猪上昇 2001 「八王子道跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 財団法人愛知県教育委員会・ビスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 藤井康隆 2002 「古墳時代中期における尾張の首長墳と小古墳」「古墳時代中期の大型墳と小古墳—初羽舞集墳の出現とその背景—」発表要旨編 東海考古学フォーラム・静岡県考古学会
- 藤沢良祐 1995 「瀬戸古窯址Ⅲ 古瀬戸前期様式の編年」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3号 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 前川要 1984 「猿投窓における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 水野裕之 2001 「玉ノ井遺跡第2次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書37』 名古屋市文化財調査報告50 名古屋市教育委員会
- 宮澤健司編 1994 「朝日遺跡V」 愛知県埋蔵文化財センター明字報告書第34集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 村木誠 1998 「よみがえる唐津瓦落」 名古屋市見晴台考古資料館
- 村木誠 2001a 「「仮称見晴台式」を考える（1）」「名古屋市見晴台考古資料館研究紀要」第3号 名古屋市見晴台考古資料館
- 村木誠 2001b 「「仮称見晴台式」を考える（2）—三河との関連も含めて」「三河考古」第14号 三河考古刊行会
- 森泰道 1998 「台付甕の出現Ⅰ」「横崎彰一先生古希記念論文集」 横崎彰一先生古希記念論文集刊行会

## 付論1 愛知県高蔵遺跡から出土した銅鏡片の自然科学的研究

東京文化財研究所保存科学部

平尾良光 鈴木清子

### 1 はじめに

名古屋市見晴台考古資料館より、愛知県名古屋市高蔵遺跡から出土した銅鏡片に関して自然科学的な方法による調査の依頼があった。そこで蛍光X線分析法により化学組成を、鉛同位体比法により遺物の材料となった鉛の産地推定を行った。

### 2 資 料

資料は愛知県名古屋市高蔵遺跡の第34次発掘調査で出土した銅鏡片で、紋様から蛇龍文鏡と考えられている。弥生時代後期の居住域内から、弥生時代後期前半頃の土器と一緒に出土したということである。資料の写真を写真1に示した。矢印部分から、依頼者の了解を得て金属粉末を微量採取した。それらを蛍光X線分析および鉛同位体比に試料として用いた。

### 3 分析法

#### 3-1 蛍光X線分析法

##### 1) 装置および測定方法

測定に使用した装置はセイコーワンツルメンツ(株)製エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置SEA5230Eである。この装置は直徑0.2mmの一次X線ビームを資料に入射することができるため、微小領域の化学組成の測定に有効である。今回の測定で採用した測定条件は次の通りである。

X線管球 : モリブデン(Mo)

管電圧・管電流 : 45kV・28μA

コリメータ : φ1.8mm

測定時間 : 200秒

測定雰囲気 : 大気中

すべての測定において、元素濃度の算出は得られた蛍光X線スペクトル強度を理論的に解析するファンダメンタル・パラメータ法を用いた<sup>1,2)</sup>。

##### 2) 結果

測定した資料の蛍光X線スペクトルを図1に、そこから得られた化学組成を表1に示した。測定の結果、銅鏡片は銅85%、スズ11%、鉛3.4%、その他にヒ素・鉄・銀を微量に含んでいた。

#### 3-2 鉛同位体比法

##### 1) 鉛同位体比法による青銅材料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した<sup>3,4)</sup>。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が進えばそれぞれの鉛山毎に異なる値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の

同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錫部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは錫を微量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用した。今回は依頼者の了解を得られたので、微量（1mg以下）の金属を採取し、それを鉛同位体比測定用の試料とした。鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した<sup>23)</sup>。

## 2) 鉛同位体比の測定

資料から微量（1mg以下）の金属を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2マイクログラムの鉛をリン酸シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自动表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200°Cに設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

## 3) 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表2で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した（図2）。

横軸が<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb、縦軸が<sup>208</sup>Pb/<sup>206</sup>Pbの値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表し、今回の結果をこのなかにプロットした<sup>24~26)</sup>。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛と推定される。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域で、日本産鉛の範囲とした。Dは朝鮮半島産とされる多鋏細文鏡が分布する領域の中央線として示される。またaは弥生時代後期の銅鏡が集中した領域である。

横軸が<sup>208</sup>Pb/<sup>206</sup>Pbの値、縦軸が<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pbの値とした図をB式図と呼ぶこととする。この図の中でA'、B'、C'、D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

## 4) 考察と考察

高藏遺跡から出土した銅鏡片は、図2のA式図においてA領域に位置した。B式図においても同様である。このことから、この銅鏡は華北産の材料を用いていると考えられる。

これまでに、魅龍文鏡の鉛同位体比は8点測定されている<sup>27,28)</sup>。これらの鉛同位体比を本資料と比較するため、鉛同位体比値を表2に示し、図3にプロットした。図3によると大部分がA領域に位置し、伝中國出土鏡がA領域より下方に、宮山古墳出土鏡がB領域に位置した。

A領域は前漢鏡などが位置する領域であり、魅龍文鏡が前漢時代末から後漢時代初期に華北を中心に製作された鏡だとすると、本資料はそれらの鏡と同じ材料が使われていたと考えられる。また、出土した遺跡の時代別に見ると（伝中國鏡を除く）、弥生時代後期から古墳時代前期の遣唐から出土した鏡はA領域

に、古墳時代中期の造幣から出土している鏡はB領域に位置した。これまでに弥生時代の青銅器はA領域材料を、古墳時代の青銅器はB領域材料を使用していることが多い。この結果からは、古墳時代前期と中期との間に材料がA領域からB領域に移ったように見えるが、出土している鹿籠文鏡をすべて測定しているわけでもなく、また鏡は伝世する事も考えられるので、材料生産地の推移、鏡の製作地などに関する推論は控えたい。

#### 4 引用文献

- (1) 早川泰弘、平尾良光：各種の蛍光X線分析装置による文化財資料の分析；保存科学 37, 137-145 (1998)
- (2) 平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定；考古学と自然科学4 考古学と年代測定学・地球科学. 松浦秀治・上杉陽・栗原哲男編, 314-349, 同成社 (1999)
- (3) 平尾良光馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について；保存科学 28, 17-24 (1989)
- (4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370, 4-10 (1982)
- (5) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鏡の原料；考古学雑誌68, 42-62 (1982)
- (6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；MUSEUM No.382, 16-26 (1983)
- (7) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比－青銅器との関連を中心に－；考古学雑誌 73-2, 71-82 (1987)
- (8) 平尾良光編：古代青銅の流通と鋳造；鶴山堂 (1999)
- (9) 平尾良光鈴木浩子：福岡県北九州市近郊から出土した弥生～古墳時代の銅鏡の鉛同位体比；北九州市立考古博物館研究紀要2, 1-5 (1995)
- (10) 平尾良光、鈴木浩子：き龍文鏡および福岡県北九州市近郊から出土した弥生～古墳時代の青銅製造物の鉛同位体比；北九州市立考古博物館研究紀要3, 1-9 (1996)

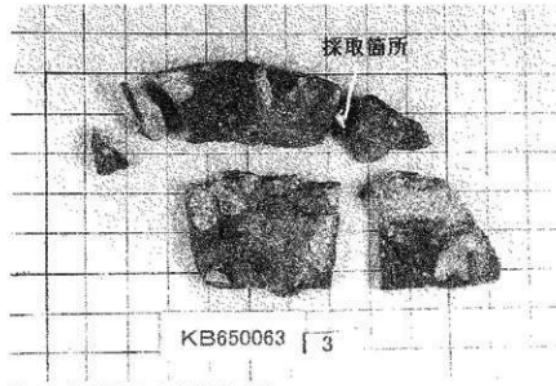
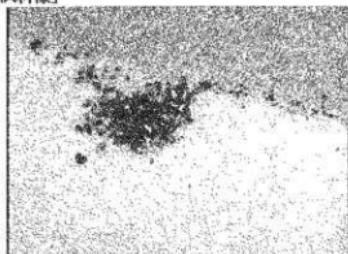


写真1 資料写真および試料採取箇所

## [測定条件]

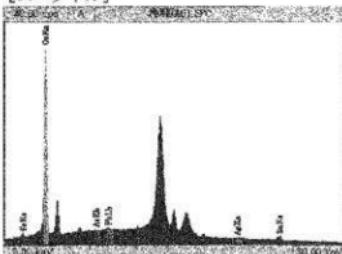
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	200
有効時間 (秒)	142
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 ( $\mu$ A)	28
コメント	き龍文鏡 名古屋市見晴台 考古資料館 020607

## [試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

## [スペクトル]



## [結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	395.869	7.86- 8.22
50	Sn	スズ	K $\alpha$	29.670	24.92-25.47
82	Pb	鉛	L $\beta$	60.034	12.42-12.84
33	As	ヒ素	K $\beta$	50.972	11.52-11.93
26	Fe	鉄	K $\alpha$	28.288	6.23- 6.57
47	Ag	銀	K $\alpha$	27.407	21.84-22.36

図1 高蔵遺跡から出土した銅鏡片の蛍光X線スペクトル図

表1 名古屋市高蔵遺跡から出土した銅鏡片の化学組成

資料名	含有率 (wt%)					
	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	ヒ素(As)	銀(Ag)	鉄(Fe)
銅鏡片 (き龍文鏡)	85	11	3.4	0.5	0.1	1.0

表2 高蔵遺跡と他の遺跡から出土した馬鹿文鏡の鉛同位体比

資料名	出土地	時代	$^{20}\text{Pb}/^{22}\text{Pb}$	$^{20}\text{Pb}/^{23}\text{Pb}$	$^{20}\text{Pb}/^{24}\text{Pb}$	$^{20}\text{Pb}/^{25}\text{Pb}$	$^{20}\text{Pb}/^{26}\text{Pb}$	$^{20}\text{Pb}/^{28}\text{Pb}$	測定番号	引用文献
鏡片 (馬鹿文鏡)	愛知県名古屋市高蔵遺跡	弥生後期	17.764	15.552	38.368	0.8755	2.1599	HS1140		
馬鹿文鏡片	佐賀県神埼町志波溫遺跡発掘古墳墓	弥生後期	17.714	15.537	38.321	0.8771	2.1633	HS184	*10	
馬鹿文鏡片	佐賀県武雄市みやこ遺跡	弥生後期	17.717	15.543	38.239	0.8773	2.1583	IIS185	*10	
馬鹿文鏡片	福岡県中間八つ庄遺跡	弥生後期	17.546	15.523	38.126	0.8847	2.1729	HS186	*10	
馬鹿文鏡	福岡県清音村野物師谷1号墳墓	弥生後期	17.737	15.539	38.356	0.8761	2.1625	HS187	*10	
馬鹿文鏡	福岡県南方瀧山古墳	古墳前周	17.666	15.530	38.236	0.8791	2.1644	HS120	*9	
馬鹿文鏡	鳥取県八雲村小畠谷3号墳	古墳前周	17.802	15.559	38.429	0.8740	2.1587	HS188	*10	
馬鹿文鏡	兵庫県姫路市宮山古墳第二主体	古墳中期	18.484	15.681	38.896	0.8185	2.1043	HS189	*10	
馬鹿文鏡	伝中國		17.667	15.552	37.903	0.8803	2.1454	HS190	*10	
	誤差範囲		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006			

## 引用文献

\*9) 北九州市立考古博物館研究紀要2

\*10) 北九州市立考古博物館研究紀要3

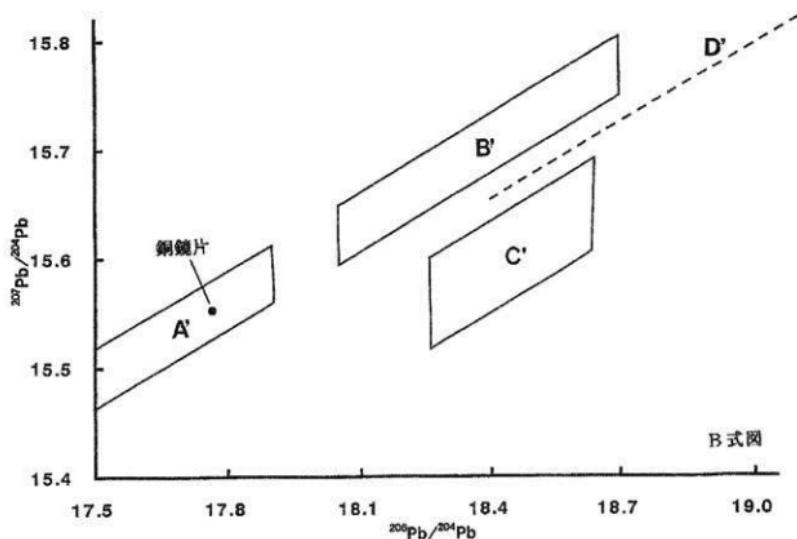
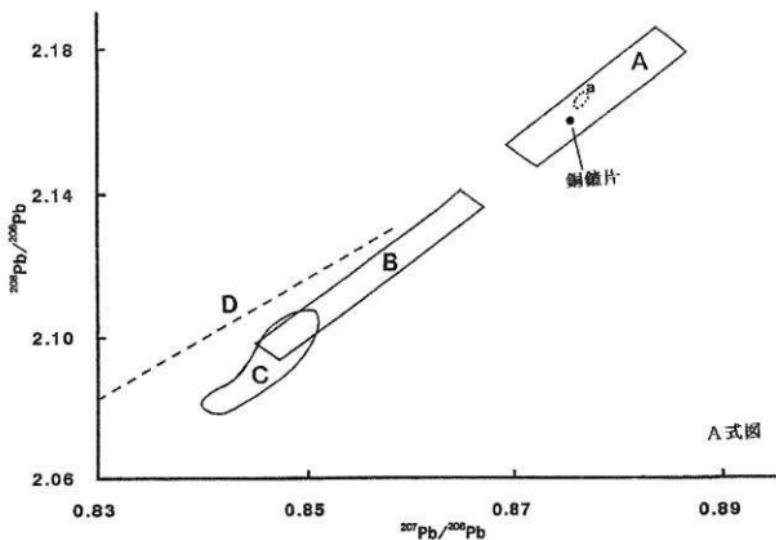


図2 高藏遺跡から出土した銅鏡片の鉛同位体比

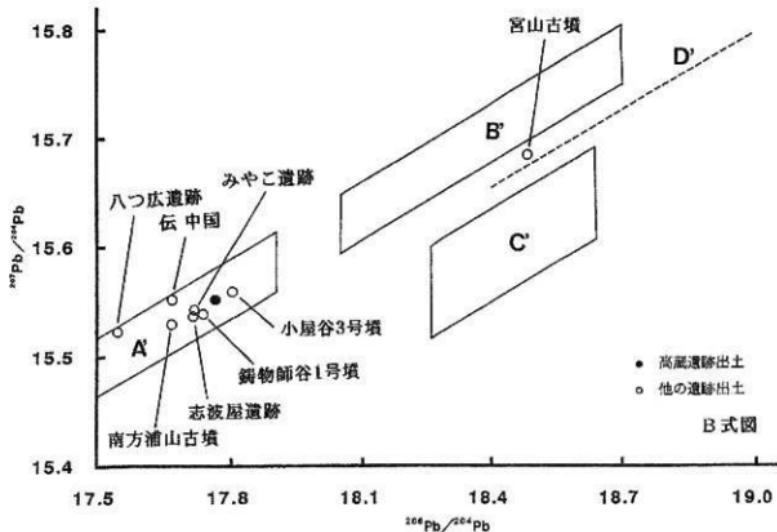
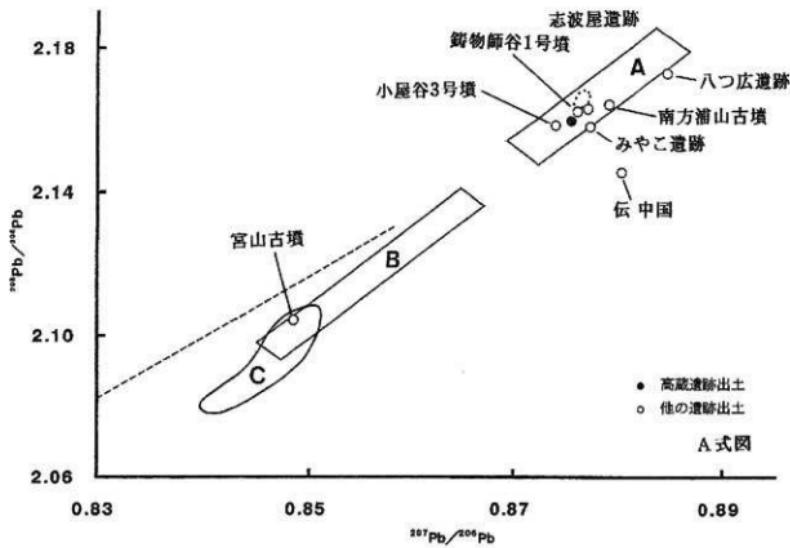


図3 これまでに測定した高麗文鏡の鉛同位体比

## 付論2 高蔵遺跡（39次調査）出土の人骨

名古屋大学博物館 新美倫子

高蔵遺跡39次調査では弥生時代の墓坑1カ所（39-SK209）から2体の人骨が出土した（第64図参照）。出土状況から見て、2体とも本来はそれぞれ全ての部位が揃っていたが、一部は腐食・消滅し、また肩附近から寛骨にかけての部分は、おそらく試掘時に破損してなくなつたと考えられる。残存していた資料の保存状態もかなり悪く、つぶれて剝状になっている部分や、取り上げる際に砕けて粉状になってしまった部分が多かった。ここでは北側の個体を人骨①、南側の個体を人骨②として、残っていた資料について述べることにする。

①：頭蓋骨・下顎骨・大腿骨・脛骨・腓骨が見られた。頭蓋骨はほぼ全体が残っていたが、土圧でつぶれている上に骨体はほとんどとかかっており、形質等は検討できなかった。上顎歯では左の第2切歯、犬歯、第1・第2前臼歯、第1・第2・第3後臼歯と右の第1・第2前臼歯、第1・第2・第3後臼歯を取り上げることができた。第3後臼歯は左右とも少し頬側向きに曲がって萌出していた。

下顎骨も骨体はほとんどとかかっていた。下顎歯では左の第2切歯、犬歯、第1・第2前臼歯、第1・第2・第3後臼歯と右の第1・第2前臼歯、第1・第2・第3後臼歯を取り上げることができた。右第3後臼歯は萌出完了しているが、左第3後臼歯は前方に倒れて上面が第2後臼歯の後部と接触しており、萌出していない。

上下顎とともにいずれの歯も現代日本人標本よりも少し大きく、切歯はシャベル状である。（下顎左第3後臼歯を除いて）全ての永久歯が萌出完了し、第2切歯、犬歯、第1・第2前臼歯、第1・第2後臼歯はいずれも磨滅により象牙質が少し出ており、第3後臼歯は下顎左側を除いてわずかに磨滅している。以上の点から、この個体は成人で壮年であろう。性別は不明である。

大腿骨・脛骨・腓骨はそれぞれ左右の中間部分が見られた。大腿骨は現代日本人男性標本と比較すると後後がかなり発達しており、たくましい。

②：頭蓋骨・下顎骨・大腿骨・脛骨・腓骨が見られた。頭蓋骨は右側の側頭部～頸頭部～前頭部～眼窩部分～頬骨～鼻部分～上顎骨が残っていたが、土圧でつぶれ変形しており、保存状態が悪いために取り上げることもできず、形質等の検討はできなかった。頭蓋骨の縫合線は癒着しているが、消失してはいないことから、個体の年齢は成人で壮年だと考えられる。なお、性別は不明である。上顎歯は左右の第1切歯と右の第2切歯のみが取り上げられた。これらは現代日本人より少し大きく、シャベル状であり、いずれも磨滅により象牙質が少し出ている。下顎骨は右の開節突起から後臼歯部分にかけての骨体破片のみが残っており、歯は取り上げられなかった。

大腿骨・脛骨・腓骨はそれぞれ左右の中間部分が見られたが、資料はほとんど剝状につぶれており、形質はわからない。

## 付論3 弥生時代の高蔵遺跡

村木 誠

弥生時代の遺跡として有名な高蔵遺跡では、名古屋市教育委員会が実施した調査が40回ほどを数えるほか、様々な団体が調査を実施している。その調査の成果は、弥生時代に限っても大きなものがある。しかし、それぞれの調査は小規模なものが多く評価が難しいこともある、その成果をまとめて考えることはなされてこなかった。同時にそうしたまとめを欠いていたために、個々の調査の成果を正当に位置付ける事ができなかつた、ということもいえるだろう。

ここでは、今回報告した内容に周辺での調査成果を加え、高蔵遺跡の弥生時代についての整理を行い、いくつかの検討を加えたい。名古屋台地上の遺跡のなかでは拠点的な位置を占めていたと想定されながらも、その実態が不明瞭であった高蔵遺跡の弥生時代の様相を整理しておくことは、この地域全体の弥生時代を考える上でも不可欠であろう。前期については本年度刊行の第1次調査の報告で触れているので、ここでは中期から後期の集落全体の動向を概観した後、検出例が多く興味深い情報を提供している中期、後期の方形周溝墓について若干の検討を行いたい。なお、時期については私が示したIV～VI様式「永井・村木2002」を用いる。各調査の報告については、本書報告を参照して頂きたい。

### 弥生時代中期（第1回）

高蔵遺跡で前期の環濠以降再び遺構、遺物がまとまって見られるようになるのは中期の中頃VI様式になってからである。中期でもそれ以前については、前期の環濠から遺物がごくわずかに出土する程度である。そのVI様式期についてもF地点などで遺物の出土が知られる程度で、検討の材料も少ない。ここでは凹線文系土器波及以降のIV様式期を中心に検討する。

IV様式の遺構としては、環濠と推測される溝、竪穴住居跡、方形周溝墓が検出されている。まず、環濠から見ておこう。從来から知られている遺構として、D地点、E地点の溝がある。D地点については、溝の最下層からIV様式の土器が出土したことが報告されている。土器の量は少なく、出土したのはB区と呼ばれる溝の中の一部分に過ぎない。上層からは後期以降の土器が大量に出土しており、可能性としては、中期の環濠が後期にも環濠として機能したというほかに、後期の環濠に中期の遺物が混入したことも考えられ、結論が出せない。E地点では、田中稔氏の調査地点のすぐ隣で立会調査を実施している。溝は2条見つかっている。1条は田中氏の調査した溝と同一であり、もう1条は上部をかなり削られた状況ではあるが、途中で切れていた。これらの溝の遺物は何れもIV様式の前半（IV-1・2様式）に限られており、溝の時期としては中期であることは間違いない。環濠とするにはやや小規模な点や途切れている溝との関係など未確定の点も多いが、田中氏の調査した溝については環濠の可能性が高いであろう。こうした古い調査のほかに、近年になって、大津通上の立会調査で東西方向の溝らしい遺構が見つかったほか、その西側の延長上にあたる静岡人歴史研究所地点でも大規模な溝が見つかった。立会調査では埋土中には遺物がほとんどなくただ破砕された貝殻があったのみだが、人歴史研究所地点ではIV様式前半頃の遺物がまとまって出土している。位置関係や静岡人歴史研究所の地点での形状からみて、これについては、環濠とみなして良いだろう。この環濠から出土する土器は、IV様式の前半を中心としており、E地点の溝と同じ時期とみられる。この他に田中氏の報告ではH地点でも同様な時期の遺物を出土する「V型ピット」があり、こ

れも環濠の可能性があろう。D地点のものも含めてこれらの遺構をつないで得られた範囲を環濠集落の範囲と仮定すると、南北150m、東西100m程度の楕円形になる。そして、環濠から出土する土器がいずれもIV様式の前葉（かつて「外土居式」とも呼ばれていた時期）である事から、集落の時期はそれ以前という程度にしか特定できない。また、その環濠集落範囲内では、24次調査などで僅かな遺構が見つかっている程度で、確実な住居跡の例は見つかっておらず、集落の実態としては明らかではない。

中期の堅穴住居は、環濠集落範囲外の沢上二丁目地点と本書で報告した地点でIV様式期のものが見つかっている。この2地点の堅穴住居跡と環濠集落の時間的な関係はなお微妙であり、環濠集落の時期が曖昧な現時点では評価は難しい。出土した土器を見ると、環濠が埋まり始めた後のものだと思われるが、環濠が機能を失っていたかはわからない。この2地点の居住域の時間的な関係も難しいが、おそらく重なる時間があるものと思われる。距離的には隔たっており、一連の居住域というわけではないだろう。すなわち、環濠が埋まり始めた後には高蔵遺跡の範囲内に複数の居住域があった可能性が高い。

さて、中期の遺構としてはその他に方形周溝墓がある。IV様式前半のものは、30次地点にあるほか、複数の溝が複雑な形状を呈しており、形状がよくわからないが静岡人類史研究所地点などで見つかっている。静岡人類史研究所地点では、10m程度で直角に折れる溝や、両端の途切れた溝からIV様式前半の土器が出土しており、溝の規模や平面形から判断する限り方形周溝墓の可能性が高いと判断するが、残念ながら示されたプランからは方形周溝墓を復元できていない。IV様式後半になると、14次、南山大学D地点、五本松町地点など検出例は多くなる。全形がわかるものはないが、中期の周溝墓の多くは、各辺が独立した溝からなり、コーナーが切れる形状を呈している。分布としては、IV様式前半のものは前記した環濠集落範囲の縁辺にあり、IV様式後半のものは南山大学D地点のように、環濠の内部にも集かれているほか、五本松地点のように環濠からは離れた地点にも見られる。

中期に関しては断片的な情報しかないが、高蔵遺跡の範囲内に複数の居住域が存在する時期がある。墓域も、五本松町のようにやや離れた位置に存在するものが見られるから、居住域と墓域の組合せが複数あったのではないかと思われる。

その他、中期の高蔵遺跡の性格をうかがわせる遺物も見られる。本書で報告した39次調査地点で出土した、櫛描文を施した中期の土器片には、シカらしい動物が描かれていた。V字形に表現された頭部などは、近畿地方での出土例に一致し、表現方法などを学んだ結果と思われる。本書報告でも述べた通り、中期の絵画土器は愛知県内では朝日遺跡で見られる程度であり、限られた遺跡でしか見られない。高蔵遺跡を含んだ集団の交流範囲の広さがうかがえる。

#### 弥生時代後期（第2回）

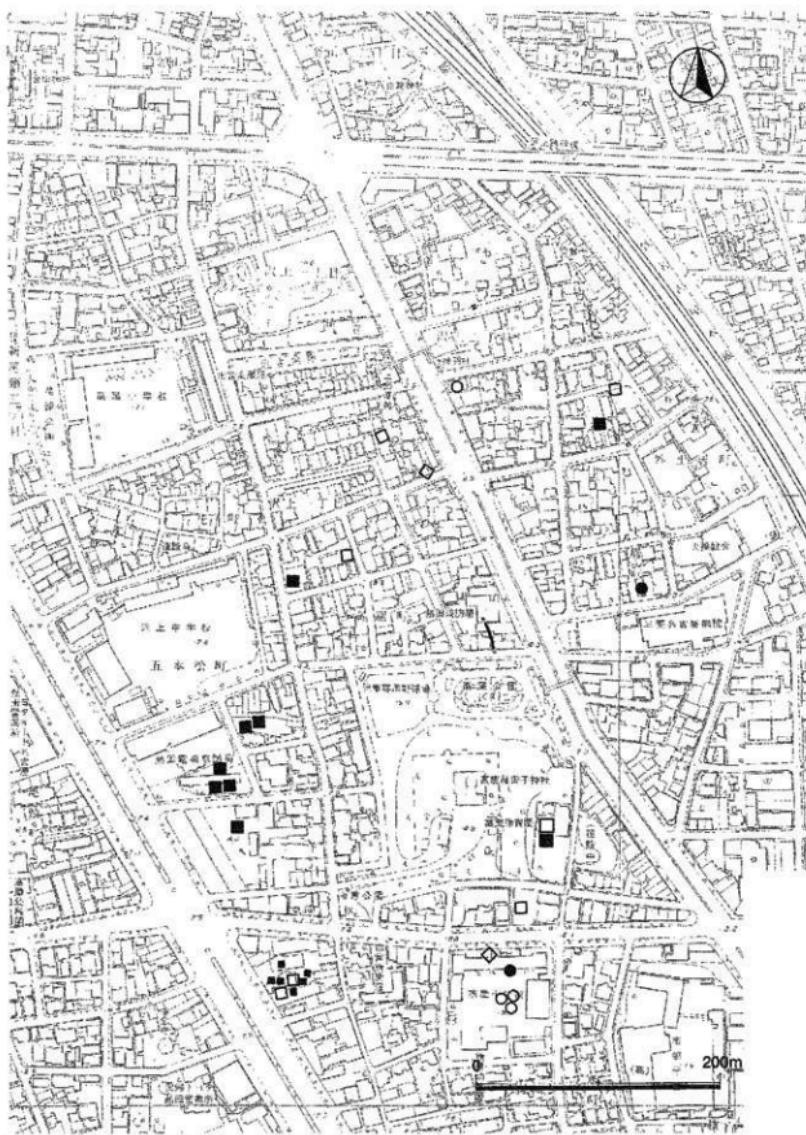
後期については遺構の数が多いので、V様式からVI様式という時間軸に沿って整理する（注1）。

V様式期については確実な遺構を見出すのが難しい。この様式は、遺跡ごと或いは遺構ごとに違う様相を示すため、土器を認定するのも難しいが、14次SD2を切って集められた壺形SX1の土器がその可能性が高い程度である。本書で報告した34次調査のSB20もこの時期に属する可能性が高い。

VI様式では、堅穴住居跡、環濠、方形周溝墓が見つかっている。前半期の堅穴住居が遺跡範囲南部の39次調査地点で見つかっている。この地点では、IV様式期の居住域もあり、V様式に比定できると思われる住居もあるので、IV様式からVI様式まで連続している可能性が高い。この居住域ではVI-4様式までの住居



第1図 中城(Iwakura式)の造構 (○:櫓小守居、□:方形周溝墓、△:性格不明遠櫓、白薙寺前半、黒後半)



第2図 後期（VI・VII様式）の遺構（○：竪穴住居、□：方形局溝墓、白又キVI様式、黒VII様式）

はあるが、それ以降についてはこの地点では未確認である。この地点の堅穴住居は同じ場所で何度も拡張が行われたかのように、平行する多条の周溝が床面に巡っている。堅穴住居の内の1基は、一辺が7m以上もあり、この地点で見つかった他の住居と比べると大型である。またこの住居の範囲内にある土坑からこの住居の時期に近い土器とともに中国製の鏡が出土している。残念ながら切り合いの激しさによって埋土が確定できず、住居に伴うとは確定できなかったのであるが、土器から見る限り時期は大きく異ならない。後期における大型の住居の評価も難しいが、鏡の存在とあわせて考えると、この地点が集落の中心であったことは間違いないだろう。

VI様式中頃の住居としては、大きく北に離れた沢上二丁目地点でも見つかっている。土器の特徴から見ると、34次地点の住居と時間的に重なるものと思われる。この両地点は中期に二つの居住域と想定した地点であり、後期にも二つの居住域が存在した事がうかがえる。

これに続くVI様式の後半については、住居は見つかっていないが、先述したD地点の中期の環濠の上層からこの時期の土器が出土するほか、中期の環濠とならんで、後期の土器を出土する環濠らしい溝がH地点、J地点などで検出されている。D地点以外は発掘調査されたわけではないが、これが後期集落を取り巻む環濠であるとすると、中期の環濠集落を北に少し拡張した形で環濠を復元した石黒立人氏の案（[村木1998]で引用）のように集落が営まれた可能性が高い。遺物が比較的明らかなD地点をみると、VI様式の後葉からVII様式末頃までの土器が出土している。環濠から土器が出土はじめるとVI様式の後葉に環濠が埋まり始めたと見ると、それ以前には環濠が機能していたということになる。VI様式の後半頃には環濠集落であった、ということが言えよう。更に、環濠から出土する土器が、その付近で居住された事と関連があるとすれば、環濠の周辺がVII様式を通じて居住域であったということになる。ただ堅穴住居などの遺構は見つかっていないため、現状で確実なのは環濠が埋まり始めたと思われるVI様式の後半頃には環濠内が居住域であった、ということである。この時期は南の居住域で住居が見られなくなる時期でもあり、分散していた居住域が環濠内に集まつた、という可能性もある。

VII様式の周溝墓は、遺跡の北東部で1基見つかっているほかは、南西部に集中している。時期的には、北東部はVI様式の中頃、南西部はVII様式の初めから中頃までである。北東部についてはまだ数が少ないので、VI様式の中ごろには、墓域も最深2つあることは明らかであり、先に見た2つの居住域のそれぞれに隣接して墓域が営まれたことを示していよう。

周溝墓は埋葬施設を残していないが、埋葬に関わる遺構としては土器棺がある。先述したV様式期の可能性が高い14次SX1のほかに、34次地点でも後期の墓域に近い範囲で土坑内に大型の壺が据えられ、壺底部で蓋をされていた。夜寒地区でも方形周溝墓内から土器棺の可能性が指摘される大型の壺が出土している。34次調査例以外は周溝墓の周溝内に薙かれ、34次調査例も周溝墓に近接している。いずれも周溝墓と関連した位置にある。周溝墓の埋葬施設は不明だが、おそらく土器棺を埋設したものではなく、異なった埋葬法が存在したものと推測する。

VII様式については遺構、遺物が少なく、D地点の環濠内から土器が出土しているのみである。環濠周辺に住居が営まれていた可能性が高いと言えよう。VII様式の居住関連の遺構としては、堅穴住居が遺跡の東部で検出されている。遺物が少なく、時期が特定し難いが、VII様式後半であろう。また、VII様式末からVIII様式にかけての遺構は、本著で述べた34次調査地点でVII様式前半の住居に重なって見つかっている。34

次調査地点では、焼土とそれに伴う土器のみで住居のプランなどは明らかにできなかったものが多いが、居住の痕跡であることは確かだろう。この地点では、先述の通りVI様式の後半に遺構が見られなくなり、VII様式の末からVIII様式になって再び居住されている。ちょうどD地点で環濠から出土する土器の時間幅は居住の痕跡がないように見える。

方形周溝墓は遺跡内各所で見つかっている。この時期にも遺跡の北東部と南西部に墓域が営まれた。VII様式の最初の頃は少なく、VII-2様式からVIII様式までのものが多い。先述した五本松地点では、VI様式の周溝墓に接するようにVII様式以降の周溝墓が築かれている。この間にはずいぶん時間が経過しているが、VI様式の後半からVII様式の間に欠落しており連続的に築かれたわけではない。こうした状況は1次調査D3でも見られる。この周溝墓はVI様式初頭のものであるが、埋土の上層にはVII様式末の上器群が見られる。この時期には古い周溝墓を意識した行為が行われたらしい。

VII様式期には、居住域がD地点の環濠の周辺及び遺跡の東部に営まれる。一方墓域は、VII-2様式頃までは遺跡の東部と南西部で見つかっているが、VII-3様式以降は、遺跡の西部から南西部にあるのみである。VII-3様式以降になると、遺構が遺跡の南西部に集中しているように見える。

### 小結

高蔵遺跡の弥生時代の遺構について現状での整理を行った。環濠が見つかっている範囲を中心として、その北東部と南西部というように三区分して考えると、その推移は第3図のようにまとめることができる。おおよその傾向としては次のようにまとめられよう。IV様式前葉とVI様式後半～VII様式初頭に遺跡中央に環濠集落が営まれる。この2回の間には、遺跡北東部と南西部にそれぞれ居住域、墓域が営まれている。居住域の動向と墓域の動向は時間的に対応しているようで、同じ墓域が継続的に利用されたのではなく、居住域の近くに墓域が営まれたという可能性が高い。ただし、単純に居住域の近くというわけではなく、すでに存在する古い周溝墓の存在を意識していたと思われる。

時期について未確定な部分も多いため、あくまで現状であって、集落変遷案の一つとして理解して頂きたい。特に、北東部及び南西部については、高蔵遺跡の範囲外との関連も注意しなければならない。南西部においては、数百m離れているとはいえ、玉ノ井遺跡で、環濠の可能性も指摘される溝があるなど、弥生時代後期の少なからぬ遺構、遺物が見られる。当然一連の集落と考えるべきであるが、高蔵遺跡以上に詳細が不明であり、今後の調査成果の蓄積に待つところが多い。最後に高蔵遺跡のこうした動向を名古屋台地全体の動向のなかに位置付けておきたい。

高蔵遺跡では中期のIII様式から後期末のVIII様式に至るまで連續と集落が営まれる。特に中期IV様式から後期にかけては、ほぼ重なる位置に掘削された環濠の状況などから見て、無関係の集落が偶然同じ地点で営まれたのではなく、連続性が高い集落と判断される。名古屋台地上では他にこれほど存続期間の長い集落は存在せず、高蔵遺跡がこの地域の中心と考え得る集落であることを示している。

時期毎に見ると、中期では、高蔵遺跡の環濠が埋まり、複数の居住域が見られるIV様式中頃に、名古屋台地やその南の鳴海丘陵で新しい集落が成立する。ある程度の資料が見られる遺跡に限っても、IV様式期に成立する遺跡としては、瑞穂遺跡、見晴台遺跡、清水寺遺跡などが挙げられ、伊勢山中学校遺跡・正木町遺跡などもその可能性がある。これらの遺跡は、中期末から後期にかけて、瑞穂台地、笠寺台地、鳴海

丘陵といったそれぞれの小地域で中心となっていく集落である。これらが直接的に高蔵遺跡から派生したというわけではないだろうが、高蔵遺跡で環濠が埋まり、居住域が分散したように見える動きと連動している可能性は高いだろう。

後期には、高蔵遺跡の環濠集落と同時期の可能性が高い環濠集落が、瑞穂遺跡、見晴台遺跡、三干山遺跡など市内各所に築かれている。かつて高蔵遺跡の環濠だけ機能した期間が長く、それが高蔵遺跡の「拠点性」を示す可能性を述べたが〔村木1998〕、環濠の機能した時期については、時期毎の遺構の動向や環濠の遺物などを見てみると、必ずしもそうとは言えないと考えるに至った。しかし、方形周溝墓群の分布に見るような遺跡の規模や中国鏡の破鏡を持つといった点は、この遺跡がこの地域の中心の一つであったことを想定する根拠となろう。

各遺跡で後期の環濠が埋まつた後、名古屋台地上の遺跡では、遺構、遺物の数が激減する。瑞穂遺跡をはじめとするかつての環濠集落はほぼ廃絶する。しかし、高蔵遺跡のみはⅤ様式の遺構が少からず認められ、他の遺跡よりは後の時期まで存続する。弥生時代中後期を通じて存続し、他の遺跡と連動しつつも、時として独自の動向を示す高蔵遺跡は、この地域の中心的な集落とみなしてよいだろう。

		北東部		中央		南部	
		居住	墓	居住	墓	居住	墓
IV 様式	1			X			
	2			X			
	3			X			
	4	X	X			X	
	5	X	X	X	X	X	X
Ⅴ様式							
VI 様式	1					X	
	2					X	
	3	X	X			X	
	4	X	X			X	
	5					X	
VII 様式	1						
	2						
	3			X	X	X	X
VIII様式							

第3図 高蔵遺跡における遺構の変遷

## 方形周溝墓の検討

以上まで高蔵遺跡の全体の動向を検討し、周辺遺跡の動向の中に位置づけた。以下では検出例の多いその方形周溝墓について若干の検討を行う。

高蔵遺跡の調査は小規模な調査が多いため、溝状の遺構が見つかっていても、それが方形周溝墓のものであるか否か判断に困る事例がある。ここでは、溝状遺構のうち、完形に近い遺物などが出土し、周溝墓の可能性が高いと判断したものと検討対象とする。まず、一覧を示しておく(表1)。

### 中期

中期といつても四縁文の波及以前に当たるIV様式よりも前のものは確実なものは見られず、何れもIV様式のものである。この時期の周溝墓では、四辺がすべて見つかっている例はないが、検出された面では各辺の溝はそれぞれ途切れているようである。本来の掘り込みがコーナーで途切れていれば不明であるが、検出面では四隅が切れた形状の周溝墓のようである。

14次調査地点では、周溝墓の溝を切ってV様式に属するらしい土器棺が埋設されていた。溝がある程度埋まつた後に築かれたわけだが、当然周溝墓を意識したものと推測される。

五本松町の周溝墓は、他とは異なり環濠集落の地点からはやや西に陥った位置にある。この周溝墓の周囲には後期の周溝墓が築かれているのであるが、この中期の周溝墓の溝の上にも後期の周溝墓が築かれているようである。この他には中期の周溝墓はない。この地点の事例は中期後業から後期にかけて墓域を同じくするような連續性があったように見える一方、中期の周溝墓を壞して後期のものが築かれたと見る

地点	遺構	形状	時期	出土遺物	備考
D地点	溝	し字形	西暦元紀半ば		
人歴史研究所	7号溝	し字形	Ⅳ-1様式	壺、手、甕	
人歴史研究所	1号溝・4号溝	直交する2つの溝	Ⅳ-1様式	壺、甕	
30次	SD01・05	直交する2つの溝	Ⅳ様式		
五本松	SZ13	一端が切れる1辺	Ⅳ-3様式	壺、甕	
14次	SD2	直線溝	Ⅳ-1様式	壺、高杯、片口鉢	
1次	D9	し字形	Ⅳ様式前半	壺、甕、甕	
39次	SD201・202	直交する溝	Ⅳ様式前半	壺、甕、甕	
五本松	SZ8	途切れるコーナー部分と直交する1辺	Ⅳ様式前半	壺、高杯	
五本松	SZ6	コ・ナ・の1つが途切れる3辺	Ⅳ-3様式	壺、直口壺	
後楽地区	SD04	全周、コーナー1箇所切れる	Ⅳ-3様式	壺、甕、高杯、器台、直口壺	
5次	SD01	1辺の一部	Ⅳ-3様式	壺、甕、高杯、器台、直口壺	
36次			Ⅳ様式	甕	
40次		し字形	Ⅳ様式	壺、片口鉢	
人歴史研究所	11号・12号	直交する2辺	Ⅳ様式	甕	
4次	SD04	1辺の一部	Ⅳ-2様式	壺、高杯、片口鉢	
6次	SD7	平行する2辺	Ⅳ-2様式	高杯	SD8と接する
31次	方形周溝墓1	3辺、1辺はコーナーで突出	Ⅳ-2様式	壺、高杯、器台、甕	
五本松	SZ11	2辺、コーナー切れる	Ⅳ-3様式か	甕	SD10と接する
6次	SD30	1辺	Ⅳ様式	壺、直口壺	
30次	SD04	コ・ナ・部分	Ⅳ様式	壺、甕、高杯、直口壺、器台	
6次	SD8	3辺	Ⅳ様式	甕	SD7と接する
五本松	SZ1	3辺全周、コーナー1箇所切れる	Ⅳ様式	高杯、直口壺	
1次	D11				
五本松	SZ2	道子を欠くがほぼ全周	Ⅳ様式	甕	
五本松	SZ7	ほぼ全周	Ⅳ様式	甕	
五本松	SZ10	3辺、コーナー1箇所切れる	Ⅳ様式	壺、高杯	
8次	SD01	コの字形	Ⅳ様式	甕	
31次	方形周溝墓2	ほぼ全周	寺町不明		
39次	SD203	コの字形	寺町不明		
39次	SD101	し字形	寺町不明		

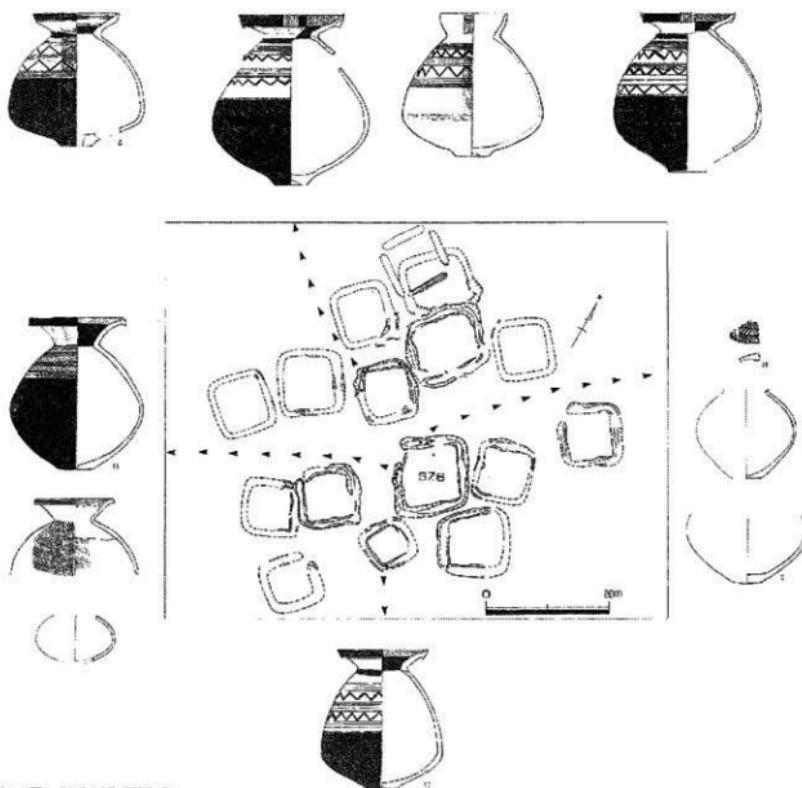
表1 高蔵遺跡方形周溝墓一覧

余地もある。他の地点での事例の増加を待ちたい。

一方、人類史研究所地点では溝のつながりがよく分からないが、IV様式前半の溝が見られる。L字形に検出されている7号溝跡は周溝墓の可能性が高いと考え、第1図に示した。溝内からは、櫛彫文系の土器を中心に、わずかに凹線文系土器が出土しているから、IV様式前半であろう。遺物は遺存度の高いものに限れば壺1、細頸壺2、太頸壺1点である。この地点では、複数の溝が交錯しているすぐ南に、同じ頃の土器を出土する環濠がある。人類史研究所の地点については、プランが明らかではない以上、確実な周溝墓とは言えないが、その周辺にあたる26次調査ではIV様式後半の周溝墓があり、更に36次調査ではVI様式の周溝墓も見つかっている。この地点では、中期から後期にかけて継続的な墓域であったという可能性があるという（注2）。

#### 後期

VI様式期であるが、現状での分布を見たとき、遺跡の南西部に方形周溝墓が集中するのは明瞭である。なかでも西端部にはほとんど居住に関連した遺構ではなく、後期には墓域として意識されていたことは認め



第4図 五本松町周溝墓

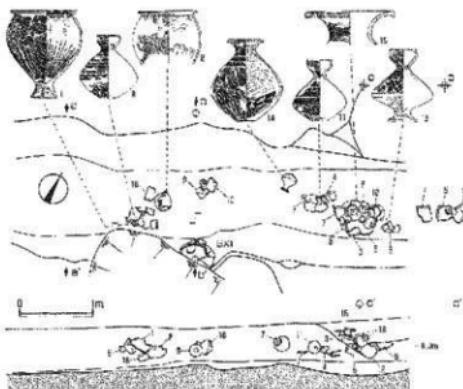
て良いだろう。ただその範囲の中でも五本松地点や1次調査地点のように、溝を接するように集かれている例がある一方で、全く周溝墓が検出されていない地点もある。であるから、この墓域と考えた範囲全域に万遍なく分布するわけではなく、数基の方形周溝墓からなる小群が数多く集まることによって大規模な墓域が形成されていたものと言えるだろう。

ではこの小群が具体的にどのような性格のものであったかという点が問題になろう。五本松町地点の事例を少し検討しておこう。ここではIV様式のものが1基あるが、先述の通り評価が難しいので今は除外しておこう。VII様式以降のものについては、溝を接するような状況を呈し、連続的に営まれているように見える。しかし、出土遺物を見ると、これだけの周溝墓が集まっているながらVI様式の後半からVII様式のはじめにかけてのものではなく、時間的には連続していない。一方、VI様式前半とVII様式後半以降のものについてはあまり時期の異ならないものが複数見られる。であるから、この小群は各世代毎に築かれた周溝墓の集積ではない。1次調査のD3 (VI-I様式) と溝を共有していると見られるD11もVII様式期のもので、時間的には連続していない。

本論で検討した通り、高藏遺跡南部の居住域でも時間的に同じ頃に同じような動向が見られるので、居住域の近くに墓域が築かれる、というのが基本であったのだろうか。そうであるならば、この小群は通時的に形成されたのではなく、居住域の近くに形成された墓域として共時に集まつたものと見ることができるだろう。しかし、そうだとしても時期の離れた周溝墓が偶然溝が接してしまったわけではなく、通時の連續性は意識されていたものと思われる。この五本松町の墓域だけでなく、1次調査D3のように、時間的に隔たった周溝墓の溝上層に大量の土器集積が見られるように、時間的に隔たった墓であっても自らに間違のある墓として意識されていた事は確かである。その一方でそれらの古い周溝墓に何の行為も行われない時期があることも重要である。既に存在する周溝墓を自らと関連したものと常に意識されていたとすれば、遺物が残るような行為を何もしなかった事が説明し難い。VII様式末～VIII様式になると、古い周溝墓に何らかの行為が行われるのは、単に居住域の動向にあわせているだけではなくて、祖先とのつながりが意識され、強調される時期があった可能性もあるう。

個別の周溝墓についてみると、後期を通じての1つのコーナーのみが切れる形態をしている。ただし、私たちが確認できる地山面では途切れているが、当時の溝としてはそうであるとは言えず、確実なのは1つのコーナーが浅くなることである。

規模はVII様式期のものが一辺10m前後を測るのに対し、VIII様式以降のものは10mに達するものではなく、小型化している。



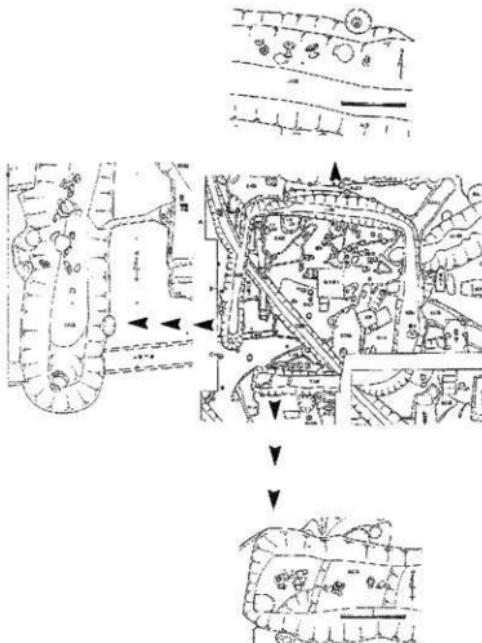
第5図 14次SD2土器出土状況

## 周溝墓の遺物の検討

周溝墓では埋葬施設が見つかった事例は一例もなく、副葬品の可能性があるものもない。関連する遺物は、周溝から出土する土器だけであるが、これについて若干の検討を加えたい。まず出土状況を簡単に見ておこう。IV、VI様式の方がⅦ様式より土器の出土量が豊富である。14次SD2では、IV-5様式の土器が大量に出土しており、壺と甕が拮抗するような数量である。細頸壺の多さも特徴であろう。出土状況は第5図に示したが、位置としては辺の中央で、溝の底部からはやや上位である。器種ごとにまとまる事はなく、雜然と折り重なるように出土している。方向もまちまちで据え置かれたという状況ではない。裏には使用痕がある。

Ⅷ様式以降の事例では、溝が途切れる部分に遺物が多く見られる傾向がある。Ⅸ様式以降の場合でも、途切れていないコーナー部分から出土する事例が多い。ただし、出土遺物の多い1次D3や夜寒町SD04などでは各辺の中央からもかなりの量が出土している。こうした遺構では、辺によって器種の構成、組成に違いがある可能性も指摘されている〔重松他1987〕し、D3でもその可能性がある。しかし、その評価は更なる資料の蓄積を待ちたい。

Ⅷ様式期の周溝墓では、個々の土器の出土状況は、必ずしも正位のものが多いわけではなく、横転しているものや倒立状態のものもあり、据え置かれたという状況ではない。また、溝の中での高さについてはあまり情報がないが、1次D3ではまちまちといった感じで、溝底にあるものは少ない。こうした状況から見ると、同一の周溝墓であってもその出土土器は同時に、同じ行為によって埋まったとする根拠はない。これらの土器については周溝墓周辺で何らかの行為を行った後の残渣とする見方がある一方、土器そのものや内容物を供獻したという見方もある。以下に見ていくように、中期から後期にかけて周溝墓から出土する土器の器種構成は明らかに変化している。そうすると、土器が周溝に埋まるまでに行われた行為も異なると考えたほうがよく、状況に応じて考えていくことになる。また、先述の通り、溝ごとに器種構成に違いがあるという指摘があるほか、同じ周溝墓出土遺物にも時間差がある可能性が高いが、辺毎にも時期

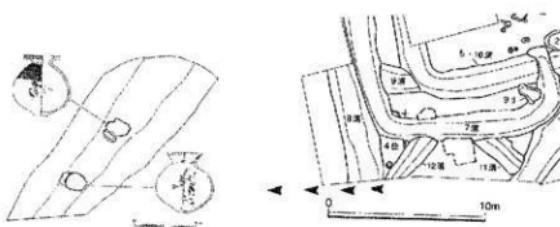


第6図 夜寒地区SD04土器出土状況

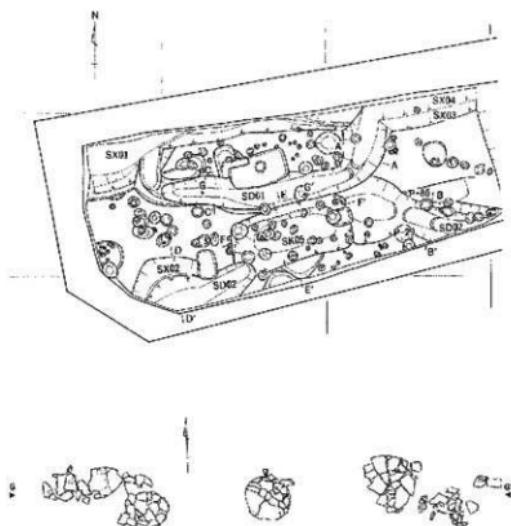
毎にも細別できない現状では周溝墓単位で考えざるをえない。

土器の構成、組成について考える。中期の周溝墓の遺物は、ほぼ壺と釜からなる。壺では特に細頸壺が多い。14次SD2の資料では、確実にこの周溝墓に属すると思われる土器は、壺7、細頸壺6、太頸壺1であり、使用痕のある壺がほぼ半数を占めている。組成としても日常生活の痕跡である住居出土資料の器種組成（絶対量ではなく）と大きく違わないと思われる。細頸壺が果たして住居でどの程度存在しているのか情報が多く、これが多いことをどのように評価してよいかわからないが、使用痕を持つ多数の壺を重視すれば、これらの土器が埋まるまでに、日常生活と同様な、煮炊きを伴った飲食が行われたよう

うに思われる。そして、上  
第7図 人類史研究所地点12周溝墓出土状況



第7図 人類史研究所地点12周溝墓出土状況



第8図 8次SD01土器出土状況

器はその後に廃棄されたものという可能性が高い。

次の後期初頭は時間的にはそれほど隔たっていないにも関わらず、器種組成は一変する。1次調査のD3では、遺存度の高いものに限れば、壺10、高杯3、鉢2、ミニチュア2であり、壺が主体で僅かに供膳器が伴うと言えよう。壺は、それほど遺存度の低くないものが1点あるのみである。これは14次SD2からみると大きな変化である。貯蔵具である壺が多く、供膳器が伴い、一方で煮炊きの道具である壺を欠くその組成から見て、土器やその内容物を供給した痕跡である可能性が高い。壺はほぼ完形で出土する例が多いことも、何らかの使用後に廃棄したというよりは、中身を供えたものであることを示唆する。こうした傾向はVI様式の中頃についても変わらない。この時期になると、壺、高杯に器台、直口壺が加わり、これらの内には赤彩、文様で飾られた「バレススタイル」のものが少なからず存在する。

その後もⅦ-2様式までは壺、高杯、器台、高口壺という構成は変わらない。壺にはパレススタイルが残るもの、高杯等からは赤彩、文様が無くなっている。パレススタイルの欠落という変化はあるものの、周溝墓で行われた行為やその意図はⅦ様式と異なってはいないのだろう。その後については、8次SD01や五本松町SZ10の様に、再びほぼ壺だけが出土する周溝墓が多くなる。そしてこれらの周溝墓では、パレススタイルの壺が比較的多く出土している点が注目される。8次SD01では、辺の中央でパレススタイルを含む壺が点々と出土している。これらの事例についても、パレス壺の出土量や位置に若干の変化は見られるが、壺を主とし壺を欠くという特徴は変わらない。ただし、1次調査D3の上面に見られたⅨ様式の土器群は、新たに築かれたものではなく、すでに存在する周溝墓に対して行った行為に関わるものであるが、ほぼすべての器種を網羅しており、他の同時期の周溝墓出土資料とは対照的である。

さて、方形周溝墓から出土する土器の位置等の状況とその器種構成、組成について簡単にまとめた。十分な資料があるわけではないが、Ⅳ様式からⅥ様式の間に、出土する土器の器種構成、組成が大きく変化することは認めてよいだろう。この現象についてはすでに何度も述べているが、ここでは周溝墓から出土する遺物の性格について若干の検討を行っておきたい。

ここで検討の対象となっている土器は、実用の場面では何れも食物あるいは飲食するという行為に関連するものである。そうした実用的な機能、用途に由来する意味付けとして、一般的に言って土器には二つの側面があるだろう。すなわち、供えるという行為、あるいは食物の内容、使用する食器などを示差的な指標として利用すること等に示される、上下関係、序列性を確認するために用いられる面と、共食することによって示される一体感、平等感をもたらすために用いられるという面である〔原田1997〕〔中村2002〕。今、誤解を恐れず、私たちになじみのある言葉に単純化して、前者を「供獻」、後者を「共食」と呼べば、中期の周溝墓から出土する土器は「共食」に伴うものであり、後期のそれは「供獻」に関連したものと言えるのではないだろうか。後期になると、使用者の差異、序列を強調するものと考えた〔村木2003〕パレススタイル土器群が用いられるのも同じ脈絡である。

すなわち、後期になって、周溝墓に対して「供獻」がなされるようになった事、そしてその場にパレススタイルが用いられた事は、方形周溝墓の被葬者の死に際して、「共食」によって集団としてのまとまりを確認するのに変わって、被葬者を上位とする序列の意識が生じたことを示しているのではないだろうか。中期から後期にかけて周溝墓の形態は変化しているが、墓域は中期から後期へと継続する事例が人類史研究所地点や五本松町地点であるようだから、周溝墓の性格自体はそれほど変化してはいないだろう。築かれる数もむしろ後期のほうが増えている点からも、階層的に上位の人のみが方形周溝墓に葬られるようになったと理解するのではなく、死亡し、「祖先」となることで階層的に上位となるようになった、と理解しなければならないだろう。死者に対して「供獻」し、死者を上位とする序列を確認することは、現実の社会での階層化と対応しているのは説明を要しないだろう。こうした序列を確認する行為は、一般的な周溝墓でも行われたのである。

「共食」から「供獻」へという変化について述べたが、実はこれはどちらか一方という二者択一的な問題ではなく、相対的にどちらが強調されるかという問題として理解した方が良い。例えば高杯や器台からパレススタイルが無くなることは「供獻」が主となる時にあって、食器の違いを消すことによって「共食」の側面が強調された結果であろうし、1次調査のD3上層において壺（特にS字壺）が再び見られるなど、

周溝墓に関連して「共食」が行われたこともあるらしいこともそれを示唆する。周溝墓の検討で述べたように、「供獻」の対象である「祖先」は常に意識されていたわけではなく、それが強調されるのは特定の時期に限られているように見えるのも同じ理由であろう。

ただし、ここで注意しておかねばならないのは、後期以降に「共食」が強調される時期があったとしても、そこに本当の平等意識があったとは考えるべきではない、ということである。むしろそれは、その対極にある階層の固定化という動きを隠蔽したのであり、その働きが古墳時代をもたらしたのである。

### おわりに

高蔵遺跡の遺構の動向を概観し、方形周溝墓についてやや詳しく述べた。最近の調査によって、高蔵遺跡の実態が明らかになったといつても、まだ不明な点が多い。調査成果の増加とともに絶えず見直しを続けたいと思う。

### 注

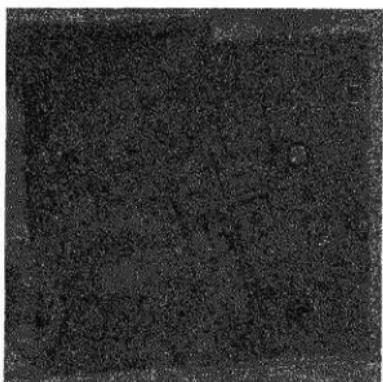
(注1) なお、私は僭様式の次の古墳時代とは考えていないため、僭様式と古墳時代の間を便宜的に準様式と呼んでおく。土器については〔村木2003〕を参照していただきたい。

(注2) 36次調査の事例とその周辺の状況については、伊藤正人氏の御教示。同氏による36次調査の報告も参照していただきたい。

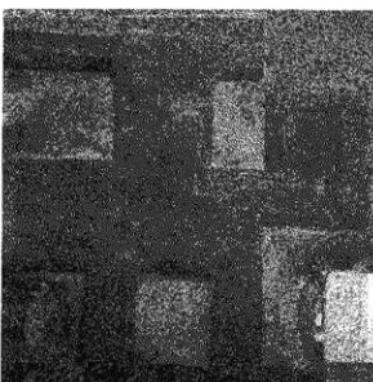
本稿の執筆にあたっては、2002年に行われた中部弥生時代研究会やその伴査会での議論を参考にした。また、環濠の範囲や名古屋台地の集落の動向については、石黒立人氏に種々のご教示を頂いている。各調査の報告については、本書報告を参照していただきたい。図の出典も各報告による。

### ＜参考文献＞

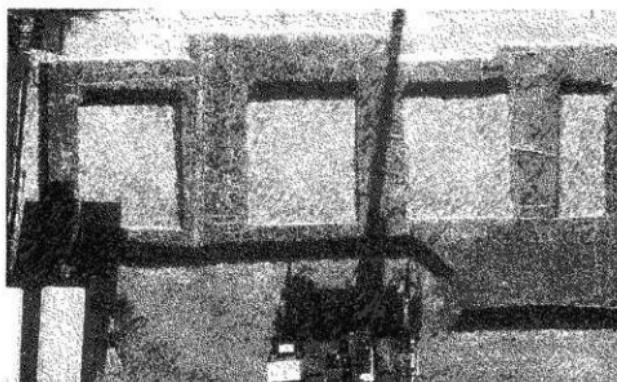
- 重松和男他編 1987 『熱田区夜寒町・高蔵遺跡発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会  
永井宏幸・村木誠 2002 「尾張地城」「弥生土器の様式と偏年」 東海報 木工社  
中村生輝 2002 「即位儀礼一千年の誕生と国家」「岩波講座 天皇と王権を考える」 5 岩波書店  
原田信男 1997 「古代・中世における共食と身分」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号 国立歴史民俗博物館  
村木誠 1998 「よみがえる環濠集落」 名古屋市見晴台考古資料館  
村木誠 2003 「高蔵遺跡の弥生土器－パレススタイル土器群を中心に－」『環濠文化財調査報告書45 高蔵遺跡（第1次）』  
名古屋市文化財調査報告59 名古屋市教育委員会



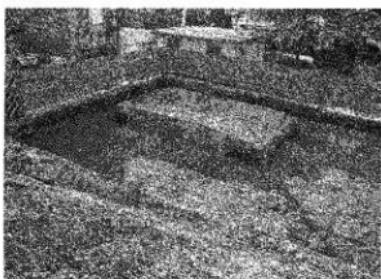
調査区北東部全景



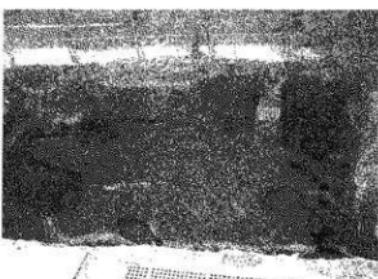
調査区南東部全景



調査区北西部全景



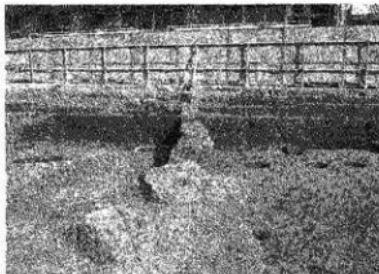
調査区南西部全景



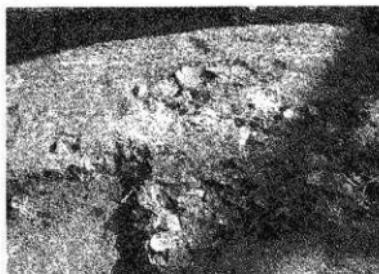
倉庫部全景



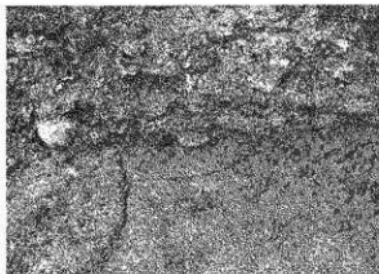
SB02・17・21



SB02南北断面



SB03上面土塗出土状況



SB06焼土と台



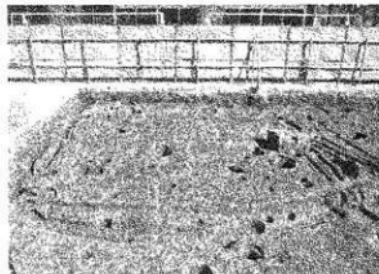
SB17内SK41



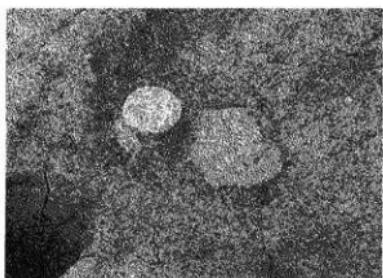
SB18



SB20・02・17(東から)



SB20(西から)



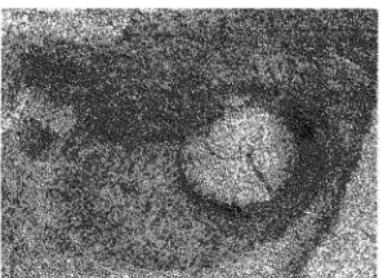
P298



SK42土器出土状況



SK44とSK37



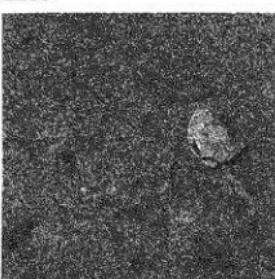
W-SK01



SD05



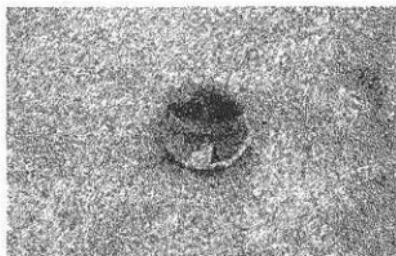
燒土4土器出土状況



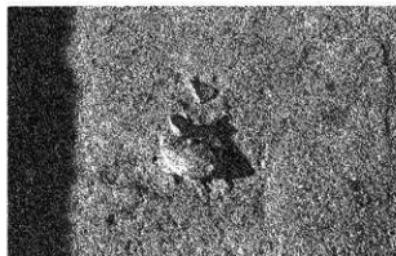
燒土6土器出土状況



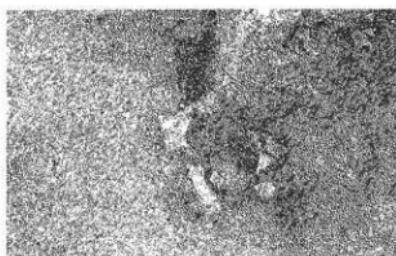
包含磨弥生土器出土状況



SB05須恵器短頸壺出土状況



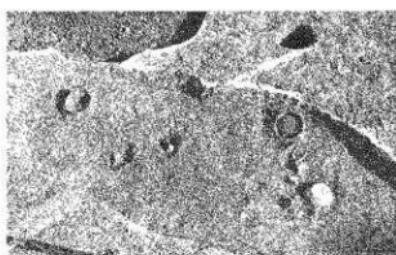
SK17須恵器平底瓶出土状況



SB08土師器出土状況



E2グリッド須恵器壺出土状況



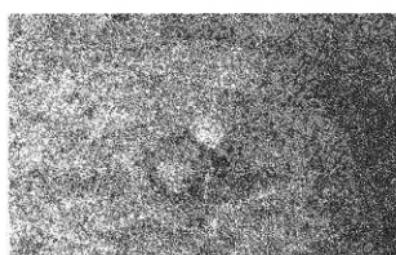
SK20遺物出土状況



SK23遺物出土状況



SX01上面遺物出土状況



SX01遺物出土状況



SX01（東から）



SX01南北小アセ西壁面



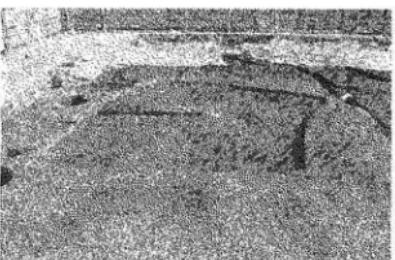
SX01遺物出土状況



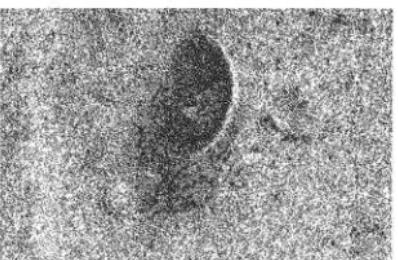
SX12検出状況



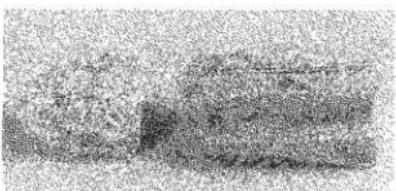
SX12須恵器類出土状況

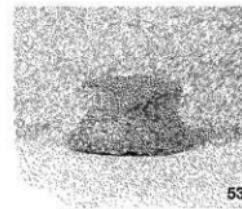
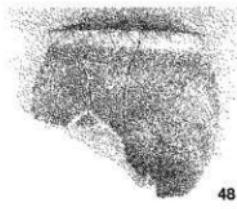
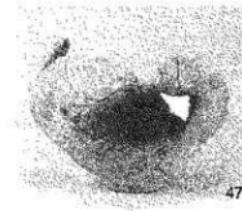
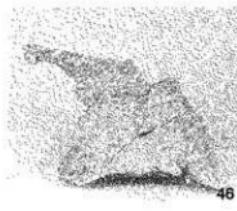
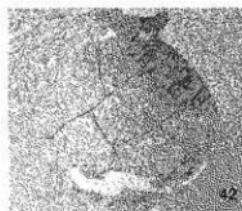
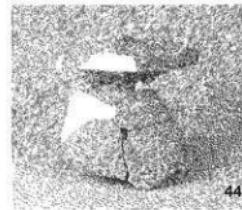
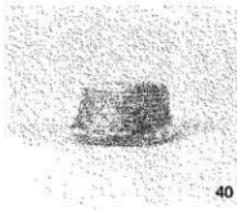
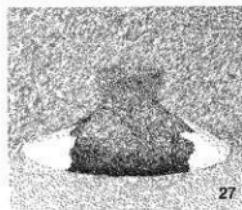
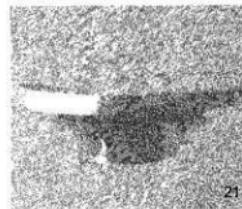
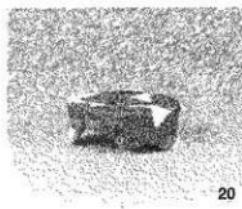
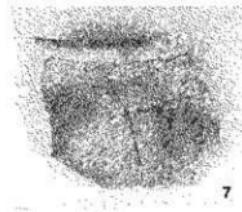
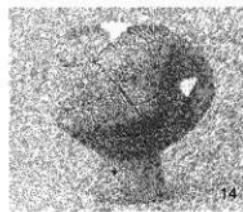
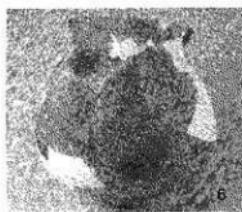


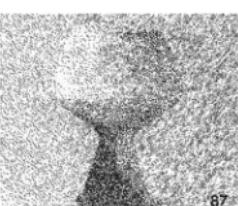
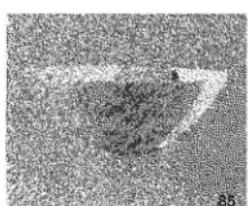
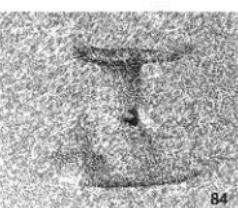
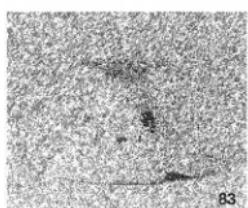
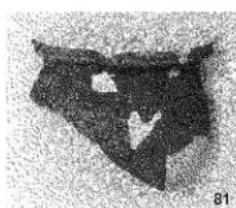
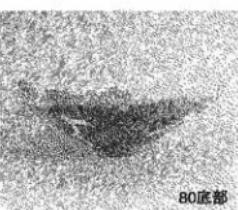
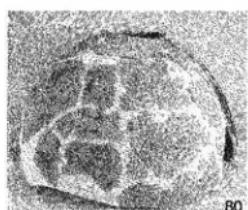
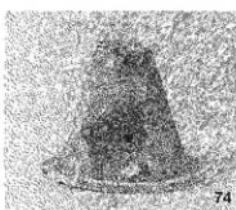
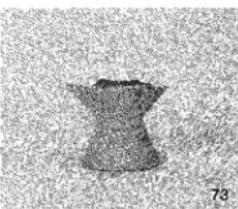
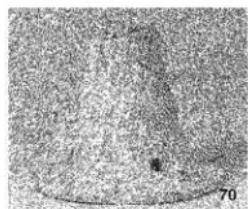
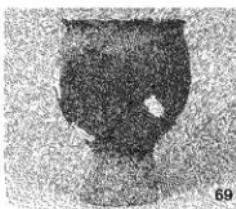
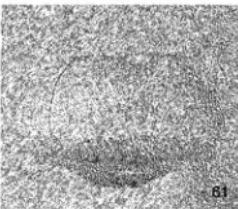
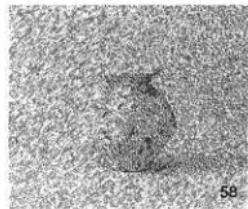
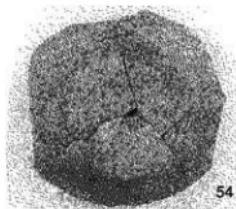
SX12完掘全景（西から）

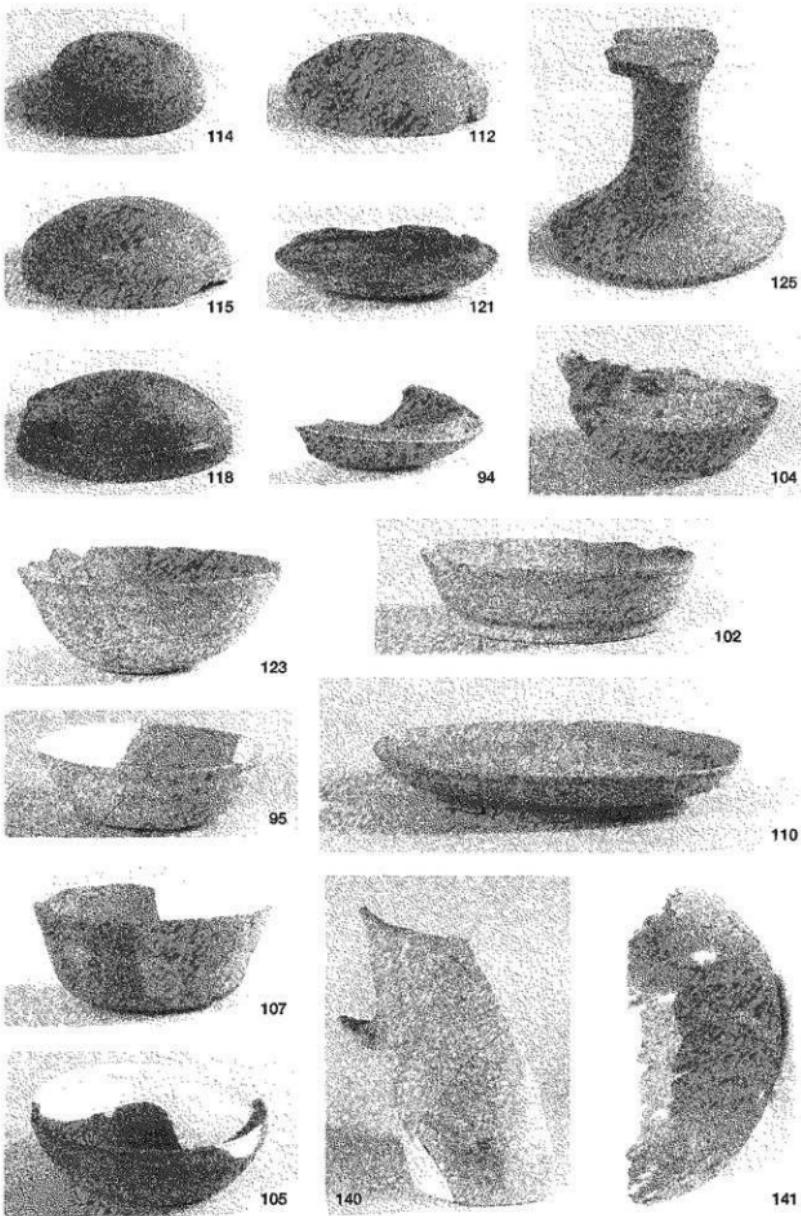


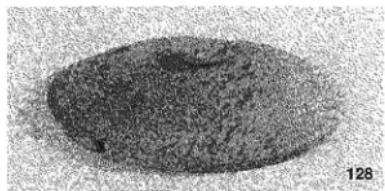
SX12遺物出土状況



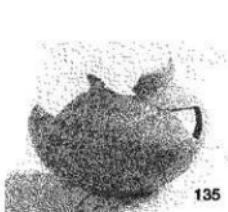
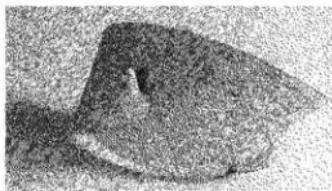




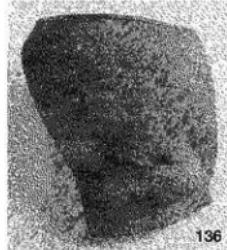




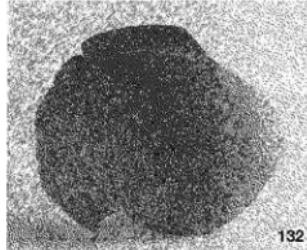
128



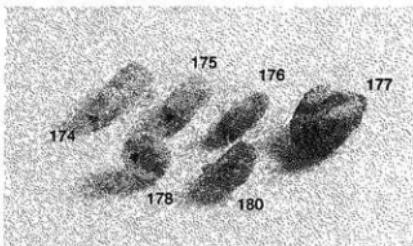
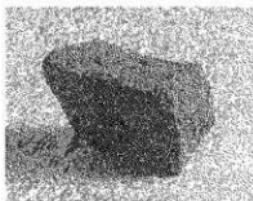
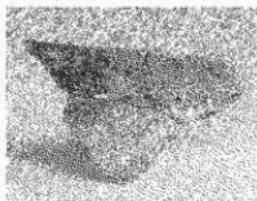
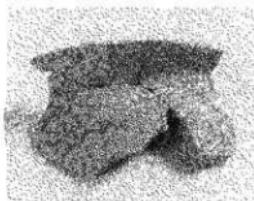
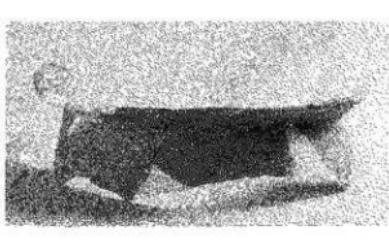
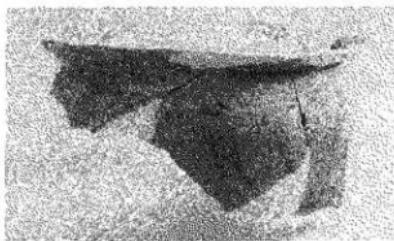
135



136



132



174

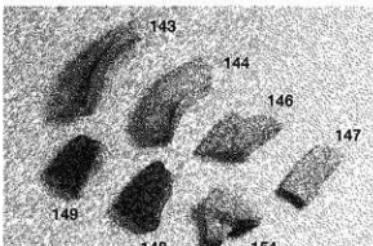
175

176

177

178

180



143

144

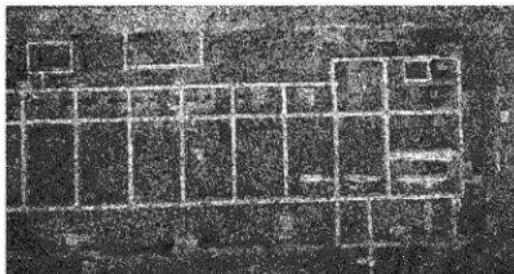
146

147

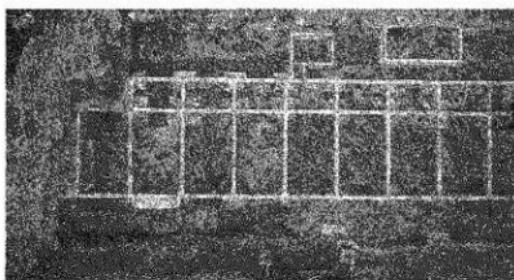
149

148

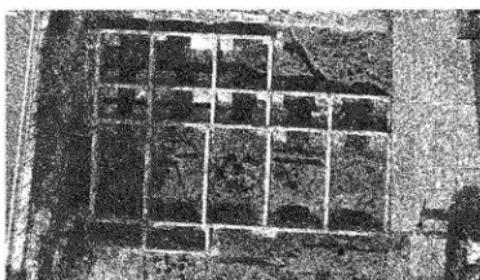
154



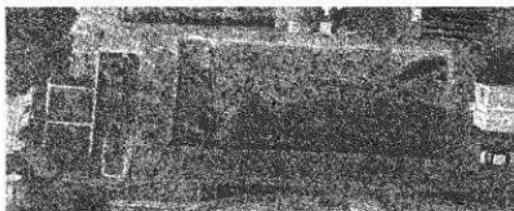
校舎部東部全景



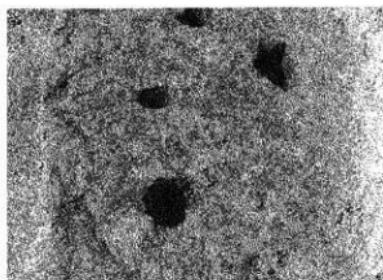
校舎部中央全景



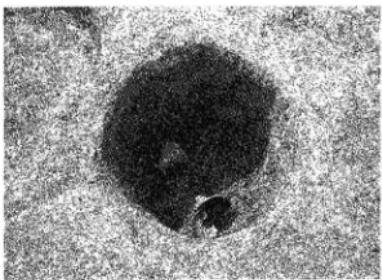
校舎部西部全景



防水塔部・給食室部



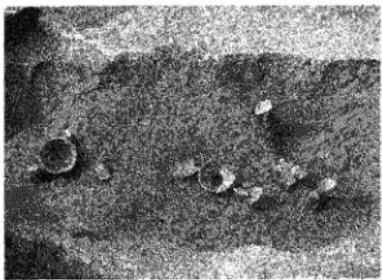
SB01



SB09内P444土器出土状況



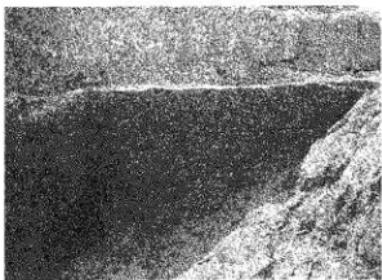
SD101



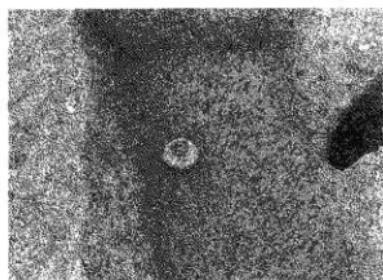
SD201土器出土状況



SD201



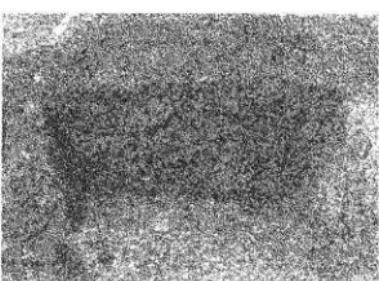
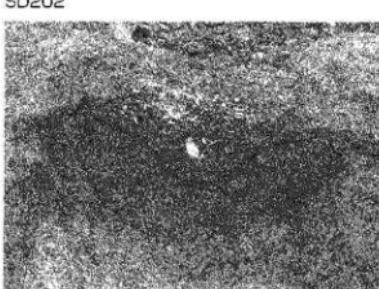
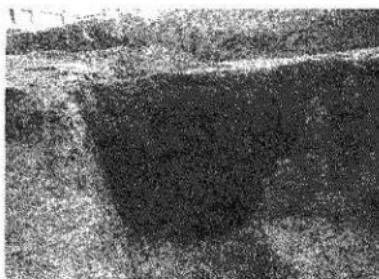
SD201断面



SD202土器出土状況



SD202





古墳2東辺



古墳2東辺断面



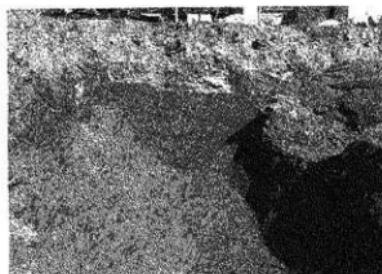
古墳2西辺



古墳1



古墳1 遺物出土状況



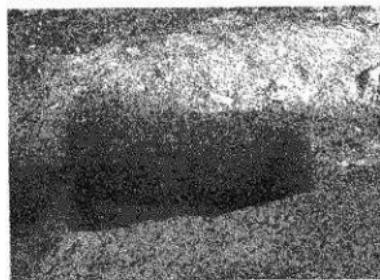
P2055



SK226



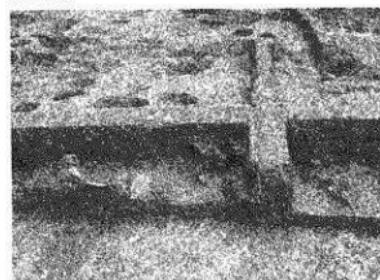
SB03



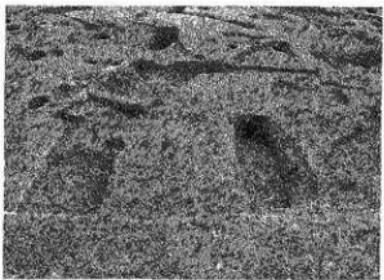
SX106



SB13



SB14



SB15



SB15窓



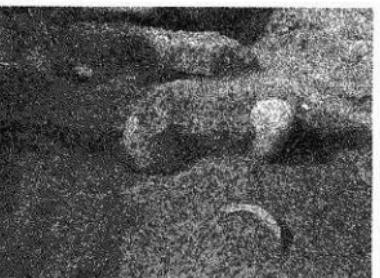
SB15壁断面



SB12・16



SB104窓



SX203



SD01新面



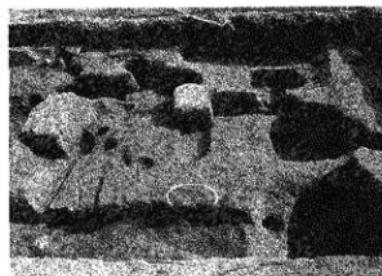
I7・8グリッド焼土遺物出土状況



SB08・09・17



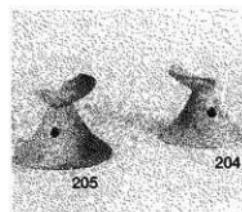
SB08



SB102

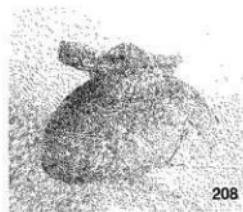


貯水槽部東半



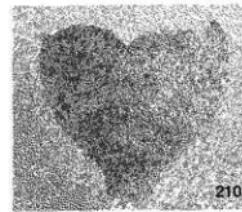
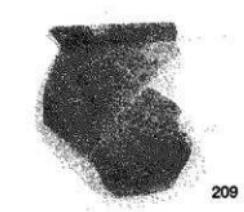
205

204

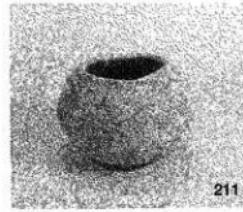


208

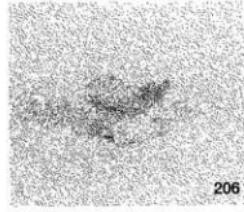
209



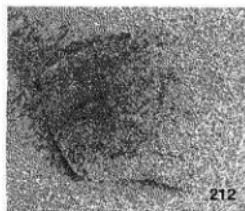
210



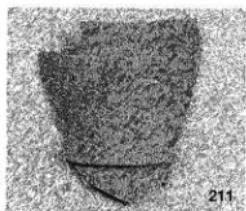
211



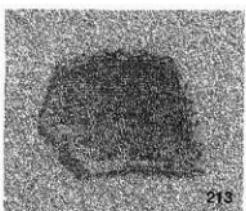
206



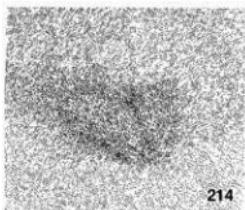
212



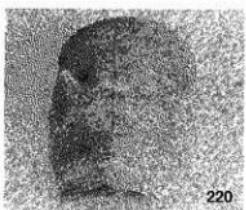
211



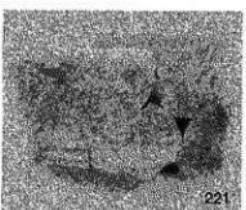
213



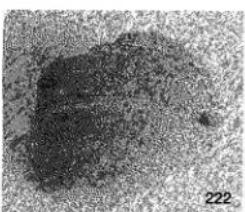
214



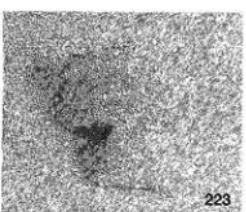
220



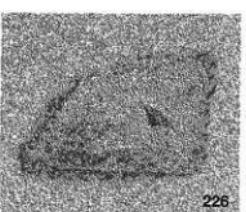
221



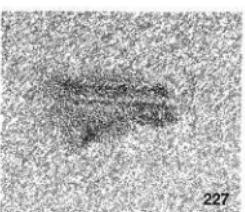
222



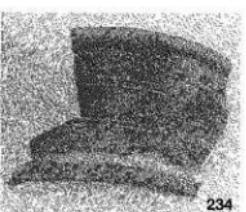
223



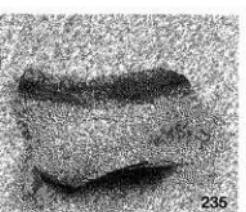
226



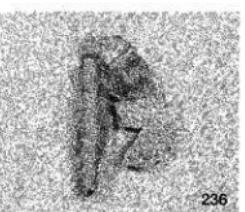
227



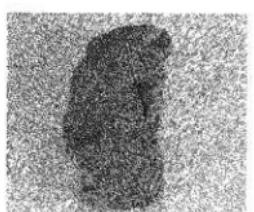
234



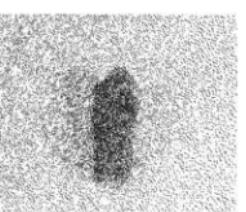
235



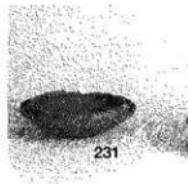
236



古墳2出土鉄塊



古墳2出土鉄器



231



230



237



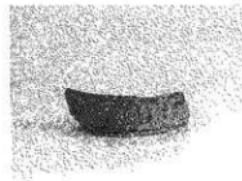
238



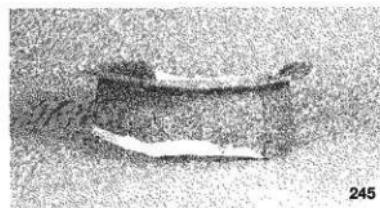
239



240



244

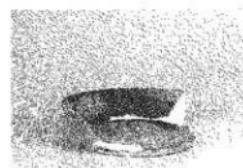


245

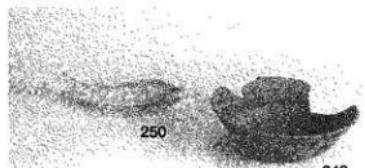


246

248



247



250

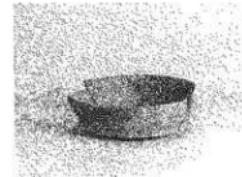
249



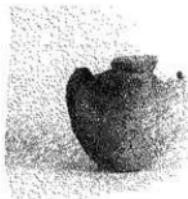
250



252



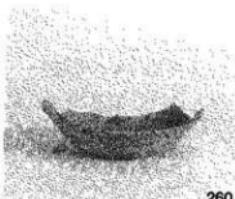
254



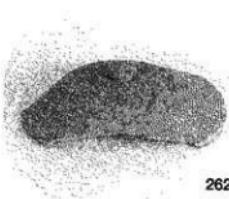
258



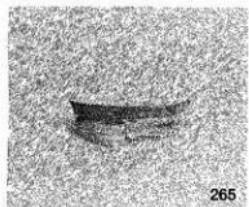
259



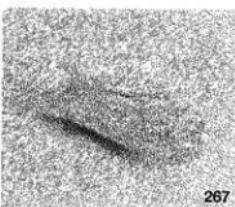
260



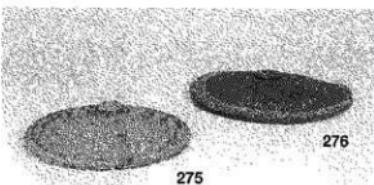
262



265

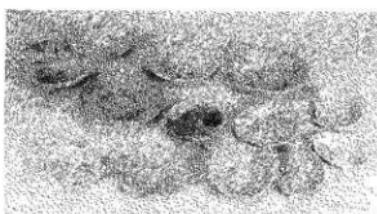


267

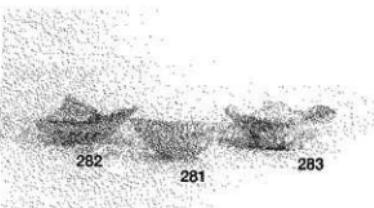


275

276



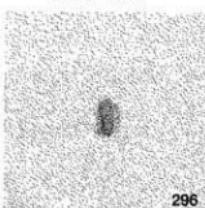
SX15土師皿



282

281

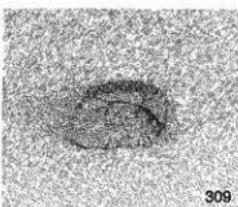
283



296



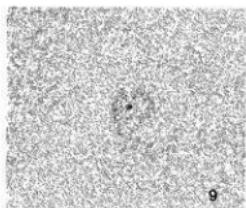
SK52鉄滓



309



第97図と対応



9

第97図と対応

# 報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	埋蔵文化財調査報告書						
副書名	高蔵遺跡（第34次・第39次）						
卷次	46						
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告						
シリーズ番号	60						
編著者名	村木誠 藤井康隆 野邊地章太 新美倫子 平尾良光 鈴木浩子						
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館						
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223						
発行機関	名古屋市教育委員会						
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268						
発行年月日	2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	面積 m <sup>2</sup>	調査期間	調査原因
高蔵遺跡	名古屋市熱田区夜寒 町5-1	23100	12-2	35°08'01" 137°54'16"	1,450	2001.11.19 2002.2.28	小学校改築
高蔵遺跡	名古屋市熱田区夜寒 町5-1	23100	12-2	35°08'02" 137°54'16"	2,270	2002.7.15 2002.11.15	小学校改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生～古代	豊穴住居・土坑	鏡・弥生土器・須恵器・土師器	第34次調査		
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生～中世	方形周溝墓・古墳	弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・豊穴住居	第39次調査		

名古屋市文化財調査報告60  
埋蔵文化財調査報告書46

2003年3月31日発行

編集	名古屋市見晴台考古資料館
発行	名古屋市教育委員会
	名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷	株式会社 名古屋大気堂

